社 日 古 墳

―一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12―

2000年3月

建設省松江国道工事事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

社日古墳正誤表

位置	誤	正
例言 30 行目	杉本敏昭	杉本和樹
巻頭カラー写真図版目次		
2，4，6 行目	杉本敏昭	杉本和樹
遺物写真図版目次		
15，17 行目	杉本敏昭	杉本和樹
本文 8 ～ 9 ページ		
第 2 図　各回発掘調査遺構		
位置図（S=1/800）中	昭和 56 年度	昭和 55 ～昭和 56 年度
本文 55 ページ		
表 3-1 下　※註 1 行目	（近藤義朗編　1991）	（近藤義郎編　1991）
本文 112 ページ		
註 1　2 行目行末	1977	1997
本文 112 ページ		
註 1　4 行目行末	1977	1997

社 日 古 墳

―― 一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 ――

2000年3月

建設省松江国道工事事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

社日2号墳第1主体部出土青銅鏡（珠文鏡）と薄板片

図版 2

社日古墳南斜面横穴墓群出土畿内系土師器・丹塗り土師器

社日古墳南斜面出土須恵器骨壺と八稜鏡

図版 4

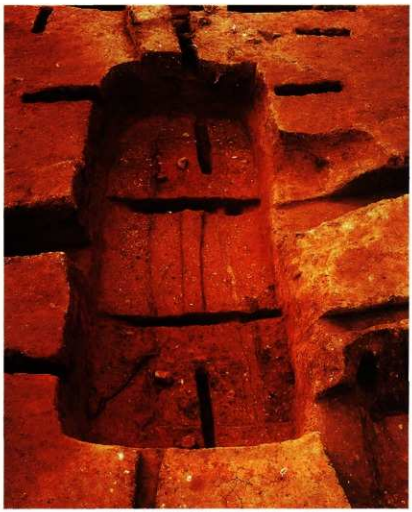
社日古墳南斜面加工段2五輪塔基壇（西から）

CGによる復原想像図

社日1号墳第1主体部西寄り横断面土層堆積状況（東から）

社日1号墳第1主体部縦断面土層東端堆積状況（北から）

図版 6



社日1号墳第1主体部棺槨痕跡検出状況（東から）

社日1号墳第3主体部棺痕跡検出状況（西空中から）

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路建設に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。

本報告書は平成11年度に実施した杜廿古墳の調査結果をとりまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成12年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長　岡　邦彦

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局松江国道工事事務所から委託を受けて一般国道9号松江道路建設予定地内の発掘調査を行ってきました。平成11年度においては松江市竹矢町に所在する社日古墳の発掘調査を実施しました。

社日古墳は、松江市東郊に広がる意宇平野を望む低丘陵の尾根上に位置しています。この尾根上とその南斜面からは木棺墓、古墳、横穴墓、五輪塔や骨壺の火葬墓など多岐にわたる埋葬遺構が集中的に検出されてました。これらは弥生時代から中世まで連綿としてこの区画を奥津城としてきた人々が土地に刻んだ痕跡です。これらの遺構からは珠文鏡や八稜鏡をはじめ土師器、須恵器、鉄製品、石塔など貴重な遺物が出土しています。

これらの遺構・遺物は、この意宇平野及びその周辺に展開する多様な遺跡と相まって、この地方の歴史を解明していく上で貴重な資料を提供することになると思われます。

本報告書は、このような発掘調査の成果をとりまとめたものですが、広く各方面においてご活用いただき、埋蔵文化財に対する理解と関心を高めていただければ幸いです。

終わりに、現地発掘調査及び本書の刊行にあたって、ご尽力いただきました建設省中国地方建設局松江国道工事事務所並びにご協力を賜りました地域住民の皆様はじめ関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

島根県教育委員会

教育長　山崎悠雄

例　　言

1．本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成11年度に実施した一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．調査組織は次のとおりである。

［事務局］　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）　秋山　実（総務課長）
松本岩雄（調査課長）　今岡　宏（総務係長）

［調査員］　西尾克己（埋蔵文化財調査センター主幹）　大庭俊次（文化財保護主事）
原田敏照（主事）　伊藤徳広（主事）　石橋俊朗（教諭兼文化財保護主事）
清水初美（臨時職員）　守山博義（臨時職員）　大野芳典（臨時職員）

［遺物整理］　神谷登喜美　土谷美鈴　松野美小恵　三上恭子　梅原準子　渡部哲子

3．発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注・重機借上・プレハブハウス借上・発掘用具調達など）については、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

（社）中国建設弘済会島根支部

［現場担当］　布村幹夫（現場事務所長）　矢野秀夫（技術員）

［事務担当］　深山明子

発掘作業員各位

4．報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

荒川正己（広島市文化財団学芸員）　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）
尾野善裕（京都国立博物館学芸課）　山中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）
運岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）　村上恭通（愛媛大学助教授）
渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

5．挿図中の方位は測量法によるⅢ系座標軸X軸の方向を指す。従って磁北より7°13′、真北より0°33′東の方向を示す。

6．本報告書の作成は以下の者が行った。

［遺物・遺構の実測・整図］大庭　西尾　角田徳幸　原田　岩橋孝典　伊藤　石橋　清水　松山智弘
露梨靖子　守山　大野　神谷　土谷　松野　三上　梅原　渡部

［遺物・遺構の写真撮影］

・巻頭カラー遺物写真と同遺物の白黒写真については、奈良国立文化財研究所牛嶋茂氏の指導を得た。撮影は西大寺フォト杉本敏昭氏に委託して行った。

・現場の空中撮影は（株）ジェクトに委託した。

・遺構の撮影は、１号墳主体部の撮影については原田の協力を得、それ以外の遺構・遺物の撮影は大庭が行った。写真の縮尺は任意である。

・巻頭のＣＧによる五輪塔建立復原図は中村氏が製作されたものである。

9．本報告書の編集は大庭が行い、執筆の分担については目次に記した。

10．出土遺物及び実測図、写真は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

巻頭カラー写真図版（1～6）

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長序文

島根県教育長序文

例　　言

目　　次

挿図表目次

写真図版目次

第1章　位置と環境　大庭俊次 …… 1

第2章　調査に至る経緯及び発掘調査の経過と概要　大庭俊次 …… 5
第1節　調査に至る経緯 …… 5
第2節　これまでの発掘調査の概要 …… 6
第3節　平成11年度発掘調査の経過と概要 …… 7

第3章　調査の結果 …… 20
第1節　社日古墳群　原田敏照　松山智弘 …… 20
第2節　社日古墳群以外の尾根上の遺構　西尾克己　大庭俊次 …… 66
第3節　古代から中世にかけての火葬墓について　西尾克己　伊藤徳広　大庭俊次 …… 69
第4節　社日古墳南斜面横穴墓群　大庭俊次 …… 82

社日古墳南斜面横穴墓群出土人骨　井上晃孝 …… 133

巻末モノクロ写真図版 …… 1～80

報告書抄録

挿図表目次

第1章　位置と環境

第1図　周辺の遺跡　1：25000 …… 3
表1　周辺の遺跡 …… 4

第2章　調査に至る経緯と発掘調査の経過及び概要

第2図　各回発掘調査遺構位置図（S＝1/800） …… 8～9
第3図　発掘調査前地形測量図（S＝1/250） …… 11
第4図　調査区内遺構位置図（S＝1/250） …… 18

第3章　調査の結果

第1節　社日古墳群

第5図　社日古墳群　調査前地形測量図（S＝1/300） …… 21
第6図　社日古墳群　1・2号墳墳丘測量図（S＝1/200） …… 22
第7図　社日古墳群　1号墳（旧表土検出時）地形測量図（S＝1/200） …… 23
第8図　社日古墳群　1号墳墳丘土層断面図（S＝1/60） …… 26～27
第9図　社日古墳群　1号墳墳裾及び溝遺物出土状況（S＝1/150） …… 28
第10図　社日古墳群　1号墳墳裾及び溝出土土師器実測図（S＝1/3） …… 29
第11図　社日古墳群　1号墳第1主体部実測図（S＝1/30） …… 32～33
第12図　社日古墳群　1号墳第1主体部棺郭構造検出過程（S＝1/40） …… 34
第13図　社日古墳群　1号墳第1主体部最下部土層断面図（S＝1/20） …… 35
第14図　社日古墳群　1号墳第1主体部埋葬施設復元予想図（S＝1/30） …… 36
第15図　社日古墳群　1号墳第1主体部棺内副葬品出土状況（遺構S＝1/15遺物S＝1/4） …… 38
第16図　社日古墳群　1号墳第1主体部出土鉄器実測図（S＝1/2） …… 39
第17図　社日古墳群　1号墳第1主体部、第4主体部付近出土石杵実測図（S＝1/2） …… 40
第18図　社日古墳群　1号墳第2主体部実測図（S＝1/30） …… 41
第19図　社日古墳群　1号墳第3主体部実測図（S＝1/30） …… 43
第20図　社日古墳群　1号墳第3主体部棺痕跡実測図（S＝1/40） …… 44
第21図　社日古墳群　1号墳第3主体部出土鉇実測図（S＝1/2） …… 44
第22図　社日古墳群　1号墳第4主体部（壺棺）実測図（S＝1/15） …… 45
第23図　社日古墳群　1号墳第4主体部土師器実測図（S＝1/3） …… 46
第24図　社日古墳群　2号墳墳丘土層断面図（S＝1/60） …… 48
第25図　社日古墳群　2号墳東側溝土層断面図（S＝1/60） …… 48
第26図　社日古墳群　2号墳第1主体部実測図（S＝1/30） …… 49
第27図　社日古墳群　2号墳第1主体部副葬品（管玉・鏡）実測図（実物大） …… 50
第28図　社日古墳群　2号墳第2主体部実測図（S＝1/30） …… 51
第29図　社日古墳群　1号墳及びその周辺出土遺物実測図（S＝1/4） …… 52

表2　社日古墳群出土金属製品・石器計測表 …… 53
表3－1　出雲における前期初頭の古墳 …… 55
第30図　出雲の前期古墳の埋葬頭位 …… 57
表3－2　主体部内の朱について …… 58
表3－3　前期古墳鉄器出土古墳一覧 …… 60

第2節　社日古墳群以外の尾根上の遺構

第31図　SK03遺構実測図（S＝1/40） …… 66
第32図　SK04遺構実測図（S＝1/40） …… 66
第33図　SK06遺構実測図（S＝1/40） …… 67
第34図　SK07遺構実測図（S＝1/40） …… 67
表4　社日古墳調査区内検出土坑一覧表 …… 68

第3節　古代から中世にかけての火葬墓について

SX01について

第35図　SX01基壇検出状況実測図（S＝1/30） …… 70
第36図　SX01基壇上面除去後実測図（S＝1/30） …… 70
第37図　SX01石材別分布図（S＝1/30） …… 71

加工段2・基壇地下五輪塔土坑（SK12）について

第38図　加工段2実測図（S＝1/60） …… 72
第39図　加工段2基壇検出状況実測図（S＝1/60） …… 72
第40図　加工段2五輪塔部材および石材別分布図（S＝1/60） …… 73
第41図　加工段2・SK12・SX01出土遺物実測図1（S＝1/6） …… 75
第42図　加工段2・SK12・SX01出土遺物実測図2（五輪塔部材S＝1/6、その他の遺物S＝1/3） … 76
表5　五輪塔計測表 …… 77

火葬墓（SK14）について

第43図　SK14遺構実測図（S＝1/20） …… 80
第44図　SK14須恵器壺（S＝1/4）八稜鏡（S＝1/2） …… 81

第4節　社日古墳南斜面横穴墓群について

第45図　7号横穴墓遺構実測図（S＝1/50） …… 82
第46図　7号横穴墓礫床実測図（S＝1/30） …… 84
第47図　7号横穴墓出土須恵器実測図（S＝1/4） …… 84
第48図　6号各横穴墓実測図（S＝1/50） …… 86
第49図　6号a・b横穴墓遺構実測図（S＝1/50） …… 87
第50図　6号c横穴墓遺構実測図（S＝1/50） …… 88

第51図　6号c横穴墓出土遺物実測図（S＝1/4）…… 89
第52図　6号b横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 90
第53図　6号横穴墓出土遺物実測図（17.18S＝1/6、その他S＝1/4）…… 91
第54図　8号横穴墓遺構実測図1（S＝1/50）…… 93
第55図　8号横穴墓遺構実測図2（S＝1/30）…… 94
第56図　8号横穴墓遺物実測図（S＝1/4）…… 95
第57図　9号各横穴墓遺構実測図1（S＝1/50）…… 97
第58図　9号各横穴墓遺構実測図2（S＝1/50）…… 98
第59図　9号横穴墓前庭部遺物出土状況実測図（S＝1/50）…… 99
第60図　9号a横穴墓玄室石床実測図（S＝1/50）…… 100
第61図　9号a横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1/6）…… 101
第62図　9号a横穴墓出土遺物実測図1（S＝1/4）…… 102
第63図　9号a横穴墓出土遺物実測図2（S＝1/2）…… 103
第64図　10号横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 105
第65図　10号横穴墓遺物出土状況実測図1（S＝1/30）…… 106
第66図　10号横穴墓遺物出土状況実測図2（S＝1/30）…… 107
第67図　10号横穴墓閉塞部・墓道出土須恵器実測図（S＝1/4）…… 108
第68図　10号横穴墓玄室内出土須恵器実測図（S＝1/4）…… 109
第69図　10号横穴墓玄室内出土大刀実測図（S＝1/4）…… 110
第70図　10号横穴墓玄室内出土遺物実測図（S＝1/2）…… 111
第71図　11号及び12号各横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 114
第72図　11号a横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 115
第73図　11号b横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 116
第74図　11号a・b横穴墓出土遺物実測図（S＝1/4）…… 117
第75図　12号a・b横穴墓遺構実測図（S＝1/50）…… 121
第76図　12号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1/4）…… 122
第77図　12号横穴墓前庭部埋土中出土埴輪実測図（S＝1/4）…… 123
第78図　調査区内遺構外出土遺物実測図（S＝1/4）…… 124
第79図　南斜面横穴墓群出土遺物実測図（S＝1/4）…… 125
第80図　調査区内出土石器実測図（実物大）…… 126
表6　横穴墓構造一覧表 …… 127
表7　横穴墓出土鉄製品計測表 …… 128
金属製品・石器を除く杜日古墳調査区内出土遺物観察表 …… 129～132

一巻頭カラー写真・図版

1．牡丹２号墳第１主体部出土青銅鏡（珠文鏡）と薄板片
奈良国立文化財研究所牛島茂氏・西大寺フォト杉本敏昭氏撮影
2．牡口古墳南斜面横穴墓群出土鍛冶系土師器・丹塗り土師器
奈良国立文化財研究所牛島茂氏・西大寺フォト杉本敏昭氏撮影
3．牡丹古墳南斜面出土須恵器骨蓋と八稜鏡
奈良国立文化財研究所牛島茂氏・西大寺フォト杉本敏昭氏撮影
4．上　牡口古墳南斜面加工段２五輪塔基壇（西から）
ド　CGによる復原想像図
CGによる復原想像図は中村唯史氏の製作による。
5．上　牡丹１号墳第１主体部西寄り横断面土層堆積状況（東から）
下　牡丹１号墳第１主体部縦断面十層東端堆積状況（北から）
6．上　牡口１号墳第１主体部棺都痕跡検出状況（東から）
下　牡口１号墳第３主体部棺蓋跡検出状況（西空中から）

二巻末写真図版

1．上　牡丹古墳全景空中撮影　南から
ド　牡口古墳全景空中撮影　北から
2．上左　牡口１号墳墳丘
上右　牡丹古墳南斜面
下左　牡丹古墳南斜面
下右　牡丹１号墳から南側を望む
3．上　牡丹１号墳・牡丹２号墳　東から
下　牡口２号墳から南斜面にかけて　牡丹１号墳から
4．上左　牡丹１号墳墳頂発掘前　東から
上右　古墳周盛り土部分　東から
下　牡丹１号墳墳丘北側　西から
5．上　牡丹１号墳各主体部検出状況
下　牡丹１号墳表土除去後
6．上　牡丹１号墳墳丘南側斜面土層堆積状況
下　牡丹１号墳墳丘北側斜面墳裾付近土層堆積状況
7．上　牡丹１号墳第１主体部主軸上層堆積状況　南側中央部
ド　牡口１号墳第１主体部主軸西端十層堆積状況　北側
8．上　牡口１号墳第１主体部主軸西端十層堆積状況　北側
下　牡丹１号墳第１主体部主軸東端十層堆積状況　北側
9．上　牡丹１号墳第１主体部主軸東端土層堆積状況　北側
下　牡丹１号墳第１主体部東寄り部分主軸直交上層堆積状況
10．上　牡丹１号墳第１主体部西寄り部分主軸直交上層堆積状況
ド　牡丹１号墳第１主体部と第２主体部の切り合いを示す十層堆積状況 東から
11．上　牡口１号墳第１主体部棺都痕跡検出状況　東から
下　牡口１号墳第１主体部鉄器（農工具）出土状況
12．上　牡丹１号墳第１主体部遺物出土状況　東から
下　牡丹１号墳第１主体部鉄剣出土状況
13．上左　牡丹１号墳第１主体部棺底検出状況　東から
上右　牡口１号墳第１主体部棺底検出状況　西から
ド　牡口１号墳第１主体部鉄器出土状況
14．上　牡口１号墳第１主体部完掘状況
下　牡丹１号墳各主体部完掘状況
15．上　牡丹１号墳第２主体部主軸平行土層堆積状況西寄り　北から
下　牡丹１号墳第２主体部主軸平行土層堆積状況東寄り　北から
16．上左　牡丹１号墳第２主体部完掘状況 東から
上右　牡口１号墳第２主体部完掘状況 東から
ド　牡丹１号墳第３主体部北寄り部分主軸十層堆積状況　東側
17．上　牡丹１号墳第３主体部南寄り部分主軸土層堆積状況　東側
下　牡丹１号墳第３主体部横断土層堆積状況　南から

18. 上　社Ｂ１号墳第３主体部棺痕跡検出状況　西から
　下左　社Ｂ１号墳第３主体部完掘状況　北から
　下右　社Ｂ１号墳第１主体部完掘状況　東から
19. 上　社Ｂ１号墳第１主体部完掘状況　西から
　中　社Ｂ１号墳第３主体部棺痕跡検出状況　西から
　下　社Ｂ１号墳各主体部完掘状況
20. 上　社Ｂ１号墳第４主体部検出状況　西から
　下左　社Ｈ１号墳第４主体部土器棺検出状況　西から
　下右　社Ｈ１号墳第４主体部土器棺検出状況　東から
21. 上　社Ｂ１号墳第４主体部土器棺合わせ口検出状況　南から
　下　社Ｂ１号墳第４主体部土器棺下半部検出状況　南から
22. 上　社Ｂ１号墳第４主体部完掘状況　南から
　下　社Ｈ２号墳発掘前　北から
23. 上　社Ｈ２号墳西側盛り土・溝土層堆積状況　北西から
　中　社Ｂ２号墳内側盛り土・溝土層堆積状況　南から
　下　社Ｂ１号墳と社Ｈ２号墳の間の盛り土・溝土層堆積状況
24. 上　社Ｂ２号墳から南斜面にかけて 社Ｈ１号墳から
　中　社Ｈ２号墳から社Ｂ１号墳にかけて　東から
　下　社Ｈ１号墳・社Ｂ２号墳北斜面表土除去後　西から
25. 上　社Ｂ２号墳墳丘南北方向土層堆積状況　東から
　下左　社Ｂ２号墳第１主体部検出状況　西から
　下右　社Ｂ２号墳第２主体部検出状況　西から
26. 上左　社Ｂ２号墳第１主体部検出状況　東から
　上右　社Ｈ２号墳第１主体部棺痕跡検出状況
　下　社Ｂ２号墳第１主体部主軸土層堆積状況西側 南から
27. 上　社Ｂ２号墳第１主体部主軸土層堆積状況東側 南から
　下　社Ｂ２号墳第１主体部土層堆積状況
28. 上　社Ｈ２号墳第１主体部主軸直交土層堆積状況　西から
　下　社Ｈ２号墳第１主体部青銅鏡出土状況　北から
29. 上左　社Ｂ２号墳第１主体部青銅鏡出土状況　東から
　上右　社Ｂ２号墳第１主体部青銅鏡出土状況　東から
　下　社Ｂ２号墳第１主体部管玉出土状況　北から
30. 上左　社Ｈ２号墳第１主体部粗砕除去後　東から
　上右　社Ｈ２号墳東側南北溝土層堆積状況　北側
　下　社Ｈ２号墳各主体部完掘状況　東から
31. 上左　SK03・SK04検出状況　東から
　上右　SK03石配置検出状況　西から
　下　SK03墓坑底検出状況・SK04検出状況 西から
32. 上左　SK04完掘状況　北から
　上右　SK04完掘状況　南から
　下左　SK06・SK07検出状況　東から
　下右　SK06完掘状況　南から
33. 上左　SK07完掘状況　南東から
　上右　加工段２五輪塔部材・基壇部材検出状況　南東から
　下　社Ｂ占墳調査区尾根上東端界付近遺構位置　西から
34. 上　加工段２五輪塔部材・基壇部材検出状況　北西から
　中　加工段２五輪塔部材・基壇部材検出状況 北西から
　下　加工段２五輪塔部材検出状況　東から
35. 上左　加工段２五輪塔部材・基壇部材検出状況　南から
　上右　加工段２五輪塔部材・基壇部材検出状況　北西から
　下左　加工段２基壇検出状況　西から
　下右　加工段２基壇検出状況　西から
36. 上左　SK12検出状況 東から
　上右　SK12検出状況 西から
　下左　SK12五輪塔部材出土状況 西から

下右　SK12五輪塔部材出土状況　西から
37. 上　SK12五輪塔部材出土状況　北西から
下　SK12五輪塔部材出土状況　北西から
38. 上左　古墳周盛り土上の石・古代瓦出土状況　東から
上右　古墳周盛り土堆積状況　北東から
下左　SX01石・古代瓦検出状況　北東から
下右　SX01方形基壇検出状況　南西から
39. 上　SX01石・古代瓦検出状況　南東から
下　SX01石・古代瓦堆積状況　南東から
40. 上左　SK14骨壺埋葬坑検出状況　西から
上右　SK14骨壺埋葬坑検出状況　南から
下左　SK14骨壺埋葬坑検出状況　南から
下右　SK14骨壺検出時復元　南から
41. 上左　7号横穴墓土層堆積状況　南から
上右　7号横穴墓玄門検出状況　南から
下左　7号横穴墓玄室陥没状況　南から
下右　7号横穴墓玄室内礫床検出状況　南西から
42. 上　7号横穴墓玄室内礫床検出状況　南西から
中　7号横穴墓玄室内礫床検出状況　南西から
下　7号横穴墓玄室左袖床面検出状況　東から
43. 上　7号横穴墓玄室内礫床除去後　南西から
中　7号横穴墓玄室内礫床除去後　南西から
下　7号横穴墓玄室内から南方を望む
44. 上　6号b横穴墓前庭部発掘前　北西から
中　6号b横穴墓前庭部須恵器出土状況　東から
下　6号b横穴墓前庭部土師器出土状況　西から
45. 上左　6号b横穴墓前庭部検出状況　南から
上右　6号b横穴墓前庭部検出状況　南から
下左　6号b横穴墓閉塞石検出状況　西から
下右　6号b横穴墓閉塞石除去後　西から
46. 上　6号a・b横穴墓閉塞部検出状況　南から
中　6号b横穴墓玄室内　玄門から奥壁
下　6号b横穴墓玄室内右側壁　北から
47. 上左　6号a玄室内陥没土堆積状況　玄門から
上右　6号a玄室内検出状況　北西から
下左　6号b横穴墓前庭部先端須恵器出土状況　南から
下右　6号b横穴墓前庭部検出状況　南から
48. 上左　6号c横穴墓閉塞部須恵器出土状況　東から
上右　6号c横穴墓閉塞部検出状況　東から
下左　6号c横穴墓玄室内陥没土堆積状況　南から
下右　6号c横穴墓玄室検出状況　南から
49. 上左　8号横穴墓玄室上陥没部検出状況　南から
上右　8号横穴墓閉塞施設検出状況　南から
下　8号横穴墓玄室内棺台検出状況　南東から
50. 上　8号横穴墓玄室内棺台除去後・前庭部側壁獣巣穴跡　西から
下　8号横穴墓玄室内棺台除去後　東から
51. 上左　9号横穴墓前庭部須恵器出土状況　南から
上右　9号横穴墓a・b前庭部・閉塞部検出状況　南から
下左　9号a横穴墓閉塞石除去後　南から
下右　9号a横穴墓玄室内石床検出状況　南から
52. 上　9号a横穴墓閉塞石検出状況　南から
下　9号a横穴墓閉塞石検出状況　南西から
53. 上　9号a横穴墓玄室内石床検出状況　東から
下　左袖石床上人骨検出状況
54. 上左　10号横穴墓閉塞石等検出状況　南から

上右　10号横穴墓玄室内陥没土堆積状況　南から
下左　10号横穴墓玄室内棺台石出土状況　南東から
下右　10号横穴墓玄室内右袖人骨・石・大刀出土状況
55. 上　10号横穴墓閉塞石・須恵器出土状況
下　10号横穴墓玄室検出状況 北西から
56. 上　10号横穴墓玄室内右袖石・大刀出土状況
下　10号横穴墓玄室内右袖人刀出土状況
57. 上　10号横穴墓玄室内左袖棺台石・須恵器検出状況
下　10号横穴墓玄室床面検出状況　北から
58. 上左　11号横穴墓前庭部遺物出土状況　東から
上右　11号横穴墓前庭部遺物出土状況　南から
下左　11号横穴墓閉塞石検出状況　南から
下右　11号横穴墓閉塞石除去後　南から
59. 上左　11号ｂ横穴墓検出状況　東から
上右　11号ｂ横穴墓玄室床面須恵器出土状況
下　11号ａ・ｂ・12号ａ横穴墓位置 南から
60. 上左　12号ａ横穴墓閉塞石検出状況　南から
上右　12号ａ横穴墓正面検出状況　南から
下左　12号ａ横穴墓玄門検出状況 南から
下右　12号ｂ横穴墓検出状況　西から
61. 上　12号横穴墓前庭部・側壁検出作業　西から
中　11号ａ・12号ａ・ｂ横穴墓位置 南から
下　12号横穴墓玄室右袖門側隅

□遺物写真図版

62. 社日１号墳出土土器１
63. 社日１号墳出土土器２
64. 社日１号墳第１主体部出土鉄器
65. 社日１号墳・２号墳各主体部出土遺物・加工段２出土遺物・SK14須恵器骨蔵
66. １号墳第３主体部出土鉄器・社日古墳南斜面横穴墓群出土鉄器・SK14須恵器蓋内出土八稜鏡
67. 社日古墳南斜面10号横穴墓出土鉄器
68. ６号ｂ横穴墓前庭部出土遺物
69. ６号ａ・ｂ・ｃ横穴墓出土遺物
70. ７号・８号横穴墓出土遺物
71. ９号横穴墓出土須恵器
72. 10号横穴墓出土須恵器
73. 10号・11号ｂ横穴墓出土須恵器
74. 11号ａ・ｂ横穴墓出土遺物
75. 12号横穴墓前庭部出土遺物・社日古墳南斜面横穴墓群出土鍛冶系土師器・丹塗り土器
（西大寺フォト杉本敏昭氏撮影）
76. 12号横穴墓前庭部表土中出土墳輪・社日古墳調査区内東側用地境界表採墳輪
77. SK14出土須恵器骨壺と八稜鏡（西大寺フォト杉本敏昭氏撮影）
78. 五輪塔空風輪・火輪
79. 五輪塔水輪・地輪
80. 五輪塔墳輪表面・復原建立

第1章　位置と環境

社口古墳（57）は島根県の県庁所在地である松江市竹矢町地内にある。中竹矢遺跡（4）の丘陵部分東側に接しており、地形的に連続している。遺構も木棺墓、古墳、横穴墓など、社日古墳調査区東側隣接地とともに、小尾根この蛇の舌状の丘陵（最高地点の標高31m。社日古墳調査区外東にある。）に関わる部分だけでも一体の遺跡としてとらえられるべきものであった。

この低丘陵から西乃至南東を望むと、近くは西に茶臼山（標高171.5m）。やや南東に転じ、意宇平野、松江市大草町の集落と、雨乞山（標高155.2m）から続く安部谷古墳群（28）を透かして見かけの正面に、八束郡東出雲町と同郡八雲村を分かつ風土記上山（標高453.7m）。また、やや東に転じて、東出雲町と能義郡広瀬町を分かつ京羅木山（標高473m）などの優美な姿を見ることができる。しかし、さらにその南東遙か彼方には、隣県鳥取県の秀峰大山（標高1711m）を望むこととなる。

足下には県指定史跡出雲国分寺瓦窯跡（34）、東に出雲国分尼寺跡（35）、がある。南西の意宇川沿いには出雲国庁跡（25）も見渡される。これらは、まさに、眺望絶景というほかない。

これらの眺望のうちのいくつかは、後述される古墳をはじめとする幾多の埋葬遺構の築造時には、明確な意味を持って見つめられたものと思われる。その間り景色を、社日古墳調査区内の雑木を伐採することによって、時代を異にして、全く違った立場で眺めることとなった。

中竹矢遺跡・社日古墳は、現在においては、松江市街地の東南郊外にあって、田園風景の真っ直中にあるが、その位置と置かれた歴史的環境を考えるとき、意宇平野の一角を占めていることに、まず、注目しなければならない。意宇平野を中心とするこの地域は、弥生時代に勃興し、古墳時代後期にかけて繁栄を保ち、律令の時代から中世に至るまでの間は旧国出雲国の一大中心地であった。

周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺物が出土した遺跡としては、意宇平野西の段丘上にある国指定史跡出雲国山代郷正倉跡の南約100mにある下黒田遺跡が挙げられる。玉髄質の石核および剥片の接合資料が出土して、島根県においては画期的な発見であった。社口古墳調査区内においても、旧石器時代にまで遡るかともみられる、玉髄製のスクレーパーもしくは転用石鏃かとも思われる使用痕のある剥片石器（80－2）が、横穴墓前庭側壁に穿たれた獄巣穴跡から採取された。

縄文時代の遺跡は意宇平野の縁辺や馬橋川流域に点在する。さっぺい遺跡（39）、保地遺跡、法華寺前遺跡などの存在が知られている。意宇平野の縁辺竹の花遺跡（29）でも縄文土器が出土している。また、1号墳でも縄文時代のものとみられる黒曜石製の石鏃（80－1）が出土している。

弥生時代に入ると、丘陵斜面や台地上に多くの集落が営まれていると考えられ、石台遺跡（8）、勝負遺跡（7）、半所遺跡（6）において竪穴住居跡が検出されている。一方、低地でも、中竹矢遺跡の南東に隣接する布田遺跡（3）において、弥生時代前期から中期にかけての溝状遺構や竪穴住居跡、土壙などが検出されている。生産に関する遺跡としては、向小紋遺跡、上小紋遺跡（51）、夫敷遺跡（2）などから弥生時代後期の水田跡が検出されている。また、布田遺跡では弥生時代中期中葉に遡る土作の木製品が出土している。墓制についてみると、弥生時代後期になると意宇平野の北東丘陵上に約場墳丘墓（38、推定一辺8m）が築かれる。また、近隣に四隅突出型墳丘墓である来美墳丘墓（17、10m×8m）、間内越墳丘墓（8.8m×6.67m）などが築かれる。

古墳時代の集落としてはタルミⅣ遺跡、舟津田遺跡が点在し、古墳時代から奈良時代にかけて続くものである。一方、古墳についてみてみると、前期古墳として認識されるものは非常に少ないの

で若干広い視野に立って見渡すと、東出雲町寺床1号墳（32、方墳、東西約33m、南北21m、高さ2.75m）、同じく東出雲町古城山古墳（30、方墳、一辺約20m）、八雲村小屋谷3号墳（方墳、南北19m、東西15m、高さ1.5m）・2号墳（方墳、南北10.9m、東西10.5m、高さ約1m）などがあげられる。前期古墳の可能性が指摘されている古墳としては中竹矢遺跡西方、茶臼山北東に廻田1号墳（49、前方後円墳、全長57m）がある。また、本書で報告する社日古墳群1号墳は最古段階の前期古墳として位置づけられるものと考えられる。

古墳時代中期後葉になると茶臼山の西方山麓の大庭鶏塚古墳（11、方墳、一辺約42m）が築かれる。また、近隣の大橋川両岸の丘陵上に大形古墳が多く出現する。南岸に手間古墳（43、前方後円墳、全長66.8m）、井ノ奥4号墳（45、前方後円墳、全長57.5m）、竹矢岩船古墳（前方後方墳、全長50m、舟形石棺）、石屋古墳（46、方墳、一辺40m）、北岸に魚兒塚古墳（47、前方後円墳全長63m）などが挙げられる。なお、これら大橋川両岸の古墳に埴輪を供給したと推定される平所埴輪窯跡（6）も隣接する。また、意宇平野南縁の丘陵に展開する東西百塚山古墳群（26）は100基近くの小墳からなる大群集墳を形成している。時期的には、前期後半～後期初頭までの初期群集墳であり、大橋川沿いの中期古墳と平行している。意宇平野南方八雲村の盆地にも中期から後期前半にかけての初期群集墳で、総数約40基からなる土井・増福寺裏山・増福寺各古墳群がある。

これらに続く後期古墳には茶臼山山麓の山代二子塚古墳（前方後方墳、全長92m）をはじめ意宇平野の岡田山古墳（前方後方墳、全長24m、横穴式石室）、大橋川沿いの朝酌岩屋古墳（横穴式石室）など多くのものが知られている。なお、この時期、近隣の馬橋川流域には小規模な方墳が多く分布する。また、中竹矢遺跡でも多くの横穴墓が発掘されたが、このほかにも近隣丘陵の山腹に穿たれた横穴墓群が存在する。十王免横穴墓群、狐谷横穴墓群、論田横穴墓群、東出雲町地内に展開する島田池遺跡や島田遺跡、渋山池遺跡の横穴墓群などである。これらの横穴墓も墓前祭祀の形跡を残しながらもやがて衰退し、この地域に展開した古墳文化も7世紀の後半には終焉を告げる。

律令の時代に入ると、奈良時代の『出雲国風土記』によれば意宇平野周辺部には出雲国庁をはじめ、意宇郡家、意宇軍団、黒田驛などの公的施設が置かれたとされる。中竹矢遺跡東隣接地には出雲国分尼寺跡があり、西側には出雲国分寺跡も存在する。これら寺院の瓦を製造したとみられる瓦窯跡が県指定地とは別に中竹矢遺跡内で検出されている。また、『出雲国風土記』所載の北新造院に比定される来美廃寺や南新造院に比定される四王寺跡などもあり、私寺が建立されていたことがわかってきている。この時期から旧国出雲国の政治、文化の中心となっていったのである。

参考文献

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会1983年

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』（石台遺跡）島根県教育委員会1989年

『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』（中竹矢遺跡）島根県教育委員会1990年

山本　清『古代出雲の考古学』－遺跡と歩んだ70年－ハーベスト出版1995年

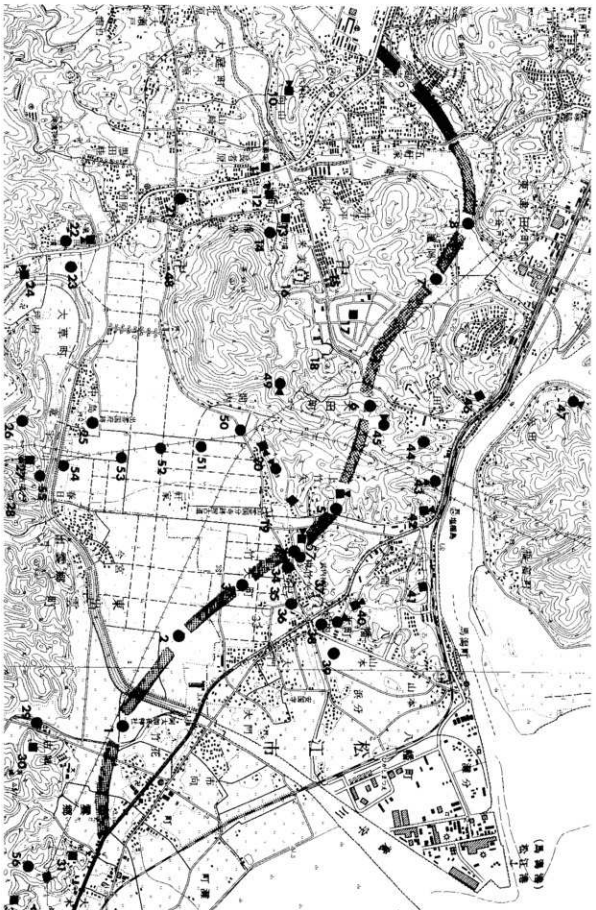
『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅱ島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘1996年

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅶ』－岡原古墳・下黒田遺跡－島根県教育委員会1989年

『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群』島根県八束郡八雲村教育委員会1981年

石野博信編『全国古墳編年集成』雄山閣出版1995年

『風土記の丘地内道路発掘調査報告Ⅹ』島根県教育委員会1994年



第1図　周辺の遺跡　　1：25000

表１　周辺の遺跡

No.	遺跡名	摘要	No.	遺跡名	摘要
1	春日遺跡	弥生土器、須恵器、陶磁器、石製品	32	寺床遺跡	古墳前～後期、竪穴住居跡、遺跡は消滅（移設保存）
2	大数遺跡	弥生後期、水田跡	34	出雲国分寺瓦窯跡	奈良・平安窯跡、瓦
3	布田遺跡	弥生（前期～中期）、住居跡、土壙	35	出雲国分尼寺跡	奈良・平安、瓦、礎石建物跡
4	中竹矢遺跡	前方後方墳、弥生土壙墓、掘立柱建物跡、横穴墓、瓦	36	平浜八幡宮前遺跡	弥生土器片
5	オノ峠遺跡	掘立柱建物、住居跡状遺構、土壙	37	代官家後横穴群	横穴１０穴以上
6	平所遺跡	竪穴式住居跡、玉作工房跡、埴輪窯跡、形象埴輪	38	前場土壙墓	土壙墓（消滅）
7	勝負遺跡	弥生～古墳、住居跡	39	さっぺい遺跡	縄文土器片
8	石舟遺跡	縄文晩期～古墳中・後期	40	道振寺古墳群	前方後円墳、方墳
10	向山古墳群	前方後方墳１，方墳２	41	瀬山古墳	方墳、土壙
11	大庭鶏塚	古墳中期、方墳（２段築成方墳）	42	竹矢岩舟古墳	前方後方墳
12	山代二子塚	古墳後期、前方後方墳	43	手間古墳	古墳後期、前方後円墳、円筒埴輪片
13	山代方墳	古墳後期、方墳、石棺式石室	44	井ノ奥古墳群	前方後方墳１、方墳３（２基消滅）
14	永久宅後古墳	墳形不明、埴輪、石棺式石室、	45	井ノ奥４号墳	古墳中期、前方後円墳、円筒埴輪
15	来美廃寺	瓦、須恵器片	46	石屋古墳	古墳中期、方墳
16	狐谷横穴群	古墳後期、現在消滅	47	魚見塚古墳	前方後円墳
17	来美古墳	四隅突出型墳丘墓（消滅）、供献土器	48	四王寺跡	礎石、瓦
18	十王免横穴群	古墳後期、横穴群（残存２７穴）	49	廻田古墳	前方後円墳
19	出雲国分寺跡	奈良・平安、瓦、礎石	50	岡内遺跡	土師器、須恵器片、打製石斧
20	上竹矢古墳群	前方後円墳、前方後方墳、方墳	51	上小紋遺跡	弥生後期、水田跡、木製品
21	山代郷正倉跡	奈良時代、掘立柱建物群	52	四配田遺跡	土師器片
22	岡田山古墳群	古墳後期、円墳 前方後方墳（横穴式石室）	53	神田遺跡	古墳３基、須恵器、土師器
23	岩屋後古墳	古墳後期、石棺式石室、人物埴輪	54	大屋敷遺跡	土師質土器片、中世の遺構
24	御崎山古墳	古墳後期、大刀類、馬具類 前方後方墳（横穴式石室）	55	天満谷遺跡	土師器、須恵器片
25	出雲国庁跡	奈良・平安、瓦、官衙遺構、玉類	56	鳥田池遺跡	横穴群、古墳、掘立柱建物跡
26	百塚山古墳群	方墳、円墳	57	社口古墳	No.4中竹矢遺跡と地形的に連続している
27	古天神古墳	古墳後期、前方後方墳、石棺式石室			
28	宏部谷古墳群	方墳８基、円墳３基、墳形不明２基、横穴群			
29	竹の花遺跡	縄文土器、弥生土器			
30	古城山古墳	方墳			
31	大木権現山古墳群	方墳、須恵器			

第２章　調査に至る経緯と発掘調査の経過及び概要

第１節　調査に至る経緯

一般国道９号松江道路・安来道路建設と埋蔵文化財とのかかわりは昭和47（1972）年に遡る。すなわち、国道９号線の道路網整備に伴い、昭和47（1972）年５月26日付で建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会あてバイパス建設の基本設計資料として鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についてその照会があった。そこで昭和47（1972）年９月19日から９月29日まで地元教育委員会の協力を得て現地踏査を行い、翌昭和48（1973）年には５月～６月にかけて安来市から八束郡東出雲町地域について再度これの分布調査を実施した。

これらの調査結果を踏まえ、建設省においておよそ３つのルート案が作成された。これによって安来市吉佐町から松江市乃白町におけるバイパス予定ルート及びその付近には131遺跡の存在することが明らかになった。

ついで昭和48（1973）年７月松江市東地区の予定３ルートにかかわる遺跡の取扱いについて協議があり、これに応えて島根県教育委員会では次のような趣旨の回答を行った。（１）八束郡東出雲町から八雲村を通る南側丘陵ルートは東出雲町出雲郷の地域に多数の古墳が分布する。また（２）東出雲町から意宇平野の中央を通り、大庭町へ抜けるルートは、史跡出雲国府跡や同出雲国分寺跡付古道など八雲立つ風土記の丘の主要部を横断し、好ましくない。これに対して（３）東出雲町から竹矢町を通るルートは文化財保護の立場から最も被害の少ないルートである。ただしこの場合、ルート内に含まれる中竹矢古墳についてはこれが全長約20mの前方後方墳であることから現状保存を計るよう一部計画の手直しを希望する。という内容のものである。これをもとに中竹矢古墳を外した（３）の竹矢ルートが採用された。この間10月には安来地区計画路線内の2500分の１の平面図新規図化に伴って、現地立会の依頼があり、11月に立会調査を行った。

明けて昭和49（1974）年７月、安来地区の清水一月坂間の提案ルートについて協議があり、現地を踏査した。その結果（１）確認している遺跡については事前に発掘調査を実施すること。（２）発掘により貴重なものが発見された場合は保存に協力すること。（３）すでに判明しているもの以外に遺跡が発見された場合は工事の施工にあたり改めて協議すること。という条件を付し、島根県教育委員会としては一応提案ルートを容認することとなった。

そして建設省からの依頼に基づき昭和50（1975）年度には松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の３遺跡の発掘調査を実施することとなった。平所遺跡からは、馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、昭和52（1977）年６月10日付けで重要文化財に指定されている。

つづく昭和51（1976）年度には平所遺跡の関連調査と、かつて出雲国府跡に比定されていた東出雲町出雲郷の夫敷遺跡の試掘を行った。

昭和55（1980）年度から昭和56（1981）年度には、昭和57年に島根県で開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町出雲郷から松江市古志原町古志池に至る5.4km間の７遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち２車線分を緊急に調査した。

その後「松江バイパス」は高規格道路に計画変更され、「松江道路」となり、昭和60（1985）年に建設省から前回調査した７遺跡について、残り４車線の本道工部分についての調査依頼があった。協議の結果、昭和61（1986）年度に春日遺跡から発掘調査を再開し、平成３（1991）年度のオノ峠遺跡まで順次発掘調査を実施した[註3]。

このような協議と調査の流れの中で、中竹矢遺跡は昭和55（1980）年度から昭和56（1981）年度にかけての２車線部分と、平成２（1990）年度の本道工部分と２次にわたる発掘調査が行われた。しかし、平成９（1997）年に至り、この地点における本道工法が変更されることとなり、建設省から島根県教育委員会に対し、中竹矢遺跡に隣接する社日古墳について発掘調査の依頼があった。当初平成10（1998）年度に発掘調査を実施する予定だったが、平成11（1999）年度の実施となった。

註１『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会1983

註２同上及び『岩屋口南遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』島根県教育委員会1996

註３『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』（中竹矢遺跡）島根県教育委員会1992

第２節　これまでの発掘調査の概要

昭和55（1980）年度から昭和56（1981）年度にかけての発掘調査において検出された主な遺構は掘立柱建物跡４上壙222、火葬墓１、古墳１、近世墓１、横穴墓２、溝跡１４、ピット群などである。

社日古墳調査区へとつづく丘陵の南側裾の水山部からは、土壙192とこれを囲むと思われる溝跡１が検出されている。土壙からは弥生土器と土師器、木製品などが出土しており、弥生時代前期から古墳時代前半頃の時期のものと思われる。宅地跡から丘陵裾部至る部分には約350ヶのピット群があり、掘立柱建物跡が１棟確認されている。

社日古墳へとつづく丘陵上では、古墳時代前期のものと思われる土壙や、後期のものと思われる古墳、横穴墓などのほか14世紀頃の７～８才の小児の火葬墓、方墳状の盛土をもつ近世の遺構が検出されている。第１節で述べた現状保存されることになった中竹矢古墳は、調査区から北西にのびる尾根状にある。

この丘陵上の調査区内にあり、２号墳とした前方後方墳は明確な主体部を持っておらず、その北側斜面に穿たれた１号横穴墓の後背墳丘である可能性が高い。ところで、この後背墳丘を持つ中竹矢遺跡１号横穴墓は、この後発掘されることになったほかの16穴の横穴墓と比べ、その出土遺物において出色であった。墓道からは、須恵器の蓋坏、高坏、壺、鉢付坩２、壺３が出土した。玄室からは馬具の雲１、鈴具２、飾金具４、剣１、刀子２、鉄鏃６、袋状鉄斧１、須恵器の坏３、提瓶１、ガラス玉90が出土した。６世紀後半の築造とみられる[註4]。

また、丘陵部の上壙の中には L 字状の溝を伴った礫床を有するものやコの字状の溝に囲まれたものもあった。これらについては方形周溝墓や方墳の可能性があるとされる。

さらに、この調査区では掘立柱建物跡も２棟検出されている。１棟の柱穴は柱根の痕跡を残しており、建て変えが行われたことが考えられる。おおむね奈良時代の終わり頃のものと思われる。

丘陵北斜面から裾部の池に至る調査区では、掘立柱建物跡のほか性格不明の石組み遺構が見つかっている。また、池からは多量の瓦が出土し、出雲国分尼寺跡出土のものと同文の鬼瓦も見つかっている。その北の水田部においても、池の北側付近では多量の瓦が出土しているが、掘立柱建物跡の北側の水田ではなにも出土していない[註5]。

平成２（1990）年度に発掘調査された部分の概要は以下のとおりである。

社日古墳調査区へとつづく丘陵の南側麓からは、弥生時代～古墳時代前期の道物と土壙群を検出した。ほかに、ピット約200、平安時代の掘立柱建物跡、近世初頭の柱穴などを検出した。

丘陵の南斜面からは瓦窯跡が検出された。この窯跡は標高12mの斜面に位置している。構造は平窯で、焚口と焼成室が見つかったが、焼成室の天井部は残っていなかった。出雲国分寺、国分尼寺で使われた瓦を焼いていたと思われる。瓦窯の時期は、出土した須恵器と軒平瓦の文様から平安時代と思われる。

丘陵の南斜面で検出した二つの横穴墓は東に位置するものを３号、西側のものを４号とした。３号横穴墓は幅約2.5m、長さ約10mの幅広で長い前庭部を持つ。玄室は家型を呈し屍床が作られていた。出土した遺物などから７世紀末～８世紀初頭のものと思われる。４号横穴墓は、幅約２m、長さ約７mの細長い墓道を持ち、玄門部には閉塞石が置かれていた。出土遺物から６世紀後半のものと思われる。５号穴は３・４号各横穴墓をトンネル状につないだもので、後世に穿たれ、祈祷などの祭祀がおこなれていたと考えられる。３・４号各横穴墓はいずれも近世初頭に再利用されており、５号穴が穿たれたのもこの時期と思われる。

丘陵北斜面の麓近くの調査区でも建物跡が検出されており、出土した遺物から平安時代後期のものと思われる。[注3]

註1 第７回山陰横穴墓調査検討会「出雲の横穴墓－その型式・変遷・地域性－」資料山陰横穴墓研究会1997

「山陰横穴墓集成出雲編」「山陰横穴墓一覧出雲編」『出雲地方の須恵器編年表』

註2 『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会1983

註3 『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』（中竹矢遺跡）島根県教育委員会1992

第３節　平成11年度発掘調査の経過と概要

経過について

６月１日丘陵北斜面から発掘作業開始

社日古墳群のある丘陵尾根上を中心に立木伐採後の詳細な地形測量開始

６月10日丘陵南斜面横穴墓部分（後に６号ｂ横穴墓前庭部とした部分）と、加工段２発掘調査開始

６月11日加工段２五輪塔部材出土

６月22日社日古墳群１号墳墳頂社日基壇除去精査

１号墳と２号墳との間にあった盛土台状部分にトレンチ入れる

６月23日社日古墳群２号墳南側部分から表土剥ぎ開始

７月１日加工段２基壇検出以後続行

７月８日丘陵南斜面８号横穴墓玄室上陥没空洞部開口

７月９日丘陵尾根上東側用地境界近くの木棺墓・土壙部分トレンチ入れ発掘調査開始

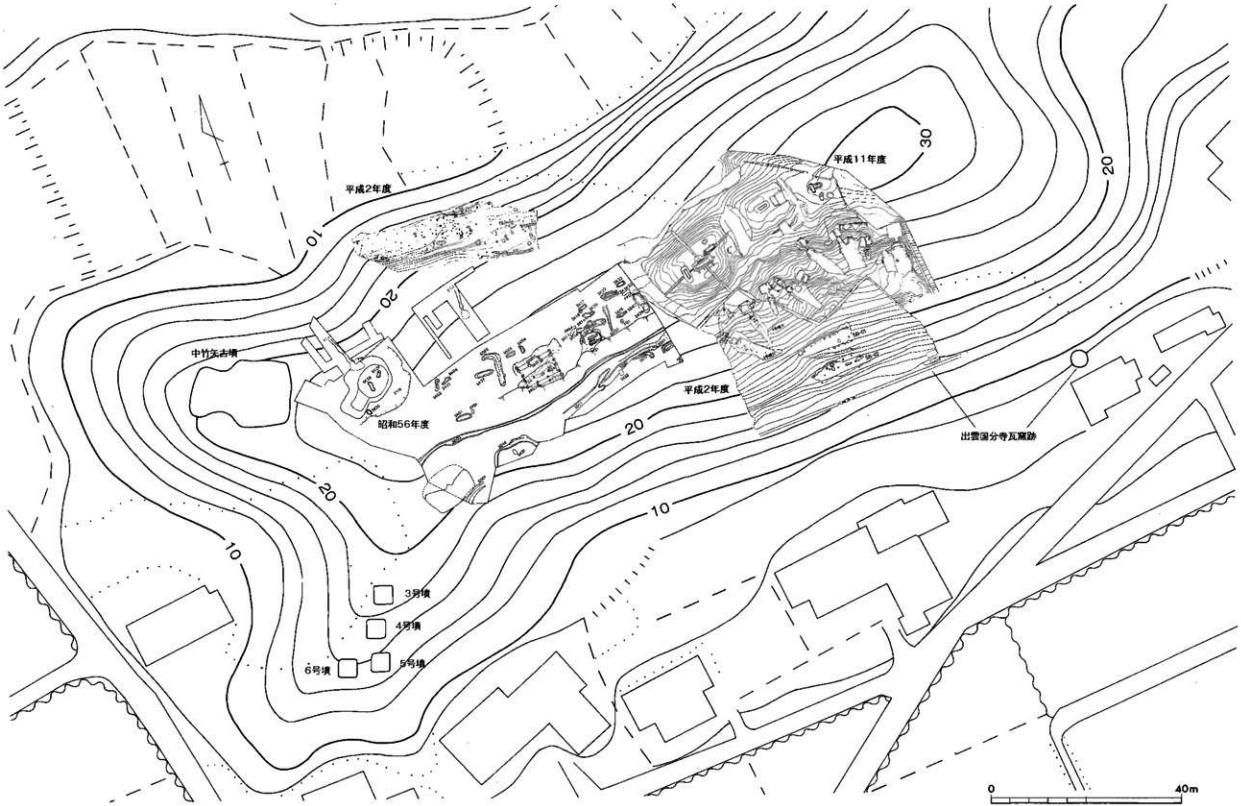
７月16日社日古墳群２号墳第２主体部検出

社日古墳丘陵南斜面７号横穴墓墓道検出

７月26日社日古墳群２号墳東側溝検出

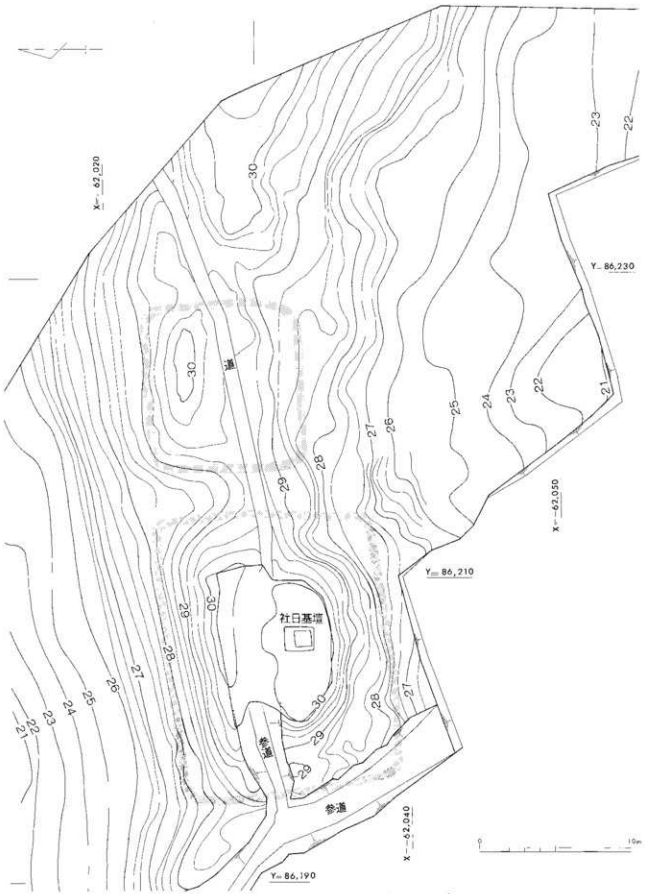
８月５日社日古墳群１号墳東側斜面から南東隅に石、古代瓦を集積したSX01を確認

SK03土壙がSK04木棺墓を切っていることを確認



第2図　各回発掘調査遺構位置図（S＝1/800）

8月9日社日古墳丘陵南斜面に密集する横穴墓を検出するため、重機による表土掘削を開始
この日の内に12号・11号・10号・9号各横穴墓の墓道乃至前庭部を確認
8月11日SK03、SK04完掘
8月12日SK14須恵器火葬骨壺・八稜鏡が12号横穴墓前庭部埋土中から出土
8月16日加工段2基壇直下にSK12（後に五輪塔部材が埋められていることがわかる）検出
南側半分が椎大木の根に覆われて人力で完全に発掘することが困難であった。
8月19日社日古墳群1号墳墳丘の軸を取って四方に盛土確認のサブトレンチを入れる
盛土と旧表土の堆積を確認
8月20日社日古墳群2号墳第1主体部検出
8月25日加工段2・SK12完掘
9月1日社日古墳丘陵南斜面重機掘削終了
この後、横穴墓検出作業を本格的に開始した。玄室が空洞として残っているのは6号b、11号b、12号aの3つの横穴墓だけで、ほかの横穴墓は皆玄室が陥没していることがわかった。
SX01基壇地下構造検出後完掘
9月5日社日古墳群2号墳第1主体部発掘開始
9月9日第1回調査指導　島根大学法文学部渡邊教授
島根県文化財保護審議会運営委員
島根大学汽水域研究センター中村客員研究員
9月13日社日古墳群1号墳墳頂平坦面平板測量（10cmコンター）
9月27日社日古墳群2号墳第1主体部から珠文鏡出土
9月30日社日古墳群2号墳第1主体部完掘
10月1日社日古墳群1号墳第1主体部～第3主体部この日までに検出
10月6日社日古墳丘陵南斜面7号横穴墓、6号b横穴墓完掘
10月7日第2回調査指導　島根大学法文学部渡邊教授
10月12日第3回調査指導　島根県文化財保護審議会田中委員
10月13日リモコンヘリコプターによる遺跡全体の空中撮影敢行
10月18日社日古墳群1号墳第1主体部、第3主体部各棺痕跡検出
10月26日第4回調査指導　島根大学法文学部渡邊教授
10月28日第5回調査指導　島根大学法文学部渡邊教授
社日古墳群1号墳第1主体部埋葬施設の構造を木棺木棺墓と判断
10月31日社日古墳群1号墳第2主体部完掘
11月3日遺跡現地説明会実施　近隣住民の方々はじめ80名参観
11月4日社日古墳丘陵南斜面11号a・12号a各横穴墓以外の横穴墓この日までに完掘
11月5日社日古墳群1号墳第1主体部から鉄製品5点（第15図ほか）出土
同第3主体部から鉇（第20図ほか）出土
11月6日社日古墳群1号墳第4主体部検出
11月10日社日古墳群1号墳旧表土検出・測量・完掘写真撮影等の作業終え全ての発掘作業終了



第3図　発掘調査前地形測量図（S=1/250）

調査結果の概要について

平成11年度発掘調査した遺構等の概要は以下のとおりである。

弥生時代後期の木棺墓１基、古墳２基（いずれも方墳）、横穴墓13穴、平安時代の火葬墓１基、中世の五輪塔基壇２所（五輪塔４基）、五輪塔埋納土坑１基（五輪塔２基分）、弥生時代後期以降のものとみられる土壙１基、時期不明の土坑２基などであり、ほとんどの遺構が埋葬遺構かそれに関連するものであった。この低丘陵は、弥生時代から中世にかけて連綿として、この地域の奥津城とされた場所であったと言える。これまで、昭和55年～56年にかけてと平成２年度の２次にわたり、この松江道路建設に伴う発掘調査を行い、墳墓や古墳、横穴墓、国分寺瓦窯跡など多くの遺構の記録や遺物をを得てきた。県内において、古代史上最も注目を浴びる地域の一角で行った今回の発掘調査で、さらに多くの古墳、横穴墓、その他埋葬遺構の記録や遺物などの資料を得ることとなった。

各遺構の概要

社日古墳群１号墳

墳形・規模：東西19m、南北15m、残存高さ約２mの方墳

主体部：墳頂には、今も伝わる社日信仰にかかる祠が建てられていた。主体部は４基検出された。中心となる第１主体部は木棺木棺、第２・第３主体部は木棺直葬、第４主体部は土師器の甕形と壺形を１個ずつ嚙み合わせた土器棺であった。

第１主体部　墓坑の規模は、東西長さ5.0m、南北幅1.6～2.0m、深さ1.1mを測る。木棺東西3.5m、南北70～85cm。木棺の規模は、長さ3.0m、幅60cmを測る。棺底頭位から鍬・鋤先、袋状鉄斧、短冊形鉄斧、鉇などの鉄製農工具が一括して出土した。足位からは鉄剣が単独で出土した。これらの鉄製品は、柄から抜き取られた後に、布に包まれて副葬されたとみられる形跡があった。ほかに、標石として転用したと考えられる朱の付いた石杵が出土している。

第２主体部　墓坑の規模は、東西長さ2.8m、南北幅1.1m、深さ35cmを測る。この墓坑に組み合わせ式箱形木棺を納めている。木棺の内法は東西長さ1.9m、南北幅50～60cmを測る。遺物なし。

第３主体部　南北長さ3.8m、東西幅1.5m、深さ80cmを測る。この墓坑の中に、底の丸い木棺を納めていた模様。木棺は南北長さ2.4m、東西幅80cm程度と想定される。棺底から、ほぼ直角に折れ曲がった鉇とみられる鉄製品が出土した。

第４主体部　東西長さ1.2m、南北幅85cm、深さ28cmを測る。この甕坑の中に口縁と口縁が嚙み合わさった土師器の壺と甕で作られた土器棺があった。その大きさは、東西長さ80cm、南北幅43cm、深さ28cmを測る。２個の土器ともに胴回りの復元計測値は44cmだったので、本来の甕坑の深さもこれに近いものであったと思われる。棺の土器以外、出土遺物はない。

時期：主体部の構造、構成と鉄製農工具などの副葬品、さらに墳丘の北西コーナーの墳裾から出土した土師器壺や加飾壺、東側溝に転落したと見られる土師器などの様相から考えて、古墳時代前期の古い段階に築造された古墳として位置づけられるものと思われる。

社日古墳群２号墳

墳形・規模：一辺11m、残存高さ約1.5mの方墳。２号墳の東西両側には、南北方向に延びる溝があった。

主体部：主体部となる墓坑は２基あり、墳頂部のやや北に偏って鉤形に割り付けられている。両主体部の上面は後世にかなりの削平を受けていた。

第１主体部　東西長さ3.3m、南北幅1.8mを測る墓坑に木棺を納めている。この木棺の規模は東西長さ2.0m、南北幅70cm程度と推定される。この第１主体部からは、青銅鏡（小型仿製鏡の珠文鏡、直径6.4cm）が出土した。銅鏡の下には、鏡の丸い形のままにその銅成分と緑青に守られて、棺材かあるいは副葬品を納めるための小箱の一部かと思われる板片が残っていた。珠文鏡の文様は、鏡背の鈕座のまわりに１列の珠文帯、その外に櫛歯文帯が１列巡り、縁は平縁と単調で簡便な意匠であった。また、完形で残っていたものの全体に緑青がふき、非常に薄く、脆くなっていた。第１主体部からは、ほかに、緑色凝灰岩製の管玉１ヶが出土した。

第２主体部　南北長さ2.2m、東西幅1.2mを測る土壙であった。

時期：２号墳に伴う遺物は、銅鏡と管玉以外にはほとんど出土していない。櫛歯文帯を有する珠文鏡が出土していることと、埋葬施設の様式から考えて、その築造時期は古墳時代前期中葉を中心とする時期とみられる。

島根県内で珠文鏡が出土した古墳、横穴墓は、松江市大草町御崎山古墳[注2]、八束郡鹿島町奥才12号墳[注3]、出雲市神西沖町山地古墳[注4]、安来市植田町鷺ノ湯病院跡横穴墓[注5]、益田市乙吉町小丸山古墳[注6]である。

このうち、御崎山古墳は意宇平野を挟んで杜日古墳の対岸にある最も近い出土地だが、古墳自体は後期中葉に位置づけられる前方後方墳である。その横穴式石室から出土した珠文鏡自体も8.2cmと２号墳出土のものよりも大きく、また厚く、鏡背の文様帯も内から珠文帯３列、複線波文帯、櫛歯文帯などと多彩である。

奥才12号墳と山地古墳は古墳時代前期後葉とされ、２号墳と時期的に近いと考えられる。

奥才12号墳は宍道湖北岸島根半島の島根県八束郡鹿島町に所在する前期から中期にかけての古墳群中にあった円墳である。杜日古墳からは12km以上離れている。奥才12号墳第３主体部から出土した鏡は直径6.7cm、鏡背の文様も内側から珠文帯１列、細長い鋸歯文帯、平縁と大きさ、薄さ、文様構成とも２号墳のものに近い。２号墳出土鏡は奥才12号墳第３主体部出土鏡の細長い鋸歯文帯を櫛歯文帯に簡略化したようなものという印象を受ける。しかし、この奥才12号墳の鏡は約半分しか出土しておらず、最初から壊れたものを副葬した可能性が考えられており、完形で納められていた２号墳出土鏡とは副葬品として、その持つ意味に違いがあると言えよう。

また、山地古墳は杜日古墳から40km以上離れた出雲市神西沖町に所在した円墳で、出雲平野西部において最も早く築造された古墳の一つであるとされる。山地古墳から出土した珠文鏡は8.0cmを測り、２号墳出土の鏡よりも大きく、鏡背の文様も内側から珠文帯２列、櫛歯文帯、鋸歯文帯と多彩である。

安来市植田町に所在した鷺ノ湯病院跡横穴墓は琥珀製棗玉、金銅装単竜環頭大刀、金銅製冠立飾、馬具残欠、鹿角装刀子などが出土したといわれる豪奢な古墳時代後期後葉の横穴墓である。これらの遺物とともに玄室内から出土したとされる珠文鏡は径7.7cmを測り、２号墳よりも大きい。文様も鏡背内側から珠文帯３列、櫛歯文帯２列と多い。

島根県西端、旧国でいえば出雲ではなく石見にある益田市に所在する小丸山古墳は、中期末から後期初頭に位置づけられる周濠、外堤を有し全長52mを測る前方後円墳である。２号墳からは140km以上離れている。この小丸山古墳から出土した珠文鏡は7.3cmとやはり２号墳出土鏡よりも若干

大きく、文様も２列の珠文帯、互いに向き合って斜行し、矢羽状もしくは麦穂状を呈する２列の櫛歯文帯や鋸歯文などと多彩で厚みも厚い。

以上の比較から、２号墳第１主体部出土珠文鏡がほかの県内５例のうちのどれよりも簡便な意匠で小さいものであることがわかった。また、時期的・距離的に比較的近い奥才12号墳第３主体部出土鏡と意匠・大きさともに近いが、副葬品としての意味付けに違いが見られることがわかった。

弥生時代の木棺墓とその他の土坑

杜日古墳群２号墳の溝のさらに東に、木棺墓１基（SK04）とそれ以降の時期の土壙１基（SK03）、時期・性格不明土坑２基（SK06・SK07）が検出された。規模や向きは計測表（表４）のとおり。これらの遺構から遺物は出土していない。SK04には組み合わせ式木棺の痕跡と思われる小口溝がある。構造から弥生時代後期のものと思われる。SK04は、SK03に垂直に切られている。SK03はごく浅くではあるが、２段に掘り込まれた形跡のある土壙であった。上端は削平されており、浅くしか残っていない。土壙長軸の両端と真ん中やや東よりの３カ所に、拳大から子供の頭大の自然石を２～３個ずつ集積している。

火葬墓（SK14）

南斜面に造られた12号横穴墓の前庭部埋土中で火葬墓を検出した。規模は計測表（表４）のとおり。この火葬墓は土壙に火葬骨壺を納めたもので、地上の標識は確認できなかった。骨壺は須恵器の頸周りの太い長頸瓶であり、この中に、火葬骨、灰、若干の土砂、八稜鏡が納められていた。八稜鏡の稜から稜までは7.8cmであった。これは骨壺である須恵器の頸部最小内径よりも小さい。須恵器壺の年代は、形式などの特徴から９世紀後葉まで遡る可能性があるかと思われるが、八稜鏡自体の年代は、文様等の残りが不鮮明ではあるが、外形、界圏の形、外縁の断面形などの各特徴から、10世紀末～12世紀前半と思われる。

五輪塔（加工段２・SK12・SX01）

９号横穴墓から10号横穴墓にかけての真上にあたる斜面に加工段（加工段２）を造成して、２段の石積みで囲んだ長方形基壇を築き、五輪塔３基を建立していたとみられる遺構を検出した。これは火葬墓群であり、五輪塔の水輪（塔身）に火葬骨を納めて骨蔵器としていたものと思われる。基壇のうちに火葬骨を納めたと思われる土壙などは検出されていない。基壇の周囲には被熱部分や火葬骨が検出される地点があった。ところで、加工段２長方形基壇の下には、長径1.9m、短径1.5m、深さ１m以上を測る土坑（SK12）が検出され、中には五輪塔の部材が不斉一に充満していた。この土坑からは空風輪が２個体出土しているので、少なくとも２基以上の五輪塔部材があったものと考えられる。なお、五輪塔の復原高は85cm前後とみられる。

杜日古墳群１号墳の南東隅を削平して若干の加工段を造成し、礫を用いた方形基壇の上に、多量の古代瓦と少量の礫、五輪塔部材を積み上げた塚のような遺構（SX01）を検出した。集石墓といえようか。この遺構からは五輪塔の空風輪が出土したが、そのほかの部材については細かく剥離しており、判然としない。五輪塔が基礎から建立されていたかどうか、疑う余地はあるが、基壇を造っていることもあり、塔身ほかを持ち出した可能性も考慮したいところである。古代瓦は五輪塔が廃

絶した後に同所に積み上げられた可能性もある。加工段2からも若干の古代瓦を得ているが、基壇は礫で築かれていたのに比べて、SX01とした方は、方形基壇の石囲い自体は礫などで造られているが、その上に多量の古代瓦を集積していることは特徴的である。これついては、この2ヶ所の基壇が、相対的に一定の時期差をもって造営された証左と見たい。

以上報告した五輪塔群の中には、他種の石塔は一切含まれていない。このような、五輪塔のみで構成される石塔群は特徴的と思われる。これらの五輪塔部材は全て凝灰岩製で、乳白色を呈するもの、白色に限りなく近いもの、黒い粒子が含まれているものなど若干の相違点があるが、いずれにしても、この地域（松江市、八束郡内？）で比較的容易に入手できるものらしい。表面は滑らかに加工されていたものと見られる。この石塔群では五輪塔と火葬骨、礫、古代瓦以外には遺物はあまり出土していない。したがって、これら五輪塔群の時期について詳細はわからないが、材質の流通の面から見ても、空風輪・笠（火輪）の加工、基礎（地輪）の形状・体積などの形態的技工的特徴から見ても、室町時代後半頃のものと思われる。

社日古墳丘陵南斜面に展開する横穴墓群

概要：各横穴墓の規模等は表6横穴墓構造一覧表のとおり。7号横穴墓と小横穴（9号c・11号b・12号b各横穴墓）、それに未完成（9号b横穴墓）のものを除くほとんどの横穴墓で追葬が行われた形跡があった。また、6号b、11号b（前庭部側壁の小横穴）、12号a・b（前庭部側壁の小横穴）各横穴墓以外の横穴墓の玄室は全て陥没していた。

7号横穴墓と10号横穴墓は、その閉塞施設から墓道にかけての構造が羨道を持たない旧来型で、古い横穴墓の形態を残している。この2穴を比較すると、7号横穴墓が10号横穴墓よりもやや先行して築造されたと見られる。本文で報告するが、7号横穴墓の玄室内礫床から、弯んだ須恵器蓋坏が出土しており、これが出雲3期の様相を呈していたので、6世紀後葉以降の築造になると見られる。10号横穴墓出土須恵器の様相は上限がそれに続く出雲4期と考えられる。ほかの横穴墓は、二重構造の羨道を持つ意宇型で、7号横穴墓や10号横穴墓よりも新しい様相を呈する。出土する須恵器も7世紀以降のものばかりであった。6号b横穴墓の前庭部先端からは8世紀前半代の須恵器高台坏・須恵器短頸壺・須恵器甕が一括して出土しているので、横穴墓を意識した祭祀がこの頃まで行われていたと考えられる。また、7号横穴墓と10号横穴墓は他の横穴墓に比べて位置が高く、他の横穴墓は築造にあたって、この2つの横穴墓を破壊しないように注意を払っている様子がうかがえる。

特徴的な構造：6号a・b・cとした3基の横穴墓はa⇒c⇒bの順に造られたと考えられる。a横穴墓とc横穴墓の先後関係は直接にはつかめないが、斜面に掘り込まれた位置関係と構造からcの方が後から造られたことが窺われる。6号c横穴墓は6号a横穴墓と前庭部を共有できるように、7号横穴墓と6号a横穴墓に挟まれた狭いスペースに副約されて、羨道玄門と玄室が鈎形になるような設計で、強引に横穴墓を造っている。この2穴の横穴墓に遅れて横穴墓の造営を迫られた人々は、何故かこの場所に執着したと見え、6号a横穴墓と6号c横穴墓が共有していたであろう前庭部をほぼ同幅で掘り下げて、6号a横穴墓と9号横穴墓の間に、ついに、大人が少し腰をかがめれば動き回れるほどのテント系家形の玄室を掘り上げたのであった。ほかの横穴墓の玄室が陥没してしまっているのに対して、6号b横穴墓の玄室は、今日に至るまで、その、中竹矢遺跡・社日古墳の横穴墓群中で一番大きく立派な荒島石の閉塞石とともに、その姿を留めることとはなったが、玄

室内には一切遺物がなく違ったときそのままか、あるいは掃き清めたときそのままの状態であった。

前庭部の共有はこの横穴墓群共通の特徴と見られ、9号a・b（玄室は未完成）各横穴墓は前庭部が全く平らに造られ、a・b各横穴墓それぞれに均等に玄室位置が割り付けられており、横穴墓造営当初から前庭部を共有するように設計されていたことがうかがえる。11号aと12号aも10cm足らずの段差はあるが前庭部から出土した須恵器の中に、両方の前庭部の2m離れた地点から得られた接合資料があり、少なくとも墓前祭祀における前庭部の共有意識があったと考えられる。

6号a横穴墓は6号b横穴墓の造営によってその前庭部を失っていたが、若干残る前庭部の名残と、羨道の平面形から見て意字型である。玄室の規模は今回調査分の中では12号a横穴墓についで2番目の大きさであった。側壁上半部から天井にかけて完全に崩落しており、玄室の構造をつきとめることはできなかったが、床面の形状と立ち上がり方から見て平入りドーム形と推測する。

玄室は陥没していたものの、表からは立派な閉塞石（荒島石の1枚造り）に塞がれていた。作業員の方々にお願いしてようやくの思いで引き出した閉塞石の下には、「メ」印のヘラ記号が刻まれ、宝珠状つまみが付いた出雲6期の蓋坏の歪んだ蓋が1点出土した。この時期は調査区内において横穴墓の造営が最も盛んであった7世紀中葉に相当する。

ところで、玄室内の陥没上層を除去して床面を精査してみたが、推測されるドーム形の上半部は失われ、凸凹の床面が表れ、平入りの床面を左右の屍床に分けるために設けられたであろう、中央の溝跡は検出できたが、そのほか、埋葬の形跡や遺物はついぞ出土しなかった。また、奥壁が掘れども掘れども定まらない。やがては床面までもが堆積土の柔らかさを示すようになり、ついには奥壁と思っていた部分がトンネルの入り口様を呈するに至り、作業は非常な危険を伴うようになったためやむなく中止した。ここからは推測にすぎないが、おそらく、平成2年度に調査された中竹矢4号横穴墓の玄室から東に向かって横合いに掘られた「横穴」が、今年度調査区内7号横穴墓玄室の存在を知ってか知らずか、見事これを壊すことなくその下を透かして、6号a横穴墓玄室奥壁へと到達していたのではないだろうか。しかし、中竹矢遺跡3・4号各横穴墓及び同5号「横穴」では、近世初頭における再利用の明瞭なる痕跡が検出され、それに伴う良好な遺物も出土しているが、この6号a横穴墓玄室においてはそのような痕跡、遺物はいっさい見られなかった。ひとつには、6号a横穴墓の玄室がそのころにはすでに陥没していて、到達はしたものの利用するには至らなかったという可能性が考えられれようか。

閉塞施設：7号横穴墓は拳大から人頭大の自然石で閉塞した形跡があった。10号横穴墓も同様に閉塞に用いられたと見られる自然石が出土しているが、後述するとおり追葬の際に切石で閉塞している。本章前節で前節註2文献を引用して記述した中竹矢1号横穴墓の閉塞は人頭大から一抱えもある大きな自然石であり、築造時期が出雲3期の中でとらえられ、ほぼ同時期とみられる7号横穴墓の閉塞のあり方と同様と思われる（巻末モノクロ写真図版41右上）。この区画に横穴墓が導入された初源の姿を残していたと言えるかもしれない。

加工した荒島石（浮石凝灰岩）を使用した各横穴墓の閉塞施設の状況は以下のようであった。

6号a、同b、9号a、10号、12号a各横穴墓では、門の規模にあわせた1枚の切石を使用している。6号b横穴墓で使用されている閉塞石が最大規模を誇り、高さ幅とも1m、厚さ20cmを測る。

10号横穴墓の閉塞は最終的には高さ94cm、幅74～84cm、厚さ20cmを測る下膨れの切石でなされていた。しかし、この閉塞石は本来の割り付け位置であったはずの刳り込みからずれて、地山面か

ら最高30cm浮いている（第64図）。また、この石の下には人頭大から一抱えもある自然石が供献須恵器蓋坏などとともに敷かれていた（第65図）。10号横穴墓は中竹矢1号横穴墓・社日古墳南斜面7号横穴墓についで、中竹矢4号横穴墓とともに古い様相を呈する横穴墓である。一端自然石で閉塞され最初の追葬で切石を使用し、次の追葬で切石を高い位置で再利用したことが考えられる。

11号a横穴墓は2種類の石材を組み合わせて閉塞している。下には、ほかの横穴墓と同様に高さ63cm、幅82cm、厚さ20cmの板状に加工された荒島石の切石を用い、その上には高さの不足を補うように、高さ22cm、幅68cm、奥行き14cmの角柱状に加工された荒島石の切石を組み合わせて閉塞している。

8号横穴墓には石床の転用かとも思われる3枚の比較的小さな切石を組み合わせて使用されている。復元するとみなほぼ同規格と思われる。高さ60cm、幅44cm、厚さ15cmを測る。

埋葬施設：玄室内の埋葬施設には以下のようなものがあった。

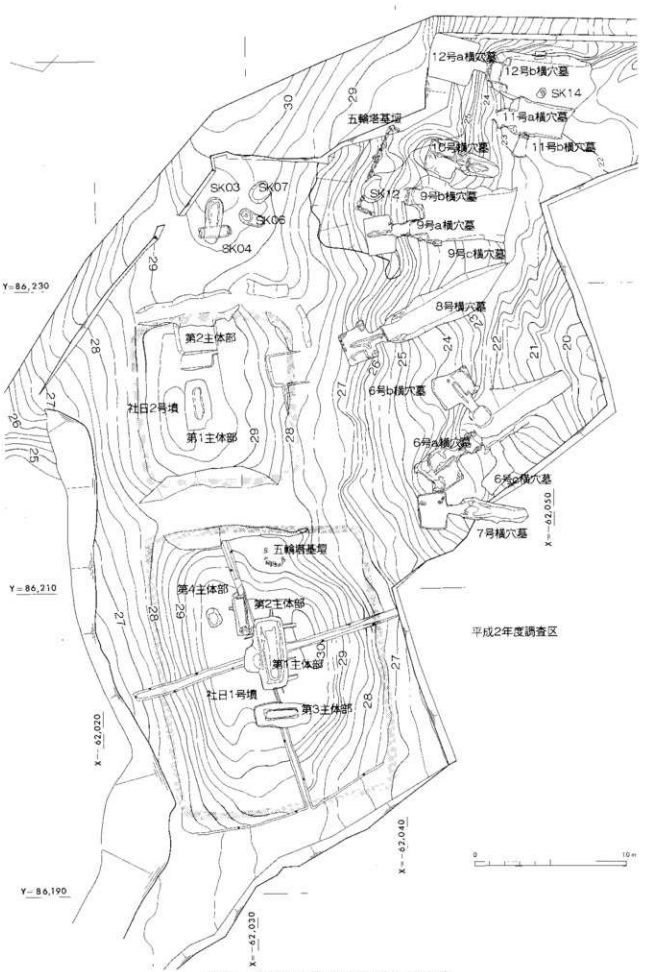
7号横穴墓には、平入り長方形を呈する玄室床面の縁に沿い、玄門から始まり玄門で終わる横断面「V」字の溝が巡っている。玄室一面を屍床としたのだろうか。さらに、玄室右袖には、拳大の円礫を多く使用した礫床があった。この礫床は、玄門右壁の延長線より右側の玄室の奥行きをほぼ全部使って作られている。まず、礫床の石囲いをおくための割付穴をいくつか掘り、一抱えから人頭大の比較的大きい石を用いて石囲いを作り、拳大の自然石を奥の方から1.28mにわたって敷き詰めている。そこから石囲いまで約30cmの間なにも検出されなかった！面が続く。そして、平らな人頭大の石と玄室前面の壁との間に須恵器蓋坏が置いてあった。。

6号a横穴墓玄室には中央に開口軸に沿った微かな溝の痕跡があり、右壁下、壊された奥壁下の溝とともに右袖に屍床を設けようとしたのだろうか。6号b横穴墓玄室には、中央開口軸に沿うはっきりとした幅40cm前後の溝があり、玄室床面の周溝と合わせ左右に屍床を造り出している。

8号横穴墓玄室には、玄門から続く幅30～60cm、深さ10cm前後を測る溝が開口軸に沿って中央に掘り込まれ、左右に屍床を造り出している。また、その上には、閉塞に使われていたものと同じ規格（高さ60cm前後、幅42cm前後、厚さ15～20cm前後を測る）の切石が2枚づつ玄室の左右袖中央に積み上げてあった。左袖の石積みにはそれを割り付けたかのごとくに窪みがある。石床か右棺を転用して棺台にした可能性がある。しかし、釘などは一切出土していない。8号横穴墓玄室床面周縁からは大小8個の窪みやピットが検出された。

9号a横穴墓は左袖を鑿などで加工した2枚ずつの切石2列、右袖に1列（切石3枚敷き）計3列の石床が置いてあり、その上や玄室内から人骨や刀子、須恵器坏が検出された（巻末モノクロ写真53）。平入りの玄室床面自体には、開口軸に沿って中央にその底が羨道と同じ高さになるように幅30cm、深さ10cm前後の溝を掘り、左右の床面を高くして屍床を設けている。この割付は石床の配列と合致しているので、石床を配置するのと同時か、もしくはこのような石床の配列を当初から決めて置いて計画的になされたことと思われる。

9号a横穴墓玄室左袖中寄りの石床は検出時には割れていたが、もとは2枚の切石を一体として彫刻成形したものと思われる。全体の長さ1.87m、最大幅42cm、厚さ16cm前後を測る。その表面には、ほぼ全体に及ぶ長さ1.44m、最大幅33cm、深さ2cm前後の長楕円の刳込みと、玄門側の端部に20cm×14cmの隅丸長方形で深さ3cmの小さな刳込みがある。大きな長楕円の刳込みは滑らかに仕上げているが、小さな刳込みは工具痕が残り雑に映る。それぞれ身体と頭部に対応していると思わ



第4図　調査区内遺構位置図（S=1/250）

れる。全体に中程が膨らみ両先端が若干すぼまっている形状は舟形を想定しているのだろうか。

9号a横穴墓玄室左袖の左壁に沿う石床は、2枚の長方形の切石をそれぞれ彫刻成形して一体としたものである。最大幅40cmのうち、10cm前後の棚を残し、深くは1cm前後を削り込んで平面を造り出している。

10号横穴墓玄室には、床面周縁の溝と中央間口軸に沿う溝でやはり左右に屍床を造り出している。また、左袖に人頭大の自然石6個を整然と配置し、石の平坦面を上に向けてその上に木棺を置いた形跡がある。

遺物：10号横穴墓では、玄室内から多種多様な遺物が出土している。先に挙げた玄室左袖棺台石の周辺には、木質の付着した釘が12点と鉄鏃、刀子が出土した。追葬時のものと思われる。また、玄室右袖には、最初に埋葬された被葬者の副葬品とみられる84～89cmの大刀（直刀、鍔あり）2振が、人骨を乗せた3個の自然石のうちの一つに組み敷かれて出土した。この大刀周辺では鉄鏃1、鹿角装柄刀子1が出土し、人骨などが寄せられていた（巻末モノクロ写真54ほか）。墓道と玄室内においてそれぞれ須恵器の一括資料が得られた。第67図と第68図に挙げたものがそれである。この中で68－6はフラスコ形長頸瓶で愛知県猿投窯産と見られる[註1]。このように外来系もしくはその模倣品と見られる土師器がいくつかの横穴墓で出土している。外来系土師器としては6号b横穴墓前庭部出土53－15畿内系土師器皿、9号a横穴墓前庭部出土62－10畿内模倣丹塗り系土師器坏C、同62－11畿内系土師器坏もしくは皿がある。一方これらの模倣的土師器としては11号a横穴墓前庭部から74－11丹塗り土師器坏Aと74－12丹塗り土師器皿がそれぞれ出土している。

このほか、9号a横穴墓前庭部左壁奥隅からは第63図に挙げた長頸鏃が塞着して出土した。6号b横穴墓前庭部からは欠片にして11個の鉄滓が出土した。

註1『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会1983

『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X』（中竹矢遺跡）島根県教育委員会1992

註2『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅱ島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘1996年

註3『奥才古墳群』島根県鹿島町教育委員会1985年

註4『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会1986年

『遺跡が語る古代の出雲』－出雲平野の遺跡を中心として－出雲市教育委員会1997

西尾克己・大國晴雄著『出雲平野の古墳』出雲市民文庫9出雲市教育委員会1991年

註5山本　清『横穴被葬者の地位をめぐって』『島根考古学会誌』第1集1984年

註6『小丸山古墳発掘調査報告書』島根県益田市教育委員会1990年

以上註2から註6までについては『釜代1号墳外発掘調査報告書Ⅰ』（財）松江市教育文化振興事業団1994年第7表

石野博信編『全国古墳編年集成』雄山閣出版1995年

註7大谷晃二『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集1994年

大谷晃二『出雲地方の須恵器編年表』**『出雲の横穴墓』－その型式・変遷・地域性－**第7回山陰横穴墓調査検討会資料

山陰横穴墓研究会編1997年

中村　浩著『研究入門須恵器』柏書房1990年

以下須恵器の編年についてはこれらの研究による。

註8京都国立博物館学芸課工芸室小野善裕氏のご教示による。

第3章　調査の結果

第1節　社日古墳群

(1) 古墳群の立地

社日古墳群は、壹宇平野の北東部に位置し、東西に延びる丘陵の尾根頂部に立地している。古墳群は、丘陵先端付近の標高30m付近に存在しており、そこから北西と南西方向に二俣に分かれる先端部にも中竹矢古墳群の存在が確認されている。

また、1981年の調査において、同一の丘稜尾根上で確認された道構（中竹矢遺跡）を検討すると溝で区画された低墳丘の古墳や壺棺、木棺墓群などが見られ、中小規模の古墳が古墳時代前期以降この丘陵に集中して存在していることが分かる。

さて、発掘調査では、2基の古墳（1号墳・2号墳）を確認し調査しているが、尾根頂部の調査区西端部で古墳の溝と推測される溝状遺構や下方斜面の横穴墓前庭部から円筒埴輪片が出土していることから西側にもう1基以上の古墳が連続して存在しているものと考えられる。

調査では、1号墳と溝で区切られた2号墳の方墳2基について発掘を行った。1号墳は、丘陵尾根が降る手前の頂部に存在し、2号墳は尾根を溝で区切った西隣に存在している。

(2) 調査前の状況（第5図）

調査前は、1、2号墳ともに山林であり、また、1号墳は、古墳群の名称の由来である「社日さん」が祀られていたことから墳頂部は平坦に削られ表土が存在していない状況であった。又、1号墳の西側の墳丘斜面及び墳裾部分も「社日さん」への参道のため削られており、かろうじて北西コーナーが残存しているものと考えられた。1号墳の北辺は、標高28m付近で傾斜が緩やかになる部分が確認でき、北東コーナーにつながる良好な状況であった。また、下方の標高27m付近でも傾斜が緩やかになる部分が確認できたが、1号墳とは無関係のものと考えられた。南辺については、標高28m付近でテラス状の平坦面が確認できたが、中程を除いて南東及び南西コーナー付近は、コンターが乱れているように後世の改変が著しいものであった。

また、1、2号墳の間に存在する溝部分は、尾根を東西に走る古代以降と推測される道のための盛土で繋がっており、調査当初は、1，2号墳が同一の古墳で前方後方形と考える可能性もあったが、調査の結果2基の方墳であることが判明した。

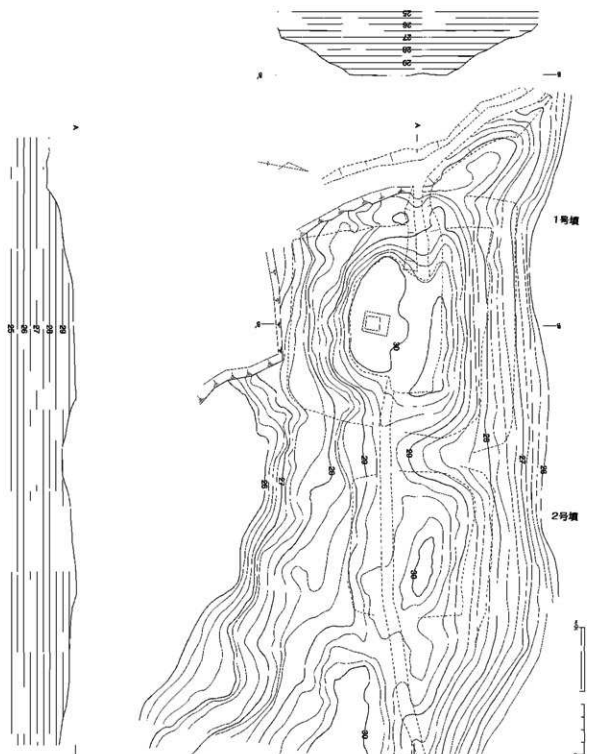
2号墳は、後世の改変を著しく受けたものであったが、東側の尾根を切断した区画溝の存在が考えられ、また、北側は、標高29m付近で傾斜変換する箇所が認められ、かつ東側の溝と繋がるものであったので、墳裾がこの辺りであると推測された。南側の墳裾については、墳頂部分から、後世の削平により改変されており、明確にはできなかったが、標高29m付近で傾斜が緩やかになっていることを確認していた。

(3) 調査経過

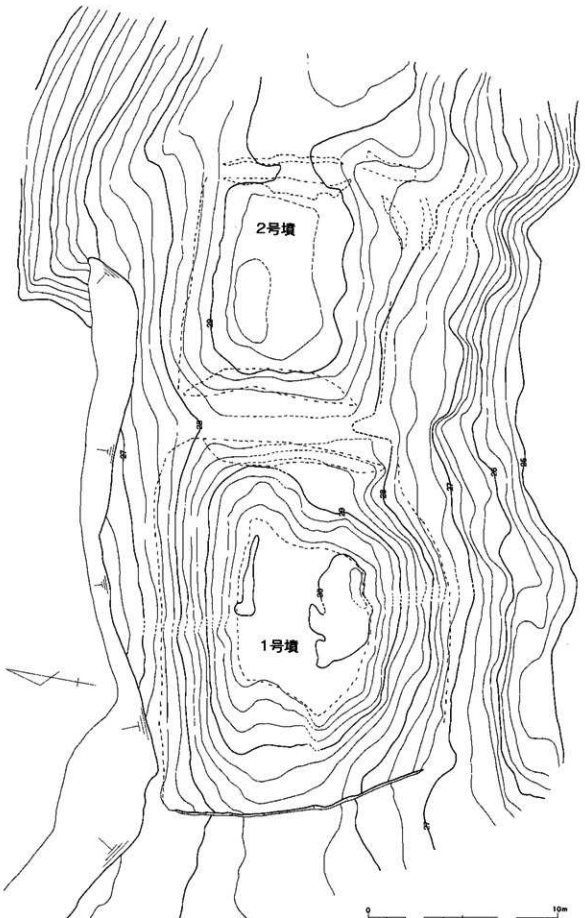
調査は、立ち木の伐採後に周辺の地形測量後、トレンチ調査をおこない、本格的な古墳群の調査をおこなった。1号墳については、東西と南北の墳丘主軸方向にベルトを設け墳丘の構築法についてまず調査をおこなった。最初に墳丘主軸に沿ってサブトレンチを掘り下げた結果、盛土及び旧表土、地山を確認し、また、墳丘西側が当初の推測どおり大きく削平されていることが判明した。さらに北側、北西コーナー付近、東側溝において古墳に伴うものと考えられる土師器が出土し、その

平面的な位置、標高を記録した後に取り上げをおこなった。

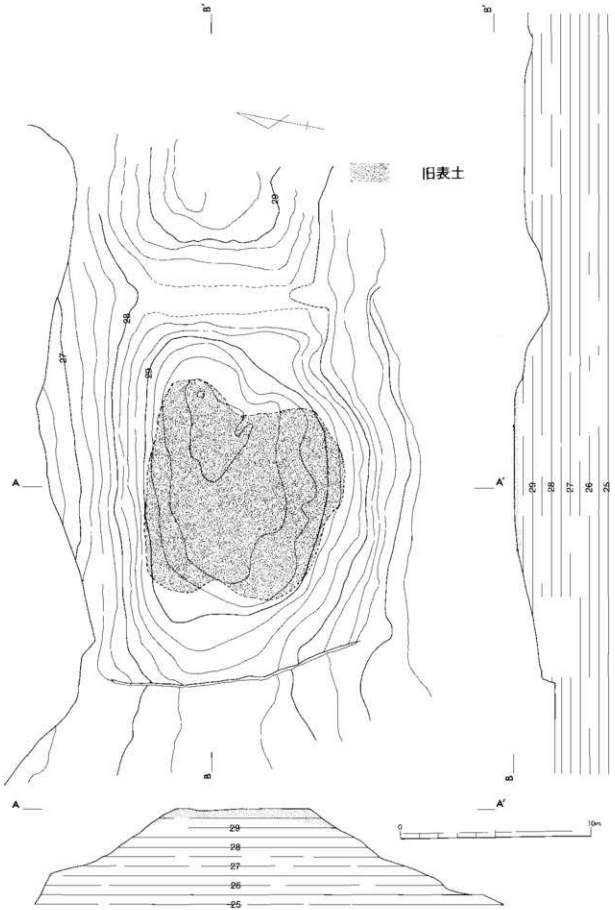
墳丘主軸沿いのサブトレンチによって墳頂付近まで確認した結果、東西方向に長い並行する主体部が2基存在する可能性が考えられた。そのうちの1つは、墓坑長が7m程の大規模なものと当初推測されたが、調査の結果、第1主体部と第3主体部の2つの主体部であることが判明した。



第5図　杜日古墳群　調査前地形測量図（S=1/300）



第6図　社日古墳群　調査後測量図（S=1/200）



第7図　社日古墳群　1号墳（旧表土検出時）地形測量図（S＝1/200）

主体部が3基存在することが判明した後に、それぞれの主体部の調査をおこなった訳であるが、第1主体部については、その棺構造等について検討を要するものであった。第1主体部の調査当初は、縦断面及び横断面の観察から箱形木棺であろうと想像されたが、その規模が大きいものであることから、木棺の痕跡である可能性も考慮に入れながら調査をおこなった。調査は、期間の迫る中で、上部にテントを張り天候に関わらずおこなう状況であったが、結果として、横断面形の丸い木棺の外側に底板のない箱形の木棺が存在していたものと考えられた。副葬品には、鉄器が出土し、その実測、取り上げを行い完掘後に、盛土を除去し旧表土検出を行ったが、その過程で第4主体部を発見した。そこで第4主体部を調査し、その後に旧地表の測量を行い終了した。

2号墳の調査は、すでに表土を調査で除去し地山まで検出した後であったことから、墳丘主軸に沿ったベルトについては、南北軸を部分的に観察したのみであった。主体部は、当初東西に長い墓坑を1基検出していたが、墳丘中央より東へ偏っていることから、他にもう1基以上の主体部が存在している可能性が考えられた。そこでもう一度墳丘中央部を精査した結果、もう1基の主体部（第1主体部）を検出することができた。

1，社日1号墳の調査

（1）墳丘の概要

規模・形態（第6図）　1号墳の墳丘形態は、東西が長い長方形を呈するものである。ただし、西側については、後世の改変が著しく正確な数値については、明確にできなかった。

墳丘規模は、東西19.5m程度、南北15mを測る。墳裾の様相については、北辺では、標高27.5m付近で傾斜が緩まり、テラス状をなす箇所が見られ、南辺では、標高27.5m付近でコンターが緩まりテラス状を呈している。但し、南辺は、北辺に対応するコンターが東西方向に直線状になる部分が墳丘中軸付近のみであり、改変が著しいものと考えられた。

さて、東側では、尾根を切断した溝が存在している。溝は、トレンチ調査で失っている部分が多く、溝の下端の数値や2号墳との切り合い関係などについて厳密さを欠く結果となっているが、墳端は標高28.25m付近と推測される。西側は、改変著しいが、北西コーナー付近については、遺物の出土状況等から傾斜部分の一部が残存しているものと考えられた。また、墳端は後世に1段削られている付近と推測される。

墳丘の高さは、北及び南側から2.5mの高さを測り、東側溝下端から1.7m程と考えられ、おおよそ各辺とも墳端は、同一レベルで揃えられている。

なお、墳丘には、葺石や段築が認められず、墳頂平坦面は、復原で東西11m、南北8mと推定される。

（2）墳丘の築成

概要（第7図）　墳丘は、まず、斜面部分の地山を削り出して整え、墳裾は溝及びテラスによって築成している。そして、その後に墳頂部分に盛り土を施して完成させている。盛り土の厚さは、厚い部分で、0.8mを測るが、後世に「社日さん」のために削られているので、実際は、今より高く盛土されていたものと想像される。また、盛土は、水平を保つように施されている点が、特徴である。

南北ライン土層の盛土状況（第8図上段）　南北の土層観察によって、北側において、地山の整形

の様相が分かり、交点から7.5m付近でテラス状に加工してあり、そこに27層が堆積している。南側は、盛土が流出によって失われている外に斜面部についても良好な遺存状況ではない。よって墳裾は明確ではないが、現状で交点より南7.8mの箇所でテラス状になっていることから本来の墳裾もこの辺りと推測した。

盛土は、地山の整形後に、12、13層（南側）で旧表土の最頂部レベルまで盛り上げ、墳頂平坦面を築いている。その後に、9～11層（南側）、8層（北側）によってさらに水平に盛土した後に第1主体部が掘り込まれ、さらにその上に4層によって覆われている。このように盛土の過程は、3段階の工程に分けて解釈することができる。

東西ライン土層の盛土状況（第8図下段）　東西ラインでは、第1～第3主体部を通過しているが、第2主体部については、かすめている状況である。この断面で、第1及び第3主体部は、旧表土上に盛土が施された後に墓坑が掘り込まれていることが確認された。また、第3主体部西側では、後世に削平を受けた後に新しい造成土が覆っており、墳頂部東側の第2主体部付近は、旧表土付近まで改変を受け、盛土が存在していない。なお、第1主体部－第3主体部の前後関係はこの断面でのみ確認している。調査の結果では第1主体部墓坑埋土後の盛土を第3主体部の墓坑が切っているものと捉えたが、この部分の土層は、分層が困難でもあり、実際のところ断定しがたいものであった。

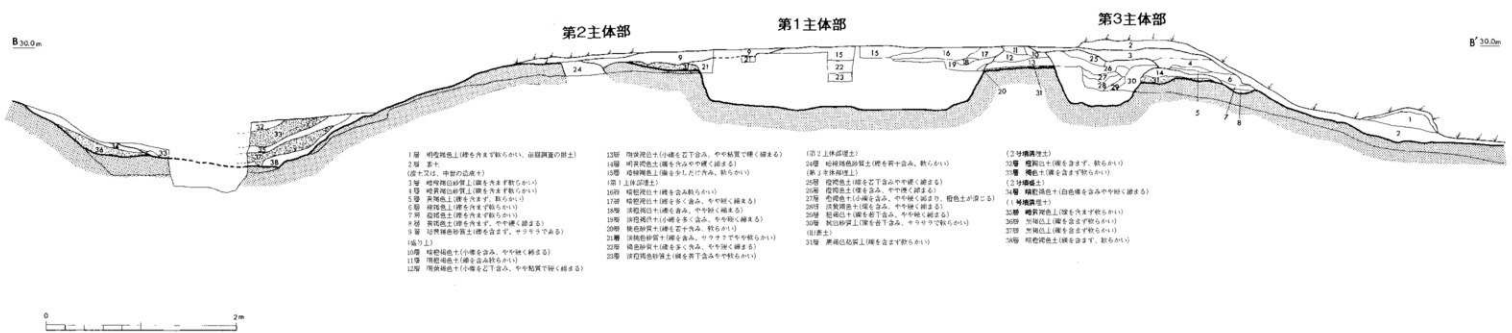
周溝（第8図下段）　1号墳－2号墳間の溝の堆積状況は、トレンチ調査時に失われた部分が存在しており、不明確な点が多いが、結論として、1号墳の溝掘削、自然堆積、2号墳築造時に西側に整形の盛土及び溝の開削、自然堆積、古代～中世の道の整地土といった順序が考えられた。

(3) 墳裾及び溝出土遺物

出土状況（第9図）　墳丘斜面部及び東側溝の精査時に古墳に伴うものと考えられる土師器片が出土している。破片は、平面的、立面的位置をドットによって記録した後に取り上げた。土師器片は、基本的に墳丘東辺、北西コーナー、周溝から出土しており、古墳時代前期に属するものと考えられる。なお、図化した低脚坏（図10－10）以外は1号墳に伴う可能性が高いものである。

土師器の出土状況を検討すると完形のものはなく破片で出土しており、出土位置に完形のまま置かれていたものと考えることはできないものである。また、その器種を見ると溝からは甕形土器が、墳丘北辺からは鼓形器台・高坏・小形壷形土器等の甕以外の器種が、北西コーナーからは装飾された壷形土器・壺形土器・蓋形土器がそれぞれ出土しており、地点により器種が異なっているという特徴が挙げられる。さらに細かく見ると北西コーナー出土のものは、出雲地方で弥生時代後期から一般的に見られる土器とは系譜が異なるもので、他地域の影響（特に畿内）を受けたものと考えられる土師器が出土している。これらの出土状況を考えるに、古墳に関わる行為（祭祀）に使用された時の状況等の差異を示している可能性も考えられるが、現段階では明確にし難いものである。

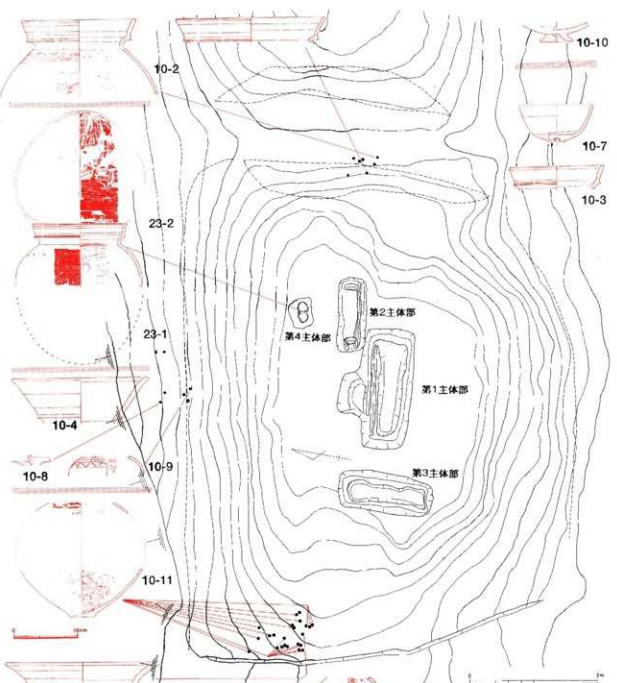
出土土師器（第10図）　1～3は在地の複合口縁の甕である。1は風化が著しいが、口縁端部には幅2.5㎜の平坦面を持ち、下段の突出は見た目ほど長くはならないようである。2は口縁の器壁がやや厚く（6mm）、板元より先端が厚くなる。端部は外方に引き出す感じで平坦面を加工しており、器壁内面に平坦面が取り付く。外面頸部直下に櫛描きのような平行線紋が施されている。肩部には横方向の刷毛目か撫でが施されているようである。内面は口縁・頚部は横撫で、胴部は左上がりの箆削りである。3は口縁部の高さが2.8㎝と短小なわりに器壁が7㎜と厚く、平坦面も先端を押



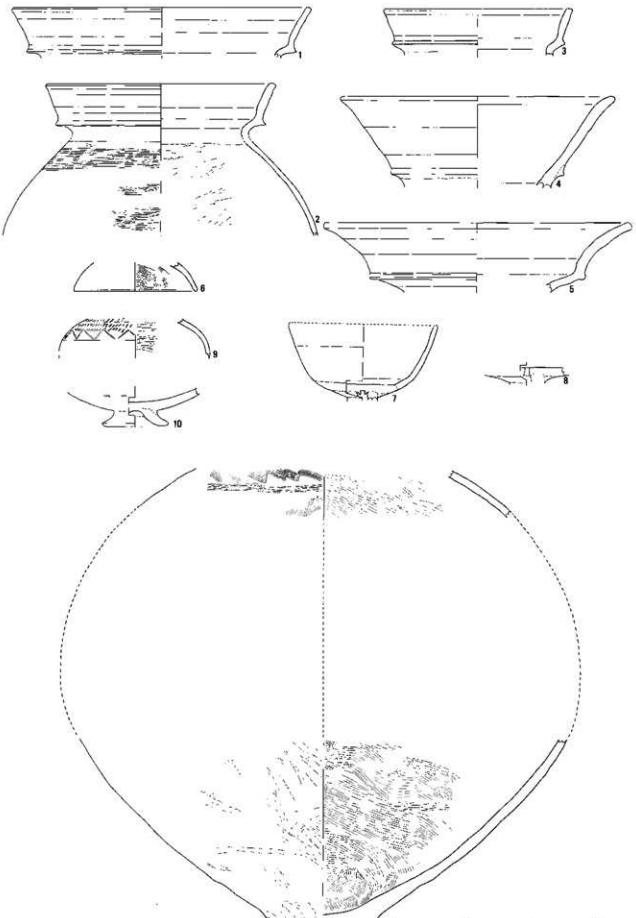
第8図　社日古墳群　1号墳墳丘土層断面図（S＝1/60）

さえるようにして加工されていることから、1・2に比べると後出的な要素がある。小片であるため確実とはいえないが、復元口径は1が21.4cmと平均よりやや大きく、2は18.2cmで平均的な法量（口径16cm～19cm）である。3は口径の復元ができず、口縁の立ち上がりが短いことから平均より小さいものと判断したが、小谷式になると法量の大小にかかわらず口縁の立ち上がり（2次口縁）の高さが3cm程度に揃う傾向があり平均的な法量となる可能性もある。

4は鼓形器台の受け部と思われる破片である。端部はそのまま薄く延び、下段の突出は粘土紐を貼り付けて作られている。



第9図　社日古墳群　1号墳墳裾及び溝遺物出土状況（S=1/150）土器は1/6又は1/12



第10図　社日1号墳墳裾・溝出土土師器実測図（S=1/3）

5は壷の口縁部と考えられる。1次口縁は水平気味に立ち上がり、2次口縁も大きく外反して開く。頸部はおそらく絞まったものとなるであろう。同様なものが小屋谷3号墳でも出土している。二重口縁加飾壷や布留式の二重口縁壷などの影響により成立した可能性がある器種である。このような器種は大木式段階では見られないものである。

6は径9.8cmを測る半球形の壷と思われる。内面は刷毛目、外面は撫で調整である。9が直口壷とすれば組み合うものであろうか。9は直口壷の胴部片と思われ、肩の施紋は列点紋3段に鋸歯紋が1段である。10は低脚坏で、脚と坏は挿入付加方によっている。7・8は高坏で、7は小型の坏部で、脚との接合法は円盤重点で円盤には軸痕（径3mm）がある。山陰の伝統的な高坏は口径が20cmを超える大型のものであるが、小谷式になるとこのような小型のものが散見されるようになる。脚部の形態は不明だが、あるいは畿内系の低脚高坏の模倣品である可能性もある。8は高坏の坏底部と脚部との接合部である。接合法は円盤充填か、挿入付加法によるものである。脚の器壁の厚さは8mm、中空部の径は1.2cmを測る。坏底部の軸痕（径4.5mm）は貫通しており、高坏における底部穿孔と見ることもできる。

11は畿内系の加飾壷と思われ胴部下半と肩部のみ残っている。復元に不安があるが胴部は高さ37.2cm・最大径41.1cm程度になるものと思われる。肩部外面には波状紋と平行線紋が施されるが、波状紋は在地の土器に見られるものとは趣を異にする。器面調整としては、外面は撫でのような擦痕があり、内面は粗い（7本／cm）刷毛目が施される。内面に見られるような刷毛目も在地の土器には見られない。低部は径7.8cmの平底で自立することが可能である。胎土は在地のものと異なることから搬入品と考えられる。

時期決定の容易なものとしては、1～3の複合口縁の土器である。1・2は2次口縁の高さが3cm超える発達した段階で、端部調整も器壁内面に行い平坦面も狭いことから、大木式（草田6期）である。3は2次口縁が短小なわりに器壁が厚く端部の加工を先端に行っていることから、底部が丸底化した小谷式の初源的なものとなる可能性がある。ただし平坦面は3.5mmとまだ狭く明瞭な肥厚も見られないことから従来の編年では草山6期のなかに含まれるものである。在地の土器は杜山1号墳の築造時期を草田6期の新しい段階であることを示している。

(4) 埋葬施設

主体部の配置（第9図）　1号墳の墳頂平坦部からは、4つの埋葬施設を検出した。それぞれの主体部は、検出順に第1～第4主体部と呼称している。

第1主体部は、中央部に位置し東西方向に主軸をとる最大規模のものである。この第1主体部が1号墳の中心的な埋葬施設と考えられる。第2主体部は、1号墳と同一の主軸でやや東側に位置し、若干コーナー付近が切り合っている。第3主体部は、1号墳の西側に存在し、南北に主軸をとるものである。第4主体部は、2号墳東側の墳頂部縁辺に位置し、東西方向に主軸をとるものである。また、各主体部の墓坑底面を比較すると第1主体部（29m）－第3主体部（29m）－第2主体部（29.5m）－第4主体部（29.4m）といった順になっている。

A、第1主体部

概略（第11図）　第1主体部は、墳頂部中央に位置する木棺木槨墓と考えられるものである。主体部の主軸は、N－84°－E（座標軸による。以下主体部軸は、それによる。）を測り、ほぼ東西方

向である。墓坑は、盛土から掘り込まれており、地山まで達している。なお、墳丘調査時の断ち割りによって墓坑の南北方向で破壊した部分が存在する。

墓坑　墓坑の規模は、検出面上端で東西5mを測る。南北方向では、東側で2m、西側で1.6mと東側が幅広となっており、深さは1.1mである。また、北辺のやや西側よりには、木棺等の搬入等で機能したものと考えられるスロープ状の施設が付設している。スロープは、上端で南北1m、東西1.7m程の不整な方形を呈し、断面は、斜行した後にテラス状の平坦面が造り出されている。スロープ下面の平坦面は、半円形を呈し、東西1.1m、南北0.45mである。

墓坑の形状は、2段墓坑状を呈し、床面付近で幅15cm程のテラスが巡り、北辺に沿っては、上端幅20cm、深さ10cmの断面「V」字状を呈す溝が掘られている。2段目の規模は、深さ5～15cm程の浅いもので西側の方が深く掘られている。長さ（東西）は3.6m、幅（南北）が東で1m程、西で0.8m程を測り東側が幅広である。

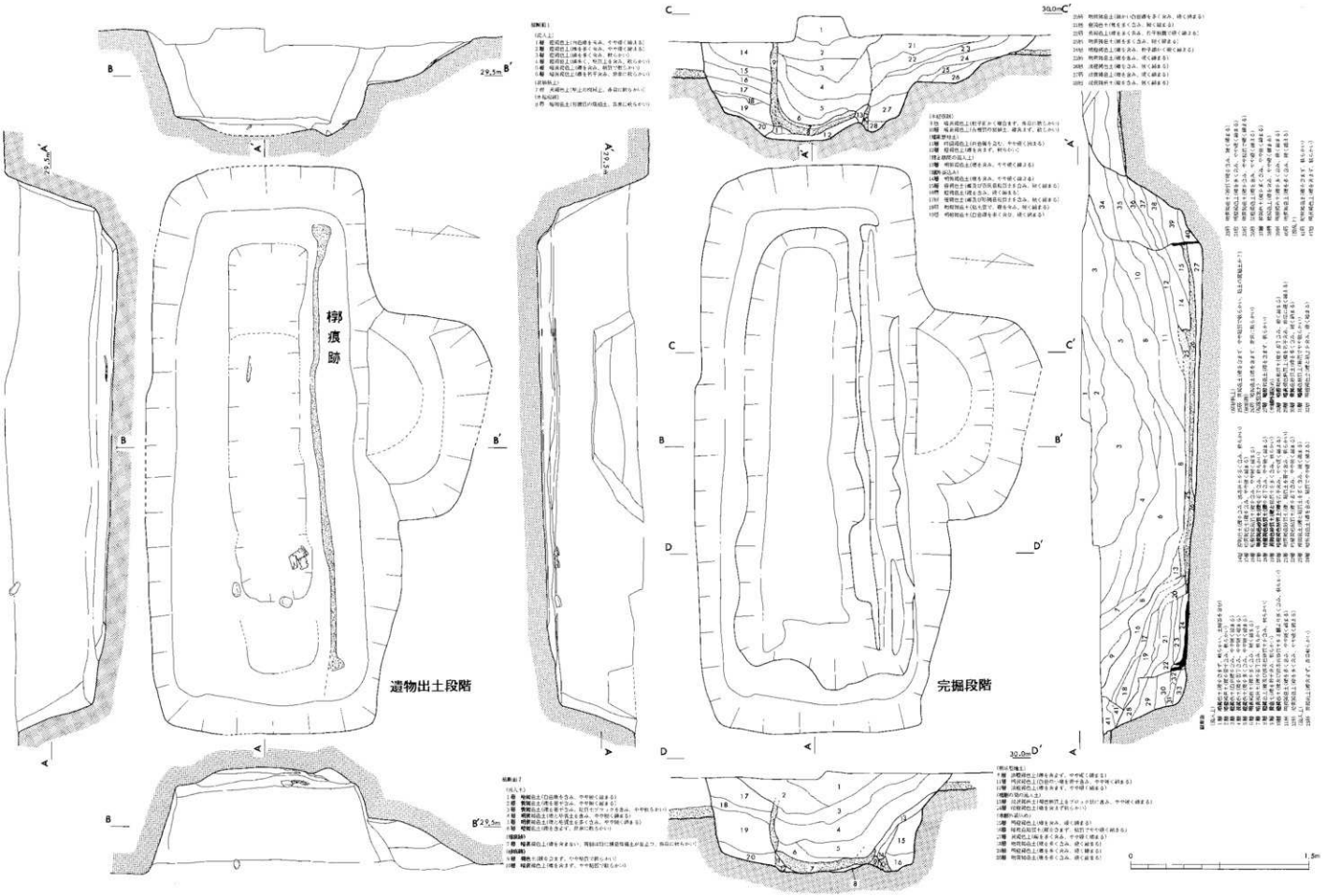
棺槨の検出過程（第12図）　第1主体部の調査は、平面的に検出した時点で長軸1本（東西方向）、短軸2本（南北方向）の土層観察用のベルトを設け掘り下げを行った。上端より深さ0.7m（標高29.3m付近）程掘り下げた時点（第12図上段）で、木棺（後の木槨）痕跡と棺内流入土と棺外の裏込め土の土層の違いが存在することが判明した。この時点で、墓坑南辺に平行する幅10cm前後の側板と認識した痕跡が筋状に確認され、その横断面観察と平面観察からは、箱形木棺の可能性を強く推測されるものだった。しかし、その規模が一般的な箱形木棺としては、大形であることから木槨状の施設を想定しながらの調査となった。

そこで、木槨と木棺の構造解明のために、墓坑上端より深さ0.8m程（標高29.2m付近）掘り下げた時点で縦断ベルトの中央付近を除去し、横断土層2面を精査した結果、木槨と木棺底面の痕跡を横断面で確認した。その後横断ベルト除去、東西両端の縦断ベルトをそれぞれ除去した後、墓坑床面付近での棺槨構造の解明に努めた。

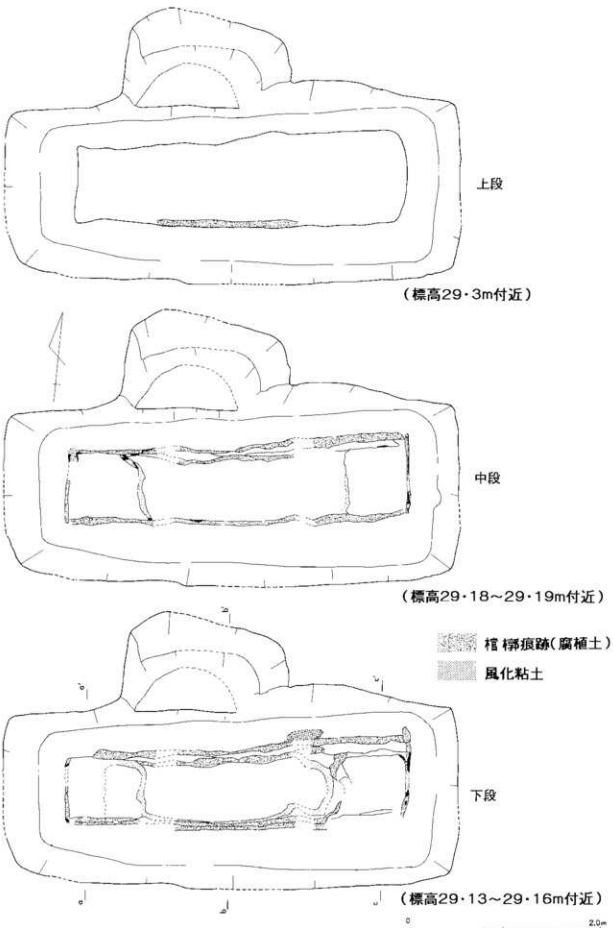
調査は、墓坑床面付近での棺槨構造を明らかにするために、これまでの主軸縦断セクション（東西方向）の他に横断セクション（南北方向）を3本追加し（第12図参照）掘り下げた。

まず墓坑床面より23cm程（標高29.18～29.19m）まで掘り下げた段階（第12図中段）で平面的に観察し、記録をとった。その段階では、北辺では、棺と槨の痕跡と考えられる2重の腐植層とその隙間に流入した細かい砂質の土砂を確認した。一方南辺では、横断面でも分からなかったように1重の痕跡しか確認できず棺と槨の区別は確認できなかった。東、西辺でも1重の腐植層が確認できるのみであったが、東辺では、腐植層というよりも淡青灰色の粘土が顕著に認められた。また、棺槨内で東、西辺に平行した粘土の風化（腐植）したような層が筋状に認められた。この粘土の腐植層は、仕切板または、棺の小口に対応する痕跡の可能性が考えられた。

その後に墓坑床面より18cm程（標高29.13～29.16m）までの段階（第12図下段）で、今一度平面を観察、記録した。この段階で、木棺の様相及び木槨との関係が大方把握することができた。北辺及び南辺では、棺槨の痕跡と考えられる2重の筋が確認された。さらに、東辺の棺痕跡については、槨痕跡より内側で終わっているものと考えられた。なお棺痕跡の内側に粘土の腐植層の薄い筋が認められた。この粘土の腐植層については、現段階でも解釈不明なものである。また、前段階でも認められた内側の南北軸の粘土腐植層は、西側のみで認められた。なお、北辺添いでは、黒色の腐植土が幅10cm、長さ40cm程で存在し、これは、槨外の有機質の副葬品痕跡である可能性が考えられた。



第11図　社日古墳群　1号墳第1主体部実測図（S＝1/30）



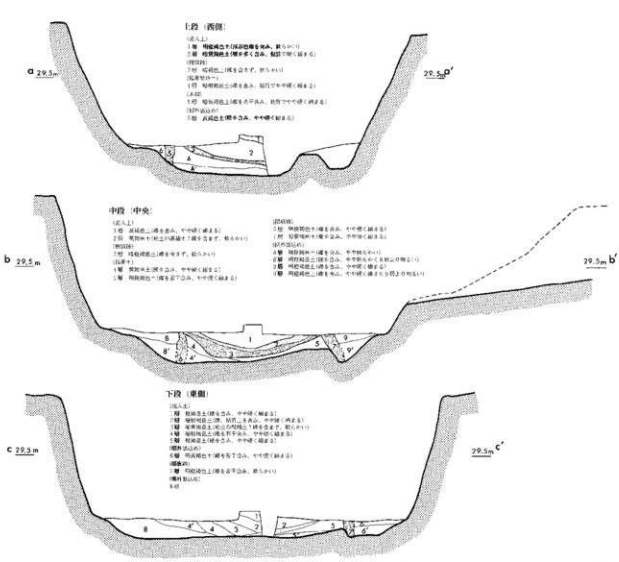
第12図　社日古墳群　1号墳第1主体部棺槨痕跡検出過程（S=1/40）

平面的に棺槨の痕跡を確認後、木棺内の堆積土を除去し、棺内の副葬品等について調査を行った。その結果東西2群に分かれる鉄器を検出し、記録後取り上げた。最後に墓坑床面（地山）を検出する段階で、北辺で木槨側板用と推測される溝を検出した。さらに溝内で木槨の側板痕跡（第11図左）と考えられるやや暗色の腐植層も確認した。

墓坑内土層観察1（第11図） 前述した過程によって棺槨構造の把握をおこなったが、ここでは各土層断面について若干述べておきたい。

墓坑上面から把握している積断土層は2本である。それぞれ、棺と槨の痕跡を確認できるものであり、棺身は断面が「U」字状を呈し、槨の側板は北辺が溝内に置かれ、南側が墓坑床面に置かれていたことが確認できるものであった。

東側横断土層では、槨の側板痕跡が南側では垂直に近い状況で確認できたが、北側では、下方で認められるのみであった。また、流入土の状況からこの付近では、北側の槨側板が先に腐朽倒壊し土砂が流入したものと推測された。なお13・14層は、棺と槨の隙間に流入した土層と解釈された。



第13図　社日古墳群　1号墳第1主体部最下部土層断面図（S=1/20）

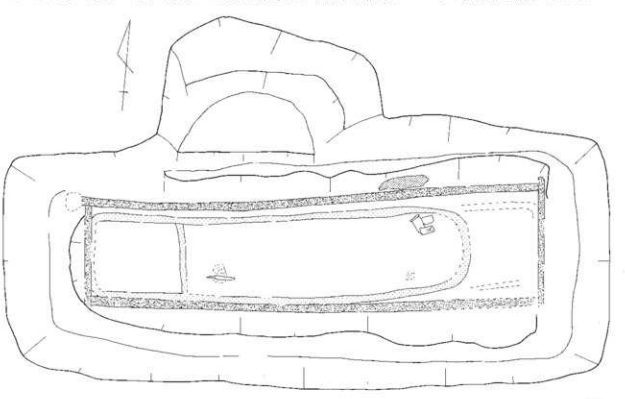
一方西側横断土層では、南側の槨側板と棺の区別が明確に分層できなかった。このことからおそらく殆ど隙間の無い接した状態で埋納されていた可能性が考えられた。また、北側の槨側板と棺の隙間に入り込んだ土層（13層）が東側横断土層と同様認められた。

墓坑を縦断する土層では、棺底の腐植層が西側では、槨材の小口付近まで達しているが、東側では、槨小口の手前1m付近で終わっていた。また、棺底の腐植層は、墓坑壁より東側0.75mの所で若干上方に立ち上がっていた。このことから、おそらく棺は、西側では槨小口と殆ど接しており、東側では、空間が存在しており、西側には仕切板が置かれていたものと考えられた。この棺底痕跡の上面には、薄い腐植（風化）した粘土層と考えられる粒子が細かく軟らかい層（25層）が存在していた。ただし、この層は、西側の仕切板の想定位置で終っていた。

また、東側の槨小口と棺小口の間では、墓坑床面上に青灰色の薄い粘土層が見られた。この粘土層は、東側の槨と棺の間の空間に何らかの施設が存在していた痕跡の可能性も考えられるが、よく分からないものである。またこの部分の流入土層は、砂質土と粘質土が互層状（16～24層）に堆積している特徴的なものであり、墓坑の中央部分とは異なるものである。

墓坑内土層観察2（第13図）　棺底付近で設定した3本の横断面（南北方向）の観察では、棺底と槨側板の痕跡が中央と西側では確認された。ただし、東側では北側の槨側板のみが確認された。この北側の様相からも縦断で確認した棺と槨小口板の間の空間の存在が判明した。なおこの東側では、南側の槨側板痕跡が確認できていないが、この部分の土層が根による攪乱などもあり不明瞭な点が多かった状況が原因であると思われる。

棺槨の復元　以上の調査によって、木棺、木槨についての解釈を行う上での検討資料を得ることができた。今回、一応、調査での知見を検討し、木槨木棺構造についての復原案を提示したもの



第14図　社日古墳群　1号墳第1主体部棺槨復元図（S=1/30）

が、第14図である。復原にあたって、木槨及び木棺の規模については、大凡想像できたが、その使用木材の厚みについては、不確かなところであり、棺槨痕跡の検出時の腐食層の厚みをそのまま採用している。おそらく棺・槨材の厚みについては、本来は、それ以上の厚さのものと推測される。また、棺の小口付近の形状についても明らかにできたとは言い難い。様々な不確定な要素も確かに存在するが、木棺、木槨の規模を復原してみると以下の数値となる。

・**木棺**－断面の丸い刳り抜きの棺身、東西3m、南北0.6m、高さ不明、西から0.7mの所に仕切り板あり。

・**木槨**－底板の無い箱形、東西3.5m、南北0.7～0.85m、高さ0.8m以上。

石杵と土師器小片の出土状況（第15図）　遺物は、木棺内より鉄器が5点、墓坑埋土最上層付近より標石と考えられる石杵が1点、土師器小片が数片出土している。石杵は、墓坑内流入土から出土し、西側に使用面を向けてやや傾いた状態で検出した。本来は、墓坑埋め戻し後に据え置かれたものと推測されるが、木槨木棺腐朽後の土砂の流入によって移動したものと考えられる。また、可能性として墓坑埋め戻し後の基壇状の施設に据え置かれていたとも考えられる。

土師器小片は、数片出土したのみでその器種などについては不明であるが、おそらく石杵と同様に、本来は墓坑埋め戻し後に置かれたいわゆる「供献土器」の破片と想像される。また、その出土した土層は、所々暗色であり腐食した土層と考えられる。一つの可能性としてこの土師器片が出土するレベルは、よく見られる供献土器が落ち込んで土器溜まりとなった状況の最下面と捉えることもできる。そのように考えると墓坑埋土上面に本来は、厚さ0.8m以上の盛土または、基壇状の施設の存在が想像される。

鉄器出土状況（第15図）　棺内の鉄器類は、東側で農工具類4点、西側で武器1点といったように2群に分かれて出土している。東側出土の鉄器は、短冊形鉄斧、袋状鉄斧、方形の鉄製鍬・鋤先、鉇が各1点である。それぞれの鉄器の刃先は、東側に向けた短冊形鉄斧、鍬・鋤先と西側に向けた袋状鉄斧の2者が存在し、切先方向は同一ではない。また農工具は、木棺内北東隅付近でまとまって出土しており、鉄器に付着する布痕跡等から木製の柄が付けられないで、布に巻かれて副葬されていた可能性が高い。

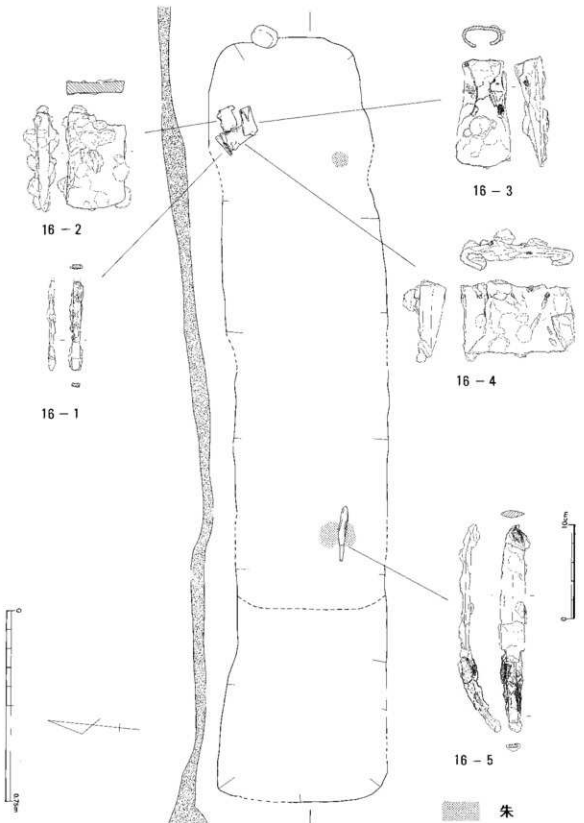
西側出土の鉄器は、鉄剣1点である。鉄剣は、切先を東側に向けた状態で出土しており、また付着した布痕跡から柄、鞘等のない抜き身の状態で布に巻かれて副葬されたものと考えられる。

また、棺内の南西と鉄剣周辺では、棺床付近で赤色顔料（おそらく水銀朱）を検出している。顔料は、面的に広がるものでなく、まばらに認められるものであった。

朱（第15図）棺内からは、少量ではあるが赤色顔料を検出している。赤色顔料は、分析をおこなっていないが、おそらく水銀朱と推測されるもので、棺内の南東隅より内側付近と鉄剣出土地点周辺から検出した。おそらく遺体の頭部付近と足下に散布されたものと思われる。

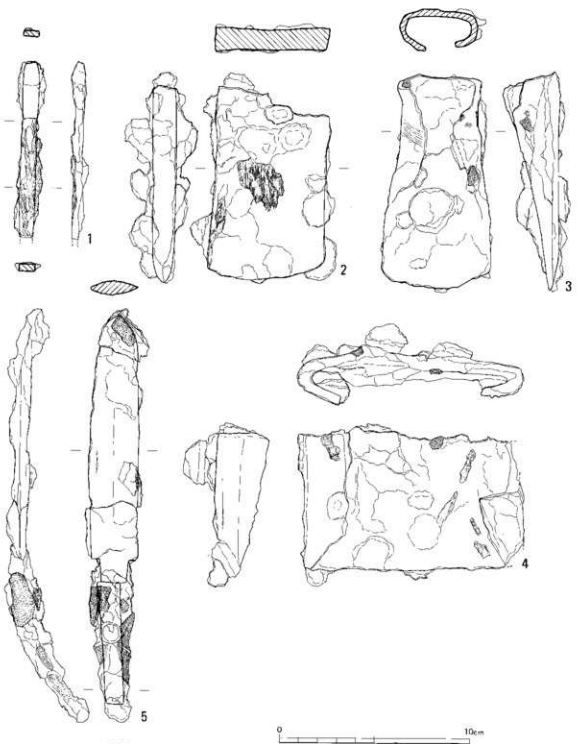
鉄器（第16図）1は、明確には分からない鉄器であるが、おそらく鉇と推測される。断面は矩形で棒状を呈し、現状で長さ9.3cm、幅0.8cm、厚さ0.4cmを測る。木質は、図上で下半部分に付着しており、棺材の木質と推測される。木質の無い部分は錆が顕著で良く分からないが布痕跡が認められる。刃部は図の下側で先端が欠けている。

2は、短冊形鉄斧であり、基部が欠けており身部中央の膨らみ部分から刃部にかけて残存してい



第15図　社日古墳群　1号墳第1主体部棺内副葬品出土状況（遺構S＝1/15・遺物S＝1/4）

る。おそらく欠損している基部の一部は、腐植によるものではなく、人為的に断ち切られている可能性が存在している。寸法は、残存長で10.3cm、刃部幅6.2cm、厚さ1.2cmであり、刃部先端はやや湾曲しており、両刃である。また、横断面は長方形であるが、中央部が薄くなり両端部が厚いものであり、しっかりと鍛打されている。復原すると中型又は、大形のタイプと考えられる。なお、付着している木質は、棺材のものと考えられる。



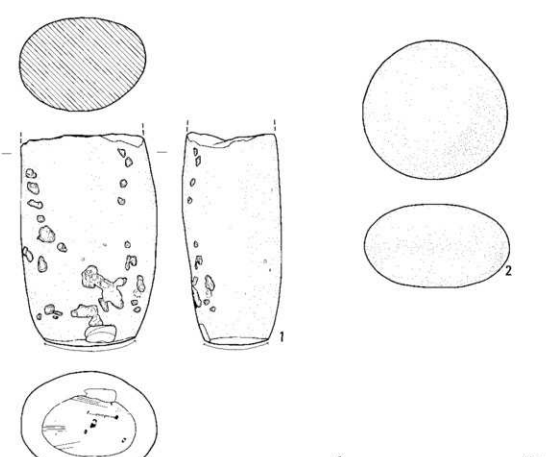
第16図　社日古墳群1号墳第1主体部出土鉄器実測図（S=1/2）

3は、袋状鉄斧であり、袋部から刃部に至る間に肩部の張り出しを持たないタイプである。また、袋部の端部が木柄を強引に取り外すためなのか抉れている。全長11.2cm、袋部長5.5cm、刃部幅5.75cm、基部幅4.1cmを測り、やや刃部に向かって広がるものである。また、縦断面は、袋部と刃部の境に段を持ち、刃部に厚みをもたしている。なお袋部の内外面には、繊維が付着している。

4は、方形の鉄製鏃・鏑先であり、形態は、横長で刃部は直線状を呈している。全長7.6cm、幅11.5cmを測り、厚さは、1.8～2.6cmである。また、袋部内面には布の繊維の痕跡が認められる。

5は、全長20.6cmの短剣で、茎部が関部付近から折れており、人為的に折られたものが副葬されたものと考えられる。寸法は刃部長13.0cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。茎部は長さ7.6cm、幅1.6～1.0cm、厚さ0.35cmを測る。関部付近では、木質の表面に布痕跡が認められ、断面は、長楕円形状を呈している。なお、刃部にも布の繊維痕跡が所々認められる。おそらく抜き身のまま布に巻かれて副葬されている可能性が考えられる。

石杵（第17図） 1は、基部の欠損した石杵であり、小口部分が使用により平滑になっている。なお、側面には使用痕跡は認められなかった。計測値は残存長12.3cm、幅7.2cm、厚さ5.25cmである。使用面は、ほぼ平らで、一定方向に使用擦痕が認められ、凹部には朱と推測される赤色顔料が微量ではあるが付着していた。なお、石杵出土地点周辺の土砂も採取して観察したが、朱は検出されなかった。



第17図　社日古墳群　1号墳第1主体部(1)第4主体部(2)出土標石（S=1/2）

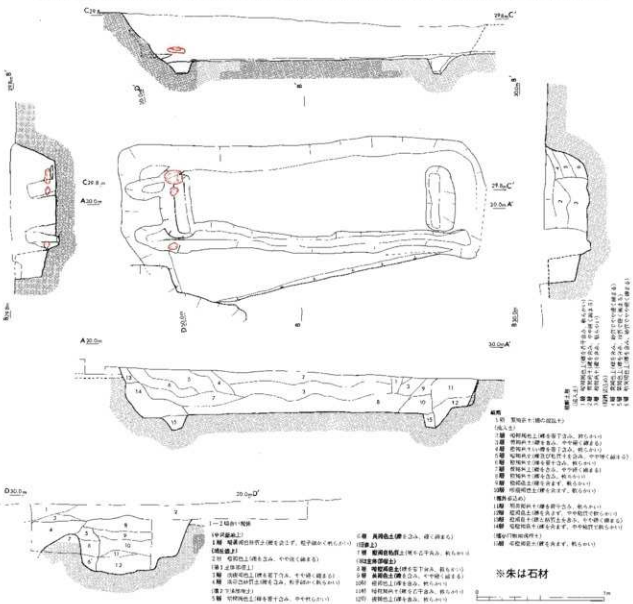
B、第2主体部

概略（第18図）　第2主体部は、第1主体部に平行した軸をとり、やや北西側に位置し、南西コーナーを第1主体部によって一部切られている。主体部の主軸は、N－80°－Eを測り、ほぼ東西方向である。なお、墓坑の南辺を調査時の墳丘主軸沿いのサブトレンチによって破壊している。また、墓坑内には、組合せの箱形木棺が納められているものと推測した。

墓坑　墓坑は、周辺の盛土が失われているために掘り込み面について厳密なことは分からないが、現状では、旧表土から掘り込まれている。規模は、上端で東西2.8m、南北方向が東側で1.1m、深さ0.35mを測り、長方形を呈す。また、墓坑床面は若干西側に低く傾斜しており、墓坑床面には組合せ式木棺の棺材を固定するための溝が掘り込まれている。

棺構造　埋葬用の木棺については、完全に腐朽しており残存していなかったが、墓坑床面及び西壁で検出した溝と短軸と長軸のセクションの観察から組合せ式の箱形木棺と推測した。

墓坑床面の溝は、東辺及び西辺の短辺と南辺の長辺側で検出した。東辺の溝は、上端で南北2.8



第18図　社日古墳群　1号墳第2主体部実測図（S=1/30）

cm、東西1.1cm、深さ0.35cmを測り長方形を呈している。一方西辺の溝は、上端で南北50cm、東西25cm、深さ15cmを測り東辺と同じように長方形を呈している。また、各溝の傾斜は外方側が、内方側と比較して傾斜が緩やかである点が共通している。これらの溝は、棺材の小口板を納めるための溝と推測された。

南辺側の溝は、幅15cm程、長さ2.6mを測り、深さは3cmを測り、西壁にも続く。なお、西壁の北辺側にはもう一つの溝が穿たれているが、それに続く墓坑床面の溝は、検出されなかった。また、東壁には西壁に対応するような溝は穿たれていなかったものと考えられる。なお、南辺側の溝については、木棺の長側板を入れる固定用の溝と推測された。

長軸と短軸の土層、及び第1－第2主体部間の土層観察では、木棺外の裏込め土と木棺内への流入土（木棺腐朽後）と解釈できる層位がそれぞれ確認された。また、土層から解釈される木棺の位置と前述した墓坑床面の溝は、対応していることから箱形木棺の存在を復原できることは疑いないものと思われる。ただし、長軸土層の西側については、棺外の裏込め土と考えられる層が13・14層と思われるが、13層は墓坑床面の木棺の側板固定用の溝を覆っており、解釈上不都合なものであるが、14層については、木棺腐朽時に2次的に内側に流入している層と考えた。

以上述べたように墓坑床面溝と土層の解釈から復原される組合せ式の箱形木棺は、長側板によって小口板が挟まれた平面で「H」状を呈するものと推測される。その木棺規模は、内法で南北50～60cm、東西1.9m考えられる。また、頭位方向は、東側の方が幅広であり。床面レベルが高い点から東側頭位であったものと考えられる。

出土遺物　出土遺物については、副葬品と考えられる物は出土していない。ただ、墓坑床面付近から棺材の固定に使用されたものと考えられる拳大の石が西側から3点出土している。

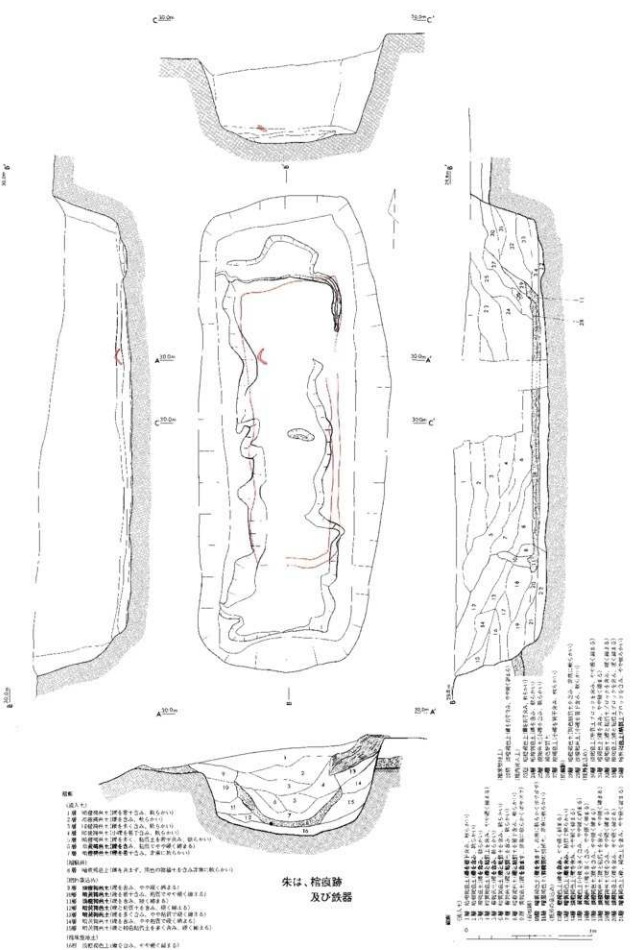
C、第3主体部

概略（第19図）　第3主体部は、第1主体部の西側墳頂部に位置し、刳り抜きの棺身底の断面が「U」字状を呈す木棺を納めたものである。主体部の軸は、N－5°－Wを測り、ほぼ南北方向である。墓坑は、盛土中から掘り込まれ、地山まで達している。墳丘調査時の断ち割によって西壁の一部を削り取ってしまっている。

墓坑　墓坑は、南北に長い長方形を呈し、規模は上端で南北3.8m、東西1.5mを測り深さ0.8m程である。墓坑壁は、傾斜がやや急な基本的には素掘りの土壙であるが、墓坑床面で浅く深さ5cm程窪み状に掘られている。これは、おそらく木棺設置のため若干掘り窪めたものと推測している。

棺構造　墓坑内に納められたと考えられる木棺は、腐朽によって失われていたが、その痕跡と推測される黒色の腐植層の観察によって刳り抜き木棺の存在を復原した。

墓坑内調査は、長軸（南北方向）と短軸（東西方向の）の直交する2本の土層ベルトを残して掘り下げていった。その過程の中で、標高29.3m付近で平面的に長方形を呈す土の異なる部分（第20図）が中央で認められ、かつ、南西では幅8cm程の棺材の腐食層と考えられる黒色土層が認められた。この木棺痕跡を平面的に記録した後に、東西軸横断ベルト沿いにサブトレンチを入れ木棺痕跡の横断面を確認した。その木棺痕跡の横断土層を観察すると、黒色の非常に軟らかい腐食土層が「U」字状を呈し、その内外で土層の色調、締まり具合が異なることが確認された。その後、墓坑床面から15cm（標高標高29.2m付近）まで掘り下げた状態で、平面的に棺痕跡と考えられる黒色の腐植層が幅5cm程で帯状に確認できた。また、長軸土層では、木棺の小口痕跡と考えられる

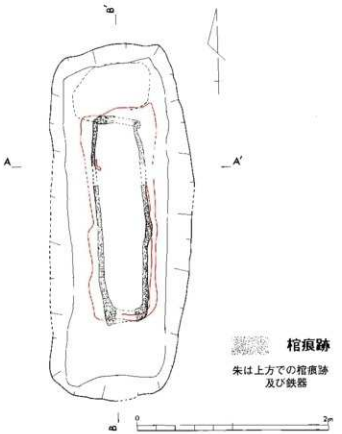


第19図　社日古墳群　1号墳第3主体部実測図（S＝1/30）

腐植土層と棺床の腐植層も確認できた。この段階で、ベルトを除去し平面の状況を記録に納めた後に、腐食土層の内側を調査することとし、棺内の流入土のみを除去していった。その結果、副葬品の鎗を検出した。

以上述べてきた過程によって、木棺の痕跡から大凡の木棺規模を復原することができた。復原できる刳り抜き木棺は、断面が「U」字状を呈し、内法で長さ（南北）2.1m程、幅（東西）が北側で0.75mを測る。また、平面的に確認した痕跡幅で、北側0.4m、南側で0.35mを測ることから北側が幅広のものと考えらえる。

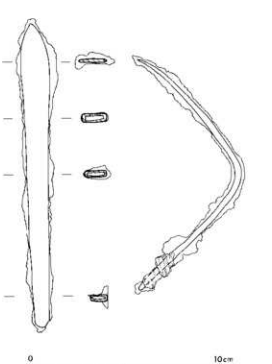
鉄器の出土状況（第19図） 遺物は、木棺内の北西側の棺側付近から鎗が1点出土している。鎗は刃部を北側に向けた状況で出土している。



第20図　社日古墳群　1号墳　第3主体部棺痕跡実測図（S=1/40）

鉄器（第21図） 木棺内から出土した鎗は、人為的に中央から折り曲げられたと考えられるものである。刃部の形状は、先端が尖り、上反しており、茎部との境は明瞭ではない。また、その横断面は、現状では明確に分からないが、裏透き状になっているように見える。

茎部は、幅がだんだん細くなるものである。寸法は、全長が16.8㎝で、刃部の最大幅1.5㎝、長さ4.6㎝、厚さ0.2㎝であり、茎部は長さ12.2㎝、幅0.8㎝～1.3㎝、厚さ0.3㎝である。なお、茎部先端に付着している木質は、棺材の木質と考えられる。



第21図　社日古墳群　1号墳第3主体部出土鎗（S=1/2）

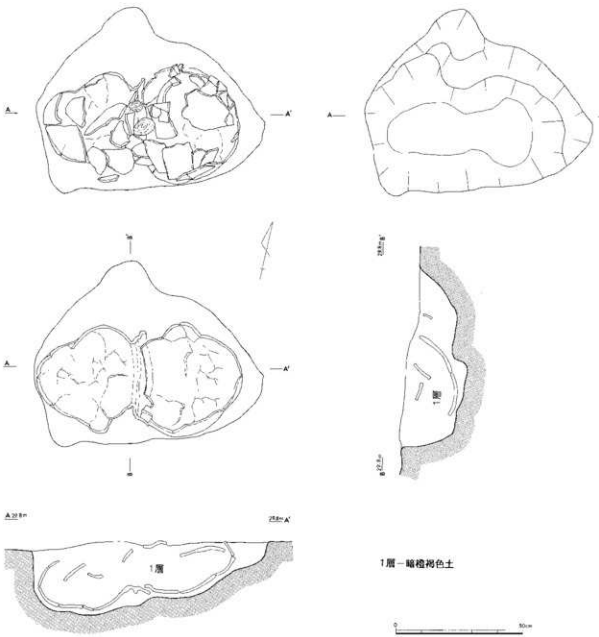
D、第4主体部

概略（第22図） 第4主体部は、第2主体部北側の墳頂部端に位置する土器棺である。主体部の主軸は、N－77°－Eを測り、ほぼ東西方向である。

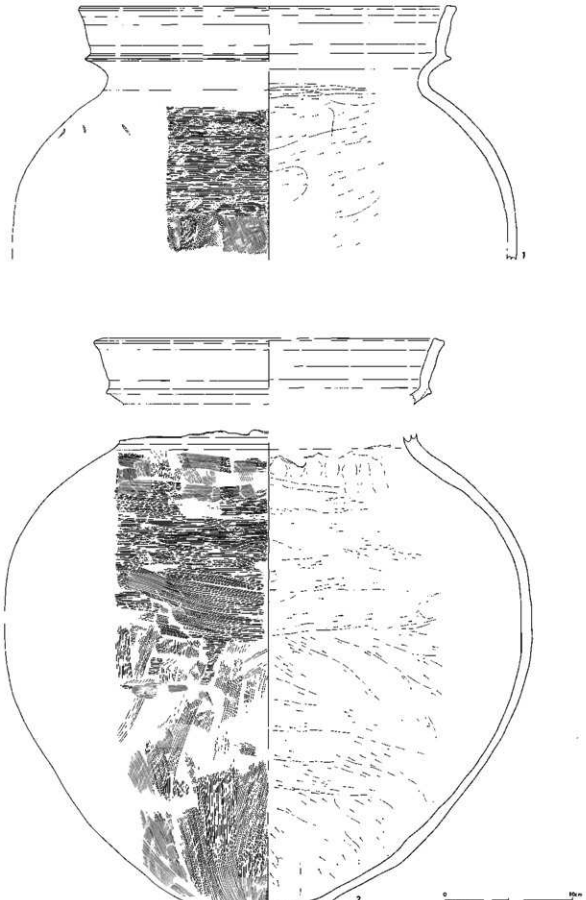
主体部の検出は、第1～第3主体部完掘後にこれ以上の主体部は存在しないものと考え、墳丘盛土を除去している作業中に検出している。このためは、墓坑の検出面は地山であるが、本来盛土から穿たれている可能性も考えられる。

墓坑 墓坑の形状は、不整な楕円形を呈し、上端で長さ0.9m、幅0.75mを測り、深さは最深部で0.28mである。なお墓坑床面は西側に深く傾斜している。

土器棺 墓坑内の土師器は、西側に口縁の付いた甕（23－1）がまず置かれ、それに接するように東側に口縁を打ち欠いた甕（23－2）が置かれていた。この2つの甕は、上面は破片で内部に落ち込ん



第22図　社日古墳群　1号墳第4主体部実測図（S=1/15）



第23図　社日古墳群　1号墳第4主体部土師器実測図（S＝1/3）

だ状態で出土しているが、本来は完形であったものと推測される。

出土遺物　土器棺内からは、遺物は全く出土していないが、主体部発見時に周辺から磨石（第17図2）が1点出土している。石器は、最大径7.7cm、最小径7.3cmを測りほぼ正円形に近く、厚さは4.4cmである。なお、この磨石が主体部に伴うものとすれば、標石であった可能性もあるが、出土位置が明確でないため不明である。

土師器（第23図）　1は完形品であったが風化が著しく復元できなかったが、2と同様な形態になるものと思われる。口径は29.8cmで、胴部最大径は39cmである。口縁端部は幅7mmの明瞭な平坦をもち、外方に軽く肥厚しやや丸みを持つ。下段の突出は粘土紐貼り付けによっている。

調整は、口縁部は内外面ともに横撫で、頸部内面には施ミガキのような調整がある。胴部は、外面肩部に10本／cmの細かい横刷毛が高さ8cmにわたり平行に施っている。これ以下は同様の細かい縦方向の刷毛目が施される。胴部の器壁は厚さ7mmである。また、肩部には4cm程度の間隔で刷毛原体による列点紋が施る。胴部内面は施削りである。

2はほぼ完形に復元できるが、口縁部については小片しかなく、胴部との接合面がないことから頸部を欠いているものと思われる。頸部より上を掻き切って使用している。

口縁端部はやや外傾して立ち上がり、幅6mmの平坦面を持ち、下段突出は粘土紐を貼り付けている可能性があり、ややドを向いている。

胴部は肩部に14本／cmの横方向の刷毛目が平行にめぐり、最大径部分には7本／cmの縦方向の刷毛目、底部には9本／cmの刷毛目が施される。注目されるのは同じ縦方向の刷毛目でも最大径部分と底部とでは連続しておらず、この境界に対応して外形ラインに軽い段がつくことである。これは底部製作と上部製作の間に重量を支えるため、乾燥させる時間差が生じたためか、分割整形によるものと考えられる。また、底部についてはやや削りが弱いが、明瞭な指頭圧痕がないため整作りとは断言できない。

内面頸部直下は指頭圧痕が残っており、施削りが達していない。以下は施削りによる。

これら2個体の時期であるが、大型の土器については煮沸用の甕などとは異なる変化をする。大型の土器は丸底になるのが遅れるのにたいし、口縁端部の平坦面は早い段階から幅広の平坦面を持たせる傾向がある。第2主体の土器はそれほど大きくなく中型の法量にはいると思われるが、型の使用については確実にできなかったが、いずれも丸底になっている。この点を重視すれば小谷1式から小谷2式のなかで捉えられる。従来の編年では草田6期の新段階から草田7期の初頭と考えられる。

(5) 古墳の時期

古墳の時期についての詳細は後述したいが、墳丘出土の土師器、主体部出土の鉄器等、また、第4主体部（土器棺）に使用された土師器より古墳時代前期前半と推測している。

2、社日2号墳の調査

(1) 墳丘の概要

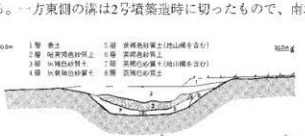
規模・形態(第6図) 前述しているが、社日2号墳は、1号墳と同じ東西に長い尾根上に築かれており、その東側に隣接する。墳丘の最後部の標高は30mであり、1号墳の頂部より若干低い。調査前から、墳丘は小規模な方墳と考えられたが、墳丘の南側部分に小径が東西に走っており、墳丘はかなり削られ、南側は変形していた

発掘の結果、尾根の方向に合わせて築かれた東西12m、南北11mのやや東西の長い方墳と判明した。頂部には東西6m南北3mの見かけ上の平坦面があるが、小径など後世の造作によって本来の平坦面が削平されたものと見られる。墳丘の高さは、築造時時点においては2m前後と推定されるが、その後に盛土が流れたため、現状では1.5mとなっている。なお、墳丘には、段築が認められず、葺石等は存在しなかった。

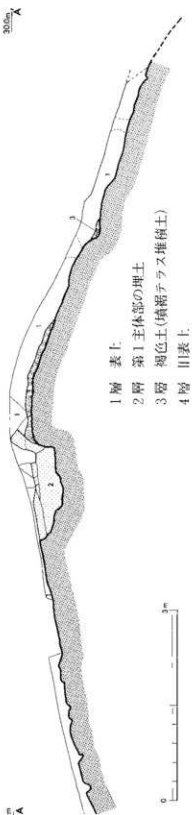
(2) 墳丘の築成

南北及び東西ライン土層の盛土状況（第24図） 墳丘の大部分は尾根を削り出したものである。また、1号墳に見られた旧表土は南北ラインで墳頂部付近で若干認められた。墳丘盛土は、後世の削平によって大部分が失われているものと推測されるが、南北ラインの墳頂部付近と西側溝の墳丘斜面部で確認された。この中で西側溝で確認したものは、1号墳で造られた溝に堆積した黒色土（第8図36層）上に存在している。おそらくこの盛土は、2号墳墳丘築成時に西側斜面部を整える目的で盛られたものと推測される。

周溝 墳丘の東西両側には、古墳築造に伴って、東西に伸びる尾根を切ってできた南北方向に走る溝がある。西側の溝は1号墳を造った溝を盛土で整地した後に築成している。一方東側の溝は2号墳築造時に切ったもので、南北



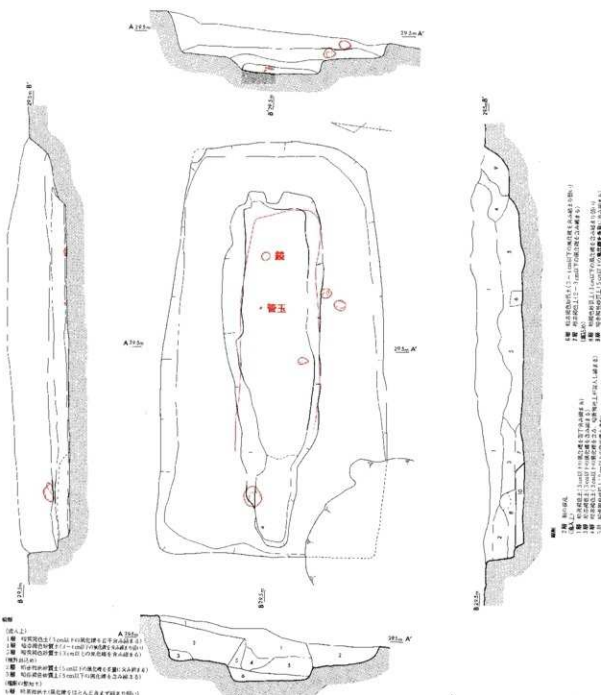
第25図　社日古墳群　2号墳東側溝土層（断面図S＝1/60）



第24図　社日古墳群　2号墳墳丘土層断面図（S＝1/60）

長さ6.8m、幅2.3m、高さ0.6mを測る。

各周溝内からの出土遺物は、両側溝で若干の土師器小片が認められたのみであり、東側溝では確認されなかった。なお、墳丘南側出土の土師器低脚坏（第10図10）が存在するが、2号墳に伴うものであるかは明確でない。



第26図　杜日古墳群　2号墳第1主体部実測図（S=1/30）

(4) 埋葬施設

主体部の配置（第4図） 墳頂部に2つの主体部を検出している。墳頂部の中央部に位置し、東西方向に主軸をとるものを第1主体部、その東側に南北方向に主軸をとるものを第2主体部と呼んでいる。

A、第1主体部

墓坑（第26図） 墓坑は平面プランが隅丸長方形で、2段掘りとなっており、主軸はN－86°－Eを測る。外坑の規模は長さ（東西）3.3m、幅（南北）は東側で1.4m、西側で1.8mで西側の方が幅広である。外坑の深さは0.3mで底面中央には、木棺安置のためと考えられる深さ0.1mの内坑が掘られている。内坑の規模は、上端で長さ（東西）2.1m、幅（南北）は東側で0.8m、西側で0.6mを測り東側が幅広になる。また、内坑の底面は、西側に向かって若干低く傾斜している。以上の内坑幅と床面の傾斜から被葬者の頭位は、東頭位と考えられ、副葬品の出土状況もこれに齟齬をきたすことはない。なお、内坑の西側については、やや不整形な形態を呈しているが、これは、地山が脆弱であることから埋土との区別が困難であり、やや掘りすぎているものと考えられる。

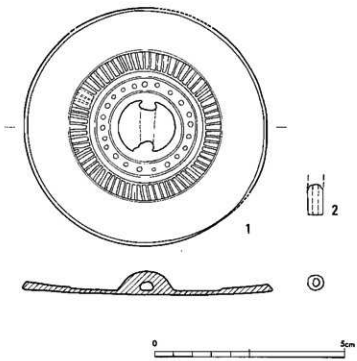
棺構造 墓坑内には、土層観察などから木棺が納められたものと推測している。墓坑内の横断土層を見ると、木棺の痕跡は分からなかったが、木棺の外の裏込め土（2層、3層）と棺内への流入土（4層～6層）の違いが確認でき、棺蓋腐朽後、棺内部に周囲の土砂が入り込んだようすを示していると考えた。次に東西方向の縦断土層を見ると、裏込め土は、2層、8層、9層と推測される。

また、平面的に棺内外の土層の相違を内坑底面から20cmの地点（標高29.4m付近）で確認（第26図スクリーントーン範囲）しているが、これは土層断面と符合するものであった。

以上述べてきた土層と平面の観察状況から復元できる木棺は、長さは東西2.0m×南北0.7mを測るものと推測される。また、棺の幅（南北）は、内坑の幅より西側に向かってやや狭くなるものと考えられる。なお、棺の構造は、明確にできないが、おそらく刳り抜きのやや底が平坦に近い木棺であったものと考えられる。

遺物の出土状況 墓坑内には、自然石の拳大の石が4個出土している。偶然坑内に入り込んだものか、あるいは恣意に持ち込まれたものかは不明である。恣意的に持ち込まれているものと考えた場合に、棺の固定に用いられた可能性が一つ考えられる。

棺内からは、銅鏡と管玉が各1点出土している。銅鏡は、棺内東側で鏡背を上面にして出土しており、鏡面には、棺材か箱の木材片が残存していた。管玉は、やや中央よりで出土している。



第27図 社日古墳群 2号墳第1主体部副葬品（管玉・鏡）実測図（S=1/1）

銅鏡（第27図1） 槨内に副葬された鏡は、鏡径6.4cmを測る珠文鏡である。縁辺部は、厚さ0.15～0.2cmを測る半縁であり、やや反り気味となっている。内区の円圏内には22個から成る珠文帯が1列配され、外区には一重の鋸歯文帯が配されている。鈕は、径1.5cm、高さ0.5cmを測り、鈕孔は方形を呈し短径0.2cm、長径0.35cmを測る。この珠文鏡は、樋口隆康の分類によれば珠文帯が1列であることからⅠ類に属するものである。またⅠ類は、中国・四国地方の出土古墳について検討した今井堯によれば、前Ⅱ期を上限とし、前Ⅲ期にも存在していることが判明している。また、県内出土例を見るとⅠ類とされている奥才12号墳第3主体部からの出土鏡が文様構成、鏡径等で比較的近いものである。なお山陰の鳥取県出土例を見るとⅠ類のものは、古墳時代前期～中期に副葬される例が挙げられている。

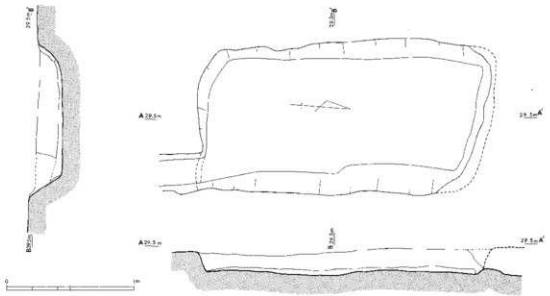
以上のことから、出土銅鏡から古墳の時期を推測した場合に古墳時代前期中葉～後葉を中心とした時期を考えることができる。

管玉（27図2） 管玉は、緑色凝灰岩製と思われる1点のみ出土している。岩質は、非常に脆いもので淡緑灰色を呈している。長さは、0.8cm残存しており、径は0.4mm、孔径0.2mmを測る。穿孔方法は、完形でないため不明であるが、おそらく片側穿孔と推測される。

B、第2主体部

墓坑（第28図） 墓坑は第1主体部の東側に位置する。検出当初は、尾根上に存在する単なる土坑と認識しており、古墳の主体部として調査していなかったものである。主軸は、N－4°－Wを測り、北辺の上端が根による攪乱で失われている。規模は南北2.2m×東西1.2mで、深さは0.25mを測る。墓坑内土層については、設定を行わなかったことから明らかにできなかった。よって棺の痕跡等については不明であり、第1主体部との前後関係についても不明である。

出土遺物 遺物は、出土していない。



第28図　社日古墳群　2号墳第２主体部実測図（S=1/30）

(5) 古墳の時期

古墳の時期は、1号墳との切り合い関係と第1主体部出土の珠文鏡より古墳時代前期中葉を中心とする時期と推測される。

3、杜日古墳群のその他の出土遺物

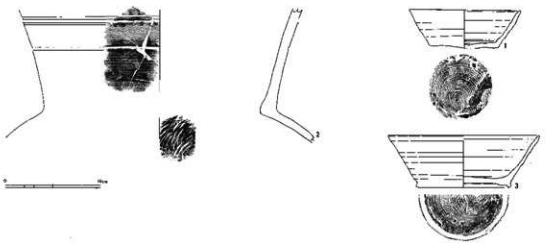
(1) 出土遺物（第29図）

古墳群の時期は、古墳時代前期であることが判明しているが、古墳の調査中に古墳時代前期以降の新しい時期の遺物も出土している。遺物は、1号墳の墳裾及び東側溝から須恵器が3点出土している。

1は、須恵器の坏である。底部は回転糸切り痕が認められ、体部は、直線的に外傾している。口径11.5cm、器高3.9cmを測り、底部径は7.0cm程である。だいたい9世紀後半頃のものと考えられる。また、この須恵器は、1号墳東側溝の堆積土中（第8図32層）より出土している。この出土層は、古道に関わる整地土層であるものであることから、古道はこの須恵器の時期に築成されている可能性が考えられる。

2は、須恵器大甕の頸部から口縁部にかけての破片である。頸部には10条程の櫛描の波状文が施され波状文の上下には沈線が施されている。この甕片は、古墳時代後期のものと考えられ、1号墳の北東コーナー付近で出土しているが、南側斜面の横穴墓群に伴う遺物として捉えた方が良いのかもしれない。

3は、須恵器の高台付きの坏である。底部には、回転糸切り痕が認められ体部は直線的に外傾し、端部はやや尖るものである。高台の端部は、平坦でなくやや沈線状に窪むものである。口径15.8cm、器高5.5cm、高台径9.6cmを測る。この坏は、1号墳北側斜面より出土しており、9世紀後半頃のものと考えられる。



第29図　1号墳及びその周辺部出土遺物実測図（S=1/4）

表2　杜日古墳群出土金属製品・石器計測表

	品目	材質	法量（単位：cm）	出土地点	備考	挿図番号
1	鉇	鉄	残存長　9.3　茎　長　1.7 刃部長　1.7　幅　0.8 刃部巾　0.95　厚　0.4 刃部厚　0.3	1号墳第1主体部 棺内	木質付着（棺材） 布痕？	16-1
2	短冊形 鉄斧	鉄	残存長　10.3 巾　5.8 刃部巾　6.2 厚　1.2	1号墳第1主体部 棺内	木質付着	16-2
3	袋状鉄斧	鉄	全長　11.2 巾 4.1（内法3.4） 厚 1.9～2.25 （1.25～1.6） 体部厚 0.35 端部厚 0.3 刃部巾 5.75	1号墳第1主体部 棺内	・袋部の内部にも布痕があり着柄されていなかったものと思われる。 ・袋部の横断面形状、楕円	16-3
4	鏃	鉄	全長 7.6 袋部　巾 11.5（内法10.2） 厚 1.8～2.6 （0.7～1.2） 体部厚 0.8 端部厚 0.5 刃部巾 11.5復元 11.0残存	1号墳第1主体部 棺内	・袋部に布圧痕が残り、柄を抜いた後廃棄されたものとみられる。 ・袋の横断面形状、楕円	16-4
5	剣	鉄	全長 20.6 刃部　長 13.0 元巾 2.5 厚　0.8 茎部　長 7.6 口巾 1.6 尻巾 1.0 厚　0.35	1号墳第1主体部 棺内	布付着 白いもの付着 ・茎の部分で折れる	16-5
6	鉇	鉄	復原長16.8 刃部　長4.55 巾1.5（推定） 厚0.2（推定） 柄部　長12.2 巾0.8～1.3（推定） 厚0.3～0.4（推定）	1号墳第3主体部 棺内	・中央でほぼ直角に折りまげられている。	21
7	標石 （右枠の 転用）	不明	残存長 11.23 最大巾 7.2 最大厚 5.25	第1主体部上層	使用面に朱あり	17-1
8	標石？	石英斑岩 ？	最大径 7.7 最小径 7.3 最大厚 4.4	1号墳 第4主体部付近		17-2
9	珠文鏡	青銅	径 6.4 厚　外縁　0.15～0.2 内外区 0.1 紐　0.6	2号墳第1主体部 棺内	鏑川隆康分類Ⅰ類	27-1
10	管玉	石材不明	残存高 0.8 径 0.4 重さ 0.1g	2号墳第1主体部 棺内	淡緑色	27-2
11	石鏃	黒曜石	残存長 1.7 巾 1.6 厚 0.3 重さ 0.49g	1号墳墳頂東側 盛土中	上半分欠	80-1
12	使用痕の ある剥片 石器	玉髄	長　3.5 巾　2.4 厚　0.6 重さ 3.61g	8号横穴墓 前庭部 右側壁 敲業穴中		80-2

3、社日古墳群の位置づけとその評価

社日古墳群では、計2基の古墳を調査した。古墳群そのものは、東側にもう数基存在しているものと考えられる。また、以前「中竹矢遺跡」として発掘調査を実施している同一丘陵の西側でも、いくつかの古墳、木棺墓、横穴墓が検出されている。これらの弥生時代後期～古墳時代後期にかけての墳墓は、当該期の意宇平野周辺のみならず出雲地方の古墳時代の様相を知る上で重要な位置を占めるものと考えられる。

ここでは、社日古墳群の中の特に1号墳を中心にしながら、各検出遺構、遺物について検討した上で、社日古墳群の出雲地域における評価について若干の考察をおこなってみたい。

1. 社日1号墳の時期について

1号墳において時期を示すものとしては、墳裾周りから大木式（図10—1・2）・小谷式の初源的なもの（小谷1式）と思われる（図10—3）甕片と庄内式～布留式にかけての加飾壷が出土している。第4主体の壷棺は底部が完全な丸底になっていることから小谷式（1式～2式）と考えられる。以上の資料から社日1号墳は大木式～小谷1式の間に築造されたものと考えられ、埋葬は小谷2式まで続いた可能性が考えられる。

さて、問題は四隅突出型墳丘墓（以下は四隅）と定型化古墳との時間的関係である。近年の資料は大木式のある段階から布留0式に併行することを確実に示しており、大木式から小谷1式の大部分は古墳時代の土器と考えてよい。

次に四隅の終焉であるが、これまで土器を出しているもので大木式段階のものは指標となった大木権現山1号墳のみで、宮山4号墳などはそれ以前の草山5期のなかで捉えることができる。大木権現山1号墳の中にも草田5期の土器が含まれることから、四隅の築造は草田5期～草田6期（大木式）の初頭段階で終えている。

つまり、社日1号墳は四隅と時間的に一線を画し、畿内における定型化古墳の出現と同時期の墳墓として位置付けることができる。神原神社古墳や大成古墳の土器は小谷2式（草山7期）で布留1式に併行すると思われることから、時間的には出雲における最古の古墳となる。

しかしながら、このような小規模な古墳が前方後円墳体制という枠組みのなかで捉えることができるかどうかは別の問題であろう。

以下はその他の資料にも触れながら、墳墓の諸属性について検討を加えることとする。

2. 社日1号墳の諸属性とその評価

墳丘　1，2号墳とも墳形は、方墳と言えるべきものであるが、それぞれ南北より東西方向が長い長方形である。また、両古墳とも墳丘は、丘陵尾根を溝によって切断し、斜面側はテラス状の平坦面によって区画したものである。そして、墳頂部には、盛土を施して築成している。

このように古墳時代前期の古墳で方形の墳丘をもつものは、出雲地方に多いことはすでに指摘されているとおりであるが、社日古墳のように長方形の墳丘の例は、非常に多数見受けられる。この長方形の墳丘は、弥生時代の四隅突出型墳丘墓の墳丘形態の伝統を引き継ぐ古い様相とも言え、在地的なものと考えれる。また、外表施設としての葺石の類を備えていない点が特徴であり、かつ、出雲地方の中小規模の古墳共通の特徴である。

墳丘規模については、1号墳、2号墳とも古墳時代前期の出雲地方の中では、中小規模の古墳と言うことができる。

表3-1　出雲における前期初頭の古墳

	遺跡名	墳丘	中心主体	主体部規模	頭位	朱	標石	副葬品	布	時期
1	社日1号墳	□ 19×15	木棺+U字木	棺3，6m 槨3,0m	N89° E	有	有	剣・銀・短冊鉄斧・袋鉄斧・鉇	有	1
2	土井・砂1号墳	□ 10×10	U字木		N22° E			内行花紋鏡(破・漢5)		1
3	小屋谷3号墳	□ 19×15	箱木	槨1,9m	N82° E	有		独竜紋鏡(破・漢4)	有	1
4	西谷7号墳	□ 22×16	—	—	—	—	有	—	—	1
5	柴尾2号墳	□ 8×8	U字木	棺2,9m	S68° E		有	無		1
6	柴尾3号墳	□ 8×8	U字木	棺2,6m	N43° E		有	鏃・勾玉（翡翠）		1
7	〃	〃	U字木	棺2,8m	N37° E			刀子		1
8	遠仙3号墳	□ 10×9.6	木棺(?)+U字木	棺2,2m	S66° E	有		鏃		1?
9	古城山古墳	□ 18m	U字木	棺3,8m<	N66° E			内行花紋鏡（破砕・漢5）		1?
10	小谷古墳	□ 15m?	箱木	棺1,8m	N81° E			鏡(小型仿製)・刀子	有	1
11	奥才13号墳	□ 23×19	箱石(礫床)	棺1,5m	S63° E		礫群	無		2
12			箱石(礫床)	棺1,8m	S60° E			無		2
13	大佐遺跡	□ 14×10	U字木	棺2,6m	S83° E	有		無		2
14	古佐山根1号墳	□ 8×8	箱石(石床)	棺1,7m	S67° E	有		刀子		2
15	三田谷I号方形周溝墓	□ 10×9	?		N43° E					1
16	神原神社古墳	□ 29×25	竪穴式石槨+U字木	槨5,8m	N10° W			三角縁神獣鏡・刀2・剣2・鉄鏃36・鎌・斧・鑿・鍛冶1・鉇・短冊鉄斧		2
17	大成古墳	■ 60×？	竪穴式石槨+U字木	槨7,5m	N40° W			三角縁神獣鏡・刀3・剣3・鏃1		2？
18	桂見2号墳（囚幡）	□ 28×22	箱木	棺4,3m	N50° E			斜縁獣帯鏡(漢7)・内行花紋鏡(破砕・漢5)・刀・刀子・鎌・鉇・針	有	1

※時期は前方後円墳共通編年（近藤義朗編　1991）
※頭位方向は磁北をNとした。報告書の中で、方位について特に断りのないものは磁北を示すものと判断した。
※布（副葬品の布巻き）、□（外表施設のない方墳）、■（外表施設のある方墳）、U字木（底部横断U字形の刳り抜き木棺）、箱木（箱式木棺）、箱石（箱式石棺）
※表3-1は前方後円墳共通編年（註9文献）の1・2期の墳墓を取り上げたものである。時期は出土土器により私案編年（註2：松山2000文献）によって決定しているが、資料の制約から時期決定に不安定なものも含んでいる。墳墓の諸属性を検討するうえでできる限り多くの資料によることが効果的であることから、可能性があるものは無作為にあげている。[10]

埋葬施設　1，2号墳の埋葬施設は、両古墳合わせて6つの主体部を検出している。そのうち、明確でない2号墳第2主体部を除けば木棺4基、土器棺1基である。このうち木棺は、刳り抜きの断面「U」字状を呈するものが2基、刳り抜きの断面がやや平坦なもの1基、組合せの箱形木棺が1基である。また、1号墳第1主体部の木棺の外側には、木棚状の施設が存在しており、今後古墳時代前期の古墳の様相を考える上で貴重な例と考えることができる。以下、同時期の埋葬施設について出雲地方の他の例と比較検討してみたい。

(木棚)　社日1号墳第1主体部は、刳り抜き木棺の外に木棚を伴うものである。この木棚を備えた古墳は、出雲地方では、類例が存在しておらず、非常に珍しい例として捉えられる。また、弥生時代の墳丘墓を見てみると出雲市所在の西谷3号墓[112]の第1、第4主体部で組合せ式の箱形木棺に伴う木棚が2例知られているのみである。このように出雲地方では、木棚を備えた墳墓は、現段階では2つの墳墓で認められる少数例であり、詳細な検討を行うことは不可能である。1つの仮説として弥生時代後期の首長墓に採用された木棚の系譜の流れで社日古墳の木棚を理解することも可能かもしれないが、社日1号墳と西谷3号墓の間には、時間差が開きすぎている。また、両者の間を埋める弥生墳丘墓では、木棚の例は無いので、西谷3号墓で見られる木棚の系譜で理解するには現段階では困難である。

さて、他地域に視野を広げてみれば、但馬の寺谷4号墳[113]第1主体部や丹後の大田南6号墳[113]主体部で、箱形の木棺を覆う木棚の例が存在している。2つとも木棺に近接して木棚が備えられている点や木棚が狭長である点が、類似しており注目される。それぞれの時期は、前者が5世紀初頭、後者が前期後半という年代が報告されている。このことから古墳時代前期～中期初頭までの間には、確実に木棚を採用している古墳が存在していることが伺える。このような主流ではないが古墳時代の木棚がどのように採用されたのか、その背景や系譜について検討が必要であるが、今後の課題点として挙げておき今回は置いておきたい。

(木棺)　木棺について、出雲地方の前方後円墳集成編年1～2期の古墳について検討すれば、刳り抜き木棺の例と組合せの箱形木棺の例の両者が認められる。これらの木棺長を比較すると刳り抜き木棺は、3m前後のものが多く、箱形の木棺について詳細に見てみると2m弱のものがほとんどである。基本的に刳り抜き木棺が棺長が長く、遺体埋葬に最低限必要なスペース以上の規模をもっていることが伺える。ただし、桂見2号墳の箱形木棺は、傾板が4.3mと長大なものでありやや趣が異なるものである。

さて、出雲地方の弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓の木棺の形式を見ると、基本的に箱形の組合式木棺が主流であり、刳り抜きの木棺の報告例がない。このことからも分かるように、社日古墳で検出した刳り抜き木棺は、定型化した古墳の影響下に成立したものと考えられ、遺体埋葬するためより広いスペースをもった新しい形式の木棺と考えることができる。

なお、社日1号墳では、第1主体部～第4主体部で検出した棺が全て異なるものであったが、副葬品や墓坑規模から棺形式に階層的な序列が反映されている可能性が考えられた。すなわち、第1主体部（木棚・刳り抜き木棺長3m）－第3主体部（刳り抜き木棺長2.1m）－第2主体部（箱形木棺長1.9m）－第4主体部（土器棺）といった順で、被葬者の序列が棺形式、規模によって表れているものと考えることができる。

主体部の頭位方向　出雲における前期古墳の頭位方向については、池淵俊一[114]により総括的な分析が

なされ、安来市の荒島墳墓群とその周辺については渡辺貞幸によっても検討されている。[15]

ここでは時間的な傾向について注目する。さて、前方後円墳編年1・2期の頭位方向を示したのが第30図である。

1期に限ると頭位方向は東北東を中心にまとまっていることが分かる。そして2期でも中小規模の方形墳は1期と同じ傾向を示している。これに対しこの時期に現れる竪穴式石室を有するものは北北西を中心にしており、両者は頭位方向について別の志向を有していることが言える。

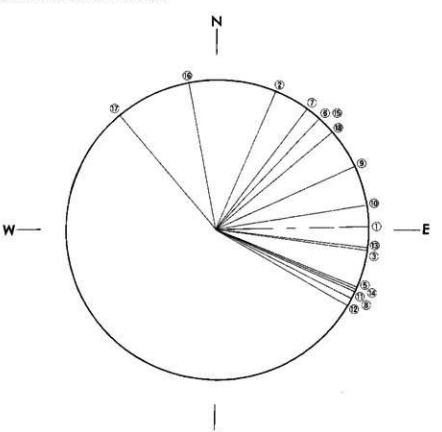
この異なる方向性をどう解釈するかであるが、弥生時代の主体部が東西方向を軸とする傾向が指摘されており[16]、1期については弥生時代の特徴がそのまま引き継がれた可能性も考えられる。

竪穴式石室については、すべて北頭位とする池淵俊一や、荒島墳墓群においては都出比呂志[17]が設定した北頭位の範囲から外れるとする渡辺貞幸の指摘もあるが[18]、中小規模墳との比較からすれば北志向と捉えることは可能であろう。竪穴式石室の導入とともに北枕も採用されたものと考えられる。2期における北頭位は竪穴式石室とともに階層性を示す属性であると考えておきたい。

（2）出土遺物について

朱　社日1号墳第1主体部では、木棺内の鉄剣周辺と南東コーナー付近の2ヶ所より朱を検出している。この朱は、厚く存在しているものでなかった。本来は棺内全域に広がっているものであったかもしれないが、調査ではこの2ヶ所で集中して検出した。

墳墓で棺内に朱を施す例は、第3-2表でも分かるように出雲の前期古墳には、ある程度認めることができるものである。また、朱の施されている範囲は、遺体の頭部と推測される範囲を中心に認められるという共通した特徴が認められる。



第30図　出雲の前期古墳の埋葬頭位

さて、弥生時代後期の出雲の四隅突出型墳丘墓でもこのような棺内での施朱が認められる。[19] このことから社日占墳第1主体部で棺内に朱を施す儀礼は、弥生時代後期の墳墓で認められる施朱儀礼に系譜を求めることも可能である。

鉄器　1号墳の第1・第3主体部では、農工具を中心とした鉄器が出土している。ここでは、これらの鉄器の時期的な位置付けを中心に述べておきたい。

1号墳第1主体部から出土した鉄器について検討すると短冊形鉄斧は、出雲地方からは、現段階で、神原神社古墳についで2例目の出土例となった。全国的に検討した古瀬[20]によると、大きさから3タイプに大別してあり、今回出土したものは、中型のタイプか基部の損なわれた部分を最大に考えた場合大型に属する可能性も考えられる。また、出土古墳は、古墳時代前期前半に限られるようで、出土土器の編年観とも齟齬は生じない。

次に袋状鉄斧について検討する。製作技法から見た場合、金山の検討[21]によるA技法で作成されたものと考えられる。このA技法は、金田によると袋状鉄斧出現以来採用されているもので、後出するB技法（古墳時代前期後葉出現）のものではない。また、袋部の横断面形は、隅丸方形をなしているが、これは、九州地方中心に分布するものであることが指摘されている。なお出雲地方での前期古墳出土例は、本古墳例も合わせて4例存在しており、農工具の副葬器種では少ないものである。

鉄製の鍬鋤先は、方形板刃先に属し、松井の分類[22]によると大型のタイプに属するものである。そして、この方形板刃先は、弥生時代後期中頃から古墳時代後期の6世紀前半の間に創作、使用されているものである。古墳への副葬は、4世紀後半から5世紀の前半代にかけての時期が量的に多く、この頃に盛行していることが指摘されている。また、出雲地方の前期古墳で出土している例は、他

表3-2　主体部内の朱について（弥生後期～古墳前期）

古　墳　名	墳　丘	主体部	朱	朱の散布ヶ所	標石	時期
社日1号墳	方墳	第1主体部	部分	被葬者頭部と足下	石杵	1
小原谷3号墳	方墳	第1主体部	部分	頭部に施朱		1
大佐遺跡	方墳？	ＳＫ02	部分	頭部集中、他に3ヶ所に散見		2
吉佐山根1号墳	方墳	第2主体部	部分	頭部付近に施朱		2
塑伊中山2号墳	方墳	第3主体	部分	頭部に施朱		3
塑伊中山1・4号墳	（削平段）		部分	頭部に施朱		？
寺床1号墳	方墳		部分	頭部に施朱		3
神原神社古墳	方墳		部分	頭部に施朱		2
塩津山1号墳	方墳	第3主体部	部分	頭部に施朱		3
神原正面Ｅ5号墳	方墳		？	？		？
遺仙3号墳	方墳		部分	頭部に施朱		1？
遺仙5号墳	方墳		部分	？		？
大成古墳	方墳	竪穴式石室	？	？		2
松木1号墳	前方後方墳	第1主体部	（全面）	遺体部分全面		3
		第2主体部	部分	3ヶ所、遺体の頭部、足下		〃
釜代1号墳	円墳	第3主体部	部分	頭部と足下		4
上野1号墳	円墳	第1主体部	部分	頭部に施朱	石臼	3～4
西谷3号墓	四隅突出型	第1主体部	全面	棺床全面	石杵	草田3
		第3主体部	全面	棺床全面		草田3
		第4主体部	全面	棺床全面	石杵	草田3
安養寺1号墓	四隅突出型	第1主体部	？	？	石杵	草田5
		第2主体部	？	？	石杵	草田5
宮山4号墓	四隅突出型	第1主体部	？	？		草田5

＊時期については、註2、9の文献による。

に神原神社古墳、大寺1号墳[23]の2例があるのみである。

1号墳第1主体部・第3主体部からは、鉇が出土している。鉇を分類した古瀬[24]に従えば、前者はI類、後者はII類に属するものと考えられる。出雲の前期古墳での鉇の出土例は、13例認められ、刀子に次いで多く副葬される器種である。

第1主体部出土の鉄剣は、短剣の部類に属し、茎形制を中心に分類した池淵[25]によれば、直並Cの直角関に当てはまるものと考えられる。この型式は、時期的には、4世紀前半にはあまり認められず、4世紀後半から5世紀中葉に多く認められることが指摘されている。また、前方後円墳で出土することは、稀であり、むしろ30m以下の円・方墳で出土することが多いことも指摘されており、中小規模の古墳被葬者に伴うややランクの低い階層に伴う鉄剣と考えられる。なお出雲地方での前期古墳の鉄剣出土例は、14例認められる。

以上の検討から鉄器は、古墳時代前期を中心として出土する鉄器の様相を示していると考えられ、出土土師器の編年観と大きく齟齬が生ずるものではない。また、第1主体部では、農工具が複数器種のセットで副葬されており、弥生時代の他地域の例[26]と比較してみても弥生墳墓の農工具副葬とは異なるものである。なお、古墳時代初頭の農工具副葬について検討した野島[27]によると農工具の多種副葬が基本的に認められるのは、古墳に三角縁神獣鏡を副葬する段階と捉えており、それ以前の漢式鏡を副葬する墳墓と区別して捉えている。このことから社日古墳での農工具副葬様式は、三角縁神獣鏡を古墳に副葬している段階に多く見られる様相として捉えることも可能ではある[28]。

(3) 鉄器の副葬状況

第1主体部の鉄器の副葬状況について見ると2つの特徴を見てとれる。1つは、布に巻かれた状態で副葬されている点、もう1つは、武器と農工具が位置を分けて副葬されている点である。

布巻きの鉄器　出土した農工具は、おそらく柄の部分を外されて布巻きにされて副葬されていたものと考えられる。このように布巻きされた農工具の副葬例は古墳時代前期で多くの類例が存在することは指摘されている[29]。出雲地方で農工具を出土している古墳時代前期の古墳を検討すると半数近くが布で巻かれており、高い確率で農工具を布巻きにして副葬していることが確認される。

さて、鉄剣が抜き身で布に巻かれている例は、宇垣[30]によって検討が行われている。それによると出雲では、刀剣を布巻き抜き身で副葬する前期古墳の類例は、松本1号墳、寺床1号墳、椿谷古墳、奥才14号墳が存在している。その一方で、上位クラスの大成古墳、神原神社古墳では、刀剣類を鞘入りで副葬しており、この刀剣類の副葬状態の差を、階層差または格付けの差として捉えている。確かに、社日古墳と大成古墳、神原神社古墳を比較すると明らかにそれらの首長墓より下位にランクされる古墳であり、宇垣氏の指摘を肯定するものである。また、出雲の前期古墳で鉄剣の出土例がいくつか存在するが、確実に鞘に納まった状況で出土している例は、他には見あたらない。　ところで、出雲の弥生時代の墳丘墓に刀剣類が副葬された例は、非常に少なく2例が知られるのみであるが、その例の西谷3号墓[31]、宮山4号墓[32]の場合では、鞘に納められた状態で副葬されている。このことから出雲では、刀剣類の副葬に関して布巻きが行われた点は、弥生墳墓には無かった新しい時期の様相と考えることもできる[33]が、弥生時代の刀剣類の副葬が一般的ではなかった出雲の少数例と比較するのは問題であろう。現状では、それは、中小規模の古墳での刀剣副葬時に伴うものであることだけは言えよう。

表3-3　前期古墳出土鉄器一覧

古　墳	主体部	鏡	武器 刀	剣	槍	鉄鏃	農工具 刀子	ヤリガンナ	鎌	鍬鍬先	袋鉄斧	短冊鉄斧	鑿	その他	時期
社日1号墳	第1主体部	—	—	足1	—	—	—	頭1	—	頭1	頭1	頭1		—	1
	第3主体部	—	—	—	—	—	—	脇1	—	—	—	—	—		1
小屋谷3号墳	第1主体部	1	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	—	1
柴尾2号墳	第1主体部	—	—	—	—	胸1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
柴尾3号墳	第1主体部	—	—	—	—	1	-	—	—	—	—	—	—	—	1
	第2主体部	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
道仙3号墳		—	—	—	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	1?
小谷古墳	第1土坑	1	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	—	1
	第2土坑	—			—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	1
神原神社古墳		1	頭2	[illegible]	—	足36	—	足①	足1	足1	足1	足1	足1	針・錐2	2
大成古墳		1	③	③	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2
造山1号墳	第1石室	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2～3
	第2石室	1		1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2～3
袋尻4号墳	土器棺2	—	—	1(折れ)	—	—	—	—	—	—	—	—		—	1～2
吉佐山根1号	第2主体部	—	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	—	2
	第3主体部	—	—	—	—	—	棺外頭1	—	—	—	—	—	—	—	2
土井・砂4号墳	第1主体部	—	—		—	-	—	棺上1	—	—	—	—	—	—	2
土井・砂2号墳		—	—	—	—	—	—	—	—	—	墓坑上1	—	—	—	2～3
土井・砂3号墳		—	—	—	—	—	—	足1	—	—	—	—	—	—	2～3
道仙1号墳		—	—	—	—	—	—	足1	—	—	—	—	—	—	不明
八幡山古墳	第1主体部		—	2	—	-	—	—	—	—	—	—	—	—	1
大木権現山5号墳		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3～4
造山3号墳		1	—	—	—	—	頭1	頭1	—	—	—	—	—	—	3
塩津山1号墳	第2主体部(未掘)	—	—	—	—	銅鏃1	—	—	—	—		—	—	—	3
	第3主体部	—	—	—	—	—	左脇1	—	—	—	—	—	—	—	3
塩津山4号墳	第1主体部	—	—	—	—	-	足1	—	-	—		—	—	—	3～4
寺床1号墳	第1主体部	1	右脇1	頭1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヤス3	3
斐伊中山2号墳	第3主体部	—	—	—	—	—	—	—	頭1	—		—	—	—	3
	第4主体部	1	—	—	—	—	左胸2	右脇1	—	—	—	—	—	—	3
	第6主体部			脇1											3
松本1号墳	第1主体部	1	—		—	—	頭3	頭(1)	—	—	—	—	—	針7	3
	第2主体部	—	—	右脇1	—	—	—	—	—	—		—	—	—	3
中竹矢遺跡	sk22		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1?
奥才14号墳	第1主体部	2	棺外左脇1	棺外右脇1	棺外左脇1	足1	足1	棺外足1	—	—		—	—	不明1	3
	第2主体部	—	—	腹1		腹1	足1		—	—	—	—	—	針3	3
奥才5号墳		—	—	—	—	—	頭?1	—	—	—	—	—	—	—	不明
奥才11号墳		—			—	仕切頭1	仕切頭2	—	—	—	—	—	—	—	不明
奥才12号墳	第1主体部	—	—	—	—	—	足1	—	頭1	—	—		—	—	4
奥才17号墳	第1主体部	—	—		—	—	胸1	—	—	—	—	—	—	針1	不明
奥才32号墳		—	—	左脇①	—	—	—	—	—	—	—	—	—		不明
奥才34号墳		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	針	不明
大寺1号墳		—	—	—	—	○	—	○	—	1	1	—	—		3～4
上野1号墳	第1主体部	1	—	[illegible]	棺外右脇	—	[illegible]1	—	—	—	—	—	—	—	3～4
斐伊中山13号墳	第1主体部	—	—	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	4?
斐伊中山14号墳		—	—	—	—	—		足1	-	—	—	—	—	—	不明
斐伊中山3号墳	第1主体部	—	—	—	—	—	頭1	—	—	—	—	—	—	—	不明
五反田1号墳	第1主体部	1	—	—	—	—		1	—	—	—	—	—	—	4
寺干砦跡		—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	—	不明
神原正面南E5号墳		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明

*足—遺体の足下側に配置／頭—遺体の頭側に配置
*　　刀剣類鞘入りで副葬　　*　　布巻きで副葬

農工具の副葬位置　第１主体部の棺内においては、農工具は被葬者の頭部の上方付近に纏めて副葬され、武器の短剣は被葬者の足下付近に副葬されている。古墳の主体部内で農工具と武器の配置は、基本的に所を別にして副葬されることはすでに指摘されている通りである。また、出雲でも神原神社古墳の木棺内でも農工具は被葬者の足下側に纏まって副葬されており、刀剣類の武器とは混在するものではなく、杜日古墳の例と同一である。なお、出雲では確実に３点以上の農工具類がセットで副葬されている前期古墳は、杜日古墳と神原神社古墳、大寺１号墳の３基のみである。また、神原神社古墳とは、鉄器の組成が非常によく似ており、前期古墳の農工具の中で出土率の高い刀子を含まない点などの共通点が見られる。

ただし、農工具の配置状況を細かく検討してみると、神原神社古墳では、足側に副葬されている点に対して、杜日古墳では頭部側に副葬されており位置は異なっている。この副葬位置の相違について、以下出雲の他の前期古墳例も交えて検討しておきたい。

出雲では、農工具を副葬した前期古墳数は多いが、基本的に１～２点ほどの少数の鉄器を副葬し、副葬される器種は刀子、鉇が多い。なお、その副葬位置を見ると大きく２つに分けて考えることができる。基本的に、遺体の脇に添えられるように副葬されることは少数例で、遺体の足下か頭部上方付近のどちらか一方に副葬される例が多く、前期を通じてどちらかの位置に副葬する古墳が見られる。この中でも、遺体の頭部上方付近に副葬する例が、足下に副葬する例の２倍ほど見られ、頭側に副葬する例が多い。

以上のことから杜日１号墳第１主体部の農工具副葬位置は、出雲の前期古墳でみられる通常の副葬位置として考えることができる。なお、この副葬位置の違いの背景には、古墳の墳丘規模や出雲の中での地域性などは、関連がないものと現段階での資料では考えられる。

鉄剣の副葬位置　第１主体部出土の短剣は、遺体の足下付近に副葬され、切っ先を頭部方向に向けている。このような副葬位置を検討するために出雲地方の刀剣の出土位置・切っ先方向を概観してみたい。出雲の前期古墳では、刀剣類は、棺内に副葬する場合被葬者の脇に副葬したものが基本であり、棺外に副葬する場合にも被葬者の脇のあたりに沿うように副葬しているものが多い。また、その刀剣類の切っ先は足側に向けている。ただ、刀剣類を２本以上副葬するものの中には、神原神社古墳のように、脇のほかに、頭部上方の空間にも副葬しており、その刀剣類は切っ先を小口鋲の外方に向けて副葬している。

以上のような例を見た場合に、杜日古墳の短剣副葬位置、切っ先方向は出雲では例のないやや特異な様相として捉えることができるものと考えられる[24]。

さて、前期古墳における刀剣副葬について検討したものによると畿内における刀剣副葬は、棺外、棺内を問わず遺体の頭部を境に上方に置かれたものは切っ先を上部方向に、下方に置かれたものは、切っ先を足側方向に向けているものが大多数である[23]。全国的にもこのような配置をとるものが多く、また、畿内で成立した埋葬様式と考えられている。このように考えた場合、出雲の他の古墳で採用された畿内的な埋葬様式を杜日古墳では採用していないと評価することができる。おそらくそこまで畿内的な副葬様式の影響を受けないランクの被葬者であったか、１期の頃の出雲では畿内的な埋葬様式によった刀剣配置をおこなった古墳儀礼が行われず、やや後の時期に畿内的な頭部を中心に刀剣類を外方に配置する様式が存在するといったように時期的な差である両者の可能性が考えられる。

折り曲げられた鉄器　第3主体部では、鉇が意図的に折り曲げられた状態で副葬されていた。副葬位置は、おそらく頭部の脇付近と考えられ、農工具の副葬位置としてもやや特異な位置で出土しているとも言える。このように鉄器を折り曲げたり、損なった状態であるものを副葬した例を出雲地方で挙げると、本例を合わせて5例（刀子2例、鉇2例）[*36]存在する。また、このように折り曲げた鉄器を副葬する様式の類例は、福岡県の穴ヶ葉山遺跡72号石蓋土壙墓、佐賀県西1本形8号墳[*37]等でも認められ、これらは弥生時代後期末～古墳時代初頭に属するものと考えられている。全国的に集成し検討していないのでよく分からないが、弥生時代後期末頃～古墳時代初頭にはこのような折り曲げられた農工具類が副葬される様式が広く存在しているものと推測される。

鉄器副葬の特徴　これまでの検討から社日古墳で見られる鉄器副葬に関わる特徴についてを纏めておきたい。

武器、農工具等の鉄器の副葬で、農工具がセットで1ヶ所に置かれている点、及び農工具と鉄器が副葬位置を分けている点については、定型化した畿内の前方後円墳の要素が見られ、出雲の弥生時代の墳丘墓では見られないものである。その一方で、短剣の切っ先方向が頭部を向いている点、布巻きである点、鉄器が棺内に納められている点等は、畿内的な定型化古墳の要素が欠落している点として挙げられる。畿内的な要素が欠落している点については、古墳の規模（被葬者の階層的な位置）、地域性、弥生時代に遡ることもできる在地的な様相などが背景にあるものと推測されるが、この点については今後の検討課題であろう。

また、社日古墳で執り行われた埋葬儀礼について想像すれば、おそらく遺具立てはある程度揃ってはいたが、畿内の定型化した古墳上で行われた儀礼と比較した場合には、細部で異なるものであった可能性を考えることができる[*38]。

（4）墓坑埋め戻し後の石杵

石杵　第1主体部出土の石杵は、その使用面に付着した赤色顔料（朱）から朱を精製する時に使用した道具と推測される。このような石杵や礫をいわゆる「標石」として墓坑埋め戻し後に置く例は、大谷晃二[*39]が集成しており、山陰を中心として存在している。その時期は、弥生時代後期中葉（九重式）～古墳時代前期に属する墳墓である。また、礫を置く例の多くには、いわゆる「供献土器」の集積が墓坑上に認められている。社日1号墳第1主体部では、細片が出土しているのみであるが、やはり本来は墓坑上に土器の集積が行われていたものと推測される。以上の例を考えると社日古墳で墓坑埋め戻し後に石杵に置く埋葬儀礼は、出雲の弥生時代後期の墳丘墓等でおこわれた儀礼の伝統を引き継いだものと理解される。また、このことは、棺内で検出された朱との関わりで考えた場合、畿内での朱の施朱儀礼では、基本的に石杵、石臼等の朱の精製に使用した道具を副葬、供献等しない例が多いという特徴が挙げられている[*40]。また、古墳時代の棺内の朱と石杵・石臼等の供献・副葬は、弥生時代後期の山陰から北陸等で行われた四隅突出型墳丘墓の伝統を受け継いだものと推測されており[*41]、その可能性は高いものと考えられる。

3．まとめ

社日1号墳をはじめ同時期の中小規模墳、他地域の類例等の諸属性について検討を行った結果、以下のような特徴を挙げることができる。

▲時間的には四隅突出型墳丘墓終焉後に出現し、箸墓など最古の定型化古墳と併行する。

▲墳丘は方墳で、葺石などの外表施設はない。

▲棺に刳り抜きの木棺を使用するものがあり、比較的長大になる。

▲鏡の副葬が開始される。鏡種は後漢鏡を中心とし、破鏡や破砕副葬されている場合がある。

▲農工具の副葬が見られ、多種セットで副葬するものも見られる。

以上の特徴は弥生時代の四隅突出型墳丘墓に見られないものであり、断絶として捉えることもできる。一方では、標石（石枠）の使用は四隅突出型墳丘墓との共通点であり、朱の使用や木棺の使用、頭位方向なども弥生的なものと言える可能性もあり、四隅突出型墳丘墓からひき継がれる要素も残っている。

以上のように、社日1号墳の諸属性は四隅突出型墳丘墓から引き継がれる要素もあるが、新たな特徴が顕在化しているのは事実で四隅突出型墳丘墓との断絶として捉えることができる。また、土器編年においては四隅突出型墳丘墓とは一線を画し、箸墓古墳などと同時期のものである。しかしながら定型化した前方後円墳を特徴付ける、長大な竪穴式石槨・三角縁神獣鏡・副葬品の多量化といった要素がまったくないのも事実で、前方後円墳への飛躍は認められないのである。

はたして、この事実をどう評価するかであるが、もし出雲以外の地域であればこのような墳墓は弥生墳丘墓とする意見が大勢を占めるのではないかと想像する。また、四隅から定型化した方墳への過渡期の姿にも見え、現象としては暫時的な変化にもみえる。

出雲では最古型式（共通編年1期）の前方後円（方）墳等の大型墳は確認されていないが、松本3号墳[42]・龍田古墳[43]など可能性を持つものが指摘されている。もしそうだとすれば前方後円（方）墳を頂点にその下に方形墳が存在するという階層構造が形成されていたと解釈できるかもしれない。それならば社日1号墳を始めとした中小規模古墳は前方後円墳秩序下にある古墳となる。

これまで出雲の1期の古墳の様相について述べてきたが、最後に社日1号墳について述べて終わりたい。社日1号墳の位置付けについては、全国的な多くの事例に則して判断されねばならず、明快な答えを出すことはできないが、出雲の墳墓での様相から考えた場合には、鉄器の多種副葬、遺体埋葬以上の規模をもった刳り抜き木棺の採用、外表施設をもたない方墳であるといった新しい様相がみられ四隅との断絶が認められる。さらに時期としては箸墓などの最古型式前方後円墳と併行しており、四隅の終焉直後の墳墓であることから、定型化古墳最古段階における一例としておきたい。

参考文献（表作成）
小谷土壙墓（山壁）　近藤正　1966「安来平野における土壙墓」『上代文化』第36輯（『山陰古代文化の研究』1978）
西谷7号墳 藤永照隆　2000「西谷墳墓群－平成10年度発掘調査報告書」出雲市教育委員会
小屋谷3号墳　宮本徳昭　1981「御崎谷遺跡・小屋谷古墳群」八雲村教育委員会
柴尾3号墳　松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団1995『松江市文化財調査報告書第63集　柴尾遺跡他発掘調査報告書（Ⅱ）』
柴尾2号墳　江川幸子　1994『（財）松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書　第5集　柴尾遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団
道仙1号墳、3号墳　岡崎雄二郎　1983「2．松江市道仙古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書、第Ⅹ集　島根県教育委員会
古城山古墳　山本　清　1978『東出雲町誌』
奥才吉14号墳　三宅博士他　1985『奥才吉墳群』斐川町教育委員会
大笹遺跡　吉藤博昭他　1999『ソフトビジネスパーク建設に伴う大笹遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団
吉佐山根1号墳　錦田剛志他　1995「一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10」建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
桂見1・2号墳　平川　誠佳　1984「桂見墳墓群」島取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
日原6号墳　小原貴樹　1978『鳥取県米子市日原6号墳発掘調査報告』米子市教育委員会
松本1号墳　島根県教育委員会1963年『松本古墳調査報告』
神原正面遺跡　島根県加茂町教育委員会1988年『神原地区遺跡分布調査報告（川子谷B1号古墳発掘）』
八雄山古墳　安来市教育委員会1989年『安来市遺跡分布調査概報Ⅱ－（宇賀荘・島田・安来地区）－』

塩津山１・４号墳　島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所1997年『塩津山古墳群　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ』
袋尻４号墳　松江市教育委員会・財団法人松江教育文化振興事業団1998年『第２卸商業団地造成工事に伴う袋尻遺跡発掘調査報告書』
神原神社古墳　加茂町1984年『加茂町誌』
寺床１号墳　島根県東出雲教育委員会1983年『寺床遺跡調査概報』
大木権現山１・５号墳　島根県八束郡東出雲町教育委員会1979年『大木権現山古墳群』
大寺１号墳　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会1980年『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告』
地王砦跡　島根県三刀屋町教育委員会1989年『要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書』
造山３号墳　島根県教育委員会1967年『造山第３号墳調査報告』
大成古墳　安来市教育委員会1999年『安来市埋蔵文化財調査報告書第27集　荒島古墳群発掘調査報告書』
造山１号墳　出雲考古学研究会1985年『古代の出雲を考える4　荒島墳墓群』
斐伊中山古墳群　島根県木次町教育委員会1993年『斐伊中山古墳群　西支群－』
奥才古墳群　島根県鹿島町教育委員会1985年『奥才古墳群』
中竹矢遺跡ＳＫ22　島根県教育委員会1983年「中竹矢遺跡」『国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ
五反田古墳群　島根県教育委員会1998年『門生黒谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』
釜代１号墳　松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団1994年『釜代１号墳外発掘調査報告書Ⅰ』
西谷３号墓　渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」1992年『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室、渡辺貞幸1993年「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷３号墓の調査から－」『島根考古学会誌』第10集
安養寺１号墓　出雲考古学研究会1985年『古代の出雲を考える４　荒島墳墓群』
宮山４号墓　安来市教育委員会1974年『宮山古墳群』
上野１号墳　島根県教育委員会1998年『埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ』、同1999年『埋蔵文化財調査年報Ⅶ』、平成９～10年度島根県埋蔵文化財調査センターが調査。詳細については、担当者の林健亮氏に教示を得た。
上井・砂遺跡　島根県教育委員会2000年『埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』、平成11年度島根県埋蔵文化財調査センターが調査。詳細については、担当者仁木聡氏に教示を得た。

参考文献

池渕俊一1997「方墳の世界」『古代出雲文化展』島根県教育委員会
岡村秀典1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
近藤義郎1986「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学』６変化と画期　岩波書店
渡辺貞幸1995「「出雲連合」の成立と再編」『出雲世界と古代の山陰』名著出版

〔註〕

1 島根県教育委員会1983年「中竹矢遺跡」『国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ

2 出雲における土器編年については拙稿（松山2000年「小谷式再検討―出雲平野における新資料を中心に」『島根考古学会誌』17号島根考古学会）と草田編年（赤沢秀則　1992年『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』）による。私案と草田編年との関係は草田6期が大木式ならびに小谷1式に草田7期が小谷2式に相当する。

3 今井堯1991年「中・四国地方古墳出土素文・重圏・珠文鏡－小型倭鏡の再検討１－」『古代吉備』第13集

4 橋口隆康1983年『古鏡』新潮社

5 米子市教育文化事業団1994年『萱原・奥陰田Ⅰ』

6 註2と同じ。

7 畿内の土器編年については寺沢薫の研究による（寺沢　薫　1986年「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』）。

8 島根県八束郡東出雲町教育委員会1979年『大木権現山古墳群』

9 近藤義郎編　1991年『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版

10 出雲における１期の古墳として塩津山1号墳があげられることがあるが、中心主体の供献土器は退化が著しく小谷式の末期的な特徴を持つことや、主体部に寺床1号墳と同様な礫床があることから、3期の古墳と判断したためあげていない。

11 渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」1992年『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室
渡辺貞幸1993年「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷３号墓の調査から－」『島根考古学会誌』第10集

12 田畑基1994年「但馬における前方後円墳の出現」『前方後円墳の出現をめぐって』両丹考古学研究会

13 弥栄町教育委員会1998年『太田南古墳群／太田南遺跡／矢田城跡第２次～第５次発掘調査報告書　京都府弥栄町文化財調査報告第15集』

14 池淵俊一　1998年「門生黒谷Ⅲ遺跡の調査」『安来市門生町所在門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根

県教育委員会

15 渡辺貞幸・金山尚志1999年「島根県安来市大成古墳第４・５次発掘調査報告書」『荒島古墳群発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・安来市教育委員会

16 丹羽野裕1999年「宍道町　三成墳墓群について」『宍道町歴史叢書』４宍道町教育委員会、

17 都出比呂志1986年『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室

18、6に同じ

19 弥生後期の西谷３号墓では、棺床全体に施朱しており、古墳時代の主体部での部分的な施朱の様相とはやや異なっている

20 古瀬清秀1977年「古墳時代鉄製工具の研究－短冊形鉄斧を中心として－」『考古学雑誌』第60巻第２号

21 金田善敬1995年「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17集

22 松井和幸1987年「日本古代の鉄製鍬先・鋤先について」『考古学雑誌』第72巻３号

23 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会1980年『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告』

24 古瀬清秀1991年「農工具」『古墳時代の研究８　古墳Ⅱ副葬品』有山閣

25 池渕俊一1993年「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心として－」『古代文化研究』１島根県古代文化センター

26 北條芳隆1990年「古墳成立期における地域間の相互作用－北部九州の評価をめぐって－」『考古学研究』37-2

松木武彦1999年「副葬品からみた古墳の成立過程」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』

27 野島永1995年「古墳時代初頭の鉄器について」『近藤義郎古希記念考古文集』

28 ただし１期とした小谷古墳・土井砂古墳などでは、破鏡・漢式鏡が副葬されている。これと併行する社日古墳をどのように位置付けるかは、検討を要するものと考えられる。 ただ、Ｉ期の段階で、すでに農工具をセットで副葬する様式が出雲で成立していたと考えることは、可能であろう。

29 寺沢知子1979年「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学所論集』第４吉川弘文館

30 宇垣匡雄1997年「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44－１

31 渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査（１）」1992年『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

渡辺貞幸1993年「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷３号墓の調査から－」『島根考古学会誌』第10集

32 安来市教育委員会1974年『宮山古墳群』

33 全国的に見た場合には、弥生時代後期では、布巻き・抜き身で副葬する刀剣類が多く、鞘入りで副葬する例には大型の墳丘墓が含まれていることが宇垣によって指摘されている。このことから弥生時代後期の刀剣副葬の延長線上で社日古墳の副葬例を解釈する事もできる。

34 宇垣によれば、足下に副葬された刀剣類の切っ先が頭部方向を向く例は、吉備や中四国の一部、北陸、関東などで見られるようである。また吉備での例は、中小古墳である。

35 用田正晴1980年「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27巻第３

宇垣匡雄1997年「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44－１号

36 造山３号墳（折れた刀子）小谷古墳第１主体（折れた刀子）、小谷古墳第２主体（折れたヤリガンナ）奥才14号墳第１主体（曲げられたヤリガンナ?）の４例である

37 大平町教育委員会1993年『穴ヶ葉山遺跡』、佐賀県教育委員会『西原遺跡』 1983年、なお、西1本杉8号墳では山陰系の土器が出土し、又9号墳出土の鉄器組成は社日古墳と類似しており注目される。

38 出雲の前期古墳で、神原神社古墳での様相は、非常に畿内的な様式に近い副葬品類を持ちかつ埋葬儀礼についても類似している古墳であるといえる。

39 大谷晃二1994年「３，総括」『波佐－島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査－』金城町教育委員会

40 北條芳隆1992年「石臼・石杵」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団

41 大庭重信1996年「雪野山古墳にみる土器副葬の意義」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団

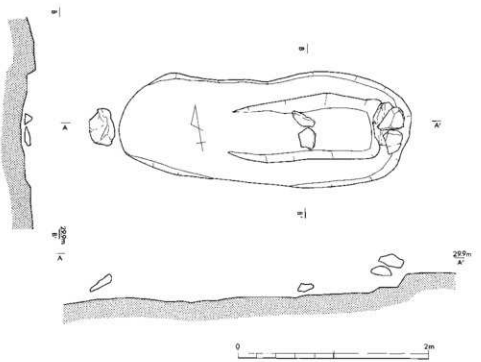
42 出雲考古学研究会　1991年『古代の出雲を考える７　松本古墳群―斐伊川流域の前期古墳をめぐって』

43 大谷晃二1997年「風土記の丘周辺の古墳５　廻田１号墳（真名井古墳）」『八雲立つ風土記の丘』ＮＯ１４５

第2節 社日古墳群以外の尾根上の遺構

社日古墳群2号墳東溝の東から調査区東境界にかけての区域から、十字に直行して切り合う木棺墓（SK04）と土壙（SK03）が検出された。さらに、南斜面に向けて傾斜する側には時期・性格不明の土坑2基（SK06・SK07）が検出された。どの遺構からも遺物は出土していない。

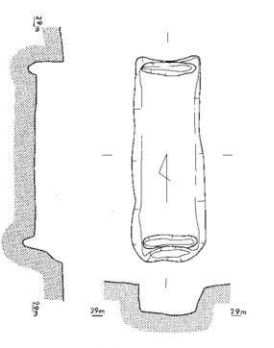
SK03は非常に浅くではあるが、2段に掘り込まれた形跡のある土壙であった。上端の西側は判然としない。土壙自体は長さ3.1m、幅1.11m、深さ20cmを測り、主軸の向きはS−79°−Eである。土壙の平面形は隅丸長方形を呈する。前述したように、非常に浅くではあるが、2段に掘り込まれた形跡があった。また、東側が拡幅され若干ながら下段の掘り方もよりはっきりしているので東側が頭位と考えられる。



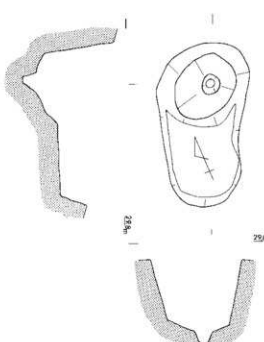
第31図　SK03遺構実測図（S＝1/40）

このSK03において特徴的なことは、地上の標識か、もしくは埋葬施設の一部として3ヶ所に計5個の石を配置していることである。主軸に沿って、東に3個の比較的平らな人頭大の自然石、真ん中やや東よりに扁平と細長い拳大から人頭大の自然石、西端土壙下端のはずれに、扁平な人頭大の自然石をそれぞれ配置している。

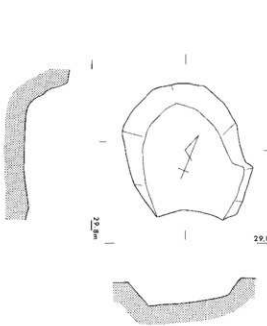
木棺墓であるSK04の平面形は長方形で、素掘りである。規模は長さ2.2m、幅80cm、深さ30cmを測り、主軸の向きはS−1°−Wであった。SK04内には組み合わせ式木棺の痕跡と考えられる小口跡の溝が認められる。溝跡の深さは40cmを測り、長方形土坑の床面よりさらに10cm深く掘



第32図　SK04遺構実測図（S＝1/40）



第33図　SK06遺構実測図（S＝1/40）



第34図　SK07遺構実測図（S＝1/40）

り込まれている。長方形につくる土坑の床面は若干ながら南側が高く、上端の幅も南側が広い。小口の溝跡も若干ながら南側が長く、棺の幅も広かったと考えられるので、南側が頭位であった可能性が高い。この木棺墓SK04は小口板と側板を組合わせた木棺の形状から、弥生時代後期の墓と推定される。

さて、弥生時代後期のものと思われる木棺墓SK04と土壙SK03は主軸の向きからすると80°で交差している。検出状況においてはSK03がSK04を切っていることがわかっており（巻末モノクロ写真31左上）、SK03の方が優先していた。両土壙の先後関係は、SK03の造営がSK04よりも後の時期ということになる。

ところで、第2章第2節で報告を引用しておいたように、昭和55（1980）年度から56（1981）年度にかけての発掘調査で、この杜日古墳群に接する尾根上から多くの弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土壙を検出している。また、調査区の東境界からさらに東に向けては、丘陵の尾根が若干の盛り上がりを見せて、20mほどピークを保った後、標高20m前後の谷部に向けて台形状に収束しており、外見上古墳的地形を示している。この南斜面には後期から終末期の古墳の存在を示すべく、藤永編年5期[註1]の埴輪が表採でき、一部の埴輪は後述する杜日古墳南斜面横穴墓群中の12号a横穴墓の埋土に混入している（第77図・第78図）。

この様に周囲の状況を見てくると、この特徴的な土壙SK03の造営された時期は、弥生時代後期以降古墳時代までのところだろうか。

標高29.3m付近で土坑SK06及びSK07が検出された。木棺墓SK04と土壙SK03からは1m～1.5m離れている。両土坑は60cmと離れていない。両土坑とも平面形は楕円形を呈し、土坑SK06は長さ1.8m、幅0.9m現状での深さ0.5～0.8mを測る。土坑SK07は長さ1.5m、幅1.3m、現状での深さ0.4mを測る。ともに、遺物はなく、時期用途とも不明といわざるを得ない。

註1藤永照陸「川霧の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集1997年

表4　社日古墳調査区内検出土坑一覧表

社日古墳　主体部計測表

遺構名		埋葬施設	規模				長軸の向き	出土遺物	特徴
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)			
社日1号墳	第1主体部	木棺木棺	墓坑	5	1.6～2.0	1.10	N-84°-E	鉄鏃　短冊形鉄斧 袋状鉄斧　鑿・鋤先 短剣	木棺木棺 木棺は底板のない箱形 木棺は刳り抜き型
			木棺	3.5	0.7～0.85	0.8以上			
			木棺	3.0	0.6	-			
	第2主体部	木棺	墓坑	2.8	1.1	0.35	N-80°-E	なし	組み合わせ式箱形木棺
			木棺	1.9	0.5～0.6	-			
	第3主体部	木棺	墓坑	3.8	1.5	0.8	N- 5°-W		刳り抜き型木棺
			木棺	2.1	0.80	-			
	第4主体部	土器棺	墓坑	1.2	0.85	0.28	N-77°-E		土師器壷変2個体の嚙み合わせ (土器の胴回り復元計測値は0.44m)
			土器棺	0.8	0.43	0.28			
社日2号墳	第1主体部	木棺	墓坑	外坑3.3 内坑2.1	外坑1.4～1.8 内坑0.6～0.8	0.3	N-86°-E	珠文縁　管玉	刳り抜き型木棺
			木棺	2.0	0.70	0.1			
	第2主体部	土坑	墓坑	2.2	1.2	?	N- 4°-W	なし	土坑のみ

社日古墳　調査区内検出土坑規模計測表

遺構名	検出場所	平面形		規模					出土遺物	性格・機能・特徴
				長軸(m)	短軸(m)	径(m)	深さ(cm)	長軸の向き		
SK03	尾根上	隅丸長方形	2段掘り	3.1	1.1	-	30	S-79°-E	土坑上部3ヶ所に自然石	土坑墓
SK04	尾根上	長方形	底部南北両端に小口溝(深さ10cm)	2.2	0.8	-	30	S-1°-W	なし	弥生後期木棺墓
SK06	尾根上	楕円形	底部北側、円形に掘り込み	1.8	0.9	-	50～80	N-23°-E	なし	土坑墓？
SK07	尾根上	楕円形	南側攪乱	1.5	1.3	-	40	N-22°-W	なし	土坑墓？
SK02	加工段2	円形	南側流出	-	-	0.9	不明	-	火葬骨	火葬墓？
SK12	加工段2	楕円形	南側攪乱	1.9	1.5	-	-	-	五輪塔2個体分	廃棄土坑か埋納土坑
SK14	12号前庭覆土	楕弾状		0.7	0.5	-	20以上	-	須恵器壷　八稜鏡　火葬骨　灰	火葬骨壺埋葬土坑

第３節　古代から中世にかけての火葬墓について

ＳＸ01（第35～37図）

ＳＸ01は社日１号墳と社日２号墳の間、やや１号墳よりに位置する集石墓である。１号墳の東側の盛土を削平して平坦面を作り、そこに礫を集めている。標高約29ｍに位置し、尾根頂部に近く、南に意宇平野が広がり、非常に見晴らしが良い。

調査前まで１号墳上に社日講の祭場があり、ＳＸ01は当初社日講に関係した遺構であると考えられていた。しかし、社日講の祭場が表土上に作られているのに対し、ＳＸ01は表土除去後に遺構全体が検出されており、また、表土では見ることができる近世以降の陶磁器などが、ＳＸ01には見られない点から、社日講とは関係ないものと判断した。そしてＳＸ01に見られる白色凝灰岩が、後に述べる加工段２の墓壇状遺構から出土した五輪塔部材と同じ石材であったので、中世の集石墓と想定して調査を行った。

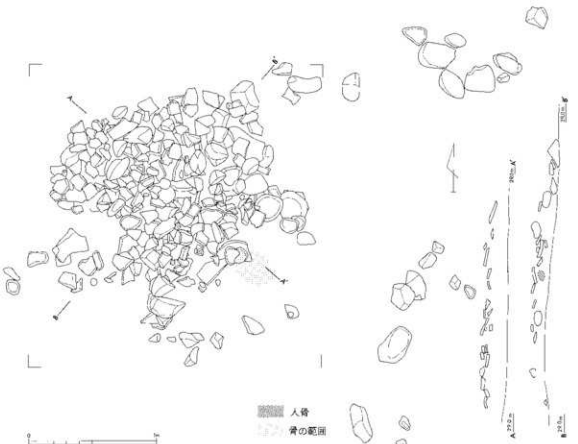
ＳＸ01は円礫、亜円礫、亜角礫、角礫からなる砂岩等と、白色凝灰岩、瓦からなる。砂岩等の形状はかなりローリングを受けた円礫から、角礫まであったが、亜円礫と亜角礫が多い。直径が約10～25ｃｍの大きさが主であった。白色凝灰岩は通称「白粉（しらこ）石」と呼ばれるもので、当遺跡では加工段２の墓壇状遺構から出土している五輪塔が同じ石材を使用している。この白色凝灰岩は節理面で割れやすく、特に、薄く板状に剥離しており、全て、破片で10ｃｍほどの大きさのものが多い。したがって、ほとんどの白色凝灰岩の器種は不明であるが、１点だけ空風輪と確認できるものがあった（第41図６）。このようなことから、ＳＸ01出土の白色凝灰岩の破片は五輪塔の部材であったと考えられる。しかし、ＳＸ01に五輪塔が配置されていたのかは不明である。

瓦は、当遺跡がある丘陵の南裾に数基の瓦窯跡があり、そこに廃棄されていた瓦をＳＸ01の一部として使用した可能性が考えられる。瓦は、平瓦が主で、わずかに丸瓦があった。すべて破片で、大きさは約10～20ｃｍであった。

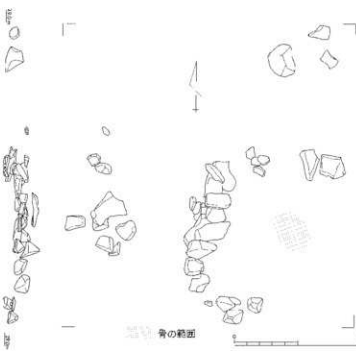
集石の範囲は第35図の示したように、断面ＡＡ’と断面ＢＢ’に囲まれた部分が主である。平面は不整形で、集石の東側にも直径約30ｃｍ前後の礫がいくつかみられるが、これらとＳＸ01の関係は不明である。集石は南北で約１．５ｍ、東西で約１．８ｍの範囲に集中している。断面からは若干凸状に築かれていたことが窺えるが、際だったものではない。また、礫等の積み重ねは顕著ではない。

集石を除去した後、その下部から検出された墓壇を第36図に示す。なお、第36図の四隅で囲まれた部分は、第35図の範囲と対応する。この基壇は、亜角礫と角礫によって構成され、瓦も白色凝灰岩も全く含まれていない。この点はＳＸ01上部の集石の状況とは違うものである。また、集石の広がりとは位置が若干ずれてはいるが、集石の下部から検出されたこと、意図的に並べたように石が組んである点から、この配石を方形基壇であると判断した。さらに、ＳＸ01の検出中に骨片が第35図・第36図の網掛け部分から出土しており、第36図の基壇の中心に骨片の分布範囲が一致する点もこの配石を基壇であると判断した理由の一つである。しかし、基壇の中心に骨片は分布していたが、下部に墓壙らしき痕跡は確認されなかった。したがって、ＳＸ01は基壇内に火葬骨を集め、その上部に集石を施した墓と考えられる。

ＳＸ01を構成する礫や白色凝灰岩、瓦の分布は第37図に示した。三者の分布に偏りはみられず、



第35図　SX01墓壇検出状況実測図（S＝1/30）

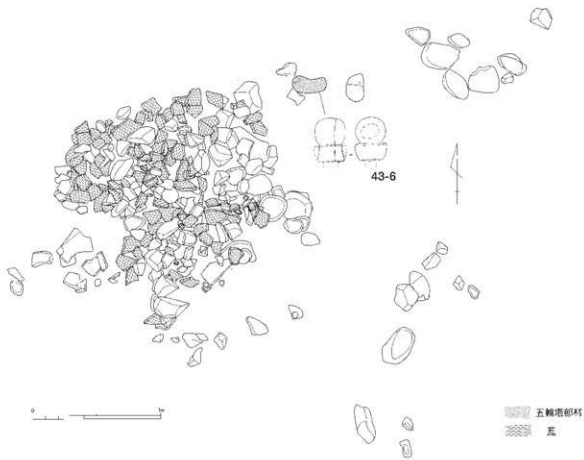


第36図　SX01墓壇上面除去後実測図（S=1/30）

それぞれが満遍なく分布していた。数の比率は、計測したわけではないが、礫と瓦が同率で、わずかに白色凝灰岩が存在する程度である。瓦は凸面と凹面が意図的に一方に向けられている印象はなかった。

出土遺物は先程述べた白色凝灰岩製の五輪塔の空風輪が1点出土している（第41図6）。他の白色凝灰岩の破片も五輪塔の部材である可能性は高いが不明である。その他の遺物は骨片が網掛けの位置を中心に散在していた。

次にSX01の年代であるが、ある程度の年代を判断できるであろう五輪塔の空風輪が1点出土してるが、SX01に当初から伴うか不明であり、遺物から年代は判断できない。しかし、後述する加工段2の墓壇から中世の土師器



第37図　SX01石材別分布図（S＝1/30）

が出土しており、同じ白色凝灰岩が出土していることから、ＳＸ01も中世を含むそれ以後の遺構と考えられる。また、社日講の祭場が削平された地表面にあったのに対し、ＳＸ01は表土除去後検出された点も考慮すると、中世以後から近世・近代以前にＳＸ01の年代は比定できると考える。

ＳＸ01出土遺物（第41図）

五輪塔（第41図６）

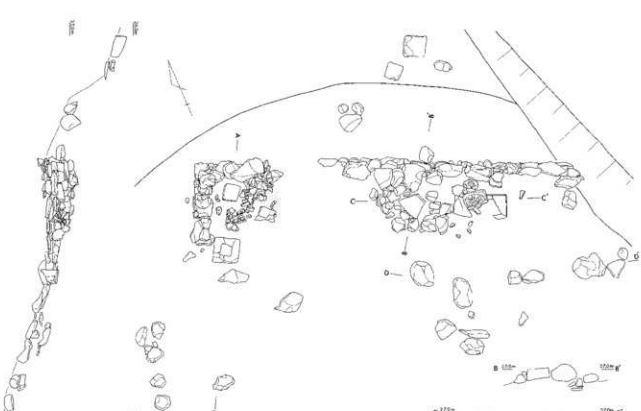
五輪塔の空風輪である。ほぞは欠損しており、全長は不明である。空輪の頂部は突出せず、丸くおさめている。風輪部は、欠損及び風化が激しいのでわからないが、空輪はやや扁平を呈する。石材は白色凝灰岩で、縦に節理面が見られる。

加工段２（第38～40図）

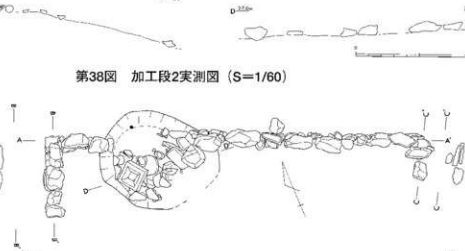
加工段２は、社日古墳群の位置する丘陵の南斜面に造り出された平坦面である。標高およそ26～27．５ｍに位置している。比高差は約19ｍあり、丘陵の頂部まで約4ｍある。南には意宇平野がひろがり、非常に見晴らしが良い。平坦面は長さがおよそ8ｍ、幅がおよそ6ｍある。

加工段２には表土を除去する以前から、礫が転がっている状態であったため、何らかの遺構が存在するとの仮定によって調査を始めた。表土除去後、基壇と五輪塔部材の出土を確認した。

第38図が表土除去後の基壇と出土遺物の分布図である。東側は調査範囲外であるため未調査である。標高約27ｍから26．７ｍのあたりに平坦面を造り出している様子が側面図から窺える。



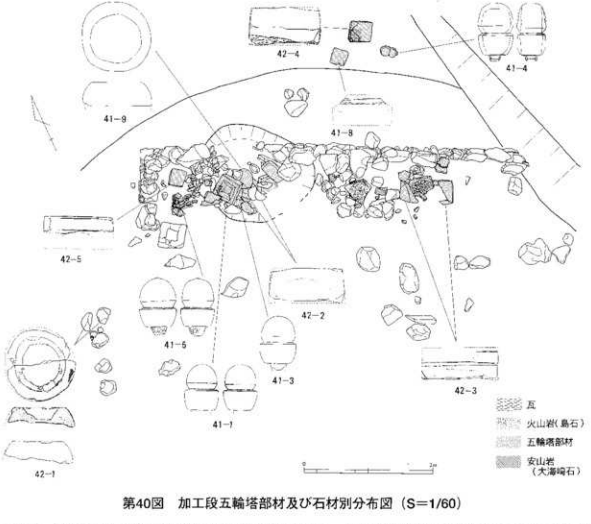
第38図　加工段2実測図（S＝1/60）



第39図　加工段2基壇検出状況実測図（S＝1/60）

基壇と考えられる遺構は、20ｃｍ程度の長方形に近い礫を並べ3辺を造っている。散在した礫や五輪塔の部材と共に検出された。方形基壇であったと考えているが、遺存状態が悪く、3辺しか確認できなかった。断面Ｄ－Ｄ'より南西寄りから検出された礫は原位置を保っていないと見られる。しかし、周辺の地層に包含されていない砂岩が中心で、何らかの遺構に伴っていたものと考えられる。またこれらが基壇を構成する一部の可能性も否定できない。

基壇の範囲内には、白色凝灰岩製の五輪塔の部材とその破片が主に出土した。ＳＸ01の項でも述



第40図　加工段五輪塔部材及び石材別分布図（S＝1/60）

べたが、当遺跡出土の白色凝灰岩は節理面で割れやすく、加工段２で出土したものについても同様に板状に割れたものが多かった。また、瓦と土師器の皿も数点出土している。網掛け部は骨片が出土した部分である。

第39図は、原位置を保っていない礫や、五輪塔部材等を除去し、基壇とその下から検出されたＳＫ12、及び遺物の出土状況である。基壇は約15ｃｍ～30ｃｍの礫を並べ、２段ほど積み重ねている。３辺は残存状態に違いはあるが、並びの方向は確認できた。もう一辺があると考えられたが、検出できなかった。礫の石材は砂岩がほとんどで、わずかに安山岩系もあった。亜角礫が多く、角礫が次に多い。円礫はみられなかった。

基壇の規模であるが、B’に近い礫が基壇の長辺に平行して据えられており、ここが基壇の隅であるならば、長さ約6m、幅約1.2mの長方形を呈していたものと考えられる。また、基壇内に五輪塔が据えられていた明確な痕跡は確認できなかった。

ＳＫ12は基壇の下から検出された土壙である。南側は木の攪乱を受けているが、平面が楕円形で、掘形が斜めに落ち込んでいる。しかし、下方に横穴幕が開口していることが想定され、また木による攪乱が著しく、底面の確認は断念した。覆土内には白色凝灰岩製の五輪塔の部材と礫が埋まっていた。底面に近い位置に埋まっているようであったが、底に接地していない印象を受けた。出土した五輪塔はほとんど風化を受けておらず、研磨痕が残り表面は滑らかであった。また、若干の人骨も五輪塔から離れた黒点の位置から出土している。

次に、基壇とＳＫ12の前後関係であるが、ＳＫ12の上面は基壇の礫が大方無くなっており、基壇を破壊して掘り込んだものと考えられる。しかし、Ａ－Ａ’の断面には、ＳＫ12の肩に礫が若干確認でき、両者の前後関係は明らかにできなかった。

第40図は加工段２の出土遺物の位置と、瓦、礫のうち砂岩以外の主要石材を図示した。火山岩は、八束郡八束町の大根島で産出されるもの、安山岩は松江市大海崎町付近で産出する石材と考えられる。火山岩は角柱の大きなもので、五輪塔の台石として使用していた可能性が高い。瓦はＳＸ01と同じように丘陵の下に位置する瓦窯跡から持ち込まれた可能性がある。五輪塔は原位置を保っているものは無いようであるが、基壇内に設置されていたと考えるのであれば、北西の角に位置する42図5の地輪と、五輪塔の台石と考えられる火山岩は、基壇との関係から位置を保っている可能性もある。出土した五輪塔の部材の数から見ても基壇に数基の五輪塔が建てられていた可能性は十分に考えられる。

また41図４・41図８・42図４は基壇から１ｍ以上も上にあり、後世にそれだけ基壇から持って上がったとは考えにくく、また、出土位置に五輪塔を設置していた痕跡も確認できなかったことから、出土位置より上方に五輪塔が存在し、転落したとも考えられる。このように、一部の五輪塔は基壇以外の尾根あるいはその周辺ににあった可能性は否定できない。

加工段２出土遺物（第41図・42図）第42図6～13は縮尺1/3、それ以外は1/6

五輪塔（第41図４・５・８、第42図１・３～５）

第41図４・５は五輪塔の空風輪である。一石で造られている。両者とも縦位の節理面で欠損しており、また表面が風化しているため、製作方法や仕上げ方などは不明である。しかし、５はほぞにのみ痕が残っており、のみを使用していたと考えられる。８は五輪塔の火輪である。遺存状態が非常に悪く、降棟の一部とほぞ穴の底部が残るのみである。これは横位の節理面で欠損している。ほぞ穴の底部には、のみ痕が残っており、刃部の幅が約4.8ｃｍののみを使っていたことがわかる。

第42図１は五輪塔の水輪である。これも遺存状態は悪く、下半（上半）を節理面で失っている。ほぞ穴を有し、内部にはのみ痕が残っている。外面には被熱により、赤色に変色した箇所が見られる（斜線部）。

第42図３～５は五輪塔の地輪である。いずれも節理面で欠損しているが、４は若干残りがよい。３・５は下面にほぞ穴があり、内部にのみ痕が残る。４はほぞ穴はない。上面にのみ痕、外面に研磨痕が残っている。

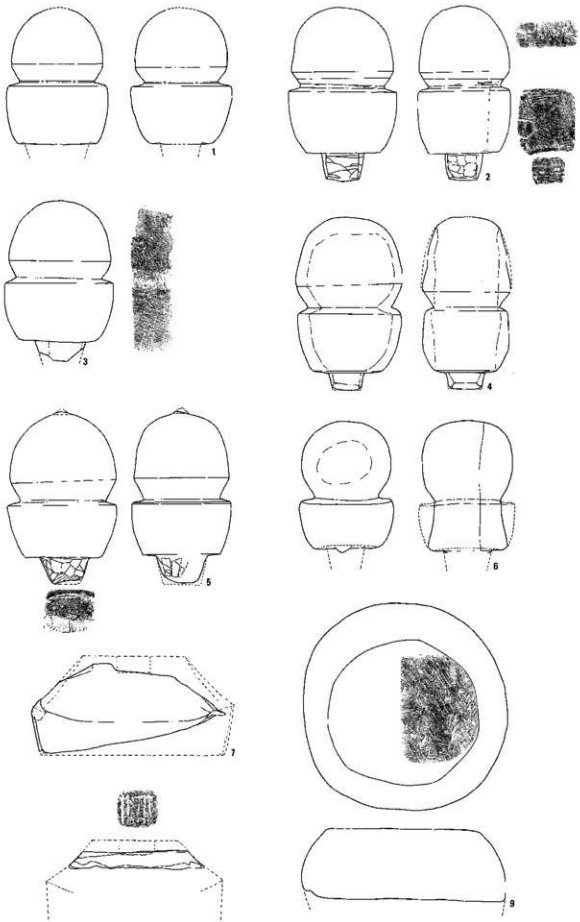
土師器（第42図６～10・12）

第42図６～10・12は土師器の皿である。６が完形で、口径6.9ｃｍ、高さ1.5ｃｍである。回転糸切り痕があり、外面は回転なでによる調整が行われている。７～10は底部に近い部分しか残っておらず、口径は不明である。また、底部の底部の切り離し方法や調整も風化により不明であるが、６と大差ないものと考えられる。12は内外面に赤色顔料が塗布された土師器の皿である。口径11.0ｃｍ、高さ2.6ｃｍである。底部は手持ちヘラ削りで整形されており、それ以外の内外面は回転なでにより調整されている。暗文は見られない。近畿産の土師器を模したものであろう。

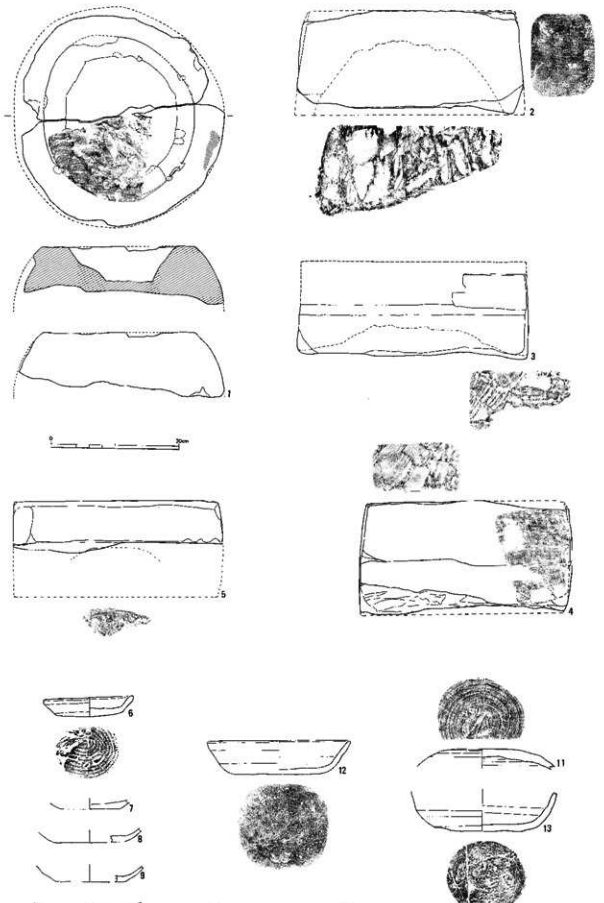
時期は６～10が形状から中世、12は7・8世紀のものであろう。

須恵器（第42図11・13）

第42図11は須恵器の蓋である。天井部のみ残っており、口径、器高は不明である。天井部外面に



第41図　加工段2・SK12・SX01出土遺物実測図1（S＝1/6）



第42図　加工段2・SK12・SX01出土遺物実測図2（五輪塔部材S＝1/6、その他の遺物S＝1/3）

は後、回転ヘラ削りを施している。内面は回転なでである。13は須恵器の杯身である。口縁部はかけており、口径・器高は不明である。底部は回転ヘラ切り痕を残している。

11は杜日古墳調査区内ではもっとも古い時期の須恵器で、大谷編年の出雲3期と考えられる。12は出雲4期以降である。

ＳＫ12出土遺物（第41図・42図）

五輪塔（第41図１～３・７・９、第42図２）

第41図１～３は五輪塔の空風輪である。一右で造られている。２はほぼ完形で、１と３は半分以下の残存率ではあるが、表面の状態は非常に良好で、全ての空風輪に研磨痕が残る。１はほぞを欠くが、２・３はほぞにのみ痕を残す。３はほぞが多角柱で、１もその可能性がある。２は空輪と風輪の間のくびれ部に刃部幅1.2ｃｍののみ痕をわずかに残している。７は五輪塔の火輪で軒と降棟、ほぞ穴が残存している。ほぞ穴は８と同じく方形である。９は五輪塔の水輪である。上半（下半）を筋理面で欠損しているが、表面の状態は良好で、天井部にのみ痕、外面には研磨痕が残り、外面は滑らかな状態を保っている。第42図２は五輪塔の地輪で完形に近い。底部にはくぼみ部があり、内部にはのみ痕が残る。外面は第41図９と同じく、研磨痕が残り、滑らかな面が残っている。天井面の長さが底面よりも短い。ほぞ穴は他の地輪に比べかなり上方まで抉り込まれている。

表5　五輪塔計測表

単位：cm
（　）：現状の数値

図版番号	部位	長さ	長さ（ほぞ除く）	空輪径(A)	風輪径(B)	くびれ径(C)	ほぞ径	くびれ度(A:B:C)	重さ(kg)	ほぞタイプ	遺存度	研磨	梵字	石材	備考
41第-1（正面）	空風輪	(20.9)	(21.7)	(14.6)	17.0	11.5	天:10.0 地:一	1.27:1.1:1.48	1.7	四角柱又は多角柱	2.5	右	有	白色凝灰岩	
（側面）				14.4	16.0	11.6		1.24:1.1:1.38							
41第-2（正面）	空風輪	27.3	23.1	16.0	17.0	13.2	天:6.6 地:3.1	1.23:1.1:1.29	5.1	区角柱	2/3程度残	有	無	白色凝灰岩	ほぞに墨痕
（側面）				14.2	17.7	11.3	天:6.0 地:4.5	1.26:1.1:1.30							
41第-3	空風輪	(25.4)	22.6	16.0	17.0	13.4	天:6.5 地:一	1.19:1.1:1.27	2.5	臼角柱	1.3	有	無	白色凝灰岩	
41図-4（正面）	空風輪	27.3	24.6	16.8	16.5	13.2	天:5.6 地:一	1.27:1.1:1.25	2.7	四角柱	1.2	不明	無	白色凝灰岩	
（側面）				(13.8)	16.5	10.4	天:6.2 地:一	(1.33):1.1:1.59							
41図-5（正面）	空風輪	(27.2)	(23.1)	16.7	17.2	13.3	天:5.1 地:一	1.26:1.1:1.29	4.1	多角柱	1.2	不明	無	白色凝灰岩	ほぞに墨痕 某輪据付痕跡
（側面）				15.0	15.6	12.0	天:5.4 地:一	1.25:1.1:1.30							
41第-6（正面）	空風輪	(20.7)	(20.1)	(14.2)	(14.8)	(10.0)	－	(1.42):1.1:1.48	1.6	四角柱	1.3	不明	無	白色凝灰岩	
（側面）				(14.2)	(12.3)	(10.1)	－	(1.41):1.1:1.22							

	部位	大		地		高さ	くぼみ加工		重さ(kg)	くぼみ形態	遺存度	研磨	梵字	石材	備考
		長さ	幅	長さ	幅		天	底							
41第-7	火輪	－	軒部:(30.8)	－	－	(14.1)	－	－	11.1	－	－	不明	無	白色凝灰岩	はぞは方形・墨痕有
41第-8	火輪	－	－	－	－	(3.0)	－	5.6（ほぞ穴）	1.4		－	不明	無	白色凝灰岩	ほぞは方形・墨痕有
41図-9	水輪	－	20.4	－	32.1（最大幅）	(10.6)		－	12.9		1.2	有	無	白色凝灰岩	上面に墨痕
42第-1	水輪	－	23.7	－	(35.2)（最大幅）	(10.2)	16.2	7.2	6.5	5.6	1.2	不明	無	白色凝灰岩	くぼみ部に墨痕
42第-2	地輪	32.5	32.5	－	－	16.0	15.0	(30.0)	18.1	(12.0)	4.5	有	無	白色凝灰岩	くぼみ部に墨痕
42図-3	地輪	－	－	(36.0)	(35.8)	(13.2)	13.8	(36.0)	10.0	(4.8)	1.2	不明	無	白色凝灰岩	くぼみ部に墨痕
42図-4	地輪	(31.5)	30.5	－	(31.8)	(12.8)	－	－	25.7		3.5	右		白色凝灰岩	
42図-5	地輪	－	31.9	－	－	(8.1)	7.2	(14.1)	6.1		1.3	不明	無	白色凝灰岩	くぼみ部に墨痕
（図版なし）	地輪	35.5	35.0	36.0	36.0	12.0	－	－		4.8	完形		無	白色凝灰岩	
（図版なし）	地輪	35.5	36.0	36.0	36.0	15.0	－	－		9.8	完形		無	白色凝灰岩	

まとめ

1．杜日古墓における石塔の特徴

杜日古墓の石材は全て加工しやすい白色凝灰岩である。保存状態が良く、表面にはのみ痕や研磨時の擦痕が明瞭に残るものもある。既に述べた様に、外から見えない部分の空風輪のほぞ部、火輪のほぞ部穴、水輪の天井部などに幅4.8ｃｍの粗いのみ痕が残る一方、見える部分はのみで仕上げた後、さらに、砥石により研磨を行っている。よって、石塔全体が滑らかな肌面となっているが、空風輪のくびれ部や地輪などには仕上げのみ痕がわずかに確認できる。

石材の大きさは表５の五輪塔計測表のとおりで、空風輪の高さ27．３ｃｍ（９寸）、火輪の幅【推定】30．８ｃｍ（ほぼ１尺）、水輪は幅32.1ｃｍ（1尺1寸弱）、地輪は最大幅36．０ｃｍ（ほぼ１尺２寸）となる。このように、石塔の各部分には企画性が認められ、ほとんどが30ｃｍ前後の切石（尺石）により作られていることが明らかとなった。

形態については、空風輪や地輪は数が多く、規格があることが確認できた。空風輪は空輪部と風輪部の径が同じであり、また、くびれ部は狭いという特徴が認められる。しかし、火輪と水輪は元の姿に復元できるものが少なく、詳しいことは分からない。火輪は復元できたのが一個（第41図７）である。降棟は反らずにまっすぐで、降棟は中央部では水平であるが、端になると斜めとなって降棟に付く。水輪は、天井部の径と胴部最大径との差が少ない胴の張らないタイプであると推定される。地輪は、第42図３・４のように高さの低い長方体となっている。火と地の差は、天がわずかに短い。高さは天地の長さの２分の１程である。水輪と火輪については、今後の類例が増えた時点で特徴を押さえる必要がある。

なお、白色で軟質の凝灰岩の産地は、松江市周辺部と推定されるが、今のところ産出場所は特定できていない。

2．杜日古墓の五輪塔と周辺部の石塔

松江市の南郊における中世の石塔調査としては、止林寺五輪塔群、内堀石塔群、中山五輪塔群、中竹矢遺跡、袋尻古墓群、谷ノ奥遺跡が挙げられる。

止林寺五輪塔群は松江市大庭町の止林寺の裏山に所在する。後世に造られた基壇上に４基の五輪塔が並んでいる。他に、小さい五輪塔と宝篋印塔（塔身１・笠13・九輪３）がある。石材が杜日古墓と同じ凝灰岩製の五輪塔は規模が大きく、各部材は30～40ｃｍ大の石で作られている。これらはおのおの梵字をもつ。形態は古いタイプに属し、時期は室町時代前半と考えられる。小形の宝篋印塔は来待石とよばれる凝灰岩質砂岩製で、室町時代末から江戸時代前半のものである。(1)

内堀石塔群は茶臼山の南麓から発見されたものである。部材は162個あり、五輪塔が大部分を占める。宝篋印塔も数基分混じり、五輪塔が29に対し、宝篋印塔は１の割合という。石材は、凝灰岩が大部分を占めるが、、軟質で白色の石材は少ない。時期は室町時代から安土桃山時代とされている。(2)

中山五輪塔群は八雲村西岩坂の低丘陵に所在し、45基以上からなる。石塔の規模は大きく、各部材は14ｃｍ大の石で造られている。時期は室町時代後半に属するとされている。軟質の白色の石材は認められない。(3)

中竹矢遺跡は松江市竹矢町に所在し、今回の調査地の西隣の隣接地にあたる。石塔には五輪塔の部材が数個あり、古代の横穴墓や矢倉状の横穴の中で発見されている。石材は軟質の白色の凝灰岩と暗灰色の花崗岩がある。各石材は30～40ｃｍ大の石から加工されており、今回発見されたものと

ほぼ同じ大きさである。付近から出土している遺物には京都系の土師器皿や17世紀前半と推定される唐津焼の皿がある。しかし、石塔と焼物が同時代かは不明である。[4]

袋尻古墓群は松江市乃白町の山腹にある。全て五輪塔で、部材は138個あり、30基以上が存在したと推定されている。石材は花崗岩が半数以上を占め、他に砂岩と凝灰岩がある。各石材は30～40cm大の石から加工されており、自然石からなる基壇と、土壙も確認されている。遺物としては、骨蔵器に使用された壺1個、洪武通寶1枚、土師器皿数枚があるだけで、副葬品は少ない。これらは室町時代から江戸時代初めまでの時期に属する。[5]

谷ノ奥遺跡は八束郡八雲村東岩坂の低丘陵にあり、五輪塔の部材が30個以上出土している。これらは径1mの範囲に自然石を並べた基壇上に五輪塔が建てられていた。各部材は30～40cm大の石を加工しており、石材は軟質の白色の凝灰岩が大部分を占める。副葬品の中に、中国産の青花や唐津皿焼のが認められ、室町時代後半から江戸時代初めのものとされている。[6]

これらの石塔群の中で古い時期と考えられるのが、正林寺裏山にある軟質の凝灰岩製五輪塔群で、時期は室町時代前半である。また、袋尻古墓群の梵字をもつ空風輪2個も正林寺のものと類似しており、室町時代前半期と考えられる。社日古墓の石材も正林寺のものと同じ凝灰岩であるが、前述したように空風輪をみると形骸化しており、時期は下る。室町時代と推定される石塔の石材では花崗岩や硬質の凝灰岩、さらに砂岩も存在している。土器や陶磁器と共伴しているものがなく、時期を知ることは難しいものの、空風輪や火輪の形より室町時代の後半のものが多いと推定される。砂岩である来待石のものも認められる。これも戦国時代から江戸時代初めと考えられ、他の石材が姿を消す時期でもある。以上より、松江市の南郊においては、室町時代には数種類の石材で造られた石塔が存在していたことが知られる。

五輪塔の規模についてみると、各古墓とも小さいものが多い。社日古墓も同様であり、水輪の径と地輪の一辺で30～40cmを超えるものはなく、総高は約70cm（セットで一基とはならない）と推定される。その他の古墓も同じか、やや小振りのものが多い。なお、正林寺裏山の五輪塔群だけは飛び抜けて大きく、総高160cm前後となる。各部分の幅も広く、60～70cmを測り、二尺から二尺三寸程である。社日古墓のものより2倍程の大きさで、規模の差は塔を建てた階層の違いを示していると考えられる。

（注1）近藤正　1968　「正林寺の五輪塔群」『島根県文化財調査報告書』第5集　島根県教育委員会

（注2）島谷芳雄　1990　「内堀古塔群」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅶ　島根県教育委員会

（注3）宮本徳昭　1982　「中山2号墳・中山五輪塔群」　八雲村教育委員会

（注4）広江耕史　1992　『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－中竹矢遺跡－』Ⅹ　島根県教育委員会

（注5）石川崇　1998　「袋尻古墓」『松江市文化財調査報告書－第2卸商業団地造成工事に伴う袋尻遺跡群発掘調査報告書－』第16集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団

（注6）平成9年に国道工事に伴い八雲村教育委員会が調査を実施した。同教育委員会の川上昭一氏の教示による。

火葬墓（SK14）について

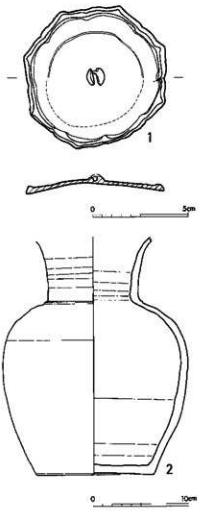
社日古墳群のある尾根上の調査区東端、木棺墓（SK04）などの土坑群がある区域の丘陵南斜面に造られた12号横穴墓の前庭部埋土中から須恵器長頸壺が出土した（第43図、第44図）。この長頸壺（第44図2）は、暗褐色砂質土中にある不明瞭な薄い黒色を呈する土坑に埋められていたものだった。土坑の規模は計測表（表4）のとおり。長頸壺の中には八稜鏡、火葬骨、灰、土砂が詰まっており、この遺構が土坑に火葬骨壺を納めた火葬墓であることがわかった。地上の標識は確認できなかった。骨壺は須恵器の頸周りの太い長頸壺でる。色調は淡い青灰色から灰色を呈し、砂粒若干含み、焼成堅緻である。体部は肩の張り出しが若干弱く、底部に向けて緩やかにすぼまる。底部に高台は付かず、外底、立ち上がりともに丁寧にケズった後丁寧にナデている。遺憾ながら口縁部は得ることができなかった。このような須恵器長頸壺は京都府亀岡市篠窯跡群にその類例がある。壺Lとして形態分類され、9世紀後葉の年代観が与えられている。[松]

八稜鏡は歪んでおり、原型を留めている部分においては稜から稜まで7.8cmを測る。歪んだ最短部分は7.4cmであった。これは骨壺である須恵器の頸接合部内径よりも小さいと見られる。骨壺に納めるために曲げられた可能性が考えられる。

つぎに、八稜鏡の形態や文様構成を杉山氏の行った八稜鏡の分類・編年[杉]に従って分類し、この土坑SK14火葬骨壺出土八稜鏡の年代観を得たい。鏡の詳細について観察すると、内区の鳥紋・唐草紋・鳥紋の配置・鈕座等中心に近い部分については錆付きが著しく観察に耐えない。界圏の形は真円でAに分類される。外区の文様はわずかに単純な盛り上がりが見えており、Cに分類されるものと思われる。外形は八角形に近い平面形のBに分類される。面径は最大7.8cmを測り7cm前後とされるDに分類される。外縁の断面形は低い台形を呈するA1に分類される。以上内区については十分に観察できなかったが、界圏から外区紋、面径、外縁の平面形と断面形など部分的に観察することができたこの八稜鏡の構成諸要素を分類して総合すると、杉山氏分類・編年するところのV2型式・10世紀末～12世紀前半に位置づけられる。この土坑SK14須恵器火葬骨壺内八稜鏡をこの型式・時期に分類するに至った決定的要因はその面径が7.8cmと小さいことであった。Ⅳ型式もしくはV1型式の時期は全国各地での八稜鏡の出土例が飛躍的に増加し、鏡自体の小形化が進んだ時期とされている。SK14鏡も、そのような八稜鏡の汎用化という時代の流れの中でとらえられるべきものなのだろうか。

このように須恵器と八稜鏡それぞれからSK14火葬墓遺構の年代観推を試みたわけだが、この結果をそのまま受け入れると、両者の間に最短でも百年近く、最長だと二百年以上の時期差を認めなくてはならない。須恵器の生産が途絶え、輸入陶磁器や国産の土器、陶器その他の器物があいまって中世的な生活様式を整える時期を考えるとき、この土壙SK14長頸壺の生産された時期を闇雲に後世に下らせて考えることはできないと思われる。須恵器の優品たるこの長頸壺が長らく伝世するに及び、当代の小形化した八稜鏡と出会い、ともに葬られたとするのが穏当なところではないだろうか。したがって、この社日古墳南斜面横穴墓群12号a横穴墓前庭部埋土中土壙SK14出土須恵器長頸壺内の火葬

第43図　SK14遺構実測図（S=1/40）



第44図　SK14八稜鏡（S=1／2）
須恵器壺（S=1／4）

骨の主が葬られた年代については、八稜鏡の年代に従い10世紀末～12世紀前半と考える。

ところで、意宇平野周辺では社日古墳のある丘陵のいわば対岸にあたる東出雲町島田池遺跡、同町勝負遺跡から八稜鏡が出土している。[註3] 島田池遺跡5区土壙SK02出土鏡は直径8.6cm、勝負遺跡木棺墓SK06出土鏡は直径8.5cmをそれぞれ測り、社日古墳SK14出土鏡よりも直径が大きいCに分類されるものだが、いずれにしても、この3鏡は八稜鏡が小形化された時期のものである。興味深いのはこの3鏡の出土状況から見えてくる人々と八稜鏡とのかかわり方であろうか。

島田池遺跡出土鏡は、掘立柱建物跡が建つ区画の同じ平坦面中の土坑の中から、古墳時代に属する須恵器壺もしくは平瓶の口縁部を打ち欠いたものと共に出土している。報告では、このような状態で出土した八稜鏡に対し、建物とのかかわりで見た場合、「地鎮め」の祭祀的意味合いを持った祭具としての役割が推定されている。また、勝負遺跡出土鏡は、木棺墓に副葬品として楮で漉いた和紙に包んで納められていたものと報告されている。一方、土坑SK14出土鏡は、骨壺の（中）蓋として使用されていた可能性が高い。一見前2者で見てきた祭具と副葬品という役割を合わせ持つように見えるが、実は前者である島田池遺跡出土鏡の担った「鎮める祭具」としての性格が強いと考えられるのではないだろうか。

註1伊野近富「龍窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1990年

註2杉山　洋『「今様の鏡」と「古鉢の鏡」－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－』ＭＳＥＵＭ6481東京国立博物館美術誌4月号1991年

註3『島田池遺跡・鍋箕遺跡』－一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅰ－島根県教育委員会1997年

『勝負遺跡・堂床古墳』－一般国道９号安来道路西地区埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区10－島根県教育委員会1998年勝負遺跡出土例を持って島田池遺跡に次ぐ県内４例目の出土例としているので、その後に例がなければ、社日古墳南斜面横穴墓群12号ａ横穴墓前庭部埋土中土壙SK14出土鏡はこれに次ぐものとなるか。

第4節　社日古墳南斜面横穴墓群について

7号横穴墓について

7号横穴墓（第45図～第47図）は、社日古墳のある丘陵南斜面の調査区西端に位置し、標高22.5m付近から墓道を掘り込んでいる。墓道には埋土が充満しており、狭長な墓道からさらに狭まる玄門部分には、閉塞に使用されていたと見られる人頭大の自然石が散見された。玄門から玄室にかけては天井部が落盤陥没して砂岩の脆弱な岩盤ブロックが多く詰まっていた。この部分については、現地表においても若干のくぼみが観察できた。検出できた墓道先端の標高が22.5mであったのに対し、玄室床面の標高は22.9mを測り、若干の高低差が見られる。これは、墓道が斜面に堆積した表土部分から掘られ始めているので、先端部分が次第に下がっていったことが考えられる。

墓道先端から玄室奥壁までの全長は7.3mを測る。墓道の断面は下隅丸のコップ形に造り、最も狭い部分で幅72cmと狭長である。墓道の長さは4.28mを測り、玄門に至る。門の最先端には、床面にわずかに閉塞を受ける刳込みの痕跡を残しているが、ほとんど段差はない。ここから墓道よりもさらに狭い幅60cmの狭長な玄門が穿たれる。墓道の断面が方形に近い隅丸であったのに比べて、玄門の断面は、現存部分でかなり丸みを帯びているようだ。この玄門の長さは1.12mを測り玄室に至る。玄室の平面形は正方形に近い長方形で幅広の半入り、奥行きは1.9m、幅2.28mを測る。ちなみに、今年度調査できた横穴墓玄室11室のうち、8号横穴墓についで7

第45図　7号横穴墓遺構実測図（S=1/50）

番目の広さということになる。玄門がやや右袖に偏っているが、玄室平面を見る限り、拡張したり、工事中の落盤によって平面が膨らんだようすも見られず、一時に造られたものと考えられる。玄室は陥没しているので、上半が破壊されているが、床面からの立ち上がりや、後述するが、7号横穴墓が玄門と狭長な墓道を持つ古い型の横穴墓であり、この地に横穴墓なる古墳の最終形態となる墓制が導入されてから、早い時期に造られたものであると考えられること、出雲東部地域に位置していること、[※1]、奥に比べて玄門の方がやや幅広であることなどから、その断面形はドーム形であったことが推測される。

玄室床面の周囲には、両端が玄門で止まる断面「V」字状の溝がめぐらされ、これも築造時に造られたものと思われる。一端床全体を屍床としたのか。この床の右袖では右壁に沿って細長く作られた白然石の礫床が検出された。この礫床は、玄門右壁の延長線より右側の玄室の奥行きをほぼ全部使って作られている。まず、礫床の石囲いをおくための割付穴をいくつか掘り、一抱えから人頭大の比較的大きい石を用いて石囲いを作り、拳大の白然石を奥の方から1.28mにわたって敷き詰めている。そこから石囲いまで約30cmの間なにも検出されなかった！面が続く。そして、平らな人頭大の石と玄室前面の壁との間に須恵器蓋坏が置いてあった。蓋坏は、逆さまに置かれてやや溝に落ち込んで傾いた坏身の上に、蓋がそのまま重ねられていたように見える。壁面や大井の落盤で、平らな人頭大の石の上に置いてあったものが滑り落ちたことも考えられる。この平らな石と須恵器蓋坏、それに、構造上の制約もあると思われるが、右囲いの門側の方が幅広になっていることなどから、こちらが埋葬頭位であった可能性が高いと思われる。

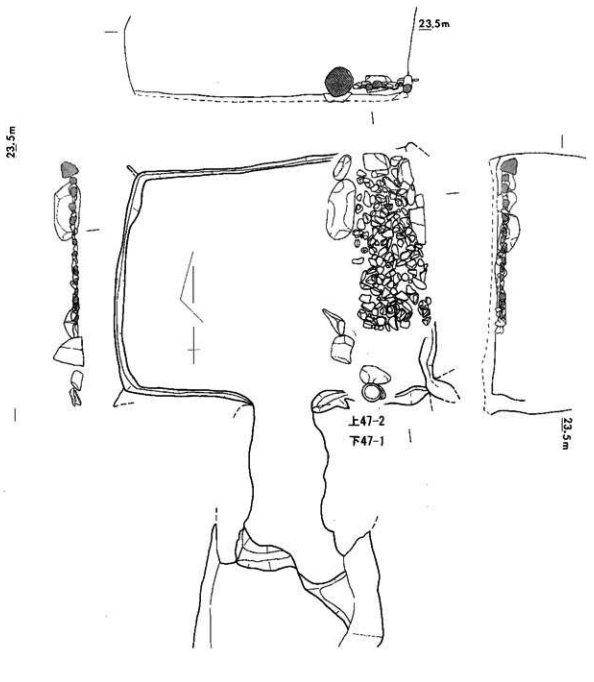
7号横穴墓出土遺物について

7号横穴墓出土遺物として図化できたのは前項で述べた須恵器蓋坏を含め第47図に挙げる4点の須恵器だけであった。前項で述べた蓋坏47-1及び2は、ともに、焼成時に全体的に焼け歪んだものである。47-1坏身の外面底部は丁寧なヘラ削りが施されており、単位も広く明瞭である。立ち上がりも斜め上方にやや外反しており、しっかり高く立ち上がっていたと見られる。口径も蓋坏としては大きい方であったと見られる。47-2蓋は天井部から丁寧なヘラ削りが施されており、単位も広く明瞭である。肩部には2本の沈線を施して稜を表現している。口縁端部内側には、高い位置に段を作っている。出雲3期[※2]の特徴を示すものと思われる。47-3は須恵器蓋坏の蓋肩から口縁部にかけての破片である。47-1・2に比べて後出の特徴を示している。47-4は須恵器甕の口頸基部から肩部にかけての破片である。47-3・4はいずれも墓道埋土中から出土したものである。

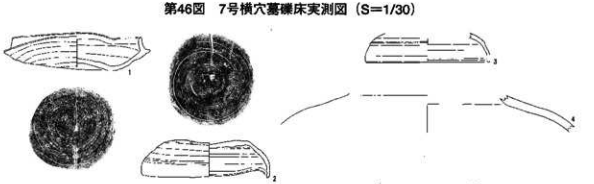
7号横穴墓の位置について

7号横穴墓の位置と他の横穴墓との位置関係を若干整理してみたい。

社日7号横穴墓は、社口古墳のある丘陵南斜面の調査区西端に位置し、標高22.5m付近から墓道を掘り込んでいる。玄室床面の標高は22.9mを測る。墓道は斜面に堆積した表土から掘り込み始めているので、先端部分が次第にドがっていったことが考えられる。同じ斜面のすぐ西側には中竹矢4号横穴墓が標高21.1mの位置に玄室を穿ち、その西に隣接して中竹矢3号横穴墓が標高20mの位置にある。また、7号横穴墓の東側に接しては、6号ｃ横穴墓と6号ａ横穴墓各玄室が標高21.6m付近に造られており、また、これらの東に接して6号ｂ横穴墓が標高20.6m付近に位置している。この南斜面に展開する横穴墓群の中で、社日7号横穴墓は、社口10号横穴墓玄室床面の23.6m、社口8号横穴墓玄室床面23.3mにつぎ、社日9号ａ横穴墓の玄室床面の標高22.9mと並んで3番目に高い位置に造られている。



第46図　7号横穴墓礫床実測図（S=1/30）



第47図　7号横穴墓出土須恵器実測図（S=1/4）

つぎに、多分に地形に制約される面もあるかもしれないが、横穴墓の開口方向について見てみると、中竹矢4号横穴墓（N-3°-W）と社日7号横穴墓（S-4°-E）は軸の向きをほとんど同じくしている。

また、7号横穴墓に隣接する中竹矢3号横穴墓前庭部と社日6号ｂ横穴墓前庭部、それに、社日8号横穴墓が向きを同じくしている。前者のグループでは社日7号横穴墓→中竹矢4号横穴墓の順に造られている。後者のグループは社日6号ａ横穴墓→同6号ｃ横穴墓→同6号ｂ横穴墓・同8号横穴墓→中竹矢3号横穴墓の順に築造されたものと考える。

註1第7回山陰横穴墓調査検討会出雲の横穴墓－その型式・変遷・地域性－資料山陰横穴墓研究会編1997年

註2大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集1994年

大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表」『出雲の横穴墓』－その型式・変遷・地域性　第7回山陰横穴墓調査検討会資料

山陰横穴墓研究会編1997年

中村　浩著『研究入門須恵器』柏書房1990年

以下須恵器の編年についてはこれらの研究による。

註3『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ（中竹矢遺跡）島根県教育委員会1992

6号各横穴墓について

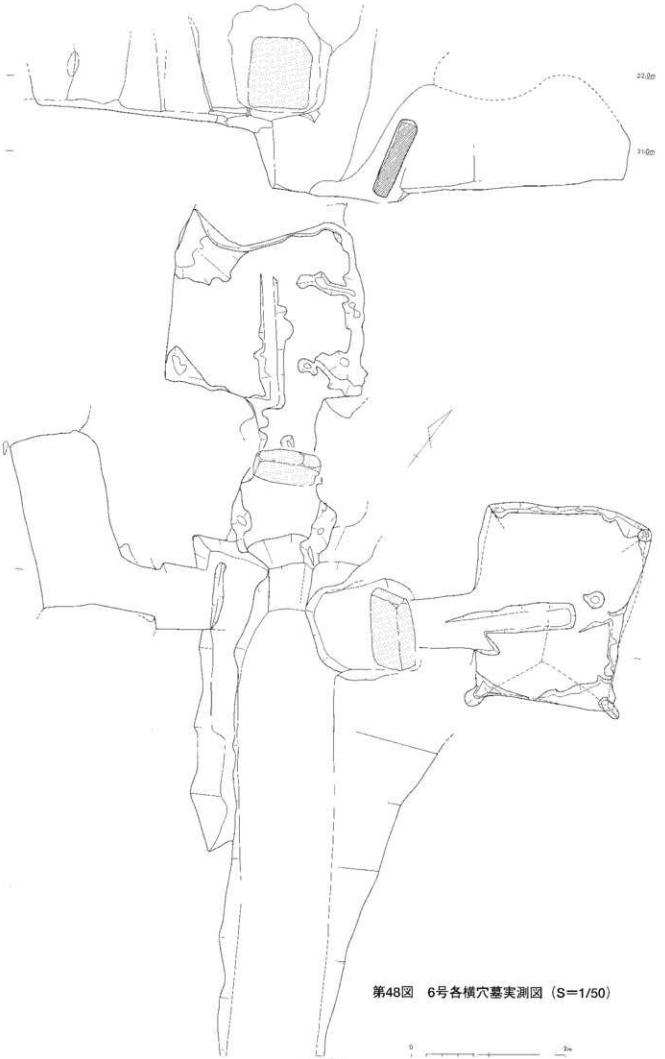
6号各横穴墓は一見3基の玄室が一つの前庭部を共有しているように見えるが、実はこの前庭部は直接には6号ｂ横穴墓のために、それまで前庭部を共有していたと思われる6号ａ横穴墓と6号ｃ横穴墓の前庭部を壊し、ほぼ同幅そして同方向に向けて改めて掘り抜いたものと考えられる。これは、この場所に玄室を作ることに固執した人々が、6号ａ横穴墓と8号横穴墓との間の斜面に玄室を作るに足る空間を創出するためになされたことであると推測される。

6号ａ横穴墓について

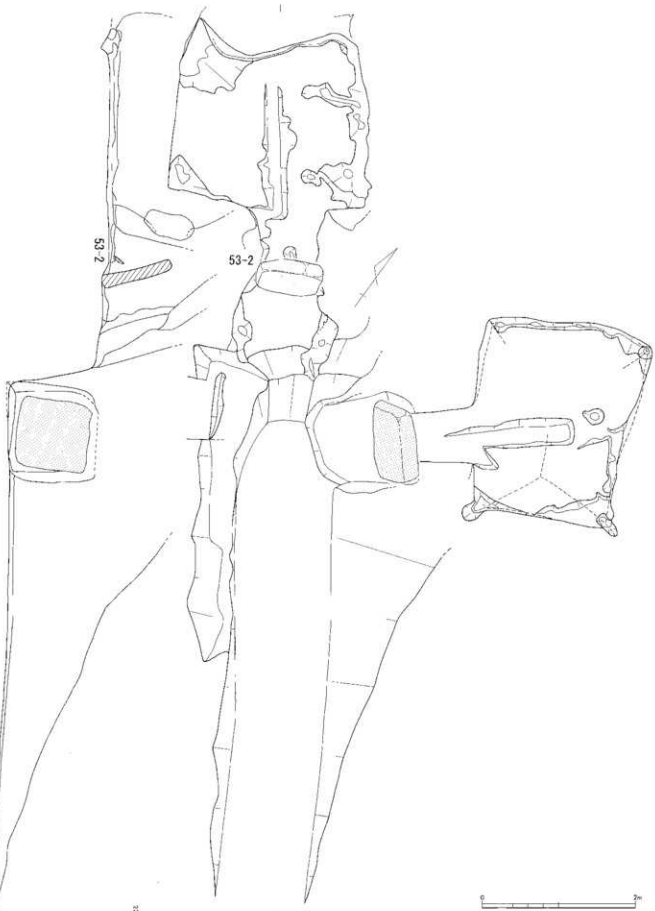
残存する玄室、玄門は落盤して岩盤土砂が充満しており、現地表も窪んで段状地形をなしていた。しかし、閉塞石はほぼ現位置を保って検出された。

6号ａ横穴墓の主軸方向はＳ-34°-Ｅで南東方向に開口している。6号ｂ横穴墓前庭部は標高20.2m付近から掘り込みはじめ、残存7.06m掘り進んだ後標高20.4mで6号ａ横穴墓羨道下に到達する。ここから残存する羨道床面まで比高差1.1mを測る。残存羨道の幅は1.31m、高さ約1.30m、断面形は隅丸方形状を呈する。この羨道の前両端にはピットがある。羨道は長さ1.35mを測り閉塞石に至る。閉塞石自体の高さは94cm、幅80cm、厚さ14～18cmを測る。この切石に塞がれた玄門は羨道よりも狭まり幅70cmを測り、高さは1m前後であったと推定される。断面形は羨道よりもより丸みを帯びているようだ。長さ93cmを測り玄室に至る。玄室床面の標高は21.6mを測る。幅は2.53m、現存奥行き2.32mを測り、半人りである。検出した床面積は12号ａ横穴墓に次いで、調査11穴中2位と見られる。玄室上半は岩盤等の崩落により破壊されているが、床面から壁面への立ち上がり等から、断面形はドーム形と推測される。玄室床面は中央部に門から奥壁に向けてわずかに溝状の痕跡が残っていた。また、右壁から奥壁沿いには溝状の遺構が残っており、これらの痕跡によって、玄室右側に屍床を設けていたことが推測される。

玄室には先述したように岩盤土砂が充満しており、この土砂を除去すると第2章第3節で述べたように、奥壁は破壊されていた。また、玄室内には、門近くの床面に置かれた6～7枚の平らな石と、閉塞石の下で、宝珠状つまみが付き、「メ」印のヘラ記号が施された須恵器坏蓋（53-2）が出土した



第48図　6号各横穴墓実測図（S=1/50）



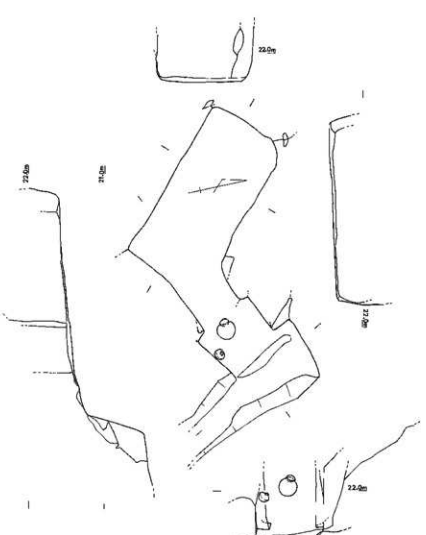
第49図　6号a・b横穴墓遺構実測図（S=1/50）

のみであった（第49図）。この須恵器蓋は焼け歪んでいた。

出雲6期の様相を示しており、6号ａ横穴墓の最終的な閉塞時期を示しているものと考えられる。

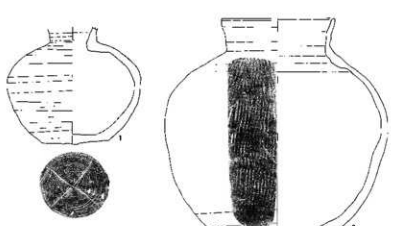
6号ｃ横穴墓について

6号各横穴墓は特徴的な構造を持っている。6号ａ・ｂ・ｃとした3基の横穴墓はａ⇒ｃ⇒ｂの順に造られたと考えられる。ａ横穴墓とｃ横穴墓の先後関係は直接にはつかめないが、斜面に掘り込まれた位置関係と構造からｃ横穴墓の方が後から造られたことが窺われる。6号ｃ横穴墓は6号ａ横穴墓と前庭部を共有できるように、7号横穴墓と6号ａ横穴墓に挟まれた狭いスペースに制約されて、羨道玄門と玄室が鈎形になるような設計で、強引に玄室を造っている。6号ｃ横穴墓も6号ａ横穴墓と同様に羨道の構造は意字型である。



第50図　6号c横穴墓遺構実測図（S=1/50）

前庭部は、かつて6号ａ横穴墓前庭部に接続して共有していたと推測される。その前庭部から若干の段ないしは刳込みを経て羨道は幅85cm、奥行き90cm、高さ62cm以上を測る。断面形はほぼ方形であったと見られる。玄門は幅60cm、奥行き62cm、高さ89cm以上を測り、断面は方形と見られる。この玄門は玄室の南東短辺を延長するように東隅に接続している。玄室はやはり落盤陥没しており、砂岩の岩盤土砂が充満していたが、地表面には若干の窪みが観察されるが、顕著な地形的変化は見られなかった。床面は南東から北西に長方形を呈する。幅1.19m、奥行き2.34mを測り、調査11穴中8位の床面積と見られる。落盤により上半を失っているが高さ1.04m以上はあったと見られる。玄室断面形については、やはり、四隅の立ち上がりの残存状況などからドーム形が想定できると思われる。玄室内に落盤した岩盤土砂中にはほとんど遺物なく、床面は中央に向かって



第51図　6号c横穴墓出土遺物実測図（S＝1/4）

若干窪んでいるものの、全く平らで、何の構造も見られなかった。

一方、羨道の埋土中からは須恵器壺と長頸瓶が出土した（第50図、第51図）。いずれも羨道埋土中、床面から44～50cm上で出土している。須恵器壺（51-2）は中心近く、須恵器長頸瓶（51-1）は羨道左（南）壁に沿うように出土している。かなり高い位置から出土しているが、横穴墓の祭祀にかかる供献と考えられる。最終的な閉塞時のものとも考えられる。

6号ｃ横穴墓羨道埋土中出土須恵器について

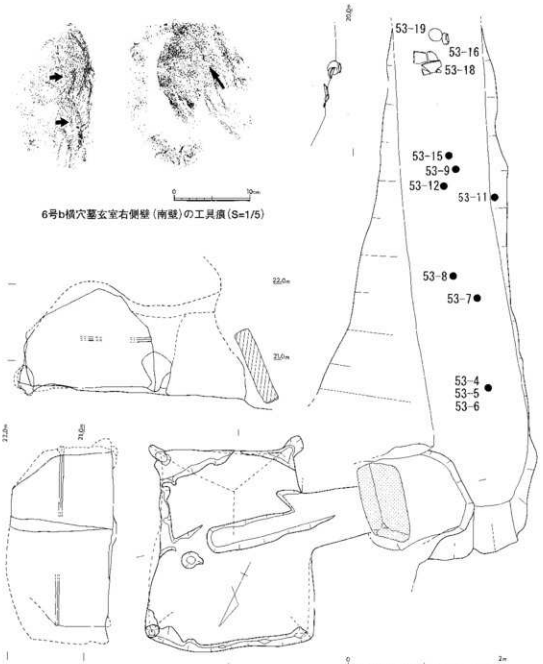
51-1須恵器長頸瓶は口頸部を欠いており、得ることはできなかった。残る口頸基部から回転ヘラケズリ後回転ナデ。体部は回転ヘラケズリのままである。脚を持たない底部は回転ヘラ切りの痕跡を残す。また、底部外面には、底径いっぱいに、ほぼ直行する十文字のヘラ記号が施されていた。6号ａ横穴墓閉塞石下から出土した坏蓋の「メ」印ヘラ記号とは趣が違うようだ。肩部と体部は膨らみを持ち、球形に近い。脚を持たないので、出雲5期を中心とする時期の様相を示していると思われる。しかし、慎重な検討を要するが、6号各横穴墓から出土した遺物の中で、というよりも、この横穴墓群全体の中で出雲5期の様相を示す遺物はきわめて少ないと思われる。6号ａ横穴墓と6号ｃ横穴墓の関係を考えるとき、51-1長頸瓶の時期を下げて考えるか、6号ａ横穴墓の築造を出雲4期ないし5期に想定するか、根底から覆してｃ→ａの築造順とするかなど多くの疑問がわいてくる。6号ａ横穴墓は、玄室の落盤した岩盤土砂からも、床面からもほとんど遺物が出土していない。後述するように、6号ｂ横穴墓に属する前庭部の埋土や床面からも出雲5期以前の様相を示す遺物は出土していない。やはり6号各横穴墓は出雲6期以降の築造を考えておきたい。

52-2須恵器短頸壺はほぼ直立する単純な口頸部を持ち、若干特徴的と思われる。

6号ｂ横穴墓について

6号各横穴墓は一見3基の玄室が一つの前庭部を共有しているように見えるが、実はこの前庭部は直接には6号ｂ横穴墓のために、それまで前庭部を共有していたと思われる6号ａ横穴墓と6号ｃ横穴墓の前庭部を壊し、ほぼ同幅そして同方向に向けて改めて掘り抜いたものと考えられる。これは、この場所に玄室を作ることに固執した人々が、6号ａ横穴墓と9号横穴墓との間の斜面に玄室を作るに足る空間を創出するためになされたことであると推測される。

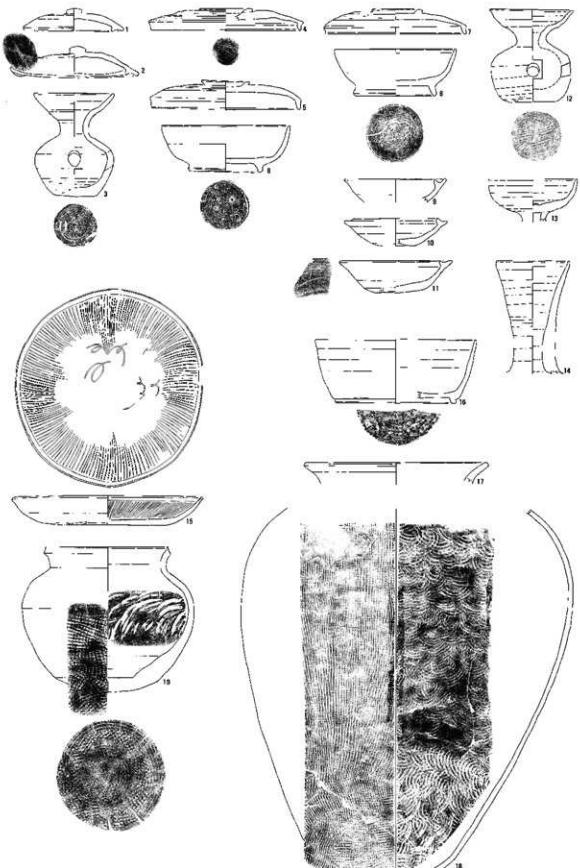
6号ｂ横穴墓の前庭部は標高20.2m付近から掘り込みはじめ、幅1.28m、深さ80cm、長さ残存7.06m掘り進んだ後標高20.4mで6号ａ横穴墓羨道下に到達する。6号ｂ横穴墓の羨道はこの前庭部に対してほぼ直角に取り付けられている。地形に制約された変則的な構造であるが、6号ａ横穴墓、6号ｃ横穴墓と同じく意宇型である。羨道は幅1.15m、長さ1.22m、高さ約1.22mを測り、断面は方形に造る。



第52図　6号b横穴墓遺構実測図（S=1/50）

玄門側にやや傾いた閉塞石は、今年度調査した横穴墓の中で最大規模を誇り、高さ幅とも1m、厚さ20cmを測る。玄門は幅65cm、長さ91cm、高さ67cm以上を測り、玄室に至る。断面は方形に造る。羨道と玄門は天井部分が若干の落盤を来しているが、玄室はほぼ保存されており、築造当時の姿を保っていた。このように、築造時の玄室の姿を現代にまで伝え得たのは、今年度調査した横穴墓の中で11号ｂ横穴墓（小横穴）玄室とこの6号ｂ横穴墓玄室の2穴だけであった。その玄室は半入りで、幅2.51m、奥行き2.12m、高さ1.40mを測り、床面積で今年度調査11穴中3位と見られる。床面には両側壁と奥壁下の周縁に掘られた幅10～20cm、深さ5～8cmの溝と閉口軸に沿う中央の幅35cm、深さ6cmの溝によって左右に屍床を造り出している。玄室の構造は軒線を表現するテント系家形である。玄室内にはさほどの土砂も堆積しておらず、遺物は土器の一片すらも出土しなかった。なお、工具痕の拓影は奥壁と南壁の界線付近で採取したものであり、左影の右端は界線である。

6号ａ横穴墓出土遺物について



第53図　6号横穴墓出土遺物実測図（17,18S＝1/6、その他S＝1/4）

第53図に挙げた遺物の中で53-2、52-3は6号ａ横穴墓閉塞石のごく近くから出土した。53-2は坏蓋で、玄門内の閉塞石重心の真下から縦になって出土している。焼成時に歪みをきたしている。頂部に宝珠状つまみ、内面周縁にはかえりを持つ。天井部には下り部分には「メ」ないし「×」のヘラ記号が付けてある。53-3は甕である。これは前庭部から閉塞石に向かって右下、羨道側で出土している。頸部の波状文や体部の刺突文が消失し、体部が橘小化している。6号ａ横穴墓閉塞石の前後両側から出土したこの二つの遺物とも出雲6期の特徴を示すと見られ、最終的に6号ａ横穴墓が閉塞された時期を示している。

6号ｂ横穴墓前庭部出土遺物について（第53図）

第53図に挙げた遺物の中で15の畿内系土師器皿以外はすべて須恵器である。前項で見たように、2と3は6号ａ横穴墓玄門と羨道からの出土、ほかは6号ｂ横穴墓前庭部からの出土遺物である。12甕、15畿内系土師器皿、16高台坏、18甕、19短頸壺は床面近くからの出土、そのほかは前庭部堆土中からの出土である。

4坏蓋、5坏蓋、6高台坏は一括して出土した（第52図）。4、5は口径15cm前後を測るやや大型化した坏蓋である。輪状つまみを持ち、すでに口縁内側にはかえりはなくなり、口縁端部が下方に折れ曲がっている。4については判然としないが5の天井部外面には静止糸切り痕が認められる。6の体部は高台からかなり離れて立ち上がる。高台は低く、外に張り、外端面は接地しない。底部外面高台内に、あまりきれいに切り揃えられていない管状工具の小口で円形のスタンプが押されている。丸いスタンプ文は79-7長頸瓶肩部にも見られるが、大きさも施文位置も趣も異なっている。これらの須恵器は出雲8期の様相を示す。

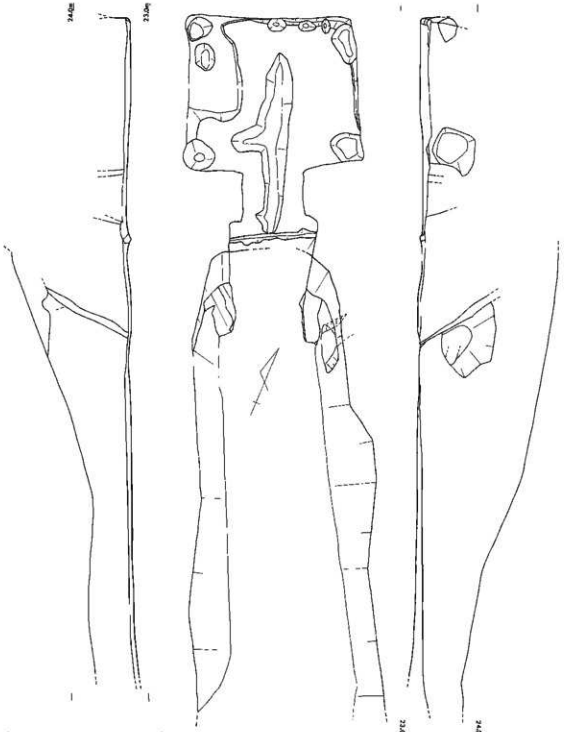
15は暗文のある畿内系土師器皿Ａで前庭部の先端に近い部分の床面近くから出土した（第52図）。口径は19.8cm、器高3.1cmを測る。体部内面には放射線状のヘラミガキが口縁下まで施されている。その内側底部内面には螺旋状のヘラミガキを施す。外面は指ナデ、特に底部外面立ち上がりに強いナデを施す。体部は緩く立ち上がり開く感がある。口縁端部は斜め上方に肥厚し、外面は沈線を巡らしたようになっている。飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の様相を呈する。

16高台坏、18甕（破片）、19短頸壺は前庭部先端床面近くから一括して出土した。16高台坏は口径17cmを測り大型化している。体部はあまり丸みを持たずまっすぐ上方に高く立ち上がり、器内部が深い印象を受ける。高台は底部のやや内側に付き、やや踏ん張るが幅狭く低い。8世紀前半代のものとみられる。

11は口径10cm前後の須恵器坏身である。体部外面に「メ」もしくは「×」印のヘラ記号がある。6号ａ横穴墓玄門から出土した53-2坏蓋と時期的に重なると見られる。

8号横穴墓について

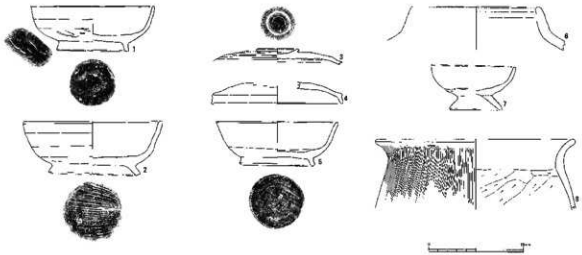
8号横穴墓は6号ｂ横穴墓と9号各横穴墓の間に位置する。前庭部は標高23.1m付近から掘り始め玄室床面は標高23.3mと今年度調査横穴墓中10号横穴墓に次いで高位に位置する。また、地形に制約されたためか玄室は群中最も奥まったところに位置している。開口方向はS-24°-Eで南南東に向く。中竹矢遺跡3号横穴墓、社日6号ｂ横穴墓、などと軸が揃っている。前庭部は幅1.52m、長さ現存7.20m以上を測り羨道に至る。羨道は幅86cm、奥行き1.35mを測り、高さは69cm以上はあったものとみられる。羨道横断面は方形に造る。3枚の切石による閉塞があり玄門に至る。玄門は幅80cm、奥行き



第54図　8号横穴墓遺構実測図1（S=1/50）

88cmを測り、幅広で短い印象を受ける。横断面は丸く造った形跡があり、現存高さ45cmを残す。両袖中央に2枚重ねの切石（閉塞とほぼ同規格）が置かれていた玄室は平入りで幅2.24m、奥行き2.00mを測り、今年度調査横穴墓中5位の床面積と思われる。この玄室は「上屋」が落盤して陥没しており、検出時には、玄室の真上の岩盤にちょうど玄室に落ち込んだ落盤上砂の体積分だけ空洞が空いていた。玄室内には開口軸に沿う幅20～30cm前後、深さ7cmの溝が羨道奥閉塞石下の刳込みから玄室奥近くまで続いている。また、大小8個のピットがあり、右壁には獣巣穴かとも思われる狭く深い横穴があった。このような獣巣穴は前庭部右壁再奥部にもあり、その奥深いところから木の実や餌とと

第55図　8号横穴墓遺構実測図2（S=1/30）



第56図　8号横穴墓出土遺物実測図（S＝1/4）

もに運び込まれたのか、第80図2に挙げた玉髄製のスクレーパーもしくは転用鏃とみられる石器が採取された。横穴墓全体の構造は意字型である。

8号横穴墓から出土した切石について

8号横穴墓では、閉塞石と玄室内の埋葬施設として、高さ60cm前後、幅42cm前後、厚さ15～20cm前後を測るほぼ同じ規格の切石が計7枚使用されている。これらの石の材質はいわゆる荒島石（浮石凝灰岩）とみられる。閉塞には羨道奥の幅いっぱいに3枚の切石が縦長横列に並べられていたものと思われる。また、玄室には左右袖中央に2枚づつ計4枚の切石が積み上げてあった。左袖の石積みにはそれを削り付けたかのごとくに窪みがある。この二つの石積みは両端まで約1.9mあり棺台と思われる。しかし、玄室内からは釘などは一切出土していない。

これらの石材は、その規格からみて石床や石棺の部材を転用している可能性も考えられる。しかし、後述するように、直接遺構に伴う須恵器高台坏には顕年的な時期差が認められず、前庭部の上層堆積縦断面中にも、追葬などによる顕著な攪乱等は認められない。石積みが築造時のものとすれば、玄門の閉塞と玄室の石積みのために切石を7枚新調したか、もしくは、ほかの横穴墓等からの転用の可能性も考えられる。

8号横穴墓から出土したその他の遺物について（第56図）

8土師器甕以外はすべて須恵器である。1、2の口径の異なる須恵器高台坏は、玄室床面左袖石積みの周囲から出土した。ほかの3坏蓋、4坏蓋、5高台坏、6短頸壺（有蓋？）、7低脚坏は前庭部埋土中からの出土である。1、2、3、5には静止糸切り痕がみられる。1は口径12.8cm、器高4.9cm、高台径7.1cmを測る。体部は丸みを持って立ち上がり端部は丸く納める。外面底部近くには工具等が当たった痕かもしくはヘラ記号がある。高台は底部端からかなり中寄りに付けており、あまり高くはないがしっかりとしていて、接地面は面取りしている。底部外面は静止糸切り痕を消すように回転ナデを施している。2は口径14.5cm、器高5.6cm、高台径9.4cmを測り、1がそのまま入るほどの大きさである。体部の立ち上がりは1よりも直線的である。高台は比較的高く、面取りした端部を外に踏ん張り内側端部で接地する。底部外面の静止糸切り痕をそのまま残している。出雲8期の様相を呈する。8号横穴墓は今年度調査横穴墓中最後の築造と思われる。

9号各横穴墓について

9号横穴墓は広い前庭部を二つの玄室が共有している。ただし、9号ｃ横穴墓としたものは前庭部左壁奥近く、床面から40cm上に穿たれた小横穴である。また、6号ｂ横穴墓としたものは羨道のみ検出できたが、その奥は砂岩の岩盤上砂で、玄門玄室に当たると思われた部分は、床も壁も「上屋」も全く形をなしておらず、遺物も一切出土しなかった。玄門、玄室については未掘、未完成ではないかと思われた。

横穴墓の位置について

9号各横穴墓は東に10号横穴墓、西に8号横穴墓に挟まれている。特に、東に隣接している10号横穴墓は、9号各横穴墓よりも先行して築造されていたもので、9号各横穴墓はこれに影響を与えないように注意して築造したことが考えられる。9号ｃ横穴墓を前庭部左壁に穿ったのもその一例か。逆に西隣の8号横穴墓は9号各横穴墓よりも後に築造されたものであることがその遺物の比較からわかる（表6等）。10号横穴墓のように群中最も早い段階に築造された横穴墓と最も遅く築造された8号横穴墓に挟まれた形となる。また、縦の位置で見ると、9号各横穴墓は尾根上調査区東境界近くの土坑群の直下、加工段2五輪塔基壇および五輪塔土坑SK12の斜面下位に当たる。中でも未完成9号ｂ横穴墓はSK12の真下に当たる。玄室は落盤陥没して埋没していた。前庭部に当たる部分と合わせて、12号横穴墓の現地表ほどでなかったが、緩斜面ないしは段状地形をなしていた。埋没した玄室部分は地盤が脆く、人力での掘削は非常に危険だったので、前庭部の記録を取った後、8号横穴墓とともに玄室の検出作業を行うのに必要な範囲で玄室「上屋」を重機によって除去した。従って玄室上屋は全く観察できていない。

9号横穴墓前庭部は10号横穴墓よりも60cm、8号横穴墓よりも30cm低位に築造されている。標高22.8m付近からその先端が始まり、幅2.46m～3.54m、奥行き約6mを測り羨道に至る。

横穴墓の構造と規模について

9号ａ横穴墓の開口軸方向はS-8°-Eで南に開口している。群中どの横穴墓とも微妙にずれているようだ。羨道は天井が一部落盤しており、奥には閉塞があった。前庭部との床面段差は全くない。幅88cm、奥行き1.1m、現存高さ1.18m以上を測る。横断面は方形に造っているようだ。自然石と荒島石切石によって閉塞された玄門は玄室と同様に落盤して埋没していた。閉塞石の位置とはずれているが玄門の最前床面に刳込みがある。幅68cm、奥行き1.22mを測り玄室に至る。現存高さは1.15m以上あったと見られる。横断面は丸みを帯びている。

9号ａ横穴墓の玄室は半入りであったと見られる。幅2.48m、奥行き1.80mを測り、今年度調査横穴墓11穴中8号横穴墓に次いで6位の床面積と見られる。玄室中央には開口軸に沿う幅30cm前後、深さ12cmを測る溝があり、左右に屍床を造り出している。羨道奥には、最終の閉塞とはずれがあるものの床面に刳込みが見られたが、玄門から玄室中央に続く溝の検出された底面は羨道よりも下がる傾向にあった。9号ａ横穴墓玄室には開口軸に沿って石床が3種類（左袖に2、右袖に1）配置されていたが、玄室自体も左袖を広く造っていることや、玄門右壁を延長して右袖に掘り込みの隔壁を造り出していたりして、当初からこのような埋葬施設の設置を計画していたことが窺える。

横穴墓全体の構造は意字型に造る。

9号ｂ横穴墓の羨道は幅98cm、奥行き88cm、現存高さ76cmを測り玄門に至る。玄門と見られる部分は幅78cm、奥行き44cm、現存高さ40cmを測り、横断面は隅丸を呈する。

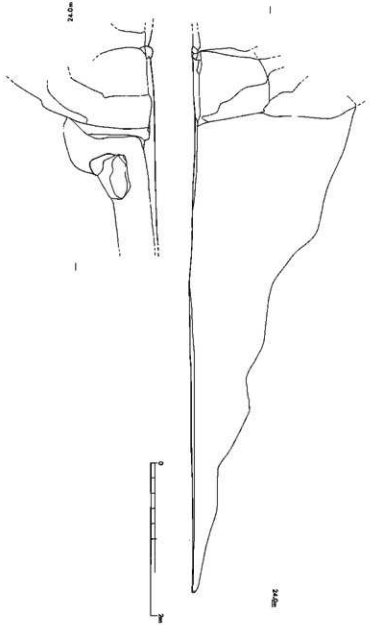
9号ｃ横穴墓は前庭部左壁奥から25cm前、床面から40cm上に穿たれている。幅58cm、奥行き28cm、

第57図　9号各横穴墓遺構実測図1（S=1/50）

高さ40cmを測る。この小横穴からは小児の歯が出土しており、本書所収井上博士の観察と所見をいただいた。

前庭部の共有について

9号各横穴墓には11号ａ横穴墓前庭部と12号ａ横穴墓前庭部のように、顕著な段差等は見受けられ



第58図　9号各横穴墓遺構実測図2（S=1/50）

ないが、平面のみから見ると、9号ａ横穴墓が先に横穴墓として完成しており、その前庭部右壁先端から現状で3.2m近く中程に入った部分から、前庭部奥隅に向けて9号ｂ横穴墓を新たに掘っていったように見受けられる。しかし、このような前庭部右壁の歪みは10号横穴墓に影響を与えないようにしているからとも考えられ、直ちに9号ｂ横穴墓の増築の証左とすることはできないと思われる。9号横穴墓築造当初から、前庭部をこのように共有するように設計されていた可能性をはっきり否定する証拠は得られていない。

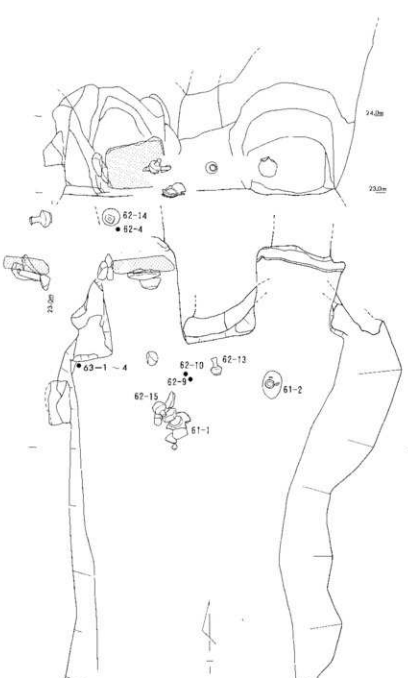
9号ａ横穴墓の閉塞について

玄門の閉塞は、荒島石（浮石凝灰岩）の切石1枚と羨道奥の空間と切石の隙間を埋めたり、あるいは立てかけるようにして抱えあるような自然石が配置されていた。

切石は羨道右壁に接するように据えられ、左壁側を天とすれば均整のとれた細長い台形を呈している。現状の天地で幅82cm、高さ現存55～65cm、厚さ18cmを測る。この切石の前からは、半らな抱えあるような自然石と角張った自然石が3個出土した。切石の左には羨道左壁との隙間を埋める、あるいは切石を固定するかのように、やはり一抱えあるような自然石が2個詰め込まれていた。

9号ａ横穴墓玄室内石床について

9号ａ横穴墓は左袖に整などで加工した2枚ずつの切石2列、右袖右壁沿いに同じく切石3枚を1組とした1列、計3列の石床が配置されていた。その上や下、隙間から人骨や刀子、須恵器坏などが検出



第59図　9号横穴墓前庭部遺物出土状況実測図（S＝1/50）

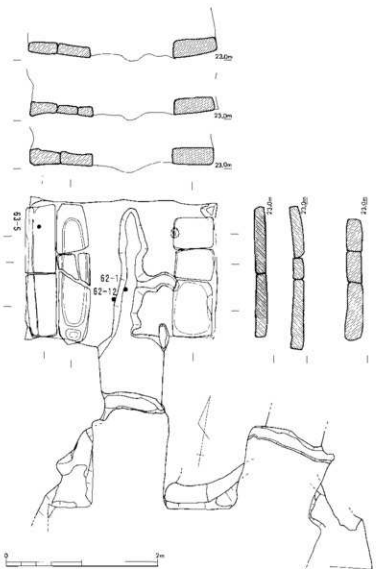
された（巻末モノクロ写真53）。半入りの玄室床面自体には、閉口軸に沿って中央にその底が羨道と同じ高さになるように幅30cm、深さ10cm前後の溝を掘り、左右の床面を高くして屍床を設けている。この割付は石床の配列と合致しているので、石床を配置するのと同時か、もしくはこのような石床の配列を当初から決めて置いて計画的になされたことと思われる。

9号a横穴墓玄室左袖中寄りの石床は検出時には割れていたが、もとは2枚の切石を一体として彫刻成形したものと思われる。全体の長さ1.87m、最大幅42cm、厚さ16cm前後を測る。その表面には、ほぼ全体に及ぶ長さ1.44m、最大幅33cm、深さ2cm前後の長楕円の刳込みと、玄門側の端部に20cm×14cmの隅丸長方形で深さ3cmの小さな刳込みがある。大きな長楕円の刳込みは滑らかに仕上げているが、小さな刳込みは工具痕が残り雑に映る。それぞれ身体と頭部に対応していると思われる。全体に中程が彫らみ両先端が若干すぼまっている形状は舟形を想定しているのだろうか。

9号a横穴墓玄室左袖の左壁に沿う石床は、2枚の長方形の切石をそれぞれ彫刻成形して一体としたものである。最大幅40cmのうち、10cm前後の棚状部分を残し、残りの部分を深くは1cm前後を削り込んで平面を造り出している。左袖の2列の石床は玄室床面の前後いっぱいにはめ込んでいる。

右袖の右壁に沿う石床は3枚の切石を1組としている。玄門に近い方の石材は幅52cm、長さ85cm、厚さ20～22cm、中程の石材は幅52cm、長さ40cm、厚さ20cm、奥の石材は幅52cm、長さ42cm厚さ20cmをそれぞれ測る。厚みを揃えた石材を前後の小口が揃うように互い違いに配置している。左袖の２列の石床から男性の遺残骨、右袖の石床からは女性の遺残骨が検出された。本書所収井上博士の観察と所見に詳しい。

左壁沿いの石床下からは第63図5に挙げた刀子が出土した。また、右袖石床の下からは須恵器甕片が1点出土した。石床の主達が何度かに分けて追葬のされた可能性を示すものかもしれない。

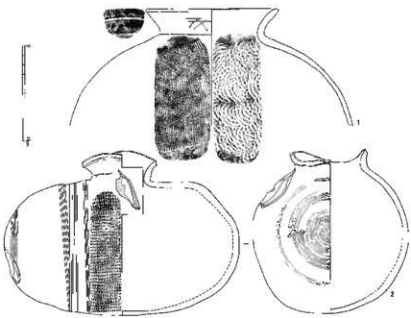


第60図　9号a横穴墓玄室内石床実測図（S＝1/50）

遺物出土状況について

前庭部の埋土中および床面からは多くの遺物が出土している（第59図、第61図から第63図まで）。床面から出土したのは61-1須恵器甕と62-6須恵器坏蓋、63-1～4鉄鏃（長頸鏃）がある。その他の遺物は、床面から20cm近く上から出土している。61-1須恵器甕は口縁部と肩部が割れ残り、口縁を下にして逆さまに出土した。63-1～4鉄鏃（長頸鏃）は前庭部左壁奥隅の床面から錆着した状態で出土した。床面から20cm上、ほぼ検出レベルを同じくして出土した須恵器群がある。61-2横瓶、62-13長頸瓶、62-15長頸瓶などである。61-2横瓶はほぼ正位で立ててあり、体部の筒状を南北に向け、9号ｂ横穴墓床道の真正面に据えられていた。62-13は9号ａ横穴墓、9号ｂ横穴墓の中間「前庭の奥壁」に口縁を向け、倒れた状態で出土している。62-15長頸瓶は口頸部の上半から口縁をを欠いており、3個以上の人頭大の自然石とともに前庭部先端の方に傾いて出土した。これら一群の須恵器のさらに上方層から62-9須恵器坏および62-10土師器坏C（全面丹塗り）、62-11搬入畿内系土師器坏Aなどが出土した。

玄門からも須恵器が出土している。閉塞石裏、玄門中間地点から62-14長頸瓶が出土した。これは玄室の落盤陥没した土砂が玄門に押し寄せて埋没したものと思われる。若干閉塞石側に傾いていた。玄門床面からは62-4に挙げた坏蓋も出土している。



第61図　9号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1/6）

玄室ではいずれも床面から4点の遺物が出土している。中央の開口軸に沿う溝の周囲、玄室のほぼ中央から62-1須恵器蓋、62-12鎌が出土した。左壁に沿う石床のうち、奥壁側石材の下から63-5刀子が出土した。

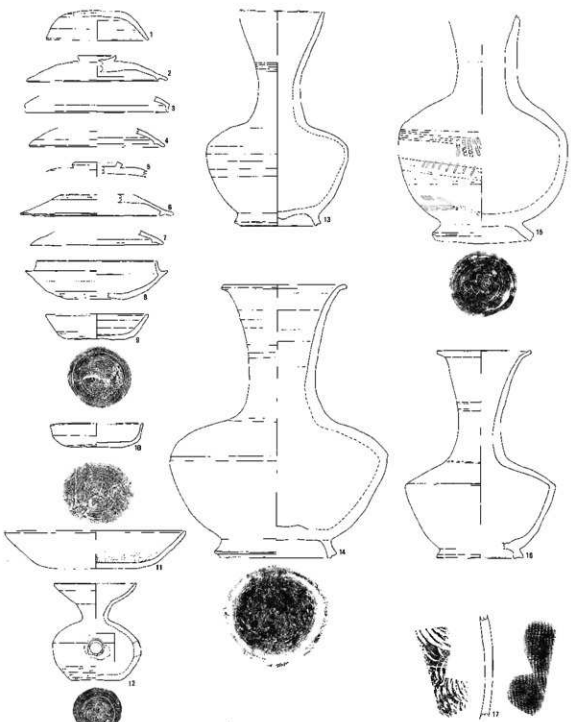
また、右壁沿いの石床の下からは須恵器甕の破片が出土した。

遺物について

前庭部床面から肩部までのみが倒立して出土した61-1須恵器甕は口径19.4cm、残存器高18.6cm、現況最大胴部径は約45cmを測る。口頸部は低く、口縁はやや外反し、断面は「く」の字を呈する。口縁は内外面とも顕著な段差・稜なく1条の沈線が巡る。この沈線に掛けて「×」印ヘラ記号が施されている。体部肩外面の残存する全面に灰釉が懸かり灰緑色に発色している。

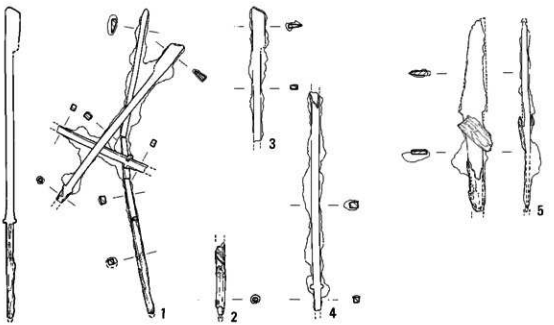
前庭部左奥隅床面から、第63図に挙げた、錆着したものを含む6点の長頸鏃が出土した。1は3本分が錆着している。3本のうち、最も長いものは全長約16.6cmと復元できる。刃部のある2本はともに片刃で、断面形は平片刃造と思われる。刃関部については不明である。頸部はいずれも直線状である。関部については、刃の残る2本はともに棘状関、刃を欠くものは棘状関があるいは円形輪関の可能性がある。茎部については3本とも断面形状は方形で樹皮様の木質が依存する。2は端部に極近い茎部のみ遺存する。残存長は4.0cmを測る。断面方形の茎部に繊維質を左上がりに密に巻き上げた上を樹皮用の木質で覆っている。木質を含んだ幅約6mm、厚さ4mmを測る。3は茎部の半ばから下を欠く。残存長は7.2cmを測る。鏃身部は片刃で断面形は半片刃造りである。関部は錆で判然としない。茎部の断面形状は方形で幅4mm、厚さ2mmを測る。4は鏃身部と茎部端を欠く。頸部は断面方形で直線状に造る。幅4mm、厚さ3mmを測る。関部は端を丸く納める棘状関である。茎部は幅厚さともに3mmの方形を呈する。木質等の遺存は見られない。[注1]

前庭部から出土した須恵器群のうち61-2横瓶は口頸部基部に坏身立ち上がりの破片その他が溶着しており、そのため本体も歪んでいる。砲弾状部分にも同様な状況が見られる。9号横穴墓ではこれらの長頸瓶を含め形式がそれぞれ異なる長頸瓶が4種出土している。いずれも高台が付く。13は体部肩は若干の丸みを持つ。口頸部は長頸化して、基部は細い。口頸部中位には沈線が2条巡る。口縁部はやや内湾している。高台は低く踏ん張り、内面端で接地し、その外底には沈線が巡る。出雲6～7期の様相を示すと思われる。15の長頸瓶の口頸部は直口に近い形と想像されるが、中位に施された沈線の痕跡をわずかに残して、その上半を欠いている。器壁は厚く成形にやや難ありといえよう。体部はかなり球形に近い雰囲気を残している。外面にはタタキ目が残り、カキ目が



第62図　9号a横穴墓出土遺物実測図1（S＝1/4）

螺旋状に巡る。高台は高く踏ん張り、内面端で接地する。外底は沈線状に溝が付く。出雲6期の様相を示すと思われる。16長頸瓶の口縁は器壁が薄く、大きく外に開く。11頸部は細く長頸化し、中位に沈線2条を巡らす。口頸基部接合部と肩部屈折部上端に沈線が巡り、外端に稜が付く。回転ナデで肩部も体部下半も鋭角に器影を造る。高台は低くやや踏ん張るが、ほぼ外底で接地する。外底には沈線が1条巡る。出雲7期以降の様相を示すと思われる。閉塞に閉ざされた玄門の羨土中から出土し



第63図　9号a横穴墓出土遺物実測図2（S=1/2）

た62-14の須恵器長頸瓶は口径12.4cm、器高29cm、肩部径23.2cm、高台径13cm、高台高さ1.8cmを測る大型である。口縁は厚みは厚いが16と同様に外反する。口頸部は太いが長頸化している。中位に沈線2条巡る。口頸部基部接合部外面に沈線1条巡る。肩部はやや丸みを持ち、体部接合部外面の屈折はやや不明瞭ながら稜を持つ。下半部は相対的に短く若干の膨らみを持つ。底部外面には中心部に回転ヘラ切り痕をわずかに残す。高台はやや高く内面端で接地する。外底には沈線が巡る。頸部と体部に露胎面があるが外面の広い範囲に灰が懸かり灰緑色に発色している。62-13と62-16の中間的な形式を示すと思われる。

玄室床面から出土した4点の遺物のうち、62-1は須恵器蓋と思われる。内面に一文字ヘラ記号が施されていた。同じく62-12題は器高が低く頸部が矯小化したものであるが、体部は丸みを持っている。調整痕のほかは沈線、波状文、刺突文などの文様は一切見られない。底部外面は静止糸切り痕を中心部に残し、周辺部に回転ヘラケズリを施して底部調整している。出雲8期の様相を示しており、これをもって9号ａ横穴墓の最終的な閉塞の時期と考える。玄室左壁右床下から出土した63-5刀子は残存長10.1cm、刀身長5cm、茎部長5.1cmを測り、刀身長と茎部長がほぼ1:1の比率となる。棟線は復元するとほぼ一直線になる。研ぎ減りが著しく、元幅（残存値）1.3cmに対して、先幅は8mmである。刃関の形状は不明。茎部は中細茎で口幅1cm、尻幅5mm、厚さ2mmを測る栗尻。断面は扁平な方形で木質が遺存する。目釘穴は確認できなかった[註2]。

註1註2長頸瓶と木質柄刀子については調査補助員露梨靖子の観察・レポートによる。

参考文献

杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集第8集』橿原考古学研究所1988

『中垣内天神山・三昧山古墳群』龍野市文化財調査報告19龍野市教育委員会1998

三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書き」山本清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』1986

池淵俊一「鉄製武器に関する一考察」古代文化研究No1島根県古代文化センター1993

10号横穴墓について

10号横穴墓からは、今年度調査横穴墓中最も多種多様な多くの遺物が出土した。玄室出土大刀や鹿角装刀子、玄室や墓道の一括出土須恵器資料などである。これらの遺物からも、羨道を持たない横穴墓の構造からもその築造が群中にあって早い時期のことであったことが窺われる。また、その窄たれた位置も高く、周囲の横穴墓はその築造に当たって10号横穴墓に影響を与えないように注意しているようにも見受けられる。墓道の遺物の質、量と、このような周囲の状況から、被葬者達の群中における相対的な地位の高さが窺われる。墓道の縦断土層断面には丘陵斜面に沿う土層の流れに対して逆の玄門閉塞石に向かって斜行する攪乱層があった。墓道の開塞は荒島石切石を使用しているが、人頭大の自然石を敷き込んでいる。玄室には左袖に棺台石と思われる整然と配置された人頭大の自然石とその周りから20本足らずの釘が出土した。また、右袖からは被葬者の遺残骨が片隅に集骨状に出土した。これらの状況は追葬を行った痕跡と見られる。なお、遺残骨については9号ａ横穴墓、9号ｃ横穴墓同様、本書所収井上博士の観察と所見をいただいた。

玄室、玄門の「上屋」は脆弱な砂岩の岩盤が落盤して埋没していた。そのため、現地表は9号各横穴墓埋没部とともに段状地形を成し、後の加工段2の造成を誘発した可能性がある。

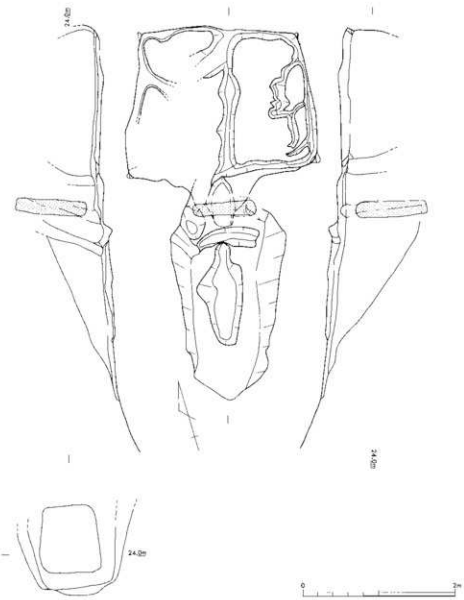
横穴墓の位置について

10号横穴墓は東隣は11号ａ・ｂ横穴墓、西側は9号各横穴墓に挟まれている。この中では10号横穴墓の築造が最も早い。縦の位置で見ると10号横穴墓は加工段2五輪塔基壇の東端下に位置している。10号横穴墓前庭部は9号各横穴墓前庭部よりも60cm高く、11号ａ横穴墓前庭部よりも1.8m高い標高23.4m付近から掘り進められている。その玄室床面は23.3mを測り、8号横穴墓を押さえて今年度調査横穴墓中最高位置に穿たれている。10号横穴墓の開口軸はS-17°-Wでほぼ南南西に開口している。12号ａ横穴墓と軸方位を同じくしている。11号ａ横穴墓とも7号横穴墓ともほぼ同方向を指向しているとみられる。

横穴墓の規模と構造について

10号横穴墓は羨道を持っておらず、墓道、玄門、玄室からなる旧来型の構造である。墓道は標高23.4m付近から掘り進められ、幅92cm、現存延長2.22mを測り玄門に至る。墓道床面には開口軸に沿い、中心に、深さ10cm、長さ1.33mの溝状の掘り込みが検出された。この溝は10号横穴墓築造当時のものとみられるが、墓道最奥部床面にある、閉塞石の切石に平行する刳込みに垂直に当たって終わる。その刳込みは幅27cm、長さ82cm、深さ12cmを測り、中心部は断面「V」字状に深く刻み込まれている。検出した閉塞石の位置とは合致していない。玄門は幅64cm、奥行き72cmを経て玄室に至る。玄門の「上屋」上半は玄室と同様に落盤埋没していた。玄門の右側壁は追葬に伴ったものか、閉塞のやり直し、部材の変更などで改変を余儀なくされたのか開削されており、左壁とは不均衡な造りになっている。玄門床面にもやはり中心部縦軸に刳込みが検出された。幅最大36cm、長さ68cm、深さ8cmを測る。また、切石の閉塞下両端にもピット状の刳込みがある。これらの溝ないしピットは、切石の閉塞に敷かれている人頭大から幼児大の自然石の位置と合致しており、これらを固定するために掘られたものと考えられる。

玄室は「上屋」が落盤して上半の姿は失われており、岩盤上砂が堆積していた。検出した床面は標高23.6mを測り、今年度調査横穴墓中8号横穴墓玄室を押さえて最高位置にある。幅2.38m、奥行き2.02mを測り、左右奥とも若干の膨らみがある。床面積においては、今年度調査横穴墓中8号横穴墓



第64図　10号横穴墓遺構実測図（S=1/50）

よりも広く、6号b横穴墓よりも狭い第4位に位置づけられるものと思われる。

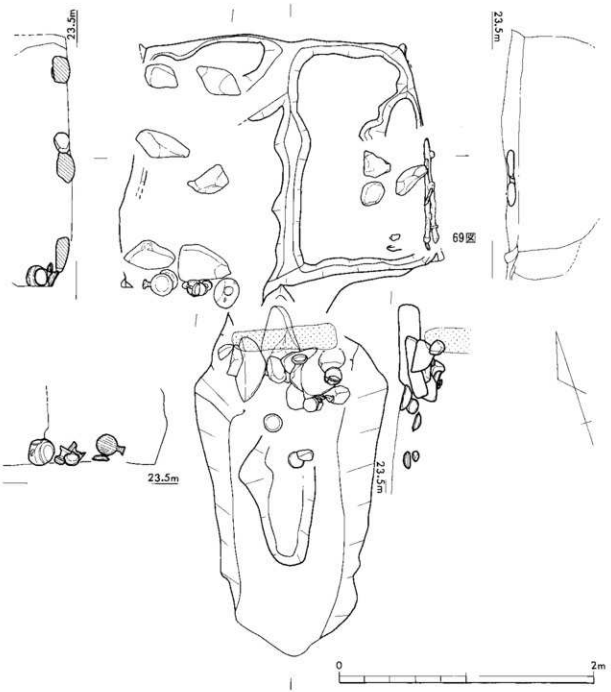
埋葬施設について

玄室床面中央には開口軸に沿う幅15～30cm、深さ最深8cmを測る溝とこれに接続する右袖を巡る周溝により屍床を造り出している。中央の溝によって左袖にも屍床ができるが、右袖には前壁下に周溝の一部として明確な溝があるため、屍床がより一層浮き彫りにされている。左袖には人頭大の自然石6個を整然と配置し、石の平坦面を上に向けてその上に木棺を置いた形跡がある。これらの石材は初葬時に玄門の閉塞に使用されたものを転用した可能性も考えられる。

閉塞施設について

10号横穴墓の構造は旧来型で後述するように出土する須恵器蓋坏も出雲4期の様相を示し、7号横穴墓玄室出土須恵器蓋坏に次いで古い様相を示している。7号横穴墓にその痕跡がみられたように、人頭大から幼児大の自然石による石積みで閉塞していた可能性があると思われる。閉塞石に敷かれた自然石は、その名残か転用された姿ではないだろうか。この自然石と埋土に混じって、須恵器蓋坏3客と蓋のみ2点計8点が出土している（第65図、巻末写真図版55上）。これらは供伴する周囲の石の一部同様、原位置を保っているものではなく、追葬に伴う閉塞の改装に伴って散らされた可能性が高いと思われる。ちなみに、蓋のみ2点に対となる須恵器坏は玄室から出土している。

最終的な閉塞に使われているこの切石はいわゆる荒島石（浮石凝灰岩）と思われる。切石の大きさは幅74～84cm、長さ94cm、厚さ10cmを測り、閉塞の天地でみれば下膨れの形状を呈する。この閉



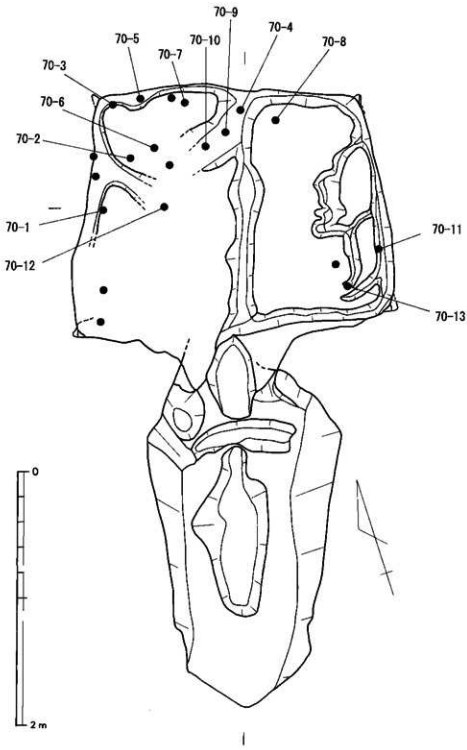
第65図　10号横穴墓遺物出土状況実測図1（S＝1/30）

塞石は6号ｂ横穴墓に使用されている切石に次いで今年度調査横穴墓中2番目の大きさといえる。

遺物等出土状況について

墓道からは前項で述べたように須恵器蓋坏が出土した。玄門では、閉塞石以外には顕著な遺物は出土しなかった。

玄室左袖の棺台石の周辺からは、木質の付着した釘12点と長茎鏃2点、鋳着した2個体分の刀子1点が出土した（第66図、第70図）。また、棺台石の上に棺を安置したとみられる左袖前壁下には、第68図に挙げた一群の須恵器が出土した。玄門に近い方から口頸部を欠いた提瓶・甕・坏身・高坏・坏



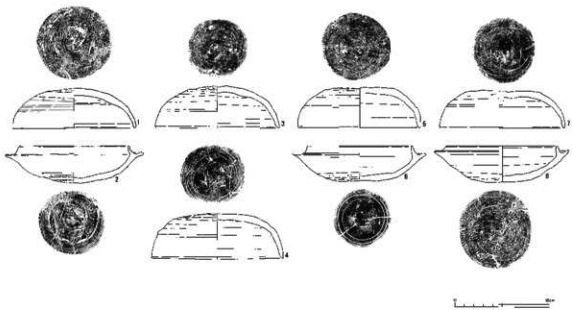
第66図　10号横穴墓遺物出土状況実測図2（S=1/30）

身・フラスコ形長頸瓶の7点が第65図に示したように出土した。片隅に寄せ集められたように見受けられる。

右袖の屍床上では、まず、上層から70-11鹿角装刀子、70-13鵐抉三角形鏃が出土した。その下から遺残骨が、幼児の人頭大自然石3個を集めた上に集骨状に出土した。さらに、この自然石のうちの1個に敷かれて、右壁下右袖周溝にはまり込んだ2振の錆着した大刀が出土した。このような右袖屍床上の遺物出土状況は追葬が行われたことによって生じたことと考えられる。①大刀を寄せる→②石を配置する→③遺残骨を集め集石の上に置く→④鹿角装刀子や鏃を集め寄せるといった一連の作業が推測される。これは新たな被葬者を板材に釘を打って組み立てた棺に納めて右袖に葬ったときに、安置空間と作業空間を確保するために一時に行われた可能性が高いと考える。

遺物について

墓道からは須恵器蓋坏3客と坏蓋2点計8点が出土している（第67図）。67-1蓋は口径12.7cmを測る。天井部にヘラ切りの痕跡を残し、その周囲から、隙間のある、粗雑で単位の狭い回転ヘラケズリを

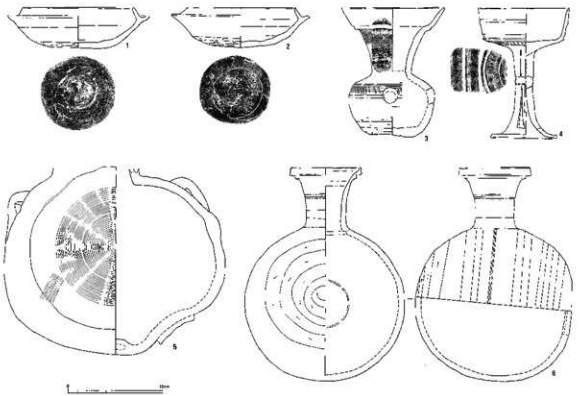


第67図　10号横穴墓閉塞部・墓道出土須恵器実測図（S=1/4）

肩部まで施す。肩部には2本の沈線を巡らせ、回転ナデでその間を突帯状に作る。口縁は薄く、端部は丸く納める。その内面上部に沈線を1条巡らす。67-3蓋は口径12.8cmを測る。ヘラ切りの跡が残るが、天頂部から丁寧な回転ヘラケズリが5周まで残る。その下は沈線を1条巡らせ、強い回転ナデが施され肩部に至る。肩部には2条の沈線を巡らせ、回転ナデを施してその間を突帯状に作る。口縁は厚く、端部は丸く納める。その内面上部には沈線を1条巡らす。67-4蓋は口径13.8cmを測り、10号横穴墓出土須恵器蓋の中では最大値を示す。天頂部にヘラ切りの痕跡を残し、若干粗雑ながら、単位の大きいヘラケズリを天井部から肩部まで隙間なく密に施している。肩部には2条の沈線を巡らせ、回転ナデを施してその間を突帯状に作る。口縁の厚みはほぼ均一で、端部は丸く納める。67-5蓋は口径12.6cmを測る。ケズリ幅が細く均一で非常に丁寧な回転ヘラケズリを、天頂部から肩部まで施す。肩部には2条の沈線を巡らせ、回転ナデを施してその間を突帯状に作る。口縁部の厚みは均一で端部は丸く納める。67-7蓋は口径13.2cmを測る。天頂部にヘラ切りの痕跡を残し、若干粗雑ながら、単位の大きいヘラケズリを天井部から肩部まで隙間なく密に施している。肩部は沈線1条を巡らせて、その上の部分を回転ナデして突帯状に作っている。口縁は薄く作り、端部は丸く納める。これらの蓋坏は出雲4期の様相を示していると思われる。

10号横穴墓玄室内左袖前壁下床面から一括出土した須恵器群（第68図）の中で、68-1、2の2個の坏身は、墓道埋土中から出土した3個の坏身（67-2、6、8）や5個の坏蓋とともに5客の蓋坏を構成すると思われる。これら5個の坏身のうち、67-6坏身のみ底部外面に中心から幅が均一で狭いが丁寧で密な回転ヘラケズリが施されている。ほかの坏身は底部外面中心にヘラ切りの痕跡をナデ、その周囲から粗雑なヘラケズリを施している。立ち上がりはあまり上方に屈曲せず、比較的真っ直ぐ斜め上方に伸びる。端部は皆丸く納める。

68-3蓋は口縁最下部に沈線1条を巡らし下端に突帯状の鋭い段を作っている。その段に下から食い込むように頸部上段に波状文を施している。頸部には中段に沈線1条を巡らす。頸部基部は口径径や体部径に対して細くしまっている。頸部長もあまり長くない。体部肩には沈線2条を巡らせ、その沈



第68図　10号横穴墓玄室内出土須恵器実測図（S=1/4）

線間にカキ目調整を施した上に、斜めに傾いた刺突文を施している。底部近くは回転ヘラケズリを施している。底部は平底状を呈しており、外面がへこむほどヘラ切りの痕跡をナデ消している。

68-4長脚無蓋高坏は器高13.9cmを測り、68-3蓋とほぼ同じ器高である。坏部は平底で体部は直立する。脚は非常に細身で接地面近くまで筒状を呈する。坏部体部中位に2本の沈線を巡らしその間を突帯状に作る。同下端屈折部にも同様に施文し、坏部底部外面には刺突文を巡らす。その内側にさらに沈線1条巡らして刺突文の区画とする。筒状の長脚は2段3方透かしであるが、上段の透かしは切れ目のみとなっている。中位には上方透かしの下と下方の透かしの上に接して2条の沈線を巡らす。下方の透かしは上端が切れ込み状になっている。下方透かしの下に接して1条の不明瞭な沈線を巡らす。脚底部は径6.8cmと非常に小さい円盤状を呈する。脚端部は明瞭な面を持つ。

68-5は口頸部を欠いた提瓶である。底部は焼け歪んで正立しない。窯内で同時焼成していた器物もしくは窯道具に転用されていた器物の一部が溶着している。肩に、空間のある実用的な把手が付いている。

68-6フラスコ形長頸瓶は多くの部分が露胎して淡灰色を呈する。口縁内部や外面の一部に灰釉が懸かり灰緑色のガラス化した光沢部分がある。底部の一部にある露胎していない部分は青灰色を呈する。口頸部は内外とも回転ナデ。口縁は二重口縁状に上下に鋭くつまみ出して仕上げ、その下にも鋭く明瞭な凸帯を作り出しており特徴的である。頸部は体部に比べて細いがあまり長くない。中位には2条の明瞭な沈線を巡らす。体部の被蓋部でない胴腹部は中心から回転ヘラケズリ、その周囲は回転ナデを施す。体部には頸部径の中心線の延長上に沈線を1周巡らす。底部にはこの沈線に直行するように約8cmの一文字ヘラ記号が施されている。このフラスコ形長頸瓶は猿投窯産の可能性が高い

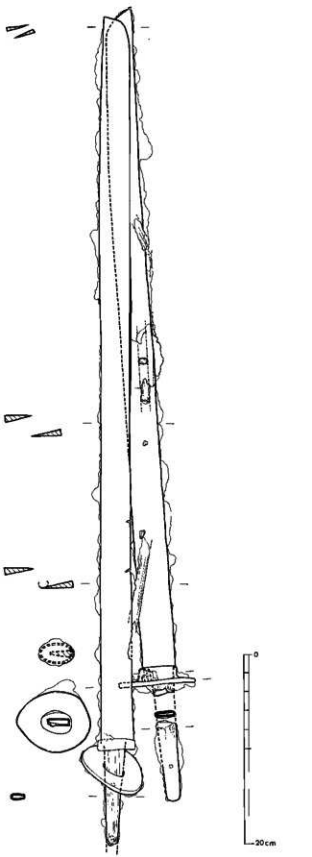
搬入品と見られる。[注1]

10号横穴墓玄室内右袖右壁直下、玄門側隅の屍床周溝から2振の互いに錆着した大刀が出土した。この大刀は、寄せ集めた人骨を置いた集石の一つに敷かれており、切先を揃え、互いの棟線と刃線とをつき合わせた状態で出土した。また、大刀にまとわりついていた錆膨れ部分に細い円筒形の空洞痕跡が見られ、これは大刀とともに竹柄の矢が置かれていたことを示すものと考えられる。この空洞痕跡は7ヶ所観察でき、矢は少なくとも5本あったものと推察される。

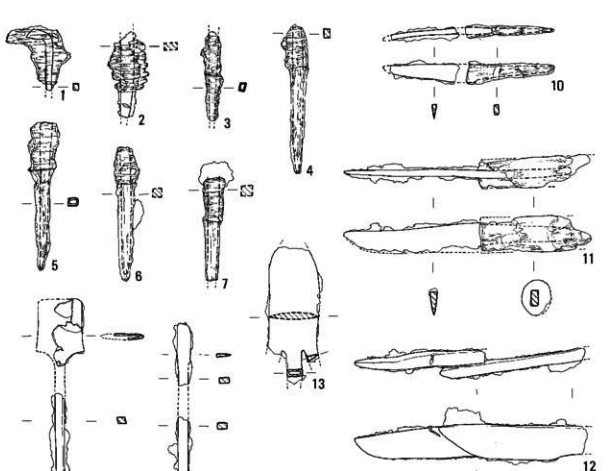
第69図中の平面図部分左側に図示した大刀は残存長89.0cm、刃長77.8cmを測るフクラ切先の平棟造りである。両関を有する。茎は中細で茎尻を欠いている。口幅2.2cm、残存長11.2cmを測る。目釘穴は2ヶ所ある。柄については木質が錆着するのみで形状は留めていない。幅1.1cmの鎺と刀身の間には木質が残存している。

第69図中の平面図部分右側に図示した大刀は、茎の一部を欠いているが、復元すると84cm前後になるものと推察する。刃長は切先を欠いた残存部分が69.9cmを測る。切先はフクラ枯の平棟造りである。両関を有する。茎は一文字尻、中細で、口幅2.5cm、尻幅1.4cmを測る。茎の長さは復元すれば14cm前後に及ぶものと推察する。目釘穴は2ヶ所ある。柄の木質が錆着している。幅1.5cmを測る鎺の周囲と刀身の間に木質が残存する。2振とも鐔を有するが無文と見られる。[注2]

第70図に図化した遺物群のうち11鹿角装刀子と13鵐抉三角形鏃は10号横穴墓玄室内右袖出土大刀の上層、集石上の人骨周辺から出土している。11鹿角装刀子は鹿角製の柄を含む残存長が13.0cmを測る。柄頭は欠損している。刀身部の長さは7.0cmを測り、茎部長は5cm前後と推定される。棟線は湾曲する匂反り状を呈し、棟関を有する。刃関の形態は角関である。刀身部元幅の残存値1.4cmを測る。茎部は口幅1.1cm、尻幅6mmを測り、形状は中細茎で三宅分類Ⅱ-B3に分類されると



第69図　10号横穴墓
玄室内出土大刀実測図（S=1/4）



第70図　10号横穴墓玄室内出土遺物実測図（S＝1/2）

思われる。柄部形態は柄頭が柄元とも同径で棒状を呈する[注3]Ⅲ類に分類できる。

70-13は外反する逆刺を持つ腸挟三角形鏃である。刃部の頂部を欠いている。鏃身残存長は6.15cmを測る。刃部の断面は厚さ4mmの扁平な両丸造りである。頸部は幅8mm、厚さ4mmを測る長方形の断面を持つ[注4]。

10号横穴墓玄室内左袖の棺台石の周辺からは、木質の付着した釘12点と長茎鏃2点、銹着した2個体分の刀子1点が出土した。釘12点のうち、かろうじて図化し得たのは、第70図で図示した70-1～7までである。このうち完形で確保できたものは70-4～6の3点であった。ほかに、70-1は頭部を留めている。これらを頭部の形状について見ると、70-1は頭部を折り曲げるタイプである。また、完形3点70-4～6の頭部は胴部とほぼ同じ幅で単純に納めるタイプである。ただし、70-5は、幅は同じでも厚さ2mmと若干圧延されている。また、全12点の断面形を見ると、皆長方形ないしはそれに近い方形を呈している。つぎに、大きさで分類すると、厚さ3mm程度、長さ6cm程度の小型のもの（70-1・3）と厚さ4mm程度、長さ6～8cmの細身（70-2・4～7）に分けられる。これらの特徴から、鉄釘の急激

な小型化が進んだとされる6世紀末から7世紀初頭に位置づけられるものとみられる。

鉄釘に付着した木質に着目すると、木目が上半部に横方向、下半部に縦方向で遺存するもの（70-4～7）と、上半部下半部ともに横方向で互いに直交するもの（70-3）とがある。また、70-4・5は実測図で表現されている面の側面から観察すると、ド半部の縦目が体部に対して斜交していることから棺材に斜めに打ち込まれていることがわかる。なお、70-4～6完形品に付着した木質の観察から棺材の厚さは2～2.5cmと推定される[註5]。

第70図10は接合が不可能となってしまっているが、復元すれば同一個体の一部となるであろう2片からなる刀子である。左に図示している部分が切先を欠いた刀身部、右側に図示した部分が破片全体を木質に覆われた刀身部と茎部である。全長は不明だが、元幅・先幅からすると10cm以内に納まる小形の刀子である。一直線の棟線を持ち、棟関は持たず、そのまま茎尻までつながる。刀身部元幅1cm、撫関を経て茎部口幅8mm、尻幅3mm、を測る中細茎である。茎部断面は扁平な長方形を呈する。茎尻は隅切尻かと思われる。厚さは刀身部・茎部ともに2.5mmを測り、薄い造りである。柄とみられる木質は刀身部にまでかかっている。目釘穴は確認できなかった。供伴遺物が須恵器であることから、棟関はないが三宅分類Ⅱ-A群に分類されると思われる[註6]。

第70図12は別個体の刀子2点分が錆着して出土したものである。実測図右に図示した方をａ左をｂとする。ａは茎尻を欠く、残存長7.8cmの小型のものである。刀身部長6.6cm、元幅1.8cmを測る。棟線は一直線で棟関はない。三宅分類中小型で太身のⅡ-B群に属する。撫関から断面形状が逆台形の茎部へと続く。ｂは刀身部のみ残存している。残存長6.9cm、元幅1.8cmを測る。棟線は刃側へ湾曲する鉤反り状を呈する。棟関部分・刃関部分はともに欠損している。三宅分類Ⅱ-E３に属すると思われる。この2点は錆着の様子から棟線と刃線を揃えて副葬された可能性が考えられる。

註1京都国立博物館学芸課小野善裕氏のご教示による。ほかに参考文献以下

尾野善裕『東海』『古代の土器研究』-律令的土器様式の西・東5　7世紀の土器-古代の土器研究会1977

尾野善裕「尾張・三ノ河（編跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器』5-1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）古代の土器研究会1977

尾野善裕「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『土器・墓が語る秀吉の独自性～弥生から古墳へ～』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会1998

尾野善裕「古墳時代須恵窯編年の再検討」『古墳時代の須恵窯と湖西窯』-分類・編年・西暦年代の再検討-第4回三河考古合同研究会資料1999

尾野善弘氏からは、このフラスコ形長頸瓶の年代についても懇切にご教示賜ったが、筆者自身の認識不足もあり、生かし切れなかった。筆者が誤解していなければ、この長頸瓶はＴＫ43並行期の次に位置づけられる型式に含まれると思われるので、そうであれば、相対編年上10号横穴墓玄室からともに出土した須恵器群と全く違和感はないものと考える。

註2第69図10号横穴墓玄室出土大刀については調査補助員露梨靖子の実測・観察・レポートによる。参考文献以下

白井　熊「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号古墳文化研究会1984

池淵俊一「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』No1島根県古代文化センター1993

石井昌國・佐々木稔著古代学叢書39『古代刀と鉄の科学』雄山閣出版1995

『上塩冶築山古墳の研究』-島根県古代文化センター調査研究報告書4-島根県古代文化センター1999

註3第70図11鹿角装刀子については調査補助員露梨靖子の実測・観察・レポートによる。参考文献以下

三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書き」山本　清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』1986

池淵俊一「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』No1島根県古代文化センター1993

註4第70図13鏃扶三角形鏃については調査補助員露梨靖子の実測・観察・レポートによる。参考文献以下

杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集橿原考古学研究所編吉川弘文館1988

註5第70図1～7鉄釘については調査補助員露梨靖子の実測・観察・レポートによる。参考文献以下

田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻2号（通巻98号）考古学研究会1978

『滋賀県文化財調査報告書』第4冊滋賀県教育委員会1969

「岩田古墳群他野山第2・5号墳・三蔵畑遺跡」岡山県山陽町教育委員会1976

「龍王山古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第68冊奈良県橿原考古学研究所1993

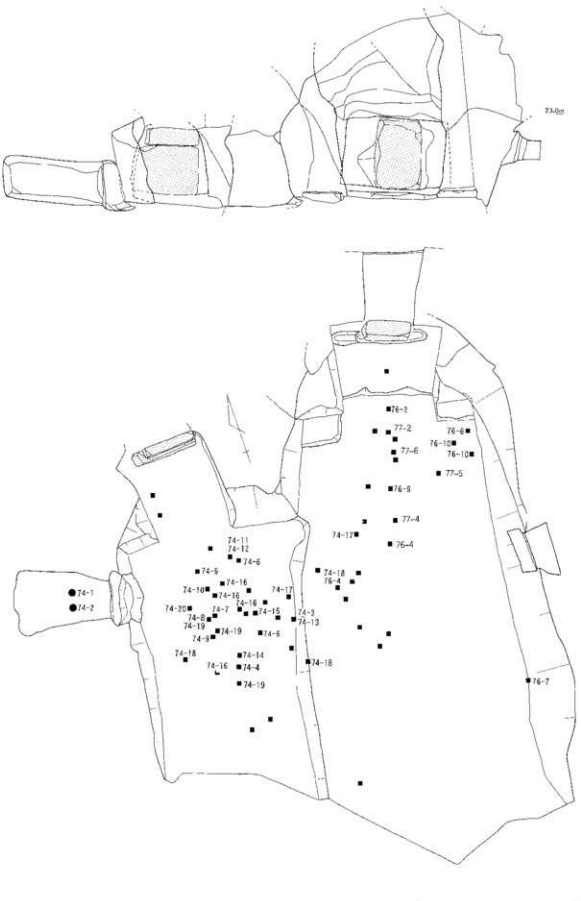
「寺山下塚古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第62冊奈良県橿原考古学研究所1991

「高田垣内古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第63冊奈良県橿原考古学研究所1991

「大淀町大岩古墳群」奈良県文化財調査報告書第57集奈良県橿原考古学研究所1987

『高取町与楽古墳群』（本文編）奈良県文化財調査報告書第56集奈良県橿原考古学研究所1987

註6註7第70図10、12刀子については調査補助員露梨靖子の実測・観察・レポートによる。参考文献は註3に同じ。



第71図　11号及び12号各横穴墓遺構実測図（S＝1/50）

11号各横穴墓について

11号ａ横穴墓はその前庭部を12号ａ横穴墓と共有している可能性がある。完掘後の双方の前庭部床面には約10cmを測る段差があるが、双方の前庭部床面近くから出土した須恵器の中には接合資料もあり、少なくとも築造以後の墓前祭祀において共有意識があったものと考えられる。

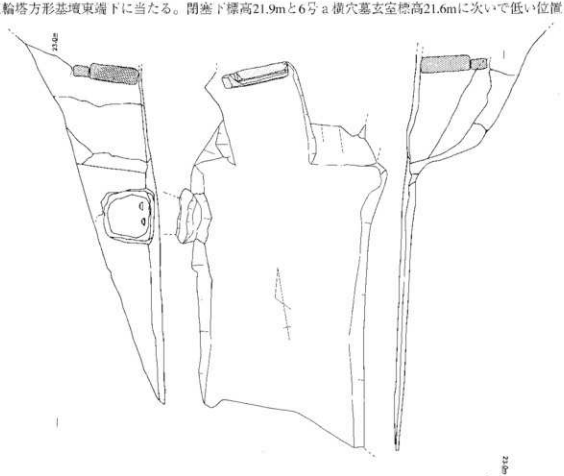
また、前庭部左（西）壁には小横穴が穿たれており11号ｂ横穴墓とした。この小横穴墓はほぼ完全な形を留めていた。すでに触れた9号ｃ横穴墓、次項で触れることになる12号ｂ横穴墓よりも規模が大きくより横穴墓の体裁を整えている。

出土遺物の中には畿内系土師器の模倣と見られる丹塗り土師器の坏・皿が出土している。搬入品の畿内系土師器皿のみ出土した6号ｂ横穴墓前庭部、畿内系土師器坏Ａと模倣品たる丹塗り土師器坏Ｃが出土した9号各横穴墓前庭部などとの関連が注目される。

なお、玄室部分については、すでに羨道・閉塞部分も含めて落盤埋没しており、人手による掘削は非常に危険を伴うこと、用地境界に近い急傾斜地のため、8号横穴墓玄室・9号ａ横穴墓玄室のような地形の大幅な改変を伴う掘削ができないと判断したこと、大半の壁面が剥離しているものの、その空間をかろうじて保っている12号ａ横穴墓玄室に、さらに損失を与える可能性が高いと判断したことなどから、発掘しなかった。

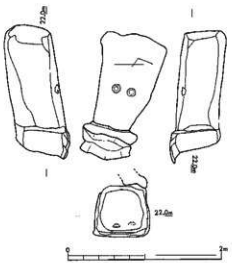
横穴墓の位置について

11号ａ横穴墓は、東は12号ａ横穴墓、西は10号横穴墓に挟まれている。縦の位置で見ると加工段2五輪塔方形基壇東端下に当たる。閉塞下標高21.9mと6号ａ横穴墓玄室標高21.6mに次いで低い位置に



第72図　11号a横穴墓遺構実測図（S=1/50）

ある。11号ａ横穴墓がこの位置に穿たれた経緯について想像すると、以下のようなことが考えられる。11号ａ横穴墓前庭部は12号ａ横穴墓の前庭部を見かけ状は切っているようである。後述するが、11号ａ・ｂ横穴墓、12号ａ横穴墓双方の遺構に伴う遺物は、出雲6期から始まっているようで、顕著な時期差は認められない。11号ａ横穴墓造営を迫られた人々が横穴墓築造空間を求めて、近い過去に築造された12号ａ横穴墓と、それ以前に築造されていた10号横穴墓との間に11号ａ横穴墓を築造し、あまり間をおかずに前庭部左壁に11号ｂ横穴墓を穿つことになったものと考えられる。



第73図　11号b横穴墓遺構実測図（S=1/50）

横穴墓の規模と構造について

11号ａ横穴墓は羨道を持つ意字型の構造である。開口方向はS-2°-Eで南を向いている。前庭部は12号ａ横穴墓前庭部と軸方向を揃えているが、羨道・玄門・玄室は12号ａ横穴墓玄室を保護するためか10号横穴墓方向に曲げるように造られている様子が窺える。前庭部は標高21.6mから床面地山が始まり徐々に登り勾配が付く。幅2.32m、奥行き3.08mを測り羨道に至る。羨道は閉塞石下で標高21.9mを測り、前庭部先端よりも30cm、前庭部奥詰めよりも5～10cm高くなっている。羨道の幅は1.02m、奥行き1.42mを測る。高さは1.15m程度であったと推定される。横断面は方形に造る。11号ａ横穴墓は2種類の石材を上下に組み合わせて閉塞している。下には、ほかの横穴墓と同様に高さ63cm、幅82cm、厚さ20cmの板状に加工された荒島石の切石を用い、その上には高さの不足を補うように、高さ22cm、幅68cm、奥行き14cmの角柱状に加工された荒島石の切石を組み合わせて閉塞している。玄門、玄室は調査できなかった。

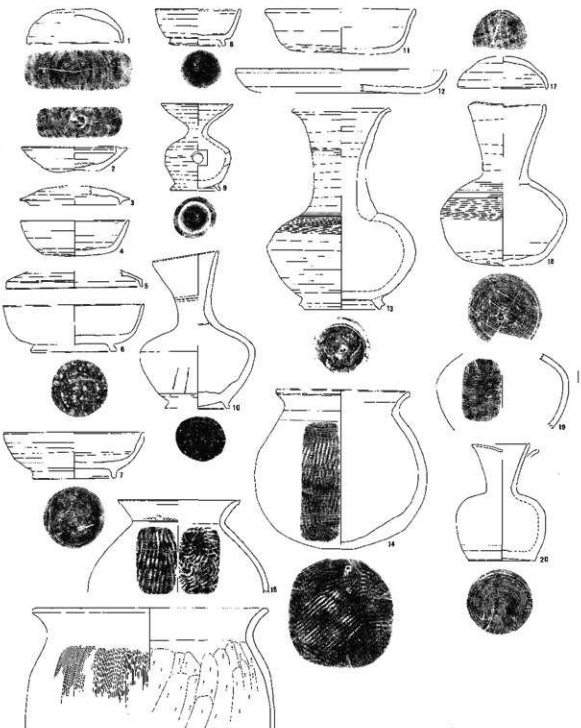
11号ｂ横穴墓について

11号ｂ横穴墓は11号ａ横穴墓前庭部左側壁に穿たれた小横穴墓である。11号ａ横穴墓前庭部奥詰めから30cm離れた位置から掘り込まれている。奥壁は10号横穴墓前庭部の検出部分先端から1.5mの距離に達する。南向きの11号ａ横穴墓前庭部左（西）側壁に掘り込まれているため、必然的に、開口方向はS-72°-Eを測り、ほぼ東を向いている。玄門と玄室を造るのみである。玄門先端は標高21.8mから検出され、玄室奥壁下は標高21.92mを測る。玄室内は奥に向けて登り勾配で排水を企図した設計かと思われる。今年度調査横穴墓中において、6号ｂ横穴墓とともに、玄室の姿をほぼ完全に残していた数少ない例であった。

玄門の幅は玄室の幅より一回り広く造り、上両端は角を立て、下両端は下膨れ状に丸く造る。幅60～74cm、奥行き40cm、高さ68cmを測る。玄門の最前床面には刳込みがあるが、閉塞に使われた形跡のある石材等は出土していない。検出時には11号ａ横穴墓前庭部埋土が11号ｂ横穴墓玄門を覆い、11号ｂ横穴墓玄室にも奥壁上部に若干の空洞を残して土砂が流入していた。板材等を使用して閉塞していた可能性がある。

玄室はアーチ形を呈し、幅は玄門側が50cm、奥壁が88cmを測り、奥行き1.3m、高さ65cmを測る。玄室の床面積については、今年度調査横穴墓11穴中最小の9号ｃ横穴墓、それよりもやや大きい12号ｂ横穴墓を押さえて第9位となる。

玄室床面ほぼ中央からは、1客をなす須恵器蓋坏の蓋（第74図1）と身（第74図2）が並べて伏せた



第74図　11号a・b横穴墓出土遺物実測図（S＝1/4）

状態で出土した（第73図）。ともに完形であった。74-1須恵器坏蓋は口径9.9cmを測り、天井部にヘラ切り痕を残すがその部分を含めてナデ調整を施しており、ケズリ調整を省略する。口縁も含め全体に器壁は厚く、口縁端部は丸く納める。74-2須恵器坏身は口径8.8cmを測る。外面頂部はヘラ切りの痕跡を残したまま調整していない。その外周から回転ナデを残り全面に施す。ケズリ調整を省略している。立ち上がりは非常に低い。この２点のこれらの諸特徴は須恵器蓋坏の法量が最小化した時期の出雲6期の様相を示すものであり、11号ｂ横穴墓築造時期を表していると考えら

れる。74-1蓋には7.0cm、74-2身には7.2cmにわたって、双方の器内面に一文字ヘラ記号が刻まれている。

11号ａ横穴墓前庭部出土遺物について

11号ａ横穴墓前庭部埋土中及び床面からは第74図3以降に図化した須恵器と土師器が出土した。

74-3は須恵器坏蓋とみられる。かえりの部分が残っており、つまみも付いていたものとみられる。

74-4は須恵器蓋坏の身である。復元口径11.2cm、器高3.9cmを測る。底部外面に残るヘラ切りの痕跡を板状工具と指でナデ消そうとしている。体部は若干の丸みを持って立ち上がり、内外ともに回転ナデをを施して、斜め上方に真っ直ぐ伸び、端部は丸く納める。出雲6期の様相を示す。床面直上から出土した遺物は、この74-4須恵器坏身のみであり、11号ａ横穴墓築造時期を表している可能性がある。

74-5はかえりを持たない須恵器坏蓋である。出雲7期以降の様相を示す。

74-6は須恵器高台坏である。口径14.8cm、器高5.0cm、高台径9.0cmを測る。胎土が非常に多くの細砂を含んでいるのか、ざらついている。高台は低いがよく踏ん張り、内面端部で接地する。高台断面は丸く作り、底部外面は沈線状にはなっていない。高台は底部の立ち上がりからかなり内側に付く。体部は顕著な屈曲を見せて立ち上がり、ほぼ上方に真っ直ぐ伸びる。口縁端部もそのままの角度を保ち丸く納める。底部の器壁が均等に厚いのに対し、体部は均等に薄く、底部体部ともに器壁断面に波がない。出雲6期・7期に並行するものか。

74-7は口径14.8cm、器高4.9cm、高台径8.8cmを測る須恵器高台坏である。高台は低く、ほぼ真下に向って付けられ、底部外面で接地する。高台断面は角丸に作る。器の底部外面は、ヘラ切りの痕跡を消すためか、回転ナデを施す。体部は、高台のやや外側から、若干緩やかに立ち上がり、斜め上方に伸びる。74-5須恵器高台坏との対比でいえば、多くの回転台を利用して成形された須恵器などがそうであるように、器壁断面に波がある。出雲7期の様相を示していると思われる

74-8は口径8.9cm、器高3.9cm、高台径5.9cmを測る小型の高台坏である。高台はやや低いが踏ん張り、内面端部で接地する。高台底部外面は高台三面の面取りを経て沈線状の窪みが巡る。器の底部外面には回転ナデで消そうとした回転糸切り痕が残っている。体部は高台接着部から6mmおいて屈折して立ち上がり、斜め上方に伸びる。口縁外面には沈線を1周巡らす。口縁端部は丸く納める。出雲8期の様相を示すと思われる。これは11号各横穴墓・12号各横穴墓に対する墓前祭祀がこの頃まで続けられたことを示していると考えられる。また、この74-8須恵器高台坏をはじめ、11号ａ横穴墓前庭部埋土中からは74-9高台付き甕、74-10長頸瓶、12号ａ横穴墓前庭部埋土中からは76-6須恵器高坏など、一群の小型化した須恵器群が出土するのは、他の横穴墓に比べ特徴的と思われる。

74-9は、高台の付いた甕である。口径7.3cm、器高9.2cm、高台径5.3cmを測る。今年度調査横穴墓から出土した甕と比較しても、高台が付くにもかかわらず、器高・径ともに最小である。調整は、口縁部内面から頸部・体部にかけて、全面に回転ナデの痕跡を残すのみである。外面の口縁部から頸部に変換する部分に明瞭な段は付かない。頸部は非常に細く、低く作り、矯小化している。体部の形状は角張った印象を受ける。施文は基部に波状文・沈線なく、体部注口部を起点に1周する沈線を施すのみである。底部外面はヘラ切り後回転ナデ調整を施して高台を接着している。高台は低く、薄く作り、踏ん張る。

11号ａ横穴墓前庭部埋土中からは、74-10をはじめ、13、18、19、20と4種類以上の長頸瓶が出土している。9号ａ横穴墓前庭部埋土中出土の大型長頸瓶群とは若干趣を異にする。

74-10は高台の付く須恵器長頸瓶である。口径6.9cm、器高16.7cm、高台径6.5cmを測る。口頸部は長頸化しており基部は細い。口頸部基部に焼成時に器壁内の気泡が膨張した形跡を残しており、そのため口頸部が頽いている。口縁に向けやや斜め上方に開いて終わる。頸部外面外方に開く屈曲変換点に沈線1条巡らす。体部は肩が張るが稜は付かず、屈曲して底部に至る。口縁から体部上半にかけて回転ナデを施し、下半はヘラケズリの痕跡を残す。高台は低く、外に踏ん張る。74-13も高台が付く。口径9.8cm、器高21.4cm、高台径7.6cmを測る。口頸部は長頸化し、やや斜め上方に開く。口縁は外に屈折して開く。回転ナデを施す頸部中位には沈線を2条巡らす。頸部基部は少し開いて体部と接合させている。この頸部基部から肩部にかけてはカキ目調整を施す。この肩部にかけての部分と全面に丁寧な回転ヘラケズリを施した体部下半の曲線はほとんど対称をなしている。肩部と体部下半の接合部分に沈線状の窪みが巡っている。高台は低いがやや屈曲して踏ん張り、内面端で接地する。底部外面は沈線状の窪みが巡る。出雲7期以降の様相を示していると思われる。74-18は口径8.1cm、器高17.3cmを測る。内外面に灰釉が懸かり、ガラス化して灰緑色に発色した部分とはじいてざらついた細砂を多く含んだ胎土が露胎している部分がある。内外に回転ナデを施す口頸部は長頸化しており基部は細い。口縁に向けやや斜め上方に開いて終わる。頸部外面の口縁部から3cm下がった位置に、非常に浅くはあるが、沈線を2条巡らす。口縁は成形時に何かが当たって変形したまま焼成されている。口頸部基部から肩部接合部の外面までカキ目調整を施す。それ以下は体部外面底部近くまで回転ヘラケズリした後回転ナデを施し、それ以下は底部外面に至るまで回転ヘラケズリを施す。底部外面には板状工具による圧痕、もしくは、4条の浅い一文字ヘラ記号がある。74-10よりも肩部が上に膨らむ傾向にある。

74-20は器高12.4cmを測る小形である。長方形に近い形状の体部を持つ。平底の底部外面は見事な回転糸切り痕を残す。口縁には片口様の凹みが1ヶ所ある。表土に近いやや上層から出土した。

74-11、12は同一地点から出土した。74-11土師器坏Ａは口径15.7cm、器高4.8cmを測る。74-12土師器皿Ａは復元口径22.0cm、器高2.6cmを測る。これらの土師器は全面に丹塗りしており、畿内系土師器の模倣品と見られる。74-11土師器坏Ａについては、その形態から、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期のものを模倣していると思われる。出雲6～7期のものと思われる。搬入品の畿内系土師器皿のみ出土した6号ｂ横穴墓前庭部、畿内系土師器坏Ａと模倣品たる丹塗り土師器坏Ｃが出土した9号各横穴墓前庭部などとの関連が注目される。

74-17須恵器坏蓋と74-18長頸瓶は11号ａ横穴墓前庭部と12号ａ横穴墓前庭部にまたがる接合資料である。74-17は復元口径9.25cm、器高3.45cmを測る極小化した須恵器蓋である。天井部はヘラ切り痕を残し未調整である。ほかの部分は回転ナデを施す。口縁は器壁薄く、やや内湾して端部は丸く納める。天井部外面には4本×3本以上のヘラ描き直線が交差して格子状をなしている。この模様を斜めによぎる抉った線がある。

このほか、74-14は須恵器壺、74-15は小形の須恵器甕、74-16は口縁径に比べて胴部の細長い土師器甕である。

註1『出雲の横穴墓』－その型式・変遷・地域性－第7回山陰横穴墓調査検討会資料山陰横穴墓研究会編1997年

12号各横穴墓について

12号ａ横穴墓はその前庭部を11号ａ横穴墓と共有している可能性がある。完掘後の双方の前庭部床面には約10cmを測る段差があるが、双方の前庭部床面近くから出土した須恵器の中には接合資料もあり、少なくとも築造以後の墓前祭祀において共有意識があったものと考えられる。墓前祭祀もしくは横穴墓の構造に関して、12号ａ横穴墓はその前庭部奥詰め両端に狭い台を削り出しており、特徴的と思われる。前庭部右（東）壁に穿たれた小横穴を12号ｂ横穴墓とした。

12号ａ横穴墓は用地境界に位置している。表土中には古墳時代後期の埴輪を包含している。12号ａ横穴墓よりも斜面上方の用地境界上で表採した埴輪も含め、頂上部の用地境界を越えた東側に後期古墳の存在が予想される。しかし、丘陵頂上部七坑群の東、用地境界外の生い茂る雑木林の中には顕著な墳丘はないように思われた。

また、12号ａ横穴墓前庭部の現地表は顕著な段状地形を成しており、このような地形は用地境界を越えて東に続いているので、さらなる横穴墓の存在は明らかである。

なお、12号ａ横穴墓玄室部分については、11号ａ横穴墓のように完全に落盤埋没していなかったものの、閉塞石除去後入ってみると、整正家形の壁面と「上屋」が、玄門付近と11号ａ横穴墓玄室側を中心に、至るところで落盤、剥落しており、床面は、これらの岩盤ブロックで覆われていた。人手による掘削は非常に危険を伴うこと、用地境界の急傾斜地のため、8号横穴墓玄室・9号ａ横穴墓玄室のような地形の大幅な改変を伴う掘削ができないと判断したことなどから、玄室内では可能な限りの略測を行うに止めて封印した。

横穴墓の位置について

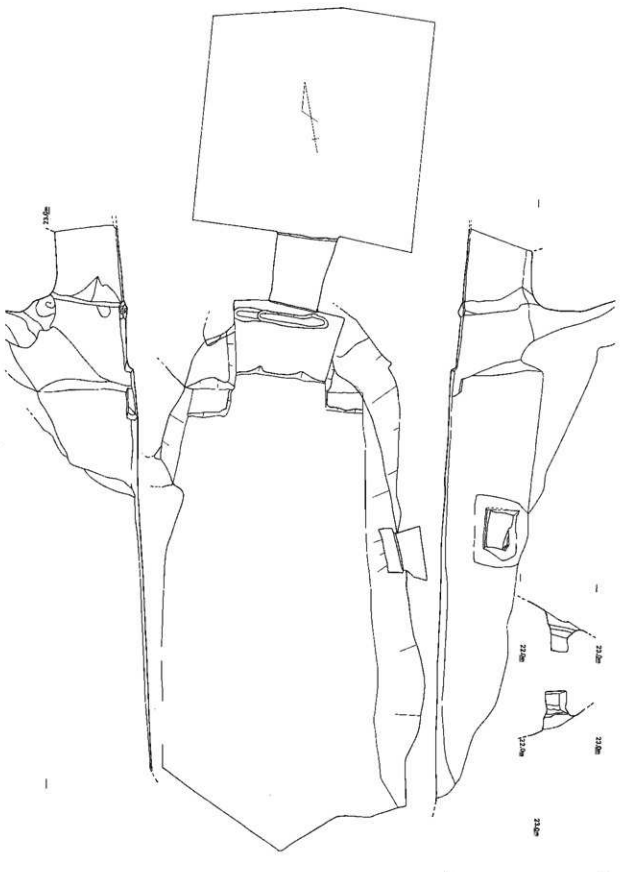
12号ａ横穴墓玄室の東1mに用地境界がある。西側は11号ａ横穴墓が12号ａ横穴墓前庭部の左（西）壁を切っているように見える。縦の位置で見ると、前庭部先端は標高21.7m付近から検出されており、11号ａ横穴墓とほぼ同じ高さである。玄室は標高22.1mを測り、11号ａ横穴墓や6号ａ横穴墓よりも20～50cm高く、7号横穴墓や9号ａ横穴墓よりも80cm低い位置にある。

12号ａ横穴墓の開口方向はS-17°-Wでほぼ南南西に開口している。これは10号横穴墓と同じ値を示している。11号ａ横穴墓、7号横穴墓ともほぼ同方向を指向していると思われる。12号ｂ横穴墓は東壁に穿たれているので開口方向はN-89°-Wとほとんど真西を向いている。

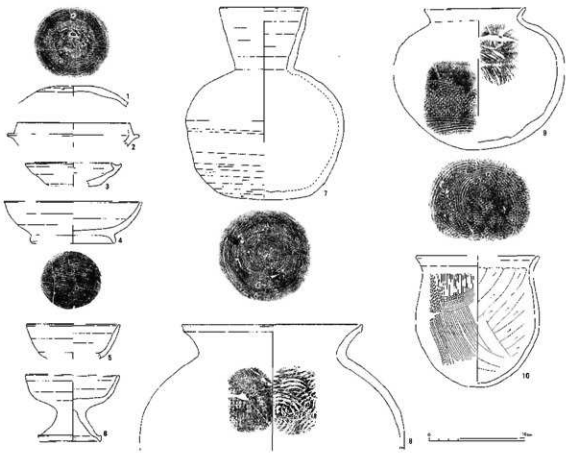
横穴墓の規模と構造について

12号ａ横穴墓は前庭部、羨道、閉塞、玄門、玄室から成る意字型の構造を持つ。また、前庭部奥詰め両端に台状の造り出しを設けており、特徴的である。玄室は略測ながら大きな整正家形の上屋構造であり、今年度調査横穴墓中においては特異な構造と言え、被葬者への関心が高まるところである。前庭部検出先端は標高21.7mであった。幅2.84m、長さ6.18mを測り羨道に至る。前庭部の奥詰め両端には台状の造り出しがある。左は幅48cm、奥行き30cm、高さ10cmを測る。右は幅49cm、奥行き20cm、高さ10cmを測る。右の台がやや狭い。羨道は前庭部から10cmの段差を付けて上がる。幅1.26m、奥行き1.08mを測り玄門に至る。高さ1.02mを測り、横断面は角を立てて方形に造る。玄門前には閉塞石を固定するためか刳込みがあって、これが二重に掘られた形跡がある。追葬の痕跡かもしれない。左端に達する非常に浅い刳込みを玄門の正面にある刳込みが切っている。いずれも幅18～20cmを測る。玄門正面の深い刳込みは深さ7cmを測る。

閉塞石はやや桃色を帯びる荒島石（浮石凝灰岩）と思われる。長方形をなし、玄門の寸法にちょ



第75図　12号a・b横穴墓遺構実測図（S=1/50）



第76図　12号a横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1/4）

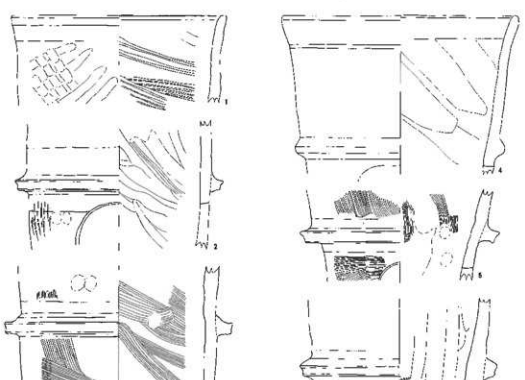
うど合致しており、今年度調査横穴墓中において特異な例と言える。石材は幅60cm、高さ90cm、厚さ16～20cmを測る。大きさで見れば11号ａ横穴墓閉塞石よりは大きいものだが、10号横穴墓、6号ａ横穴墓、6号ｂ横穴墓などの閉塞石に比べて小さく薄いものであった。

この閉塞に閉ざされた玄門は、羨道がそうであったように、1～2cmではあるが段差が付いて上がっている。閉塞側で幅66cm、玄室側で幅80cm、奥行き93cmを測り玄室に至る。高さ90cmを測り、横断面は角を立てて方形に造る。

玄室は玄門右壁奥詰めで直径50cmの岩盤ブロックが落盤していたのを始め、11号ａ横穴墓玄室側で壁面、「上屋」に顕著な剥落が見られたほか、その他の部分でも剥落しており危険な状態であった。玄門からさらに段差を付けて上がる。玄室の規模は略測ながら幅2.85m、奥行き3.08mを測り、床面積において今年度調査横穴墓中群を抜く規模と知れた。また、高さも1.4mはあるものと推定された。玄室内においては剥落が多かったが四柱は観察できた。明確な四柱の線と隅棟の線を表現している様子が観察できた。また、壁面も真っ直ぐに加工しているようであった。玄室の形態は整正家形と思われる。

12号ｂ横穴墓について

12号ｂ横穴墓は12号ａ横穴墓前庭部右（東）壁に穿たれている。前庭部奥から1.6m前、前庭部床面から40cm上にある。12号ａ横穴墓前庭部と同じ砂質の埋土が詰まっていた。玄門は幅84cm、高さ



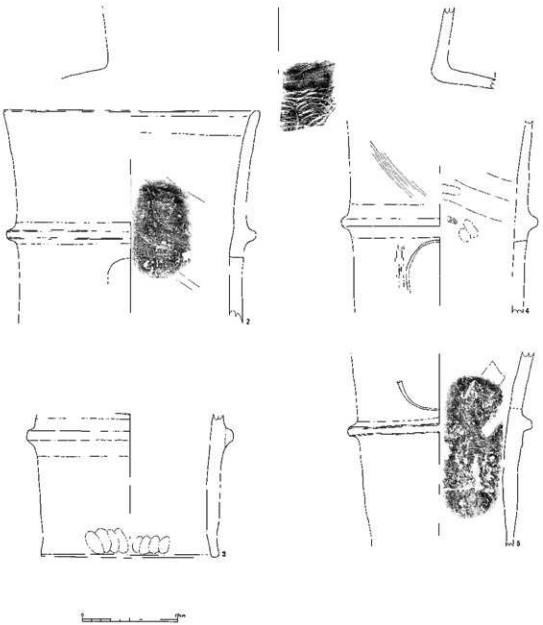
第77図　12号a横穴墓前庭部埋土中出土埴輪実測図（S=1/4）

44cm、奥行き10cmを測る。玄室は天井部が若干落盤していた。向かって右南側に横穴を掘り込み玄門よりも幅を広く取っている。玄室は、門側が幅50cm、奥壁側が76cmを測る。奥行きは26cm高さ35cmを測る。9号ｃ横穴墓よりも大きい。なにも出土していない。

12号ａ横穴墓前庭部出土遺物について（第76図）

76-1は須恵器坏蓋天井部の破片である。外面頂部にヘラ切りの痕跡を残しており、それをナデ消そうとしている。その外周を回転ヘラケズリの痕跡が2周している。その外側は回転ナデを施す。外面は暗灰色、内面は青灰色を呈する。破砕した断面は薄い紫色を呈しており、焼成が非常に堅緻であることを色でも見て取れる。出雲4期の様相を示している。このような遺物は、12号ａ横穴墓より上方の丘陵斜面で表採されたり、加工段2においても出土している。埴輪と同じく丘陵上方からの転落物と考えたい。76-2は須恵器坏身の破片である。おそらく76-1と同じ様相を示すものと思われる。同様に考えておきたい。76-3はこれも須恵器坏身の破片である。復元口径8cmと極小化している。出雲6期の様相を示しており、12号ａ横穴墓に伴うものかも知れないが、12号ａ横穴墓前庭部埋土中からの出土が確認できただけで、位置を特定できなかった。

76-4は須恵器高台坏である。口径14.45cm、器高4.45cm、高台径8.6cmを測る。高台は高く真っ直ぐ外に踏ん張る。内側は若干内湾して内面端で接地する。外底には非常に浅いものながら沈線状の凹面が巡る。器の底部外面には、おそらく、ヘラ切りの痕跡を消すためのものとみられる板状工具による粗目の圧痕が条痕状に残っており、さらにその上から回転ナデを施している。体部は大きく外に開いて立ち上がり、そのまま斜め上方に伸びる。端部は開き気味にし、丸く納める。全体に浅い印象を与える。体部内面は見込みに残っていたと思われる同心円状の波を丁寧にナデて平らにして



第78図　調査区内遺構外出土遺物実測図（S＝1/4）

いる。出雲6～7期の様相を示す。74-4須恵器坏身、74-17須恵器坏蓋（11号ａ横穴墓前庭部・12号ａ横穴墓前庭部接合資料）、74-18須恵器長頸瓶（同）、など出雲6期の様相を示す遺物と同様に床面にきわめて近い位置からの出土なので築造時期が早い段階での墓前祭祀の時期を示しているものと考えたい。

76-5は甕の口縁部と思われる。復元口径9.8cmを測る。

76-6は須恵器低脚無蓋高坏である。口径9.8cm、器高7.2cm、脚底径6.3cmを測る。脚は低く透かしはすでに消失している段階のものである。全面回転ナデないしナデ調整である。外面は無文である。脚端部外面に浅い凹面が巡る。出雲5～6期の様相を示すものと思われる。前庭部右奥詰め上層からの出土であり、上方からの転落遺物と考えたい。

76-7は長頸瓶である。口径9.0cm、器高20.4cm、胴部最大径16.6cmを測る。口頸部は高さ6.4cmを測

第79図　南斜面横穴墓群出土遺物実測図（S＝1/4）

り長製化していない。底部は平底で、高台・脚はない。体部と合わせて球形に近い形状を呈する。口頸部内外面から体部肩下4cmまで回転ナデを施す。口頸部外面は無文である。体部肩付近の接着部にも不明瞭な沈線を1条巡らすのみである。体部下半は底部外面までヘラケズリを施す。出雲5期の様相を示しているものと思われる。前庭部右（東）壁先端から1.7m内側に入った上層からの出土であり、上方からの転落遺物と考えたい。

76-8は須恵器甕の口縁部から体部肩にかけての破片である。

76-9は須恵器壺である。口径10.5cm、器高20.4cm、胴部最大径18cmを測る。口頸部は短く外に開く。底はやや尖った丸底である。内部は同心円状タタキ目が底から口頸部下のナデ調整部分まで残る。外面は最大径を測る部位まで口頸部から回転ナデを施す。下半は斜格子状タタキ口文を残し、その上に、タタキ目文の残る範囲内に何周かのカキ目を巡らしている。内面底部よりやや上の部分に、重心を取るためであろうか、幅4cmの帯が巡り厚くなっている。そのため壺自体が非常に重い。

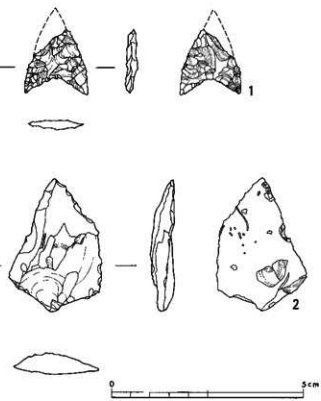
76-10は土師器甕である。約半個体分が出土した。口径12.8cm、器高13.9cm、胴部最大径13.1cmを測る。断面「く」の字の口縁部はあまり開かず、胴部もあまり張り出さない起伏に乏しい器形である。ほぼ全面に煤が付着していた様子が窺える。前庭右（東）壁際、前庭部奥詰め右造り出し部の手前30cmの床面近くで胴部が出土した。口縁部はそれより上層で出土した。

第77図に挙げた円筒埴輪は12号ａ横穴墓前庭部埋土中の表土付近から出土したものである。これらの円筒埴輪の分布範囲は第78図のものも含めて12号ａ横穴墓前庭部奥詰め羨道から前へ1m以内、11号ａ横穴墓側半分と11号ａ横穴墓前庭部からは一切出土していない。11号及び12号各横穴墓の前

庭部遺物の出土が11号ａ横穴墓に偏っている様子から、これら4穴に対する共同墓前祭祀が11号ａ横穴墓側に位置的に偏って行われた姿が想像される。このことと12号ａ横穴墓前庭部埋土中における円筒埴輪の分布範囲を考えあわせると、これらはいずれも上方からの転落と考えられる。

第78図に挙げた須恵器と円筒埴輪の破片は、すべて、12号ａ横穴墓前庭部より上の丘陵南斜面東側用地境界付近で表採したものである。1は須恵器甕の口頸部基部の破片である。2～5は円筒埴輪の破片である。

第80図に挙げた石器は調査区内で出土したもので遺構とのかかわりはない。80-1は杜日古墳群1号墳の削平された頂上部東端の古墳封土中から出土したものである。黒曜石製で無茎凹基の三角形鏃で、残存長1.7cm、幅1.6cm、厚さ3mm、重さ0.49gを測る。両側縁はごくわずかに内湾し、深く、そして角度の非常に緩やかな連続した調整が両面からなされている。このため、断面は薄いレンズ状を呈し、両端部は剥刀の刃を思わせる鋭利さを持つ。基部は逆「V」字に浅く抉りが入り、脚部を鋭く尖らせるために、両面から、浅く、急角度の細かい調整が施されている。これは鳥取県米子市日久美遺跡出土石鏃の縄文時代前期に位置づけられるB-3に分類されるものと思われる[註1]。



第80図　杜日古墳調査区内出土石器実測図（実物大）

80-2は使用痕のある剥片石器で、長さ3.5cm、幅2.4cm、厚さ6mm、重さ3.61gを測る。この石器は8号横穴墓前庭部右（東）壁奥詰め、床面から30cm上に穿たれた獣巣穴の2m奥に入った地点から出土した。木の実や巣穴材に紛れて運び込まれたものと思われる。腹面に一次剥離面を残す縦長剥片を利用している。凸基三角形鏃状を呈すが、形成を目的とした調整はない。ド辺中央から外方向へ背面からの加撃による剥離が見られる。この一打によって凸基が作り出されているかのようだが、それを意図しているものではなく、事故剥離の可能性もある。両側縁には使用による微細な剥離がある。

註1「目久美遺跡」加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書鳥取県米子市教育委員会1986

表6　横穴墓構造一覧表（単位；m）

横穴墓	墓道・前庭部		羨道				玄門				玄室				開口方向	閉塞施設	遺葬施設形態	出土須恵器の時期					
	幅	長さ	幅	長さ	高さ	断面	幅	長さ	高さ	断面	幅	奥行き	高さ	断面				出雲3期	出雲4期	出雲5期	出雲6期	出雲7期	出雲8期
6号 a	消滅		1.31	1.35	1.30	角丸	0.70	0.93	1.00	角丸	2.53	2.32	1.50以上	ドーム？	S－34°－E	切石1枚	屍床1				○		
6号－b	1.28	7.06	1.15	1.22	1.22	方	0.65	0.91	0.67以上	方	2.51	2.12	1.40以上	テント系家形	S 53°－W	切石1枚	屍床2				○	○	○
6号－c	消滅		0.85	0.90	0.62以上	方	0.60	0.62	0.89以上	方	1.19	2.34	1.04以上	ドーム？	S－37° E	床面刳込みあり	不明				○		
7号	0.72	4.28			－	－	0.60	1.12	0.84以上	角丸	2.28	1.90	1.37以上	ドーム？	S－ 4°－E	凸然石石積	石囲い礫床	○					
8号	1.52	7.20以上	0.86	1.35	0.69以上	方	0.80	0.88	0.45以上	角丸	2.24	2.00	0.73以上	－	S－24°－E	切石3枚	切石石床 切石棺台						○
9号－a	2.46～3.54	5.96	0.88	1.10	1.18以上	方	0.68	1.22	1.15以上	角丸	2.48	1.80	0.70以上	－	S－ 8°－E	切石1枚・角礫	石床3種				○	○	○
9号－b			0.98	0.88	0.76	角丸	0.78	0.44	0.4	角丸	未完成				S－19° W	－	－						
9号－c	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.58	0.28	0.40	ドーム？	N－89°－E	不明	改葬						
10号	0.92	2.22			－	－	0.64	0.72	0.95以上	角丸	2.38	2.02	0.79以上	ドーム？	S 17°－W	切石1枚・角礫	屍床2 凸然石棺台		○				
11号－a	2.32	3.08	1.02	1.42	1.15	方	調査不能				調査不能				S－ 2°－E	切石2枚	未調査				○	○	○
11号－b			－	－	－		0.60～0.74	0.40	0.68	角丸	0.84	1.30	0.65	アーチ形	S 72°－E	床面刳込みあり	床面のみ				○		
12号－a	2.84	6.18	1.26	1.08	1.02	方	0.66～0.80	0.93	0.9	方	2.85	3.08	1.40	整正家形	S－17°－W	切石1枚	未調査				○	○	
12号－b	－	－	－	－	－	－	0.84	0.1	0.44	方	0.50～0.76	0.26	0.35	厨子？	N－89°－W		床面のみ						

表7　横穴墓出土鉄製品計測表（単位：cm）

＜鉄鏃＞

挿図No.	種別	全長(残存長)	鏃身部(推定値) 長	鏃身部(推定値) 巾	鏃身部(推定値) 厚	頸部(推定値) 長	頸部(推定値) 巾	頸部(推定値) 厚	茎部(推定値) 長	茎部(推定値) 巾	茎部(推定値) 厚	備考	出土地点
63図－1	長頸鏃	(16.6)(復元)	(2.4)	(0.8)	(0.3)	(9.1)	0.4	0.3	5.1	0.35	0.35	a(abc鋳着) 片刃、平片刃造か、鏃身関部不明、棘状関	9号横穴墓前庭部左奥隅床面
	長頸鏃	(10.6)	(2.0)	(0.7)	(0.3)	(7.9)	0.4	0.3	0.7(残存)	0.25	0.2	b 片刃、平片刃造か、刃関部不明、棘状関	
	長頸鏃	(5.2)	欠	欠	欠	4.0(残存)	0.3	0.25	(1.2)(残存)	0.35	0.3	c	
63図－2	長頸鏃	(4.0)	欠	欠	欠	欠	欠	欠	4.0(残存)	(0.4)	(0.2)	茎部にセンイ質を左上が中に密に巻きつけ、木質で覆う	9号横穴墓前庭部左奥隅床面
63図－3	長頸鏃	(7.2)	(2.2)	1.2	0.2	(5.0)(残存)	0.4	0.2	欠	欠	欠	片刃、平片刃造か、鏃身関部不明	9号横穴墓前庭部左奥隅床面
63図－4	長頸鏃	(11.6)	欠	欠	欠	10.45(残存)	0.4	0.3	1.15(残存)	0.3	0.3	端部を丸くおさめる、棘状関	9号横穴墓前庭部左奥隅床面
70図－8	長頸鏃	計測不可	(3.4)	1.6(残存)(2.5復元)	0.3	7.9(残存)	0.4	0.35	2.2(残存)	0.3	0.3	方頭抜か?角関か?	10号横穴墓玄室内棺台
70図－9	長頸鏃	計測不可	(2.2)	(0.8)	0.25	(1.2)(残存)	0.5	0.35	－	－	－	a(a,a'同一体体か?頸部の一部欠、二片接合不可) 鏃身関部、鏃関か、台形関か	10号横穴墓玄室内棺台
		計測不可				(5.25)(残存)	0.5	0.35	1.5(残存)	0.4 0.5	0.3	a' 茎部にセンイ質を左上が中に巻きつけ木質で覆う	
70図-13	陽抉三角形鏃?	(7.3)	6.15(残存)	2.7(残存)	(0.4)	1.8(残存)	0.8	(0.4)					10号横穴墓玄室右袖右側壁下玄門側隅

＜刀子＞

挿図No.	全長	刀身部 長	刀身部 元巾	刀身部 厚	茎部 長	茎部 口巾	茎部 尻巾	茎部 厚	柄部 長	柄部 口巾	柄部 柄厚	形式の特徴 関	形式の特徴 茎尻	形式の特徴 目釘	備考	出土地点
63図－5	10.1(残存)	5.0(残存)	1.3(残存)	0.3	5.1(残存)	1.0	0.5	0.2	欠	欠	欠	両関	栗尻	無	茎部に柄の残片と思われる木質付着	9号横穴墓玄室左袖、左側壁右側1の下
70図－10	計測不可	計測不可	1.0	0.25	3.9	0.8	0.3	0.25	4.65(残存)	1.2	0.8	片関?	隅切尻?	無	接合できない、片	10号横穴墓玄室左袖
70図－11	13.0(残存)	7.0	1.4(残存) 1.6(復元)	0.4	5.0(推定)	1.1	0.6	0.4	5.9(残存)	1.9	1.6	両関	栗尻?	無	鹿角装刀子、角関	10号横穴墓玄室右袖右側壁直下玄門側隅大刀2の上
70図－12	a 7.8(残存)	6.6	1.8	0.6	1.2(残存)	0.6	欠	0.6	欠	欠	欠	片関	欠	欠	a(a,b鋳着) 鏃関、茎の断面形状は逆台形	10号横穴墓玄室左袖棺台
	b 6.9(残存)	6.9(残存)	1.8	0.6	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	b	

＜釘＞

挿図No.	長	巾	厚	備考	出土地点
70図-1	3.2(復元3.75)	0.4	0.3	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-2	4.6(残存)	0.7	0.4	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-3	4.75(残存)	0.45	0.35	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-4	7.9(木質含)	0.5	0.4	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-5	7.85(木質含)	0.5	0.45	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-6	7.1(木質含)	0.5(推定)	0.45(推定)	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台
70図-7	6.3(錆含)	0.6(推定)	0.55(推定)	木質付着	南斜面10号横穴墓玄室内左袖棺台

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調 焼成	胎土	備考
第10図-1	社日1号墳 周溝	土師器	甕	50%以下	口径;23.2 現高;4.0	風化が著しいため不明	黄橙色 良好	微砂粒を多く含む 石英	
-2	社日1号墳 周溝	土師器	甕	50%以下	口径;17.4 現高;11.8	外面;クシ描き平行線紋、横ナデ 内面;ヘラケズリ	良好	微砂粒を多く含む 石英	
-3	社日1号墳 周溝 黒色土	土師器	甕	50%以下	口径;14.1 現高;3.7	外面;ナデ 内面;ナデ	橙色 良好	微砂粒含む程度 石英	
-4	社日1号墳 北斜面 周溝斜面	土師器	鼓形器台	50%以下	口径;21.0 現高;7.2	外面;横ナデ 内面;横ナデ	橙色 良好	1mm程度の砂粒を多く含む 石英	
-5	社日1号墳 西側	土師器	甕	50%以下	口径;23.8 現高;5.0	外面;横ナデ	黄橙色 良好	1mm程度の砂粒を多く含む 石英・長石	
-6	社日1号墳 北斜面西側	土師器	壺	50%以上	口径;9.5 現高;2.3		浅黄橙色 良好	微砂粒多い 石英	
-7	社日1号墳 周溝	土師器	高坏	50%以下	現高;5.7	外面;横ナデ 内面;横ナデ	浅黄橙色、黄橙色 良好	砂粒は含むが粘土はきめ細かい	粘土に、ねごししたものか
-8	社日1号墳 北側	土師器	高坏	50%以下			黄橙色 良好	1mm程の砂粒を含む 石英、金雲母	
-9	社日1号墳 北側	土師器	直口壺	50%以下	胴部径;12.0		黄橙色 良好	砂粒少ない	工具による施文 刺突・鋸歯文
-10	社日2号 南斜面	土師器	低脚坏	50%以下	現高;3.0 底径;5.2	接合面に粗いハケ目	黄橙色 良好	微砂粒多い 石英、黒雲母	
-11	社日1号墳 北斜面西側 北側斜面	土師器	吉備系加飾壺	50%以下	底径;7.4 胴現存;38.5	外面;ナデ 内面;ハケ目	黄橙色 良好	砂粒多い	肩部に波状文と櫛状工具による平行線文
第23図-1	社日1号墳	土師器	甕	50%以下	口径;28.4 現高;20.0 胴部径;39.7	外面;ハケ目 内面;ヘラミガキ、ヘラケズリ	黄橙色 良好	密	
-2	社日1号墳	土師器	甕口縁部	50%以下	口径;26.0 現高;5.4	内面;強いナデ	黄橙色 良好	1mm以下の砂粒を含む 量はやや少ない	口縁部緩く内側にふくらむ
			甕肩部胴部	50%以上	現高;38.6 胴部径;41.4	外面;横ハケ 内面;ナデ、指頭圧痕	黄橙色 良好	微砂粒含む、量はやや少ない 石英 金雲母	
第29図-1	社日1号墳 周溝整地土内 黄色土	須恵器	坏身	50%以上	口径;11.5 器高;3.9 底径;7.3	外面;回転ナデ、糸切り痕 内面;回転ナデ、静止不定方向ナデ	淡灰色 良好	密、1mm程度の砂粒を含む	
-2	社日1号墳 東斜面表土	須恵器	大甕	50%以下	頸径;24.6 現高;14.3	外面;ヘラ描き沈線、平行タタキ 内面;回転ナデ、同心円タタキ	灰色 良好	密	頸部波状文その上2条下1条沈線
-3	社日1号墳 北斜面	須恵器	坏	50%以下	口径;15.8 器高;5.6 高台径;10.0	外面;回転ナデ、高台取り付け後ナデ 内面;回転ナデ、静止不定方向ナデ	淡灰色 良好	密、2mm程度の砂粒を含む	
第42図-6	社日加工段2 石列3段目直下	土師器	皿	50%以上	口径;6.9 現高;1.7	外面;静止糸切り	橙色 良好	密	
-7	社日加工段2 最奥石組の上	土師質土器	皿	50%以下	底径;6.0 現高;1.3	外面;回転ナデ?回転糸切り?	淡橙褐色 良好	密	
-8	社日加工段2 SNベルトの下	土師質土器	皿	50%以下	底径;5.6 現高;1.1		浅黄橙色 良好	密	
-9	社日加工段2 最奥石組の上	土師質土器	皿	50%以下	底径;5.5 現高;1.3	外面;回転ナデ	浅黄橙色 良好	密	
-10	社日加工段2 最奥石組の上	土師質土器	皿	50%以下	底径;4.6 現高;0.7		浅黄橙色 良好	密	
-11	社日加工段2 第3石組SE01	須恵器	蓋坏	50%以下	現高;1.6	外面;回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面;静止ナデ	灰白色 不良	密	
-12	社日加工段2 西側表採	土師器	皿	100%	口径;11.1 器高;2.8	外面;回転ナデ、板状工具ナデ 内面;回転ナデ、静止ナデ	橙色 良好	密	
-13	社日加工段2	土師器	皿	50%以下	口径;11.2 器高;3.1	外面;回転ナデ、回転糸切り 内面;回転ナデ、静止ナデ	淡橙色 不良	密、1mm以下の砂粒を含む	
第44図-2	社日SK14(12号横穴墓前庭埋土)	須恵器	長頸瓶	50%以上	現高;18.5 底径;12.4 胴現存;19.6	外面;回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内面;回転ナデ	灰色~青灰色 堅緻	白粒、黒粒	火葬骨蔵
第47図-1	7号横穴墓 玄室床面	須恵器	坏身	100%	口径;13.4 器高;4.0	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、静止ナデ	灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	焼け歪み
-2	7号横穴墓 玄室床面	須恵器	坏蓋	100%	口径;13.2 器高;4.0	外面;回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面;静止ナデ、回転ナデ	外;淡灰色 内;灰色 不良	密、1mm以下の砂粒を含む	焼け歪み
-3	7号横穴墓	須恵器	坏蓋	50%以下	口径;12.8	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	外;暗灰色 内;白灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	
-4	7号横穴墓 墓道	須恵器	甕	50%以下	現高;4.0	外面;回転ナデ、タタキ後回転ナデ、タタキ 内面;あて具痕後回転ナデ、あて具痕、静止ナデ	灰色 良好	密、表面に自然釉	
第51図-1	6号横穴墓	須恵器	壺	100%	底部径;13.9	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	淡青灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	底部外面十文字ヘラ記号有り
-2	6号横穴墓	須恵器	甕	100%	口径;11.8 器高;24.6 胴部径;23.4	外面;回転ナデ、タタキ後ナデ、タタキ後回転ナデ、タタキ後ナデ 内面;ナデ回転ナデ、あて具痕	淡灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	
第53図-1	6号b横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	100%	口径;10.3 器高;2.4	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	暗灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	
-2	6号a横穴墓 閉塞石真下	須恵器	坏蓋	100%	口径;13.5 器高;3.4	外面;ヘラケズリ、回転ナデ 内面;ナデ、回転ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	焼け歪み外面「メ」印ヘラ記号有り
-3	6号a横穴墓 閉塞石右下	須恵器	瓶	50%以上	口径;8.4 器高;11.0 胴部径;8.3	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	灰色 良好	密	
-4	6号b横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	50%以下	口径;15.6 器高;2.3	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、静止不定方向ナデ	淡黄灰色 良好	密、2mm程度の砂粒を含む	
-5	6号b横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	100%	口径;14.9 器高;2.7	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
-6	6号b横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	50%以上	口径;13.3 器高;4.9 高台径;7.3	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	黄灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
-7	6号b横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	100%	口径;15.6 器高;3.2	外面;板状工具によるナデ後回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	黄灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	

−8	6号b横穴墓 前庭	須恵器	高台杯	50%以上	口径:12.7 器高:5.0 高台径:8.2	外面:回転ナデ、静止糸切り? 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	
−9	6号b横穴墓 前庭	須恵器	杯身	50%以下	口径:8.4 現高:2.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色 良好	1~3mm大の砂粒を含む	
−10	6号b横穴墓 前庭	須恵器	杯身	50%以下	口径:8.8 器高:2.9	外面:ヘラ切り後ナデ、回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ	淡黄灰色 不良	密	
−11	6号横穴墓	須恵器	杯身	50%以上	口径:9.3 器高:3.5	外面:回転ナデ、ヘラケズリ、ヘラケズリ後ナデ 内面:回転ナデ、指ナデ	灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	
−12	6号b横穴墓 前庭	須恵器	瓶	100%	口径:8.6 器高:9.9 胴部径:8.4	外面:回転ヘラケズリ後回転ナデ、回転ヘラケズリ、静止糸切り痕 内面:回転ナデ、ナデ	淡灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	
−13	6号横穴墓	須恵器	高坏	50%以上	口径:9.2 現高:4.5	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	密、2mm以下の砂粒を含む	
−14	6号横穴墓	須恵器	長頸瓶	50%以上	口径:7.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	外:灰色 内:淡灰色 良好	密、1mm大の砂粒を含む	
−15	6号横穴墓 墓道覆土	土師器	畿内系皿A類	50%以上	口径:19.8 器高:3.1	外面:指ナデ 内面:ヘラミガキ	明橙褐色 良好	密、1.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	
−16	6号横穴墓	須恵器	高台杯	50%以下	口径:17.0 器高:6.8 高台径:11.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1~4mm前後の砂粒を含む	
−17	6号b横穴墓 前庭	須恵器	壺	50%以下	口径:19.6 現高:2.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色 良好	密	
−18	6号b横穴墓 前庭	須恵器	甕	50%以上	胴部径:52.4 現高:39.0		良好	1~3mm大の砂粒を多く含む	
−19	6号横穴墓	須恵器	壺	100%	口径:12.8 器高:15.3 胴部径:18.2	外面:回転ナデ、タタキ後回転ナデ、タタキ 内面:回転ナデ	淡灰色 良好	密	
第56図 −1	8号横穴墓 玄室	須恵器	高台杯	100%	口径:12.8 器高:4.9 高台径:7.1	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	外面にヘラ状工具による当て傷有り
−2	8号横穴墓 玄室	須恵器	高台杯	100%	口径:14.5 器高:5.6 高台径:9.7	外面:回転ナデ、板状工具ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	白灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
−3	8号横穴墓	須恵器	坏蓋	50%以下	現高:1.6	外面:ヘラ切り後回転ナデ、ヘラケズリ 内面:静止ナデ、回転ナデ	淡青灰色 良好	密、2mm以下の砂粒を少量含む	
−4	8号横穴墓	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:13.8 現高:2.3	外面:ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
−5	8号横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	50%以上	口径:12.8 器高:4.7 高台径:8.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	淡灰色 良好	1~3mm前後の砂粒を含む	
−6	8号横穴墓 前庭	須恵器	蓋付短頸壺	50%以下	口径:12.8 現高:4.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、一部同心円タタキ後ナデ	白灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
−7	8号横穴墓	須恵器	低脚坏	50%以上	口径:8.6 器高:4.8 底径:5.4	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
−8	8号横穴墓	土師器	甕	50%以下	口径:20.7 現高:7.6 胴部径:21.2	外面:横ナデ 内面:横ナデ、ヘラケズリ	外:淡赤褐色 内:橙褐色 普通	やや粗、1mm以下の石英・長石・黒色粒等を多く含む	外面に煤が付着
第61図 −1	9号横穴墓 前庭床面	須恵器	甕	50%以下	口径:19.4 現高:18.6 胴部径:44.4	外面:ナデ、タタキ後カキ目 内面:ナデ、同心円タタキ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	口縁外面ヘラ記号、口頸全外面自然釉
−2	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	横瓶	100%	口径:11.2 器高:26.0 胴部径:37.4	外面:回転ナデ、平行タタキ後カキ目 内面:回転ナデ、同心円タタキ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
第62図 1	9号a横穴墓 玄室床面	須恵器	蓋	100%	口径:10.6 器高:3.2	外面:ヘラ切り後ナデ、ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色 良好	0.5~3mmの砂粒を含む	内面一文字ヘラ記号有り
−2	9号横穴墓 排水溝土中	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:14.5 現高:2.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
−3	9号横穴墓 玄室	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:13.8 現高:1.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
−4	9号a横穴墓 玄門床面	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:13.9 現高:2.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
5	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	坏蓋	50%以下	現高:1.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ後不定方向ナデ	淡灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
−6	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:16.0 現高:2.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、回転ナデ後不定方向ナデ	白灰色 不良	1mm~2mm前後の砂粒を含む	
7	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	坏蓋	50%以下	口径:13.8 現高:1.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	淡青灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
−8	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	坏身	50%以下	口径:12.6 現高:4.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色 良好	1~2mm径の砂粒を含む	外面に一部自然釉
−9	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	坏身	50%以下	口径:10.65 器高:2.6	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	灰色 良好	2mm前後の砂粒を含む	
−10	9号横穴墓 前庭覆土中	土師器	畿内模倣坏C類	50%以上	口径:9.6 器高:2.6	外面:横ナデ、回転ヘラケズリ 内面:横ナデ、回転横ナデ後不定方向ナデ	暗茶赤褐色 良好	やや粗、1mm以下の石英・長石を含む	全面丹塗り、地色は淡橙色
−11	9号横穴墓 前庭覆土中	土師器	畿内系坏A類	50%以下	口径:19.0 器高:4.0	外面:ナデ、糸切り後ナデ 内面:ヘラミガキ?	明淡橙褐色 良好	密	
−12	9号a横穴墓 玄室床面	須恵器	瓶	100%	口径:8.6 器高:10.3 底径:5.0 胴部径:9.3	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ、静止糸切り後ナデ 内面:回転ナデ、接合痕をナデ消す	白灰色 良好	1~2mm径の砂粒を含む	
−13	9号横穴墓 前庭覆土中	須恵器	長頸瓶	100%	口径:8.6 器高:22.9 胴部径:14.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	黄灰色 良好	1~3mm前後の砂粒を含む	
−14	9号a横穴墓 玄門覆土中	須恵器	長頸瓶	100%	口径:12.4 器高:29.0 高台径:13.0 胴部径:23.0	外面:回転ナデ、ナデ指圧痕 内面:回転ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を多く含む	色調一部緑灰色

－15	9号横穴墓 前庭部覆土中	須恵器	長頸壺	50% 以上	現高;23.5 底径;10.0 胴部径;17.8	外面;回転ナデタタキ後カキ目ヘラケズリ 内面;強いナデ	灰色 良好	1~2mmの砂粒を含む	ヘラによる傷痕
－16	9号横穴墓 前庭部覆土中	須恵器	長頸瓶	50% 以上	口径;9.7 器高;22.0 高台径9.1 胴部径;15.8	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
－17	9号横穴墓 前庭部覆土中	須恵器	甕	50% 以下		外面;タタキ後カキ目 内面;あて具痕	淡灰色 良好	密	破片
第67図 －1	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏蓋	100%	口径;12.7 器高;4.3	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ ヘラ切り後一部ヘラケズリ 内面;回転ナデ、回転ナデ後ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
－2	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏身	50% 以上	口径;11.4 器高;4.0	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 板状圧痕 内面;回転ナデ、 回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
－3	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏蓋	100%	口径;12.8 器高;4.5	外面;回転ヘラケズリ、回転ナデ ヘラ切り後回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ後不定方向ナデ	灰色 普通	1~2mm前後の砂粒を含む	
－4	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏蓋	100%	口径;13.8 器高;4.8	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ ヘラ切り後回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	淡黄灰色 普通	1mm前後の砂粒を含む	
－5	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏蓋	100%	口径;12.6 器高;4.3	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、 回転ナデ後不定方向のナデ	淡灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
－6	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏身	100%	口径;11.0 器高;3.7	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、 回転ナデ後不定方向のナデ	灰色 良好	1~2mm前後の砂粒を含む	
－7	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏蓋	100%	口径;13.2 器高;3.9	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ ヘラケズリ後回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ、回転ナデ後ナデ	灰色 普通	1~2mm前後の砂粒を含む	
－8	10号横穴墓 墓道	須恵器	坏身	100%	口径;11.6 器高;3.8	外面;らせん状のケズリ、ナデ 内面;回転ナデ、 回転ナデ後不定方向のナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
第68図 －1	10号横穴墓	須恵器	坏身	100%	口径;11.5 器高;4.3	外面;回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
－2	10号横穴墓	須恵器	坏身	100%	口径;11.25 器高;4.25	外面;回転ナデ、ヘラケズリ ケズリ後板状工具圧痕とナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	0.5~2mmの砂粒を含む	
－3	10号横穴墓	須恵器	𤭯	100%	口径;10.7 器高;13.7 胴部径;9.0	外面;回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	灰色 良好	粗、1~3mm程の石英・長石を多く含む	頸部波状文胴部刺突文沈線上下各1条
－4	10号横穴墓	須恵器	高坏	50% 以上	口径;9.5 器高;13.9 底径;6.8	外面;回転横ナデ 内面;回転横ナデ、不定方向のナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	坏部4条沈線間櫛描刺突文脚部2条沈線三角形透かし三方
－5	10号横穴墓	須恵器	提瓶	50% 以上	現高;19.7 胴部最大幅; 23.2	外面;平行タタキ後カキ目 内面;同心円タタキ	灰色~暗灰色 良好	1~2mm程の砂粒を含む	焼け歪み
－6	10号横穴墓	須恵器	フラスコ形 長頸瓶	100%	口径;7.3 器高;22.7 胴部径;16.8	外面;回転横ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転横ナデ	淡灰色 良好	やや密、1mm程度の長石粒が目立つ	猿投窯産の可能性高い
第74図 －1	11号b横穴墓 玄室	須恵器	坏蓋	100%	口径;9.9 器高;3.6	外面;ヘラ切り後ナデ、回転ナデ 内面;回転ナデ後ナデ	黄灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	内面に一文字ヘラ記号
－2	11号b横穴墓 玄室	須恵器	坏身	100%	口径;8.8 器高;2.5	外面;回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	内面に一文字ヘラ記号
－3	11号横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	50% 以下	口径;11.6 現高;1.95	外面;回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面;回転ナデ	外;淡黄灰色 内;淡灰色 良好	密	
－4	11号横穴墓 前庭	須恵器	坏身	50% 以上	口径;11.2 器高;3.9	外面;回転ナデ、 ヘラ切り後板状工具によるナデ 内面;回転ナデ後横ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
－5	11号横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	50% 以下	口径;14.2 現高;1.8	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を多く含む	
－6	11号横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	50% 以上	口径;14.8 器高;5.0 高台径;9.0	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ後不定方向のナデ	淡灰色 良好	1~3mm前後の砂粒を含む	ヘラによる傷痕あり 一文字
－7	11号横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	50% 以上	口径;14.8 器高;4.9 高台径;8.8	外面;回転ナデ、回転ナデ後一部ナデ 内面;回転ナデ、 回転ナデ後不定方向ナデ	青灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	
－8	11号横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	100%	口径;8.9 器高;3.9 高台径;5.9	外面;回転ナデ回転糸切り 内面;回転ナデ、ナデ	外;暗灰色 内;淡白色 良好	1~3mm前後の砂粒を含む	
－9	11号横穴墓 前庭	須恵器	瓶	50% 以上	口径;7.3 器高;9.2 高台径;5.3 胴部径;6.9	外面;回転ナデ、横ナデ 内面;回転ナデ、横ナデ	淡灰色 良好	密	
－10	11号横穴墓 前庭	須恵器	長頸瓶	50% 以上	口径;6.9 器高;16.7 底径;6.5 胴部径;12.1	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	青灰色 良好	1~2mm大の砂粒を含む	内面に一部自然釉
－11	11号横穴墓 前庭	土師器	畿内模倣坏 A類	50% 以上	口径;15.7 器高;4.8	外面;回転横ナデ、回転ヘラケズリ、 回転糸切り 内面;回転横ナデ、 回転横ナデ後不定方向ナデ	暗赤褐色 普通	やや粗、1mm以下の石英、長石を含む	全面丹塗り、地色は明褐色
－12	11号横穴墓 前庭	土師器	畿内模倣皿 A類	50% 以下	口径;22.0 器高;2.6	外面;ヘラミガキ、回転糸切り 内面;回転ナデ、静止不定方向ナデ	淡橙褐色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	全面丹塗り、地色は明褐色
－13	11号横穴墓 前庭	須恵器	長頸壺	50% 以上	口径;9.8 器高;21.4 底径;7.9 胴部径;15.7	外面;カキ目、回転ナデ、 回転ヘラケズリ、一部静止ナデ 内面;回転ナデ、ナデ	淡黄灰色	密、2mm以下の砂粒を含む	
－14	11号横穴墓 前庭	須恵器	壺	50% 以上	口径;13.8 器高;16.8 胴部径;18.2	外面;回転ナデ、タタキ後カキ目 内面;回転ナデ、タタキ	灰色 良好	1~3mm前後の砂粒を含む	
－15	11号横穴墓 前庭	須恵器	壺	50% 以下	口径;12.8 現高;9.8 胴部径;19.0	外面;回転ナデ、平行タタキ後カキ目 内面;回転ナデ、タタキ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒をわずかに含む	

－16	11号横穴墓 前庭	土師器	甕	50% 以上	口径;24.6 現高;13.5 胴部径;26.3	外面;横ナデ、縦ハケ 内面;横ナデ、縦方向へのヘラケズリ	淡橙褐色 普通	やや粗、1.5mm以下の石英、長石、赤色粒を多く含む	断面は明褐色
－17	11·12号横穴墓 前庭、広間	須恵器	坏蓋	50% 以上	口径;9.25 器高;3.45	外面;ヘラ切り後ナデ、ヘラ描き、 回転ナデ 内面;ナデ、回転ナデ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	外面に現存4条と3条のヘラ描き沈線が格子状に交差する11·12接合資料
－18	11·12号横穴墓 前庭	須恵器	長頸瓶	50% 以上	口径;8.1 器高;17.3 胴部径;13.2	外面;回転ナデ、カキ目、 回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	黄灰色～灰色 良好	1mm程の砂粒を含む	底部回転ヘラケズリ後一部板圧痕? 11·12接合資料
－19	11号横穴墓 前庭	須恵器	長頸瓶	50% 以下	胴径;13.7 現高;8.0	外面;カキ目 内面;回転ナデ	暗灰色～灰白色	1mm以下の砂粒を含む	
－20	11号横穴墓	須恵器	長頸瓶	100%	口径;6.0 器高;12.4 胴部径;9.3	外面;回転ナデ、板状工具によるナデ、 回転糸切り痕 内面;回転ナデ	暗灰色、一部灰色 良好	1～2mm大の砂粒を含む	
第76図 －1	12号横穴墓 前庭	須恵器	坏蓋	50% 以下	現高;2.2	外面;ヘラケズリ後ナデ、 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面;回転ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
－2	12号横穴墓 前庭	須恵器	坏身	50% 以下	口径;11.6 現高;2.5	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	黄灰色～灰色 良好	1mm以下の砂粒をわずかに含む	
－3	12号横穴墓 前庭	須恵器	坏身	50% 以下	口径;8.0 現高;2.5	外面;回転ナデ、ナデ 内面;回転ナデ、ナデ	灰色 良好	1mm前後の砂粒を多く含む	
－4	12号横穴墓 前庭	須恵器	高台坏	50% 以上	口径;14.45 器高;4.45 高台径;9.0	外面;回転ナデ、 回転ナデ後板状工具によるナデ	灰色 良好	0.5～3mmの砂粒を含む	
－5	12号横穴墓 前庭	須恵器	埦	50% 以下	口径;9.8 現高;3.7	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	暗灰色 良好	1mm前後の砂粒を含む	
－6	12号横穴墓 前庭	須恵器	高坏	100%	口径;9.8 器高;7.2 底径;6.3	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ、底部静止ナデ	良好	密、3mm以下の砂粒を含む	
－7	12号横穴墓 前庭	須恵器	長頸瓶	100%	口径;9.0 器高;20.4 胴部径;16.5	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面;回転ナデ	黄灰色 良好	密	
－8	12号横穴墓 前庭	須恵器	甕	50% 以下	口径;18.8 現高;13.3 胴部径;27.8	外面;回転ナデ、平行タタキ 内面;回転ナデ、同心円タタキ	黒褐色～緑褐色 良好	1～2mm大の砂粒を含む	
－9	12号横穴墓 前庭	須恵器	壺	50% 以上	口径;10.5 器高;15.1	外面;回転ナデ、タタキ後カキ目 内面;タタキ後ナデ	灰色 良好	1～2mm前後の砂粒を含む	
－10	12号横穴墓 前庭	土師器	甕	50% 以下	口径;12.8 器高;13.9 胴部径;13.0	外面;回転ナデ、ヘラケズリ、指ナデ 内面;回転ナデ、ハケ目、指ナデ	淡黄橙色 良好	密、2mm以下の砂粒を含む	
第77図 1	12号横穴墓 前庭	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	口径;22.4 現高;9.2	外面;回転ナデ、指ナデ痕 内面;回転ナデ、指ナデ、ハケ目	橙褐色 良好	密、2mm大の砂粒を含む	
－2	12号横穴墓 前庭	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;13.8	外面;回転ナデ、指圧痕 内面;ハケ目状工具によるナデ	暗橙褐色 良好	密、3mm大の砂粒を含む	
－3	12号横穴墓 前庭	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;15.0	外面;ハケ目、回転ナデ、指圧痕 内面;ハケ目、指圧痕	明橙褐色 良好	密、2mm大の砂粒を含む	
－4	12号横穴墓	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	口径;23.6 現高;16.8	外面;板状工具によるナデ 内面;ナデ	橙褐色(表面) 青灰色(断面)	2mm以下の砂粒を含む	
－5	12号横穴墓 前庭	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;8.6	外面;ハケ目、回転ナデ 内面;ハケ目、指圧痕	外;明褐色 内;黄灰色 良好	密、2mm以下の砂粒を含む	
－6	12号横穴墓 前庭	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;10.6	外面;回転ナデ 内面;指ナデ、ハケ目	外;淡橙褐色 内;橙褐色	密、2mm大の砂粒を含む	
第78図 －1	社日東墳 南斜面	須恵器	甕	50% 以下	現高;7.6	外面;回転ナデ、平行タタキ 内面;回転ナデ、同心円タタキ	灰色 良好	0.5mm大の砂粒を含む	
2	社日東墳墳丘 南斜面	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;22.6 口径;26.0	板状工具によるナデ	橙褐色 良	1mm以下の微細粒を含む	
－3	社日東墳 南斜面	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;15.2 底径;17.2	指圧痕	橙褐色 良	1mm以下の微細粒を含む	
－4	社日東墳墳丘 南斜面	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;20.4	外面;ハケ目? 内面;板状工具によるナデ	橙褐色 良	密、2mm以下の砂粒を含む	
－5	社日東墳墳丘 南斜面	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	現高;20.0	内面;板状工具によるナデ	橙褐色 良好	2mm以下の砂粒を含む	
第79図 －1	重機排土中	須恵器	坏蓋	50% 以下	現高;2.3	外面;ナデ、回転ヘラケズリ、 静止糸切り痕、回転ナデ 内面;静止不定方向ナデ、回転ナデ	淡白灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	
－2	重機排土中	須恵器	坏蓋	100%	口径;15.2 器高;3.4	外面;静止ナデ、回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面;回転ナデ	淡灰色 良好	密、2mm以下の砂粒を含む	
－3	重機排土中	須恵器	高台坏	50% 以下	現高;1.8 高台径;6.7	外面;回転ナデ、静止糸切り 内面;静止ナデ	灰色 良好	密	
－4	重機排土中	須恵器	高台坏?	50% 以下	現高;3.2 高台径;8.0	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ、静止ナデ	淡黄灰色 不良	密、3mm以下の砂粒を若干含む	底にヘラ記号有り
－5	重機排土中	須恵器	壺	50% 以下	現高;7.0 胴現存;15.0	外面;回転ナデ、 ヘラ切り後板状工具によるナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	密	
－6	重機排土中	須恵器	壺	50% 以下	口径;12.8 現高;3.3	外面;回転ナデ 内面;回転ナデ	灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を含む	外面に自然釉
－7	重機排土中	須恵器	長頸瓶	50% 以上	口径;7.4 現高;19.2 胴部径;13.4	外面;回転ナデ、カキ目後回転ナデ、 カキ目 内面;回転ナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	密、2mm以下の砂粒を含む	先端部を小口切りに切り揃えた管状工具によるスタンプ有り
－8	重機排土中	須恵器	壺	50% 以下	口径;7.4 現高;9.2 胴部径;14.8	外面;回転ナデ、回転ヘラケズリ、 ヘラ切り後回転ナデ 内面;回転ナデ、静止ナデ	灰色 良好	密、1mm以下の砂粒を若干含む	
－9	重機排土中	埴輪	円筒埴輪	50% 以下	口径;22.6 現高;22.4	外面;カキ目、口縁部ナデ 内面;カキ目	暗灰色	密、2mm以下の砂粒を含む	須恵質
－10	重機排土中	須恵器	壺	100%	口径;10.0 器高;11.1 胴部径;13.3	外面;回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内面;回転ナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	密	

社日古墳南斜面横穴墓群出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

はじめに

社日古墳南斜面横穴墓群は、松江市竹矢町中竹矢に所在する。横穴墓群は13穴から成り、その内人骨が出土したのはわずかに3穴にとどまった。各穴の人骨の遺残性はきわめて不良で、脆弱化した破損骨が若干ずつ遺残していた。出土人骨は、すべて現地の調査員によって掘り上げられ、後日研究室に搬入されたものである。確認された被葬者は5体で、内訳は男性2体、女性2体と小児（性別不詳）1体であった。

以下、各横穴ごとに、出土人骨の概要を報告する。

最後に、社日古墳南斜面横穴墓群出土人骨一覧（付表）にまとめた。

9号a横穴墓

玄室入口からみて、左側の右床上に人骨が若干集骨状に散在していた（1号人骨）。玄室右側の石床上とその下部の床砂上に、人骨が若干集骨状に散在していた（2号人骨）。左右の人骨の遺残骨は、脆弱化した破損骨で、遺残性は不良であった。

1号人骨

1．骨の遺残性

遺残骨数も少なく、脆弱化した破損骨で遺残性は不良であった。

2．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：骨片化

　　鱗骨、左側頭骨（乳様突起、外耳孔、錐体部）、右側頭骨（錐体部）、頭蓋底骨の一部

上肢骨

前腕骨：左右不明；橈骨か尺骨の骨体の一部

尺　骨：左右不明；尺骨体上部（橈骨切痕の下部）

下肢骨

大腿骨：左右不明；骨体中央部の骨片

脛　骨：左右不明；骨体中央部
　　左右不明；骨体中央部　　1対（？）

3．推定性別

遺残左側頭骨の乳様突起は拇指頭大の突隆で男性的特徴を有し、下肢の大腿骨と脛骨の骨径は大きく、筋粗面の発達も良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4．推定年令

遺残骨の四肢骨はかなり太く成人域に達しているものと推定できるが、それ以上の年令区分は不

詳である。

5．推定身長

遺残する四肢骨はすべて破損骨であるので、本屍の生前の身長は不詳である。

2号人骨

1．骨の遺残性

遺残骨も少なく、脆弱化した破損骨がきわめて若干で遺残性は不良であった。

2．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：後頭骨片（後頭稜部）

上肢骨

上腕骨：左右不明；骨体中央部

その他

骨　片：若干

3．推定性別

遺残骨が少なく、脆弱化した破損骨から推察すると、上腕骨は細く、華奢で骨質も薄いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4．推定年令

遺残骨が少なく、年令推定するには資料不足であるが、遺残上腕骨は小さく、細く、華奢で、骨質も薄いので、未熟な女性が推定され、本屍の年令は若年者（10代？）位が推定される。

5．推定身長

遺残する長管骨は上腕骨のみで、破損骨であるので、本屍の生前の身長は不詳である。

まとめ

9号ａ横穴墓には被葬者2体（男・女）が埋葬されていた。玄室左側の右床上に人骨が若干散在していた（1号人骨）。玄室右側の石床上とその下の床砂上に人骨が若干散在していた（2号人骨）。

男・女２体の骨の遺残性は不良であった。

1号人骨は男性、年令は成人域、身長不詳であった。

2号人骨は女性、年令は若年者（10代？）、身長不詳であった。

9号ｃ横穴墓

本横穴の大きさは奥行28㎝、巾58㎝のきわめて小さな横穴である。玄室内には人骨の遺残は全くなく、歯牙のみ遺残していた（1号人骨）。

1号人骨

1．骨の遺残性

骨の遺残は全くなく、歯牙（乳歯と永久歯）が20ヶ遺残していた。遺残性は不良であった。

2．遺残骨名とその部位

遺残歯牙はすべて遊離歯牙で、精査すると、乳歯14ヶと永久歯6ヶの20ヶであった。遺残歯牙の大半は歯冠のみで、歯根を有していたのは1ヶ、他は破損歯冠片であった。

残存歯牙を歯列順に示したのが、第1表である。

第1表　残存歯牙

右								左								歯	顎
		○			○								○			永久歯	上顎
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8		
			△	△		○	○	○	○	□		△				乳歯	
			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E					
			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E				乳歯	上顎
			△	○	○					○	△	○					
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	永久歯	
		○	○										○				
右								左								歯	顎

○：歯冠のみ
二：歯冠と歯根
△：破損歯冠片

3．推定性別

小横穴内には歯牙のみ遺残、乳歯と永久歯が混在しており、被葬者は小児で、重複歯牙がないので1体である。

一般的に、小児の場合性別は不詳であるので、本屍小児骨の性別は不詳である。

4．推定年令

遺残歯牙は乳歯と永久歯が混在しており、明らかに10歳以下の小児である。

遺残歯牙はすべて遊離歯牙で、歯牙は歯冠のみのものが多かった。

永久歯の場合、顎に釘植していないので、萌出歯牙か未萌出（埋伏歯）であるか特定しにくい。永久歯の第1大臼歯（M1，6）は6才前後切に萌出するので、6才臼歯と云われている。遺残第1大臼歯（4ヶ；上下、左右）の歯冠径の大きさは萌出時の歯冠の大きさに相当する所から、萌出前か萌出中、あるいは萌出歯牙の可能性が高い。

乳歯の内、上顎左右の乳中切歯（A）、乳側切歯（B）が遺残していることから、6歳以下の小児が推定される。

以上から、本屍小児骨の年令は5～6才位と推定される。

5．推定身長

本小横穴内の遺残骨は歯牙のみである。これからは身長推定は不可能である。しかし、歯牙の萌出状態から、本屍小児の年令は5～6才位と推定された。

参考までに、年令から身長を推察すると、身長は大約102～108cm位と推定される。

まとめ

9号ｃ横穴墓は奥行28cm、巾58cmの小横穴である。玄室内には歯牙のみ遺残、乳歯と永久歯が混在していた。

歯牙の萌出状態から、本屍骨は5～6才位の小児（性別不詳）で、身長は102～108cm位と推察された。

本穴は小横穴（28×58cm）で5～6才の小児（身長102～108cm）の埋葬にはあまりにも窮屈である。恐らく、他の場所で「殯（もがり）」が行われ、白骨化後、本小横穴に埋葬されたと推察する。

10号横穴墓

玄室右側奥部に、被葬者2体が埋葬されていた。玄室右側奥手前部に、やや集骨状に脆弱化した人骨が散在していた（1号人骨）。玄室右側最奥部に人骨が若干散在していた（2号人骨）。両者の骨の遺残性は不良であった。

1号人骨

1．骨の遺残性

遺残骨は脆弱化した破損骨で、遺残性は不良であった。

2．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

歯　牙：左上顎第２小臼歯（ ⌊5）歯冠部

上肢骨

上腕骨：左右不明；骨体中央部

前腕骨：左右不明；橈骨か尺骨の骨体の一部

下肢骨

寛　骨：左右不明；腸骨体の一部

大腿骨：左　；骨体中央上部後面粗面部（殿筋粗面、恥骨筋線部）

右　；骨体中央部後面

左右不明；大腿骨骨頭骨片

脛　骨：左　；骨体中央部

腓　骨：左右不明；骨体中央部

3．推定性別

上腕骨、大腿骨と脛骨は全般的に太く、骨質は厚く、粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4．推定年令

歯牙の咬耗度はブロカーの1度でエナメル質が水平化しているので、本屍の年令は壮年前期（20代）位と推定する。

5．推定身長

上・下肢骨が完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

2号人骨

1．骨の遺残性

遺残骨は極めて脆弱化した破損骨で、遺残性はきわめて不良であった。

2．遺残骨名とその部位

上肢骨

上腕骨：左（？）；骨体中央部

下肢骨

大腿骨：左右不明；骨体上部

脛　骨：左右不明；骨体中央部骨片

左右不明；骨体中央部

左右不明；骨体後面部の一部

3．推定性別

遺残する上腕骨、大腿骨と脛骨は細く、華奢で粗面の発達がきわめて弱いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4．推定年令

遺残する大腿骨と脛骨の太さは大約成人域に達しているものと思量する。しかし、資料不足でそれ以上の年令区分は不詳である。

5．推定身長

遺残する四肢骨（長管骨）は完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

まとめ

10号横穴墓は玄室右側奥部に、被葬者2体（男・女）が埋葬されていた。両者の骨の遺残性は不良である。

玄室右側奥手前に位置する1号人骨は男性、年令は壮年前期（20代）位、身長不詳である。玄室右側最奥部に位置する2号人骨は女性、年令は一応成人域、身長不詳である。

考　　察

1．横穴墓からの出土人骨の遺残性

骨の遺残性は、出土する遺跡の並り、土壌と骨の成熟度に大きく左右されるが、島根県の場合、さらに地域による格差もみられる。

県東部の安来市、東出雲町、松江市周辺の遺跡から出土する人骨は、全般的に遺残性が不良である。

しかるに、雲南地方の仁多町、横山町、三刀屋町周辺の遺跡から出土する人骨は、全般的に遺残

性がかなり良好な状態で出土することが多い。

本横穴群は松江市竹矢町で前者に属し、出土人骨の遺残性はきわめて不良であった。出土人骨は脆弱化した破損骨で骨片化していた。しかし、被葬者の推定性別と推定年令はかろうじて判読できたが、推定身長はいずれも不詳であった。

2．横穴墓の大きさと被葬者

9号ｃ横穴墓の大きさは奥行28cm、巾58cmの小横穴である。

9号ｃ横穴墓の項で述べたように、本横穴の被葬者は１体で推定年令は5～6才位の小児で、推定身長は大約102～108cm位と推定された。

古墳時代の埋葬法は通常仰臥伸展位で、まれに側臥伸展位がみられるが、屈葬はほとんどみられない。

本小横穴の奥行28cm、巾58cmでは、推定身長102～108cm位の遺体は屈葬でない限りこの小横穴には納まらない。

そこで、考えられるのが「殯（もがり）」である。小児が死亡して何処か適当な所で「殯（もがり）」が行われ、少なくとも白骨化後に、本小横穴に埋葬されたと思量する。

「殯（もがり）」が推察できた事例

鳥取市六部山古墳群28号墳の小石棺（79×38×34cm）内のほぼ中央部に、小児骨が一括して集骨状に埋葬されていた。本小児骨の遺残性は比較的良好で、頭骨、脊椎骨、胸郭骨と上下肢骨が遺残していた。とくに、下顎骨はほぼ完形で、乳歯の萌出状態がよく保存されていた。歯牙の萌出状態から、本屍小児骨の年令は2才前後位と推定された。本石棺の大きさ（長径79cm）は2才前後の小児の身長（男児84cm、女児83cm）では少し窮屈すぎるように思量する。そこで、恐らく他の場所で「殯（もがり）」が行われ、白骨化後集骨され、小石棺内の中央部に一括して埋葬されたものと推察した。

3．歯牙の萌出状態から年令推定しえた事例

中国横断道松江～尾道線建設に伴う事前調査で発見された宍道町長畑2号横穴墓[21]には、人骨が多数散在していた。骨の遺残性は全般的に不良であった。とくに、小児骨が多く未熟骨のため、破損、消失骨が多かった。

被葬者は5体で、内訳は成人女性1体、他の4体はすべて10才以下の小児であった。例外的に、2号人骨（小児）の下顎骨は完形で、乳歯と永久歯が併存しており、永久歯の内、左右の第１大臼歯（Ｍ１）が未萌出（埋伏歯）の状態から、年令は4～5才位と推定できた。

要　　約

松江市竹矢町地内の社日古墳南斜面横穴墓群は13穴から成り、その内人骨が出土したのは3穴にとどまった。出土人骨の遺残性は、全般的に不良であった。

9号ａ横穴墓には、被葬者2体（男・女）が埋葬されていた。1号人骨は男性、年令は成人域、身長不詳であった。2号人骨は女性、年令は若年者（10代？）、身長不詳であった。

9号ｃ横穴墓は小横穴（奥行28cm、巾58cm）で玄室内から歯牙（乳歯と永久歯の一部）のみ検出さ

れた。歯牙の萌出状態から、本屍は5～6才位の小児（性別不詳）で、身長は102～108cm位と推察された。被葬者小児の身長（102～108cm位）からして小横穴（奥行28cm、巾58cm）には納まらないので、恐らく他の場所で「殯（もがり）」が行われ、白骨化後、本小横穴に埋葬されたと推察する。

10号横穴墓には被葬者2体（男・女）が埋葬されていた。1号人骨は男性、年令は壮年前期（20代）位、身長不詳であった。2号人骨は女性、年令は成人域、身長不詳であった。

文　献

1）井上晃孝（1995）：「六部山古墳群26,28号墳出土人骨について」,『六部山古墳群Ⅱ』109－117, 鳥取市教育福祉振興会

2）井上晃孝（1999）：「宍道町長廻2号横穴墓出土人骨」, 島根県教育委員会（投稿中）

付　表　社日古墳南斜面横穴墓群　出土人骨一覧表

横穴No	被葬者No	骨の遺残性	推定性別	推定年令	推定身長	備　考
9号a横穴墓	1号人骨	不良	♂	成人域	不詳	
	2号人骨	不良	♀	若年者（10代？）	不詳	
9号c横穴墓	1号人骨	不良	不詳	小児（5～6才）	不詳（102～108cm位）	小横穴（28×58cm）乳歯（14ヶ）と永久歯（6ヶ）混在
10号横穴墓	1号人骨	不良	♂	壮年前期（20代）	不詳	
	2号人骨	不良	♀	成人域	不詳	

写真図版

図版　1

杜日古墳全景空中撮影南から

同、北から

社日1号墳墳丘

社日古墳南斜面

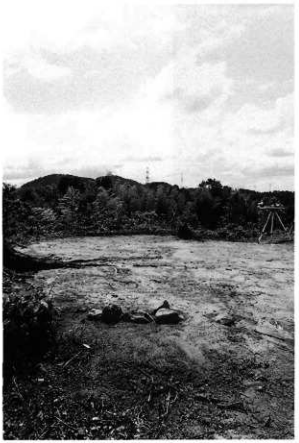
社日古墳南斜面

社日1号墳から南側を望む

図版　3

社日1号墳・社日2号墳　東から

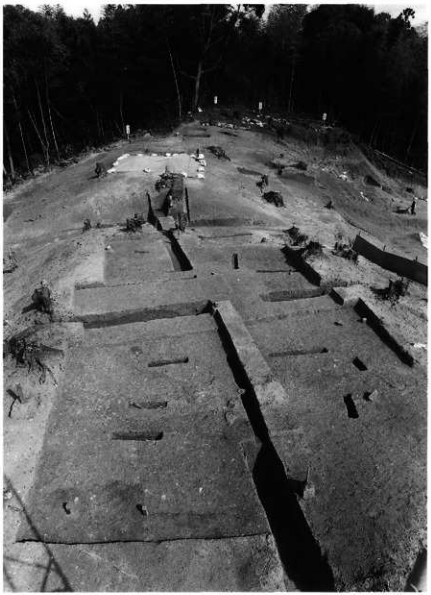
社日2号墳から南斜面にかけて　社日1号墳から



社日１号墳墳頂発掘前　東から

社日１号墳と社日２号墳の間の
盛り土部分　東から

社日１号墳墳丘北側　西から



社日1号墳
各主体部検出状況

社日1号墳
表土除去後

社日1号墳墳丘南側斜面土層堆積状況

社日1号墳墳丘北側斜面墳裾付近土層堆積状況

図版 7

社日1号墳第1主体部主軸土層堆積状況　南側中央部

社日1号墳第1主体部主軸西端土層堆積状況　北側

社日1号墳第1主体部主軸西端土層堆積状況　北側

社日1号墳第1主体部主軸東端土層堆積状況　北側

図版 9

杜日1号墳第1主体部主軸東端土層堆積状況　北側

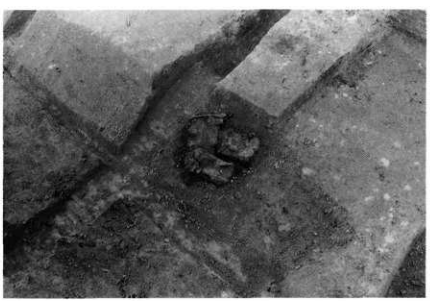
杜日1号墳第1主体部東寄り部分主軸直交土層堆積状況

社日1号墳第1主体部西寄り部分主軸直交土層堆積状況

社日1号墳第1主体部と第2主体部の切り合いを示す土層堆積状況　東から

図版　11

社日１号墳
第１主体部棺槨痕跡検出状況東から



社日１号墳
第１主体部鉄器（農工具）出土状況

社日1号墳
第1主体部遺物出土状況
東から

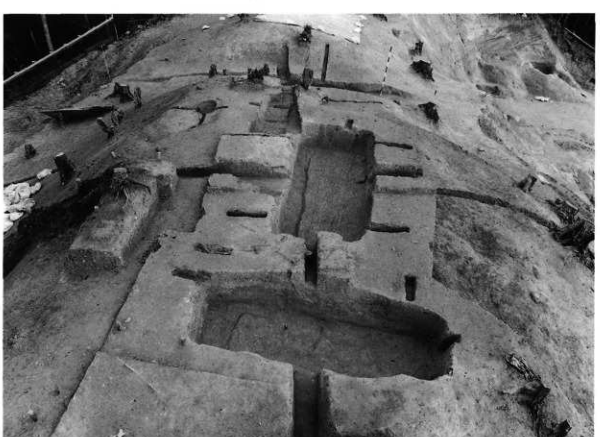
社日1号墳
第1主体部鉄剣出土状況

社日1号墳第1主体部棺底検出状況　東から

社日1号墳第1主体部棺底検出状況　西から

社日1号墳第1主体部鉄器出土状況

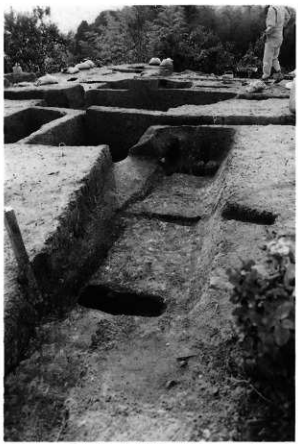
社日1号墳第1主体部完掘状況



社日1号墳各主体部完掘状況

社日1号墳第2主体部主軸平行土層堆積状況西寄り　北から

社日1号墳第2主体部主軸平行土層堆積状況東寄り　北から



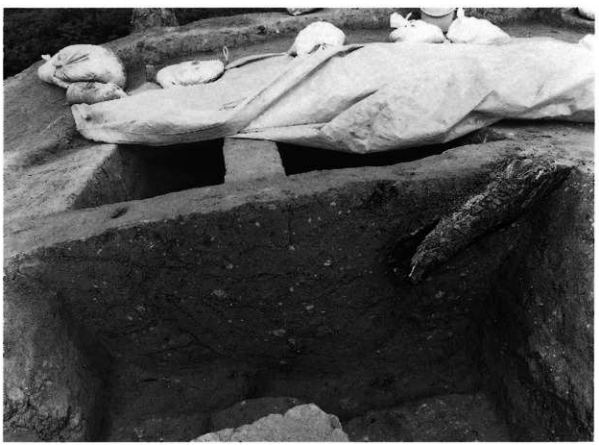
社日1号墳第2主体部完掘状況　東から

社日1号墳第2主体部完掘状況　東から

社日1号墳第3主体部北寄り部分主軸土層堆積状況　東側

図版　17

社日1号墳第3主体部南寄り部分主軸土層堆積状況　東側



社日1号墳第3主体部横断土層堆積状況　南から

社日１号墳第３主体部棺痕跡検出状況　西から

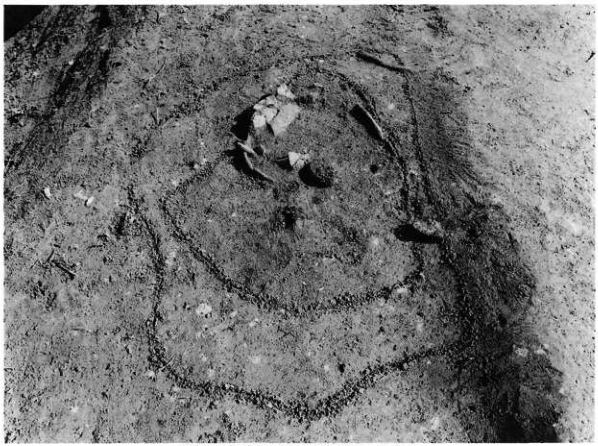
社日１号墳第３主体部完掘状況　北から

社日１号墳第１主体部完掘状況　東から

社日1号墳
第1主体部完掘状況
西から

社日1号墳
第3主体部棺痕跡検出状況
西から

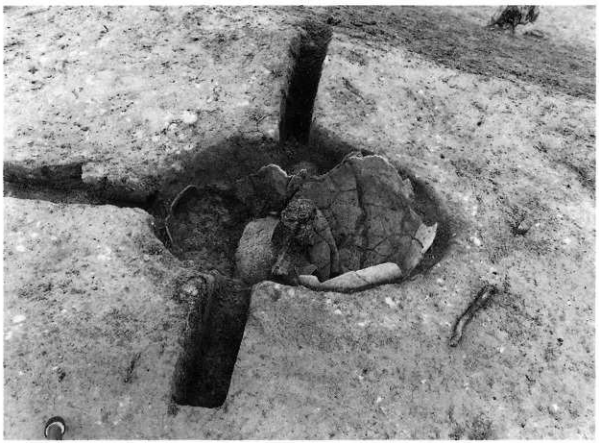
社日1号墳
各主体部完掘状況



社日1号墳第4主体部検出状況　西から

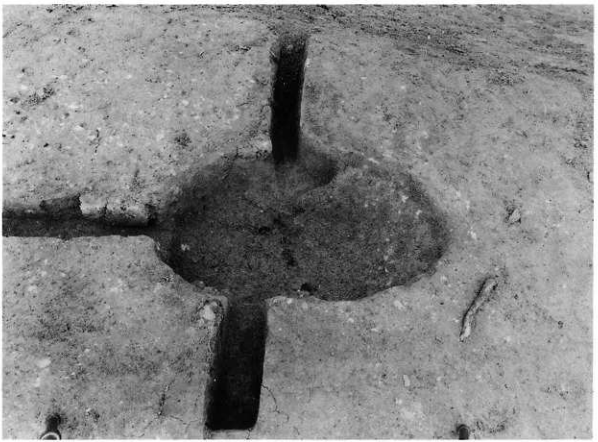
社日1号墳第4主体部土器棺検出状況　西から

社日1号墳第4主体部土器棺検出状況　東から



社日1号墳第4主体部土器棺合わせ口検出状況　南から

社日1号墳第4主体部土器棺下半部検出状況　南から



社日1号墳第4主体部完掘状況　南から

社日2号墳発掘前　北から

図版 23

社日2号墳
西側盛り土・溝土層堆積状況
北西から

社日2号墳
西側盛り土・溝土層堆積状況
南から

社日1号墳と
2号墳の間の盛り土・溝
土層堆積状況